

■ 『北海道文学大事典』ご利用の皆さまへ——ネット上での公開にあたって ■

【はじめに】

『北海道文学大事典』（編集・北海道文学館／発行・北海道新聞社）が1985（昭和60）年に刊行されてから四半世紀以上が過ぎました。多くの皆さまにご利用いただいていたこの『大事典』も、今日では入手が難しくなった事情から、ここ数年来その内容をインターネット上で公開してほしいという声が当文学館にしばしば寄せられてきました。

そこで、これらのご要望におこたえするために当文学館では、このたび「人名編」について先行的に北海道立文学館のホームページ上で公開することにいたしました。北海道の文学にいっそう親しんでいただくために、どうかお役立てください。

原則的には『大事典』刊行当初の姿にとどめました。したがって、訂正を加えるべき箇所も若干は残っていますが、調査可能な範囲で修正をほどこしました。なお、今後も調査を継続し、より精確な情報をご提供するつもりです。

【ネット版『北海道文学大事典』編集上の留意点】（順不同）

- * この『大事典』の当該ホームページ上における公開は、公益財団北海道文学館が、自らの責任において公開するものです。
- * この『大事典』は既に絶版になっているものです。また、北海道新聞社の著作権も消滅しています。
- * ここに搭載された個々の記事は刊行時に原稿買い取りの方式で集められ、個々の執筆者には、北海道文学館から稿料が支払われています。
- * 今回の公開は『大事典』の「人名編」にとどめ、「雑誌編」「事項編」については、調査・訂正などの作業を進める過程で順次アップしていきます。また、『大事典』の冒頭に収められていた、写真（グラビア）ページは割愛しました。
- * 公開に際しては、『大事典』初版に僅かながら認められた誤字・脱字、また誤記について、可能な範囲で修正をほどこしました。
- * 一部の記事中には、人名漢字などの用字（正字体や旧字体）について、コンピュータ処理のうで画面への反映が困難な例があります。カッコ内に「偏」や「つくり」を掲げて判断していただけるように努めました。が、刊行時のままとした例もあります。
- * 『大事典』刊行後の物故者は多数にのぼりますが、今回の「人名編」の公開に際して没年月日が判明した人物については、見出し語(人名)を赤いラインで囲み、「人名編」記事の最後の一覧表を掲げました。なお、相当数の没年月日不明の人物が残っていますが、調査を継続し、新たに判明した情報を追加していく予定です。
- * この『大事典』の記事内容は、コンピュータのディスプレイ上でのみ読み得る形式を採用しています。画面上の記事はプリントアウトできませんので、ご注意ください。

【お願い】

物故者の没年月日など、新たな内容訂正を可能とする情報をお持ちの方は、当文学館までメール等でご一報ください。

※e-mail: bungaku@h-bungaku.or.jp

(2012年4月3日)

北海道 文学 大事典

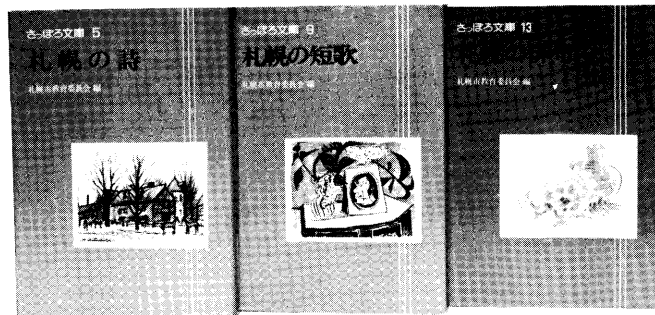
●北海道文学館 編

北海道新聞社

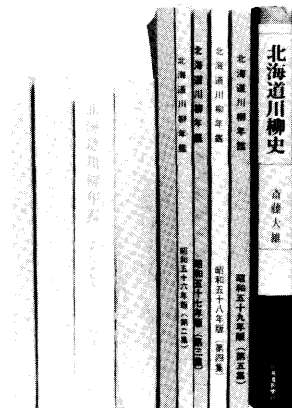
北海道
文学
大事典

北海道文学館
編

北海道新聞社

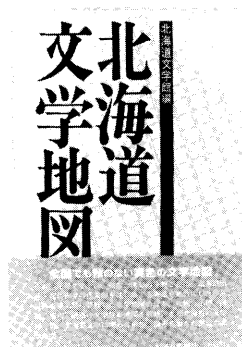


▲さっぽろ文庫・短詩型3部作（札幌市教委編集、北海道新聞社発行）

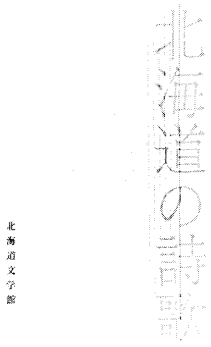


▲「北海道川柳史」「同年鑑」一括

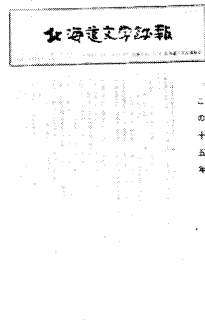
北海道文学館刊行物



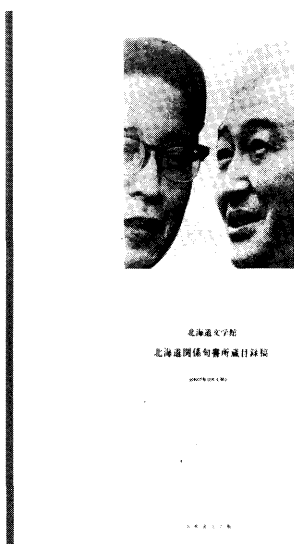
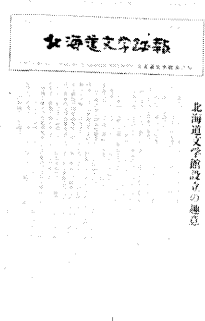
▲北海道文学地図



▲北海道の詩歌



▲北海道文学館報



☐北海道文学館主催の文学展図録



☐北海道文学館「北海道関係書所蔵目録稿」

「北海道文学大事典」刊行の辞

昭和四十二年（一九六七）四月二十三日に「北海道文学館」が発足してから、二十年近い歳月がたちました。前年秋に北海道の文学者が総力を結集して開催した「北海道文学展」の画期的な成功がもたらしたものです。

以来、各種の文学展・文芸講座・文学散歩・図書の刊行など多くの事業を重ねながら北海道文学に関わる諸資料の収集・保存・活用につとめ、現在九万点を所蔵するに至っております。満度の状態には道遠しですが、しかし、これほど一堂に収納している機関は北海道広しといえども私どもの文学館以外には見当たらないと自負しています。

展示室・閲覧室・収蔵庫・事務室を置く札幌市資料館を本拠に北海道文学センターの役割を果たし続けてゆく所存ですが、このほど北海道新聞社のご助力を得て念願の事業である「北海道文学大事典」を編集・刊行の運びとなりました。

全国的にみて、府県単位による総合的な文学事典としてはおそらく最初のものだろうと思いますが、これもひとえに館が牛歩のうちにも積み重ねてきた実績にほかならないと考えています。

項目は、人名編が二二八三、雑誌編が七一八、事項編が二三八、しめて三二二九項目の多きを数えます。ご執筆くださった三四〇人の方に心からなる感謝の意を表すものですが、小説・戯曲・評論・随筆・児童文学・詩・短歌・俳句・川柳と、文学全ジャンルを包含したこの総量は、現在の館ができる最良の事典であるといっても言いすぎではありません。

北海道新聞社の深いご理解を得て刊行されるこの事典が、おおいに活用され、北海道の文化・文学の向上に限りなく役立つことを心から願うものです。

昭和六十年十月

北海道文学館

北海道文学大事典執筆者（五十音順）

相内 晋	稲葉 吉正	岡 嘉彦	川村 壽人	葛見 勇	酒本 寿朔	菅村敬次郎	高原 与祢
相川 正義	井上 二美	小国 孝徳	川村 美翔	工藤 欣弥	佐々木逸郎	菅原 政雄	高山 亮二
青木 政雄	猪股 泰	小名 提郎	河部文一郎	久保 吉春	佐々木露舟	杉本 晃一	武井 静夫
青地 繁	今井 国夫	小野規矩夫	神埜 努	倉島 齊	笹原登喜雄	須合 尚剛	竹岡和田男
青葉 鬼善	今井 要太	小野寺与吉	木内 進	小池 進	佐藤 喜一	鈴木 勝美	武田 隆子
青葉テイ子	入江 好之	貝塚 忠弘	菊地 慶一	越郷 黙朗	佐藤 孝	鈴木 青光	只木かほる
青山ゆき路	岩佐和歌子	柿崎 清一	菊地 信一	小島 嘉雄	佐藤 忠雄	鈴木 杜世春	田中 章彦
朝倉 賢	上田 豊	笠井 静一	菊地 滴翠	小谷 博貞	佐藤 初夫	鈴木 昌子	田中 和夫
浅野 明信	鶴川 章子	笠井 信一	北川 頼子	後藤軒太郎	佐藤 昌子	鈴木 光彦	棚川 音一
浅見 祐治	内田 弘	笠原 稔雄	北川 緑雨	小林小夜子	更科 源蔵	須田 幸吉	谷川 文利
東 延江	梅田 恭平	笠原 肇	北川 玲三	小林 孝虎	椎名 義光	瀬戸 哲郎	谷口 広志
安住 尚志	江口源四郎	可知 春於	北 光星	小林 正明	塩見 一釜	園田夢蒼花	玉井 裕志
足立 敏彦	江原 光太	加藤 多一	北野 青村	小檜山奮男	鹿野 正伍	平 忠昭	玉川 薫
新井 章夫	遠藤 裕	金坂 吉晃	北野 竜介	小堀 煌治	滋野 透子	平 善雄	田村 圭司
安東 璋二	大久保興子	かままるよしあき	北見 恂吉	小松 瑛子	六戸 鉄蔵	高木 喬	田村 哲三
飯田 智佳	大須田一彦	金子 信夫	木ノ内洋二	小松 茂	柴村 紀代	高津戸 明	千葉 宣一
飯田 安子	太田緋吐子	金子 一男	木下 順一	小松 利夫	島 恒人	高野斗志美	千葉 益也
五十嵐健二	太田 光夫	金子徳四郎	木原 直彦	小森 邦男	嶋田 一步	高橋 昭夫	辻 星行
池永 竜生	大塚 陽子	金崎 葭杖	木村 隆	斎藤 邦男	下村保太郎	高橋 明雄	辻脇 系一
石井 有人	大西 雄三	加納 愛山	木村 哲郎	斎藤 大雄	東海林淳子	高橋 愁	津田 遙子
石岡草次郎	大野 信夫	叶 楯夫	木村 敏男	斎藤 征義	白幡 千草	高橋 富子	続橋 利雄
石家久一郎	大場 豊吉	神谷 忠孝	木村 南生	坂井 一郎	新蔵 利男	高橋 信子	堤 寛治
泉 孝	大広 行雄	川上喜代一	木村 正雄	坂下 銀泉	新明 紫明	高橋 秀郎	坪川美智子
居関 透	岡澤 康司	川端 麟太	木村真佐幸	坂下 文子	菅井 彬人	高橋 正彰	坪谷 京子
伊東 廉	小笠原 克	川辺 為三	木村和嘉子	桜井美千子	須貝 光夫	高橋 和光	寺師 治人

☒写真撮影・写真協力

札幌市教育委員会文化資料室
市立小樽文学館
藤井 治
北海道新聞社

執筆 者

照井 千尋	中本 俊生	菱川 善夫	水口 幾代	山口勝次郎
東野ひろ子	中山 周三	日高 昭二	光城 健悦	山口 透
堂本 茂	中山 信	比良 信治	嶺岸 柳舟	山下 和章
土江田千治	中山 勝	平田 角平	宮口 良朔	山田 政明
時田 則雄	名島 俊子	平松 勤	宮崎 勝義	山田 緑光
土蔵 培人	鍋山 隆明	深海 秀俊	宮崎 芳男	山名 康郎
富岡木之介	南河 達雄	福井 剣山	宮田 千恵	山本 丞
富田 正一	新妻 博	福島 瑞穂	宮西 頼母	湯田 克衛
友田多喜雄	西川 青濤	福地 順一	宮之内一平	横井みつる
鳥居 省三	錦 俊坊	福本 範子	宮村 フヨ	横沢いさを
長井 菊夫	西嶋 征夫	藤川日出尚	宮本 貞子	横道 秀川
永井 浩	西村 一平	藤田 昌彰	村井 宏	吉田 秋陽
中川 吉夫	西村 信	藤本 英夫	村上 清一	吉田福太郎
長木谷梅子	布川 初朗	船尾 彊	茂木健太郎	米坂ヒナリ
中沢 茂	野田 牧聖	文梨 政幸	本山 節弥	脇田 勇
長沢としを	萩原 貢	古川 善盛	本山 哲朗	脇 哲
中嶋 常雄	橋爪まさのり	細井 剛	百川 梢介	脇尾 待人
中島 正裕	畑沢 草羽	細谷徹之助	森山軍治郎	鷲谷 峰雄
永田耕一郎	畑中 康雄	堀田 輝子	八重樫 実	和田 謹吾
中館 寛隆	秦 保二郎	堀井 利雄	八木橋絵民	渡辺 勇
永田 富智	早川 雅之	堀井 美鶴	矢口 以文	渡辺 健治
中坪 青雲	林 晃平	堀越 義三	八子 政信	渡辺 洪
長野 京子	林 直樹	本田 錦一郎	矢島 京子	渡辺 悦人
永平 利夫	原子 修	本田 大柳	八森虎太郎	渡辺ひろし
永平 緑苑	原 裕子	前田 信一	山内 栄治	
中部川信一郎	針山 和美	増谷 竜三	山岸 巨狼	
中村 勝栄	萬上 義次	水出みどり	八卷 春悟	

目次

「北海道文学大事典」刊行の辞……………北海道文学館 3
北海道文学大事典執筆者…………… 4

凡例…………… 7

北海道文学大事典・人名編…………… 9

北海道文学大事典・雑誌編…………… 401

北海道文学大事典・事項編…………… 613

北海道文学略年表……………木原直彦編 709

索引…………… 756

編集後記…………… 772

凡例

☑生、没年は「明43・10・1」大14・2・15 (1910～1925)」とし、生存中は「明43・10・1」(1910～)」とした。

☑北海道文学にかかわる小説・戯曲・評論・随筆・児童文学・詩・短歌・俳句・川柳のほか一部関連ジャンルも含めて構成した。

☑人名・雑誌・事項の三部で構成し、それぞれ五十音順に配列したが、収録項目は三三三九(人名二二八三、雑誌七一八、事項一三三八)であり、執筆者数は三四〇人である。

☑項目の配列は、ひらがな、かたかな、漢字を問わず音による五十音順とし、濁音、半濁音を無視した。音引きは音順に入れていない。

☑項目の記述は、原則として昭和59(一九八四)年12月現在を基準とした。

☑アンソロジー類は雑誌の部に入れた。

☑原則として常用漢字と現代かなづかいを用い、引用は原文のままとしたが、署名原稿なので若干の不統一も止むを得ない。

☑執筆者の記述にしたがったが、事典の性質から最小限の記述の統一をはかった。

☑北海道を対象とする地域の文学事典であることから、スペースは北海道事項を軸に配分した。たとえば夏目漱石の項であっても少スペースとしている。

☑ジャンルは「」で囲み、二つ以上あるときは点で区切った。

☑出生地は、道外の場合原則として「〇〇県生まれ」とし、東京、大阪、京都は都府を省いた。道内は「〇〇市生まれ」または「〇〇(支庁)管内〇〇町生まれ」とした。現在地名を使用している。

☑本名の姓が同じ場合は省略し、名前だけにした。本名と姓名の間に句読点は付けていない。

☑年号は初出のみ「明治5年」などを入れ、次の同年号は「23年」とし、年号は省略した。ただし、年号が戻ったり文章が長い時には年号を繰り返すこともある。

☑文中の雑誌名は「」でくくった。結社名はバラツキがあるが原則として「」でくくり、結社名に賞が付くときは「」をはずした。

☑作品名のあとに付く出版年月、出版社名は(昭35、北海道新聞社)のように表示し「」内に出てくる数字(5巻)なども算用数字を用いた。

☑出身学校名は、一般的にわかる場合はフルネーム(北海道大学)とし、微妙なものは原稿どおり無理に統一しなかった。旧制、庁立、道立、国立などは、あったほうがよくわかる場合のみ使用した。

北海道文学大事典・人名編

装丁 佐藤 信明

として、伊藤整に関する評論、伝記、研究を多数発表。なかでも「雪明りの叢書」第九編「伊藤昌整」(昭50、北書房)、「伝記伊藤整―詩人の肖像」(昭52、六興出版)は、伝記研究の白眉として高く評価されている。(日高昭二)

會野綾子 昭6・9・17(1937)「小説」東京生まれ。本名三浦知寿子。聖心女子大学英文科卒。作家三浦朱門は夫。昭和29年の「遠来の客たち」が芥川賞候補となり文壇にデビュー。つぎつぎと話題作を生み、有吉佐和子と共に才女の名をほしいままにする。本道取材作に「室蘭まで」(昭34・9、「週刊朝日別冊」)、「消えない航跡」(昭36・10)11、「週刊サンケイ」などがあり、講演も多い。(木原直彦)

園一勢 大9・10・3(1938)「俳句」小樽生まれ。本名宮川勢一。砂川市居住後東京転出。昭和22年細谷源二に師事、「北方俳句人」水原帯、45年「海程」同人。31年水原帯賞を受ける。24年より「水原帯」発行会計担当。38年句集「翔ぶ皿」刊行。作品は庶民的明るさと独特の比喩の巧みさで幾多の秀作がある。現代俳句協会員。(山田緑光)

園田郁志 昭2(1927)「小説」青森市生まれ。本名小西幸男。昭和20年庁立室蘭中学校卒。25年頃から保高内余市町生まれ。旧姓川崎、ペンネーム深山水明、田中兼通。大正10年7月札幌から同人誌「青空」を創刊、第七集から余市町のいとこ川崎昇に引きつぐ。のちこの同人誌の編集に伊藤整があたる。大正13年11月歌集「むらぎも」を深山水明の名で発刊、同人誌「アカシヤ」の編集もするが、ほどなく上京、日本大学に学ぶ。昭和3年詩誌「信天翁」に加わり、田中兼通の名で詩を発表、7年には「新文芸時代」に田居尚の名で「処方箋」「句点」など創作をのせるが、その後文学活動から遠のく。伊藤整の没後ふたたび文学にかかわり、「青空」と伊藤整「(北書房)、詩歌集「信天翁」(六興出版)、「蘇春記―素膚の伊藤整」(岩崎書店)、「義経の生涯―能楽義経像」(中央公論事業出版)などを著した。理工出版社長、武蔵野学園長などを務めた。(武井静夫)

大門 太 昭9・11・4(1934)「詩」札幌生まれ。本名田村耕一郎。昭和36年詩誌「ん」のほか「ダイヤモンド・ダイナマイト」「非」(以上個人誌)を創刊。48年渋谷美代子と二人誌「蛇蠍」を創刊して刊行中。詩集は37年の「太陽のある風景」のほか「ある存在」「指・眼・舌」「わが詩王」などがあ

徳蔵の「文芸首都」に拠り小説を書く。代表作「千礁」(「文芸首都」掲載、昭29・2「室蘭文学地図」に転載)。HBCラジオ放送の掌編小説等がある。(かなまる・よしあき)

園田 風 大12・2・24(1933)「俳句」上川管内和寒町生まれ。本名重和。兄夢蒼花に感化され昭和12年頃から句作を始め、17年「天の川」に加え、吉岡禪寺洞の指導を受ける。21年「水輪」同人。32年「水原帯」同人(異薔薇男の筆名を用いる)。45年千葉県松戸市に転じ「広軌」に参加。滝沢無人と東京支部を結成。58年句集「跋扈の汗」を広軌発行所から上梓した。現代俳句協会員。(園田夢蒼花)

園田夢蒼花 大2・12・15(1913)「俳句」上川管内美瑛町生まれ。本名喜武。昭和7年以降公務員生活三八年、函館労働基準監督署長を最後に46年退職。小学生の頃から句作に手を染め、新聞俳壇などに句を投じ、また「南柯」等の俳誌にも投句するようになった。やがて昭和初頭から俳壇を席捲した新興俳句運動に共鳴し、高橋貞俊らと吉岡禪寺洞の「天の川」へ投じ、のち同人となる。12年貞俊らと「海賊」(のち「プリズム」と改称)を創刊、北海道の新興俳句運動に火を付けた。21年貞俊ら

る。人間存在について問い続けることを詩の主題とする、洞察と存在感のある詩風が特色。(永井浩)

平 忠昭 昭4・3・11(1926)「新聞記者」上川管内下川町生まれ。昭和26年北海道大学国文科卒。同年北海道新聞社入社。29年名寄支局で同人雑誌「刻塔」の創刊に参加。32年札幌本社芸芸部文芸担当、39年東京支社社会部芸芸担当次長。41年の北海道文学展では東京での資料集めに当たり、同展の成功で創設された北海道新聞文学賞の運営に発足当初から参加。芸芸部長、出版局長を経て60年旭川支社長。(木原直彦)

高 昭宏 昭11・9・30(1936)「短歌」十勝管内音更町生まれ。中学校時代から短歌に親しみ、雑誌「少年」「蛍雪時代」などへの投稿を経て「辛夷」入会。北海道立中央水産試験場に勤務してから海上生活を素材とした作品を多く発表してきた。51年第一歌集「わが航路」発刊のほか「漁業露和事典」「漁業和露事典」を、57年には「系統魚類学」(ニコリスキー著、高昭宏訳、たたら書房)など特殊な著書がある。(大塚陽子)

高井静子 昭35・7・25(昭58・8・2(1902)1983)「短歌」岐阜県生まれ。本名静。庁立札幌高等女学校

と「水輪」を創刊したが、幾ばくもなく休刊。細谷源二の「水原帯」に迎えられる、編集同人となる。44年貞俊を代表に、後藤軒太郎、木村敏男らと同人誌「広軌」創刊。47年より「杉」にも参加し、現在「広軌」「杉」同人。昭和26年第一句集「火を放て」、48年第二句集「こほろぎ馬車」刊行。共著に「札幌の俳句」「札幌歳時記」がある。現代俳句協会幹事。北海道文学館監事。(酒がめは酔がめにかはる雪女郎)

「こほろぎ馬車」句集。昭和48年11月広軌発行所刊。第一句集「火を放て」以降約二〇年間の作を収めた第二句集で、年代的には三〇代の壮年期から、六〇代の還暦に及ぶ間の集積である。処女句集「火を放て」が、抜群に新鮮で奔放な感覚に溢れていたのに対し、この句集は年齢の賢りを見せながらも、妖しいまでの虚構の世界を自在に現前してみせた句集といえる。(木村敏男)

た

田居 尚 明37・5・20(昭59)

卒。林賢治と結婚したが離婚。札幌市の桑園出張所勤務。短歌結社「とをつび」と同人。道歌人会員。(名島俊子)

高岡邦夫 大11・11・2(1925)「短歌」山形県生まれ。岩手医学専門学校卒。北海道大学医学部、釧路赤十字病院産婦人科部長を経てシロアム医院長。昭和19年「アララギ」入会。21年「羊蹄」創刊に参加する。36年釧路アララギ会を興し会報を発刊した。(笹原登喜雄)

高垣 葵 昭3・11・10(1928)「シナリオ」東京生まれ。本名正克。父は冒険小説作家高垣晔。北海道大学国文科卒。北大在学中に農学部の手田悌三らと学生演劇で活躍し、昭和27年NHK札幌放送劇団に入団。花房はるみ、若原良などの筆名でラジオドラマを執筆。翌年退団し、「底流」でNHK懸賞放送劇に入選、作家生活に入る。代表作に「一目一番地」(NHKラジオ)、「ホームラン教室」(同テレビ)など。楠トシエらと劇団を結成し、ブラジル取材によるラジオ作品、戯曲がある。東京在住。(佐々木逸郎)

高木彬光 大9・9・25(1936)「小説」青森市生まれ。本名誠一。京都大学工学部卒。昭和24年の「能面殺人事件」で探偵作家クラブ長編賞を受

賞。代表作「刺青殺人事件」など経済推理小説に新機軸を発揮。本道取材作に白鳥事件を下地とした推理小説「追跡」(昭37・8、光文社)などがある。

(木原直彦)

高木牛花 大2・1・27(65)。「俳句」渡島管内八雲町生まれ。本名万寿夫。昭和18年山岸巨狼を知り句作に入り、現在「葦牙」「アカシヤ」同人。48年から八雲俳句会長。55年同会から「八雲俳壇史」を上梓した。八雲町議、八雲農協組合長。(太田緋吐子)

高木夢二郎 明28・8・2(昭49・11・8 (1895~1974)) (川柳) 名古屋生まれ。本名正一。七歳のとき来道、四〇年間教鞭をとり、僻地教育に尽力。大正12年「水原」同人。「川柳人」「影像」等と関係。昭和32年「川柳人」編集長。46年「井上剣花坊伝」が刊行された。

(斎藤大雄)

高口敏子 明45・11・15(1912~)。「俳句」留萌管内増毛町生まれ。本名武男。留萌木材株式会社専務を務めた。昭和30年ころより句作。石原八束の「秋」、木村敏男の「これ」、山岸巨狼の「葦牙」等に学ぶ。現在は「これ」「葦牙」同人、「秋」に所属。

(木村敏男)

高倉新一郎 明35・11・23(1910~)。「短歌」滋賀県生まれ。昭和44年「新凍土」に入会。同誌運営および編集委員。56年歌集「篝火草」を刊行。

(1902~)「農学、郷土史」帯広市生まれ。庁立札幌第一中学校を経て大正15年北海道大学農業経済学科卒。助手、助教、教授、経済学部部長の道を歩み、本道農業経済と北海道史の研究を深める。主な著書に「北海道の歴史」「北海道文化史序説」「アイヌ政策史」「北海道拓殖史」「北海道出版小史」「蝦夷地」「北海道史の歴史」などがあり、編著書や論考、さらには市町村史の監修も多い。北海道史の最高権威であるが、幅広い交友と共に、本道文化に関する密度の高い活動も見逃せない。文学的造詣も深く、早くには戦前の「北方文芸」に発表した「北方文学憶書」などにみることができ、新渡戸稲造の言を引いて人間社会の立脚点が「文学」にあるとしているところに高倉学の特質がある。北海道新聞文化賞、北海道文化賞、北海道開発功労賞、地域文化功労賞などを受賞。「新北海道史」の総編集長も務める。現在は北海道大学名誉教授、北海学園大学名誉学長、北海道開拓記念館長、北海道文化財保護審議会長、「新札幌市史」編集長。

(木原直彦)

高倉とき子 明43・4・18(1910~)。「短歌」滋賀県生まれ。昭和44年「新凍土」に入会。同誌運営および編集委員。56年歌集「篝火草」を刊行。

年「汎日本的で悪いか」(「函館文学」)は地方文学論争の口火となった。小説「白い光の記憶」(昭32、「表現」)、「西部の使者」(昭38、同)、評論「原口統三論」(昭30、「不凍港」)、「風土と文学への試論」(昭33、「函館文学」)などがある。道立教育研究所副部長。

(安東璋二)

高 清華 明44・11・11(1911~)。「俳句」石川県生まれ。本名政雄。網走市議会議長、網走地方高等職業訓練校長、農協組合長などの公職に就く。俳句は青木郭公に私淑、昭和4年「暁雲」入会、のち白田亜浪、牛島勝六の指導を受ける。昭和48年「葦牙」に加入、網走地区の結社十七美会長として地域俳人の育成につとめる。自治功労藍綬褒章(昭50)、職訓功労労働大臣表彰(昭52)などを受賞。

(佐々木子興)

高瀬恵子 昭2・3・9(1902~)。「俳句」帯広市生まれ。旧制高等女学校卒。昭和38年土岐鍊太郎に師事し「アカシヤ」に入会。42年同百花集同人。53年同木理集(無鑑査)同人。アカシヤ浄鍊賞受賞。56年句集「鳩笛」上梓。俳人協会会員。

(岡澤康司)

高瀬剣逸 明39・10・10(昭59・10・8 (1906~1984)) (川柳) 神戸市生まれ。本名健一。昭和33年1月札幌川

明く清雅な詠風と海外詠が注目された。長年つとめた家庭裁判所調停委員、札幌家事調停協会会長等の社会的な功績により44年藍綬褒章、56年勲五等瑞宝章が贈られた。

(八巻春悟)

高倉牧人 明26・8・26(昭40・2・20 (1893~1965)) (俳句) 滋賀県生まれ。本名定助。滋賀県立水口農林学校中退。明治43年十勝管内音更町に渡り高倉牧場牧夫。大正5年より農業関係の役職多数。昭和3年帯広に転住し、市議、道議二期、昭和22年より衆議三期、30年より清水町長三期務める。その間小学校舎ほかの寄付等功績の賞一九回。俳句は「あきあじ」井浦徹人に師事した。清水町に「清流会」を残す。没後句集「金壘」。日勝峠に句碑がある。

(佐々木露舟)

高崎郁秋 大11・8・28(1922~)。「俳句」函館市生まれ。本名幸雄。豊橋陸軍予備士官学校卒。室蘭市土地開発公社役員並びに室蘭工業大学講師。昭和18年ころより句作、「ホトトギス」に所属したが、高浜虚子没後退会、現在無所属。「芽木の会」「草の実会」「萌の会」等地元俳句会をつくり、俳句作者の育成指導にあたる。昭和52年室蘭文化連盟芸術賞受賞。平明典雅な伝統俳句の実践に努める。俳人協会会員。

柳社創立に参画。39年より北海道川柳年一度賞選考委員。49年7月句集「道草」を刊行。札幌川柳社顧問。

(川村美翔)

高瀬白洋 明41・12・8(1908~)。「俳句」上川管内中富良野町生まれ。本名藤三郎。昭和49年「葦牙」入会、54年同金剛集同人、同年「人」創刊とともに入会、同人。58年同当月集同人。60年同札幌支部長。昭和57年「梓」同人。俳人協会会員。

(太田緋吐子)

高瀬用女 明39・10・23(1908~)。「俳句」上川管内東神楽町生まれ。本名マツエ。旭川市立高等女学校卒。昭和13年室積徂春の「ゆく春」で句作開始。以来、一貫して同誌に所属する。昭和48年ゆく春徂春賞受賞。共著句集に「朱弦」がある。

(園田夢蒼花)

高田英太郎 昭6・11・1(1931~)。「小説」岐阜県生まれ。昭和32年早稲田大学仏文科卒。巨大に膨脹した新聞資本が北海道に進出して来た様子を描いた「黒い原点」で一九六三年度(第一回)新日本文学賞を受賞。三二書房から同時受賞の土方鉄「地下茎」と併せて出版(昭38・11)された。

(木原直彦)

高田喜久寿 明34・9・27(昭58・11・5 (1901~1983)) (小説) 札幌生まれ。北海道大学農学部卒。大正14

高崎 徹 明33・8・3(昭49・6・5 (1900~1974)) (ロシア文学、翻訳) 川崎市生まれ。東京外国語学校卒業後、大正14年より小樽新聞社に勤務、かたわら小樽高等商業学校講師などを務める。大正15年小林多喜二らと社会科学研究会を結成。主な翻訳作品に、小説の網羅的介绍としてはわが国初の「ガルスン全集」三巻(昭7~9年、春陽堂)がある。戦後、小樽の文芸誌「竹やぶ」に「小林多喜二についての思ひ出」を寄稿している。

(玉川 薫)

高崎竜太郎 生、没年不詳。「短歌」茨城県生まれ。明治中期函館に居住、明治21年5月北嶋社から「北海道作百人一首」を刊行。百人一首をもじった戯作歌をつくり、一首ごとに戯画を載せている。移民の致富や倒産などの生熊を描き、登場人物も土農商から鱈場のヤン衆、娼婦にいたるまで幅が広い。本道の歌書では最古のもの。ほかに「北海立志編」「札幌繁栄図録」、漢詩集「北海沿革歌」がある。

(中山周二)

高階玲治 昭10・1・7(昭36~)。「評論」樺太真岡郡幌泊生まれ。北海道教育大学函館分校時代から「不凍港」などで文学活動。のち「表現」の発行に尽力、同人として作品活動。昭和32

年旧制の釧路中学校に数学の教師として赴任、中学生らによる同人誌「北方芸術」の支援者として自ら作品を掲載した。のち長野、東京、愛媛、満州と転々、戦後長野市に居住した。釧路時代を舞台にした青春群像小説「インテリゲンチヤ」(昭5)を高田寿の筆名で刊行。戦後、満州太郎の名で著書「小説移民団」(昭58)がある。(鳥居宣二)

高田紅葉 註 明24・2・19(昭30・8・12(1891~1955))「短歌」小樽市生まれ。本名次作。損保代理店奥田商會に勤務。明治40年末啄木が小樽在勤中にその寓居をたびたび訪ね、教示を受けた。啄木の歌集中にも紅葉を詠んだものがある。生活派歌人として「文章世界」の歌壇で活躍した。(北川緑南)

高田高 註 大2・7・5(昭29)「俳句」小樽市生まれ。本名哲太郎。県立砺木中学卒業後、南樺太炭硯鉄道に就職。昭和10年池内たけしに師事、「ホトトギス」に投句。12年俳誌「凍原」を発行主宰。逸見末草、成相淑子ら「ホトトギス」関係俳人の支持を受けたが、17年新聞雑誌統合の指令により「氷下魚」と合併した。応召中敗戦となり、ソ連軍に抑留され24年帰国、北海道庁職員となり定年まで勤務する。帰国後「雲母」「青樹」に入会、飯田蛇笏、飯田竜

太、長谷川双魚に師事。現在「雲母」「青樹」同人。26年俳誌「波響」を発行、主宰。30、31、32年連続して雲母賞応募作品が優秀作品に選ばれた。「小樽の俳句」「小樽歳時記」の各編集委員。57年句集「卒爾」発行。小樽市文化団体連絡協議会理事、総務委員長。56年2月小樽市文化団体賞功労賞を受けた。俳人協会員。(菊地滴翠)

高田ちよ女 註 明39・3・22(昭60・1・17(1906~1986))「俳句」網走市生まれ。本名ちよ。庁立札幌高等学校卒。昭和19年「大富士」(古見豆人)に拠り作句を始め、32年「葦牙」同人、45年「河」同人となる。料亭「ぜにいち」の女将。34年より網走刑務所の篤志面接委員として俳句指導に当たり、地元網走の十七美俳句会を興し、網走文化連盟賞、網走市芸術賞、法務大臣賞を受賞。著書に句集「葱」(昭49)がある。(佐々木子興)

高田敏子 註 大5・9・16(昭19)「詩」東京生まれ。旧制跡見女学校卒、朝日カルチャー、主婦の友、NHK文化センターの詩の講師。詩誌「山の樹」同人、詩誌「野火」主宰。詩集「月曜日の詩集」(昭37・10、河出書房)、詩集「藤」で室生犀星賞受賞。「野火」は月刊誌で広い読者層をもつ。昭和58、59

渡り、敗戦後の22年に旭川へ引き揚げ、翌年稚内に移る。30年に「稚内文学」を興し、「沼」など多くの作品を発表。36年に「或る伝記」を稚内文芸協会から刊行。40年に稚内市文化賞(芸術部門)を受賞。伝記のほか「稚内市史」など郷土史の著作もある。現在は「月刊道北」の代表取締役社長。(木原直彦)

鷹津義彦 註 大7・5・25(昭55・11・25(1918~1980))「国文学研究」宮崎県生まれ。第一高等学校を経て東京大学国文学科卒。昭和17年から19年まで軍に応召。大学院を中退したあと帯広で開拓に従事。28年から44年まで帯広畜産大学で教える。立命館大学に移り学部長を務めた。著書に「日本文学史の方法論」(昭41、桜楓社)、「日本文学史・古典編」(昭56、同)がある。「北海文学」(昭22)には福永武彦、中村真一郎と小説、評論を発表。(神谷忠孝)

高取素城 註 明40・2・11(昭20)「俳句」名寄市生まれ。本名助春。昭和6年牛島藤六の「時雨」、荒谷松葉子の「常盤木」に参加。8年より室積徂春の「ゆく春」に投句。16年「ゆく春」同人。43年藤田旭山の「俳海」発刊以来、客員。(後藤軒太郎)

高野ケイ 註 大10・5・10(昭27)「随筆」上川管内美深町生まれ。筆

名青山一美。名寄高等女学校卒。美深小学校を振り出しに教師を三四年勤める。北海道新聞の「朝の食卓」に発表した随筆を集めて「粘土のチョコレート」(昭59、私家版)を刊行した。「昴の会」同人。(神谷忠孝)

高野草雨 註 明22・11・1(昭24・5・9(1888~1946))「俳句」山形県生まれ。本名伝五郎。山形中学中退後渡道、現在の空知管内由仁町で農業。のち上京して東京則成英語学校を卒業。再び渡道して鉄道局に入り、道内各駅助役、駅長を歴任、昭和13年退職後は鉄道弘済会に勤めた。俳句は中学時代に始め、牛島藤六、青木郭公、白田垂浪らに師事。藤六が「時雨」を創刊したとき同人として参加した。特に北海道特有の季節の研究を唱道し、藤六をたすけてその普及に尽力した。藤六が渡満、「時雨」を去るに際し、長谷部虎杖子、藤森氷魚、大島扶老竹らと計って「葦牙」を創刊。編集を担当、「暁雲」と並ぶ本道の二大俳誌として発展させた功は大きい。戦後復刊後も編集に力を尽くした。へ穹高う晴れ定まるや水柱映ゆ。(山岸巨狼)

高野斗志美 註 昭4・7・7(昭29)「評論」上川管内鷹栖町生まれ。旧制富良野中学、弘前高等学校を経て28年東北大学哲学科卒。病を得て帰道し、

年と来道し、札幌、小樽で講演並びに研究会を催して詩の発展につとめている。(小松瑛子)

高田勝 註 昭20・2・24(昭29)「エッセー」名古屋生まれ。早稲田大学商学部卒。東京のCM制作会社、林業雑誌記者を経て昭和47年根室に移住。牧夫生活の後、根室に民宿「風露荘」を開く。野鳥研究はじめ、自然に関するエッセーを多数発表し、北海道新聞のコラム「朝の食卓」にも寄稿。「ニオムロ原野の片隅から」「ある日野原で」「雪の日記帳」等の著書ほか、野鳥の写真集も多い。(小堀煥治)

高田光穂 註 大11・3・18(昭29)「川柳」空知管内北竜町生まれ。本名茂雄。昭和33年札幌川柳社創立に参加。47、48年と全国鉄文学年度賞を受賞。北海道川柳年度賞選考委員、北海道川柳連盟常任理事、札幌川柳社副主幹。句集に「波しぶき」「有珠」がある。(川村美翔)

高津磨古刀 註 大8・4・15(昭29)「小説」旭川市生まれ。本名信行。青年訓練所修。昭和14年から旭川「燔祭」「北海道文学」、札幌「大道」、東京「作家」その他に創作を発表。18年に板東三百を介して宇野浩二の知遇を得る。19年樺太新聞社の記者として豊原に

高校教師を経て現在旭川大学教授、学長。学生時代から小説を書き「根なし石」(昭31、「平原文学」13号)などで注目された。サルトル論「オレストの自由」(昭39・8)で第四回新日本文学賞を受賞後、めざましい多様な活動を展開。「存在の文学」(昭43、三一書房)、「安部公房論」(昭46、花神社。昭54、増補版、同)、「井上光晴論」(昭47、勁草書房)、「屯田作家板東三百」(昭47、旭川叢書)、「現代文学の射程と構造」(昭48、潮出版)、「倉橋由美子論」(昭51、サンリオ)、「現代文学と北海道の作家群像」(昭53、北海道新聞社)、「小熊秀雄」(昭57、花神社)など。最尖端の現代文学を追尋すると同時に、「愚神群」同人として旭川文学学校を創始し、井上光晴とともに文学伝習所を開くなど、日本北域の文学創造に情熱を傾けている。(小笠原克)

高橋昭夫 註 昭5・1・27(昭28)「新聞記者」函館市生まれ。昭和28年東京外国語大学ロシア語科卒。同年北海道新聞社に入社。モスクワに常駐特派員として三年間勤務。東京文社外報部、本社政経部次長などを経て本社編集委員。夕刊「北の事典」に「北海道番外地」「夜明けの戦艦」。長期連載シリーズ「証言・北海道戦後史」の第一部「田

中道政とその時代」正・続、第二部「町村道政とその時代」を執筆（いずれも北海道新聞社から発刊）。（竹岡和田男）

高橋明雄 たかはしあきお 昭12・9・21（16歳）「近代文学研究」新潟県生まれ。東京農業大学農学科卒。岩内高等学校教諭。主要論文は「歌人鳴海要吉研究」（昭45・12）53・5、「留萌文学」。単行本「季節の博物誌」上、下巻（昭51・9、52・4、湖北詩話会）、「留萌沿岸文学誌」（昭51、同）、「ジュシユナイの椎六狸」（昭56、みやま書房）。「留萌文学」同人。動物文学会（東京）会員。

高橋明子 たかはしあきこ 昭13・5・31（16歳）「詩」東京都生まれ。小樽校陽高等学校卒。昭和42年初期の「小樽詩話会」に参加して作品活動を続け、現在は発行人として同誌の月刊を維持。昭和46年詩誌「核」の同人。55年詩集「水甕の母」（昭55、北海道詩人協会賞受賞）刊行。詩風はヒューマンな眼と心によって庶民の日常を温かく見つめ、肯定的にうたう点に特色がある。北海道詩人協会会員。（水井 浩）

高橋勇 たかはしゆう 昭4・3・20（16歳）「詩」釧路市生まれ。慶応義塾大学文学部（通信課程）卒。戦後国立北海道第二療養所で詩作を始め、佐々木逸郎

らと同所詩部会の「木笛」「序奏」の編集に当たり、昭和25年「道標」（新十津川）および「野性」の各同人となる。38年「山音」（豊浦）同人。このほか「胆振教師詩集」に参加。昭和53年詩集「発芽」を刊行した。（佐々木逸郎）

高橋和子 たかはしわこ 昭10・2・11（16歳）「児童文学」上川管内東神楽町出身。「原野の風」同人。昭和52年に金の星社より過疎の村から都会へ引越す小学一年生のユキを主人公にした「ユキはひとりぼっち」を出版した。札幌市在住。（柴村紀代）

高橋揆一郎 たかはしけんいちろう 昭3・4・10（19歳）「小説」歌志内市生まれ。本名良雄。北海道第一師範学校中退。住友石炭（昭23）を経てフリーのイラストレーター。昭和46年「くりま」入会。同誌に「すかんぼ」（昭46）等数編を発表。「ポプラと軍神」（昭48・12）で第三七回文学界新人賞受賞。「清吉の暦」（昭50・3、「文学界」）で芥川賞候補となる。「観音力疾走」（昭52・1、「季刊芸術」）で第一回北海道新聞文学賞、芥川賞候補。「伸子」（昭53・6、「文芸」）で第七九回芥川賞受賞。現在も北海道に根を下ろし、庶民の生きざまを通して人間の根源的な姿を照射しつづけている。著書に「観音力疾走・木偶おがみ」（昭

こからおこる連想にロマンがただよう歌風。長年北見市に生活していたが、今は東京在住。〈野の鳥ら生きていづこに風葬の羽根かろがろと翔びたちてゆく〉（水平緑苑）

高橋溪河 たかはしきわ 明34・3・10（昭50・7・28）（1901～1976）「俳句」山形県生まれ。本名新一郎。昭和7年より作句を始め石田雨圃子に師事。9年拓殖銀行に勤め、松本幽石のすすめにより、ダリヤ吟社に所属し、竹内金人子、片桐芦峰、沢村素琴らと中心になり活躍。昭和23年拓殖銀行を退職後、北辰病院に勤める。院長の鮫島交魚子の片腕となり、北海道俳句協会結成以来、事務局長として長年尽力した。（白幡千草）

高橋ことし たかはしことし 明36・11・28（昭29・5・6）（1903～1964）「短歌、詩」旭川市生まれ。新聞社の文選工、カメラマンとして活躍する一方、女性のサークル・グループ「朱蘭会」を結成する。小熊秀雄の影響を受け、朱蘭会より詩歌集「独活」を発行、浅沼君子らと交友をもつ。のち北見で結婚、短歌をつくり「カーネーション歌会」を結成する。女性としての昭和初期の詩活動は珍しく、旭川や北見の文化活動の草分けとなった。

高橋貞俊 たかはしけんしん 大2・5・15（16歳）（小松瑛子）

53、東京新聞出版局）、「伸子」（昭53、文芸春秋）、「五番棟の梅」（昭53、河出書房）、「狐沢夢幻」（昭54、作品社）、「北の旗雲」（昭54、新潮社）、「北の道化師たち」（昭55、作品社）、「別ればなし」（昭55、新潮社）、「青草の庭」（昭56、同）、「夏の月」（昭56、河出書房）、「湯気に隠れて」（昭56、潮出版）、「さざなみ」（昭56、同）、「晩籟」（昭57、文芸春秋）、「舞々虫の賦」（昭58、河出書房）、「炭火赫く」（昭59、文芸春秋）、「雨ごもり」（昭60、福武書店）のほか、余技とは言えない画才をみせる画文集「帽灯に曳かれて」（昭59、潮出版）がある。昭和57年8月北海道新聞社A A作家日本委員会訪中団で中国、シルクロードに取材旅行した。

「観音力疾走」 くわんおんりきしう 短編小説。昭和52年冬号「季刊芸術」。「観音力疾走・木偶おがみ」東京新聞出版局刊（昭53・7）。芥川賞候補。道新文学賞受賞。無智ではあるが純な魂の女と、乱暴者だが優しい魂の伝吉が夫婦として生きるが、女は前夫の子の死や、伝吉の事故にあり、観音に祈る。庶民の心の底にある生のがぎと超越者への祈りが、民族的世界の中心に結晶した初期の秀作である。（川辺為三）

高橋掬太郎 たかはしきくたろう 明34・4・6（

23）「俳句」旭川市生まれ。本名木村。昭和初期、荒谷松葉子、藤田旭山らに学び、昭和12年垣川西水、園田夢蒼花らと新しい境地を求めて「海賊」「プリズム」などを発刊。その間、吉岡禅寺洞の「天の川」の同人として活躍しながら、齋藤玄らの参加もあった「俳句会館」を経て、昭和21年「水輪」を刊行した。また、昭和18年に第一句集「新殺祭」を上梓。骨太くみずみずしい作風は、多くの注目を浴びた。戦後貞俊、夢蒼花を中心とする「水輪」の門を叩いた作家は少なくない。寺田京子、情野小鈴、滝沢無人、木村照子、小田幸子、園田風、加藤次男、藤井聖波、館川京二、磯野雅之、後藤軒太郎、布施蒼平等。昭和44年同人誌「広軌」発刊。同年旭川市文化奨励賞を受賞。戦前戦後を通して北海日日新聞、北海道新聞、北海タイムス等の俳句欄の選を担当した。現代俳句協会会員。

「風貌」 ふうぼう 句集。昭和44年広軌発行所刊の第二句集。昭和21年から43年までの作品集で「深味、淡味、枯淡の境地等私に似合わない」と後記の中で著者は述べているが、「新殺祭」を上回る骨太い、そして奥深い俳人格を存分に味合わせてくれる楽しくて愛しい一巻である。（頭の中も雑草荒ぶ稲光）

高橋 愁 たかはししゅう 昭17・1・24（19歳）（後藤軒太郎）

心)〔短歌〕宗谷管内東利尻町生まれ。本名準之。食堂経営。昭和37年歌誌「新壘」に入会したが、43年に退会。同年6月個人短歌誌「幻苑」を創刊、以後同誌を「喚」「緑礁」「叙」と改題しながら、北海道における唯一の短歌個人誌として、不定期刊に発行し続ける。59年1月から月刊「叙通信」も発行。その間、歌集「石よ未明を」(昭45・11、自家版)を上梓、70年代の幕開けに一石を投じる。57年12月道内在住の若手歌人と共に短歌同人誌「燦」創刊。結社組織を好まず、自身を孤立させたなかで鍛練し、作品と評論を並行して執筆。その作品と論には、時代状況や現実に対する鋭い問題提起が常に含まれており、旺盛な批判精神を示す。第二歌集「希望の土」ある群像の記」(昭60・1、斜塔出版)は、石狩管内当別町に入植した仙台藩岩出山支藩の悲劇の書下ろしで、歴史への肉迫の書。(細井 剛)

高橋渉二 〔詩〕札幌市生まれ。胡差焼窯元、デザイナー。詩誌「ねぐんどの会」「北海詩人」「ウラヌス」を経て、個人誌「ダダ」を発行、現在「インドラ」主宰。詩集「春の裸像」(昭45・9、自家版)、「ゴリラがゆく」(昭46・8、ねぐんどの会)、「古代自転車狂」(昭49・2、

神谷忠孝) 高橋信子 〔短歌〕胆振管内追分町生まれ。実践女学校卒業後、母校の追分小学校に就職。教員時代に友人の紹介で戸塚新太郎に師事、作歌を始めた。昭和28年「原始林」入会。50年原始林賞、51年田辺賞を受賞。53年歌集「胆振路」出版。日常生活が少なく、北海道の自然風土への関心を基調とする骨太い歌風であるが、本州旅行を通じて、伝統的、日本的風土への観照を深めている。(田村哲三)

高橋英衛 〔短歌〕釧路市生まれ。旭川師範学校卒業。教員。初期の号は木芽伸一。初め並木凡平に師事したが、のちに前田夕暮の白日社、戦後は「新短歌」に所属、昭和53年同社の功労賞を受ける。歌集に「秋風の道」(昭5)、「山脈は暮れる」。

高橋秀郎 〔詩〕札幌市生まれ。本名高橋秀。大13・8・21) (62)

創映出版)、「愛と腹話術」(昭53・5、書肆山田など)。「群島渡り」(昭56・9、沖積舎)で第五回山之口模賞受賞。アンリ・ミシヨールの影響を受けて、詩を書きすすめながら詩作をしていく方法論をもち、活字の上の詩だけでなく、詩の朗唱を野外で行うアクション詩人でもある。独自の詩的空間をひらき、その作品はエネルギーを感じるが、ときとして言葉を破壊していく。詩の世界が展開して、また縮まっていく。そんな詩からボエジーの原エネルギーを感じる。(小松英子)

高橋隆雄 〔短歌〕宮城県生まれ。昭和5年北海道新聞の前身十勝毎日新聞社に入社、短歌を始める。10年「潮音」入社、12年退社。24年「新壘」入社。29年北海道新聞釧路支社歌壇選者。32年釧路歌人会長。41年札幌へ転住。46年歌集「いのちの韻」出版。おだやかな語彙ではあるが、底意に若竹のような情熱と誠実さを秘める歌風。(互替に労はり合ひて旅しゆく美しき残照の橋は消ぬべく)

高橋渾水 〔俳句〕明24・1・29) 昭49・11・26 (1891) 1974) 函館市生まれ。本名正吉。函館商業学校卒業。昭和の初期、伊藤松宇の「筑波」に拠って句作に励み、戦前樺太より発行の「氷下

吉。旧制私立昭和中学校卒業。昭和21年久野斌、佐藤初夫らが発刊している詩誌「ぼへみやん」に参加し、作品活動を始める。「ぼへみやん」「ぼへみやん」改題)、「詩祭」を経て、26年5月佐藤、久野、伊東廉、大町和衛らと詩誌「苗」を創刊。36年四五号で休刊。43年11月に急死した久野の追悼号を昭和45年12月に発行。その後昭和54年10月伊東、佐藤、長井菊夫、羽田野幸子らと復刊第1号(通巻47号)を発行し季刊をつづけている。58年7月復刊以降の作品三四編をまとめた処女詩集「歴史」を「苗クラブ」より出版。戦中派の青春非在と戦争で死んでいった者と死をまぬかれた者、それぞれの「死」の意味を問いかけた作品を集録。この詩集は第二回北海道詩人協会賞を受賞。ホクレン職員を経て、北海道農業協同組合学校講師。(伊東 廉)

高橋笛美 〔俳句〕空知管内奈井江町生まれ。昭和20年ころより句作。「はまなす」「木菟」に投句。23年より「ホトトギス」「春潮」などに投句、高浜虚子の指導を受ける。41年「十人会」に参加し高浜年尾に師事。「ホトトギス」巻頭作家。53年「ホトトギス」同人。句集に「吾の冬」がある。札幌ホトトギス会副会長。北海道俳句協会委員。俳人協会員。

魚) 同人として活躍した。のち「草人」に、晩年には「群蜂」に所属して精力的に作品活動をし、留萌税関支署長から昭和17年ビルマ派遣司政官となる。戦後留萌俳句会の創設に尽くし、33年留萌市文化奨励賞を受賞。(島 恒人)

高橋忠吉 〔短歌〕石狩管内石狩市生まれ。明治35年一家は現上川管内中富良野町の鹿討農場に移住。大正8年中田観登に作歌の指導を受け「新壘」「潮音」に入社。昭和13年「新万葉集」に五首登載される。21年「潮音」四月号に論文「中道の自覚」を発表。22年「潮音」同人となる。喉頭結核で没した。遺歌集「地温」がある。36年中富良野町弘楽園に歌碑が建立された。(西川青海)

高橋留治 〔詩〕旭川市生まれ。筆名市井莊散人。昭和4年庁立旭川商業学校卒業。北海道拓殖銀行に勤務。退職後は室蘭信用金庫常務理事、ふせ観光副社長、三陽印刷株式会社常務取締役などを歴任した。昭和6年ころから旭川新聞に詩、評論などを投稿し、戦後は「情緒」、短歌誌「原始林」などに所属して著作活動に励んだ。「市井莊散人蔵書目録」(昭47、私家版279頁)の詩書リ

高橋朋志 〔俳句〕旭川市生まれ。本名清。昭和21年「雪霧」発刊にあたり、上田互林らと共に塩野谷秋風に協力した。22年「水輪」同人となる。作風は病的なまで鋭く、頽廢の尾をひきながら力強い。(嶋田一歩)

高橋三枝子 〔女性史研究〕富山県生まれ。玉川大学文学部卒業。朝日新聞文化部、上川支庁教育局を経て、昭和47年に北海道女性史研究会を結成。その主宰として機関誌の編集発行、聞き取り調査等により本道女性史を発掘。札幌学院大非常勤講師。著書は「北海道の女たち(正・続)」(昭51、55、北海道女性史研究会)、「戦争と女たち」(昭58、ドメス出版)などがある。(森山軍治郎)

高橋義孝 〔独文学研究、評論〕東京神田の生まれ。高知高等学校から東京大学独文学科を昭和10年に卒業。大学院を経て、昭和12年から14年までドイツに留学、ドイツ哲学、芸術学などの基礎をも体得した。帰国後、東京府立高等学校教授、陸軍教授を経て、戦後は東京高等学校教授となり、北海道大学法文学部創設とともに助教として昭和22年秋着任、翌年春

離任。のち九大教授。森鷗外の研究者。横綱審議委員。(和田謙吉)

高橋竜宮城 (たかはしり) 大7・3・18 (1918) (俳句) 旭川市生まれ。本名一郎。昭和10年高橋貞俊について作句。「海賊」「プリズム」「俳句会館」「水輪」を経て昭和47年「広軌」同人。句集に「風神」がある。現代俳句協会。横浜市在住。(園田夢蒼花)

高橋和光 (たかはしり) 明44・12・2 (1919) (短歌) 宮城県生まれ。本名和夫。大正5年ころ北海道に移住。昭和3年小樽中学校在学時代から小樽観望のもとにあつて文芸活動を続け、5年「新壘」に入社して本格的な作歌活動に入る。7年から教員として小樽市周辺の小学校に勤務しながら、鍋山隆明らと「新壘小樽歌会」の活動を推進した。28年より上川管内の小、中学校長を歴任、その間に各任地で公民館活動と連繫して短歌会を育成し、多くの歌作者を成長させた。32年に日本歌人クラブ会員、「潮音」同人となつて歌壇人としても地歩を確立、38年には旭川の「新壘」支社代表として社友の活動を指導、広く同地域の作歌層を充実させた。40年「新壘」の選者となる。41年の当麻町伊香牛小学校校長時代には、井山一文らと同地の会員の年刊歌集「こまぐさ」を刊行。43年「新壘」の旭川大会

道には年尾直系の弟子が多く、ホトトギス誌で活躍している。昭和33年6月の虚子最後の来道を記念したホトトギス全道大会まで出席した。著書に「俳諧手引」「年尾句集」「父虚子とともに」「病間日誌」などがあり、没後に「年尾全句集」刊行。(嶋田一步)

高原与祐 (たかはしり) 昭4・8・25 (1929) (俳句) 札幌市生まれ。本名米。華道教授。昭和50年より粕谷草衣に師事、草衣没後は白石俳句会代表として「草衣」を続刊。会員合同句集「くさころも」第一、第四集を刊行した。「広軌」同人。現代俳句協会。(園田夢蒼花)

高松薫月 (たかはしり) 明32・11、昭4・2 (1899) (短歌) 本名利雄。北海道大学工学部事務職員。大正14年歌誌「埋火」、翌15年「新短歌社」を創設。「草いちご」「一点」などにも所属した。札幌短歌会幹事。昭和2年歌集「砂丘の雑草」出版。文語口語の両刀駆使。(吉田秋陽)

高松慶子 (たかはしり) 昭8・12・21 (1933) (俳句) 空知管内沼田町生まれ。叔父高橋耕雲の影響により小学生時代から作句を始める。昭和42年「扉」に参加し、47年「道」同人となる。49年「道」俳句作家賞を受賞。句集に「妻の笛」が

を大会長として開催し道北の歌壇活動に精彩を放った。45年に歌集「雪華」を出版。同集は昭和3年から44年までの約四〇年間のおよそ四〇〇〇首の中から自選した九八八首を編年体で構成しており、作風は四季の自然風物に対する愛着を基盤に、人生や人情の機微に触れたもので大らかな歌柄は北方的特色をみせている。教職を定年退職後は札幌市に居住し、書家としても活躍。現在「新壘」の選者、運営幹部、「潮音」幹部同人として後進の指導に力を注いでいる。(足立敏彦)

高浜虚子 (たかはしり) 明7・2・22 (昭34・4・8 (1874) (俳句) 松山市生まれ。本名清。中学時代に子規と文通、これが俳句への機縁となる。明治27年仙台第二高等学校を中退。上京して子規の俳句革新運動に従う。明治31年俳誌「ホトトギス」を受けついで多くの俳人を育てる。昭和2年「俳句の目的は花鳥風月を諷詠するにある」として花鳥諷詠を心とし客観写生を手法とする主張を提唱した。虚子の来道は六度に及び、昭和8年旭川の北日本大会、23年札幌の全道大会には、有力同人を多数従えての来道であった。33年が最後の来道となった。昭和29年星野立子に托した「北海道俳人

ある。(北 光星)

高見 順 (たかはしり) 明40・1・30 (昭40・8・17 (1907) (小説) 福井県生まれ。本名高間義雄、のち芳雄。父は永井荷風の父の実弟にあたる。母古代の私生児。東京大学英文科卒。左翼くずれの苦悩と頹廢を描いた「故旧忘れ得べき」で第一回芥川賞(昭10)の候補に選ばれ注目された。代表作に「如何なる星の下に」などがあるが、「いやな感じ」(昭38・7、文芸春秋新社)もその一つ。アナキスト加柴四郎の物語で、京城で憲兵隊に踏み込まれた主人公は女中波子に救われて一緒に東京へ逃れ、さらに北海道(根室)に落ちのび(根室の風土を見事に描く)堅気で暮らす、やがて上海に渡って教奇な運命に出会う。新潮社文学賞受賞。道内講演は数多く、根室への初旅は昭和34年7月で、「いやな感じ」はその所産であり、短編小説に「北海の渡り鳥」(昭34・12、「新潮」)がある。その間のことは「名作取材紀行」『いやな感じ』(昭37・9・24、週刊読書人)に詳しい。初代の日本近代文学館理事長。石狩管内当別町太美に建つ本庄陸男の文学碑「石狩川」は高見の揮毫。(木原直彦)

高村光太郎 (たかはしり) 明16・3・13 (昭31・4・4 (1893) (詩、彫刻)

高安国世 (たかはしり) 大2・8・11 (昭59・7・30 (1913) (短歌) 大阪生まれ。土屋文明に師事、終戦後「高槻」(関西アララギ)を編集したが、昭和29年「塔」を創刊、後進の指導に努めた。歌集「真実」ほか二冊。昭和36年と52年に来道、多数の詠作を残した。「羊蹄」の創刊にあたり樋口賢治を助け、リルケの詩の翻訳ならびに短歌作品をしばしば

へ伝言」の書がある。「定本高浜虚子全集」をはじめ句集、小説、評論など著書多数。芸術院会員。昭和29年文化勲章を受けた。「六百五十句」句集。昭和21年から25年までの六五〇句を収める。川端康成はノーベル賞記念講演の中で、「去年今年貫く棒の賞きもの」その他を挙げ、「大した言い方です。禪の一喝に遭ったようです。虚子の句はまるで普段の会話が、独り言が口を吐いて出るように、自由自在に無造作に平淡な句を作ったと見るうちに、類いなく大きいおそろしい妙にして深い句を作る」と絶賛している。(嶋田一步)

高浜年尾 (たかはしり) 明33・12・16 (昭54・10・26 (1900) (俳句) 東京生まれ。大正13年小樽高等商業学校卒業。高浜虚子の長男として開成中学時代より句作。昭和13年「俳諧」を創刊、連句の普及にとめる。昭和21年ホトトギス主宰、27年「ホトトギス」の雑誌選を虚子から引き継ぐ。虚子の平明にして余韻ある句、花鳥諷詠の道を継承、さらに解る句、直感の句を特に唱導し、多数の弟子を育てる。小樽高商との縁で、小樽を第二のふるさととして北海道を愛し、来道することが多かつた。北海道の季題を新しく歳時記にとり入れたりしている。本

東京生まれ。東京美術学校彫刻科卒。はじめ「明星」に短歌を発表。明治39年より三年半欧米留学。大正3年詩集「道程」により、人道的詩人としての位置を確立。以後出版された詩集、翻訳書、随筆集は四十余冊にのぼる。詩集「道程」にある「声」は、芸術作品の純粋性維持のため北海道で酪農生活をすべく、明治44年月寒種羊場の農商務省研究所に入所したが、札幌のアメリカ化に失望して東京に引き揚げたときのもの。昭和3年「銅鑼」に発表の「彼は語る」の彼とは更科のことで、彼の話により北海道移住熱が再燃したが、父光雲や智恵子夫人の病気のため挫折。真壁仁や更科の主宰する詩誌「至上律」や「北緯五十度」に協力し、日本の北方の大地に、ヨーロッパの文化と同じように、北緯五〇度線上に文化の花を咲かせることを常に夢みていた。(更科源蔵)

高安国世 (たかはしり) 大2・8・11 (昭59・7・30 (1913) (短歌) 大阪生まれ。土屋文明に師事、終戦後「高槻」(関西アララギ)を編集したが、昭和29年「塔」を創刊、後進の指導に努めた。歌集「真実」ほか二冊。昭和36年と52年に来道、多数の詠作を残した。「羊蹄」の創刊にあたり樋口賢治を助け、リルケの詩の翻訳ならびに短歌作品をしばしば

寄稿している。独文学者、京都大学教授としての業績も多い。

(田中章彦)

高山亮二 (1915～1980) 〔短歌〕青森県生まれ。本名正俊。青森商業学校卒業後

「満洲短歌」「短歌中原」にも関係。昭和21年に帰国後、青森、帯広、小樽と転住を重ねたが、終生土屋文明に師事。汪洋かつ骨太なその作風は、「魂陽ぶし」とも称された短歌朗詠と共に人々に愛された。歌集に「霧の中」(昭50)がある。

(村井 宏)

滝川句楽 (1917～1970) 旭川市生まれ。札幌鉄道教習所卒。国鉄を経て網走管内滝上町議会議長。二〇歳のころから

作歌。第一次「新短歌時代」に作品発表。「足跡」「滝」「たきのひびき」など創刊。歌集「胸に鳴る風」(昭46)。

(青山ゆき路)

田口孝太郎 (1929～) 渡島管内森町生まれ。北海道教育大学卒。滝川演劇鑑賞協会事務局長。昭和24年森中学、51年滝川高校

教諭。高文連草創期の中心者。「かもめ」

鎌太郎を知り「アカシヤ」に入会。42年同木理集同人(無鑑査)。55年句集「化身」上梓。アカシヤ俳句会運営委員、アカシヤ俳句会浦臼支部の指導者として、その発展に尽力している。俳人協会員。

(岡澤康司)

滝沢無人 (1915～1980) 〔俳句〕東京生まれ。本名良夫。昭和20年武蔵工業専門学校卒。戦災に遭い旭川市に移住。21年「水輪」創刊号より参加。高橋貞俊、園田夢蒼花の指導を受ける。23年より編集を担当する。24年第一回水輪賞受賞。26年帰京後作句活動を休止していたが、46年「広軌」創刊以後復活。58年句集「制多迦童子」上梓。現代俳句協会員。

(後藤軒太郎)

滝見白鳥 (1907～1970) 旭川市生まれ。札幌鉄道教習所卒。国鉄を経て網走管内滝上町議会議長。二〇歳のころから作歌。第一次「新短歌時代」に作品発表。「足跡」「滝」「たきのひびき」など創刊。歌集「胸に鳴る風」(昭46)。

(青山ゆき路)

富士製鉄の輪西工業学校卒業後同社に入社し、鶴ヶ崎定時制高校に学ぶ。千葉大学国文科卒。千葉大学教養部助教授。著

書に「堀辰雄の文学」(昭59、桜楓社)がある。芸術至上主義文芸学会理事。

(神谷忠孝)

竹内輝行 (1904～) 〔詩〕札幌市生まれ。小樽に住み会社役員。道地労委員。昭和29年石田

波郷の「鶴」に拠り句作、現在同飛鳥集同人(無鑑査)。土岐鎌太郎の「アカシヤ」にも約二〇年間所屬した。北海道「鶴」支部機関誌「さるるん」には、創刊以来意欲的に特別作品を発表してきた。俳人協会員。小樽俳句協会幹事長。

(園田夢蒼花)

竹内てるよ (1904～) 〔詩〕札幌市生まれ。釧路管内厚岸町を経て小学校三年に上京、私立日本高等女学校中退、新聞記者ののち結婚、一子を得たが脊椎カリエスの発病により離婚、婚家に残した子供を思う母性愛より詩作に入る。昭和4年草野心平の「銅鑼」、草野心平、伊藤信吉の「学校」などに、多分にアナキー的な詩を発表。病状と極度な貧困の生活を見た尾崎喜八

が代表となつて、全国の詩人たちにカンパを募り、また草野心平が鉄筆を握つて薄いガリ版刷りの「叛く」という竹内の

で全道高校創作脚本賞、「一つの旗」で青年劇場戯曲賞佳作賞を受賞。昭和57年滝川演劇鑑賞協会を組織、地域文化への貢献から滝川市政功労奨励者として表彰された。

(菅村敏次郎)

田口佐知子 (1918～) 〔詩〕大阪生まれ。帯広市三条高校卒。昭和42年5月「裸族」創刊同人。49年詩集「旅情」を刊行。52年「裸族詩選」に参加。日常性の不条理を反映した心象風景と、喪失の抒情が詩の創造的要素となつている。

(千葉宣一)

塚磨緑泉 (1912～) 〔俳句〕日高管内門別町生まれ。本名宗雄。高野山文学部卒。兵役後北海道庁に長く勤務。各地転任のかたわら昭和21年より作句。「緋衣」「樹水」に参加。49年第一回樹水賞受賞。48年より「道」に入会。55年句集「旅靴」を上梓。同句集の柔軟な詩心により、同年度「道」俳句作家賞を受賞。「道」同人会副会長。俳人協会員。

(北 光星)

匠 秀夫 (1913～) 〔詩〕札幌生まれ。北海道文学部大学院修。札幌大谷短期大学教授を経て神奈川県立近代美術館主任学芸員となり、のち館長。旧制札幌第一中学の先輩である画家三岸好太郎の研究が機縁となり、三岸家から遺作が北海道に

第一詩集が銅鑼社から出された。当時、空知管内栗山町(角田村)に住んでいた中島葉那子は竹内のために協力、栗山の黒潮社から散文集「曙の手紙」を出した。これは、竹内に発送の直前、特高に押さえられ発禁となつたが、個人発送をした極少数部が現存している。第二詩集「曙の手紙」は、竹内と共同生活をし、共に「銅鑼」の同人だった神谷暢により上梓された。このころ福田正夫編集の「詩神」にも詩を掲載した。竹内と神谷は印刷所「溪文社」を設立、ガリ版の「叛く」とは違うもう一つの「叛く」を高村光太郎の表紙で昭和6年4月に刊行した。竹内の詩は階級闘争を正面に押し出さないが、母親の感情の上にたち、ヒューマンな貧しい生活者の性格がある。竹内が詩人として広く読まれたのは第一書房で出版した「静かなる愛」(昭15・10)と「悲哀あるときに」で竹内三六歳のころである。詩集四〇冊近く、その他童話、小説など数多く書いている。自伝「海のオルゴール」(昭53・8、家の光社)はテレビ化された。

(小松瑛子)

武内夕彦 (1915～) 〔俳句〕深川市生まれ。本名敏彦。日本歯科大学卒。歯科医院経営。昭和20年より「緋衣」に所屬。42年「扉」同

寄稿している。独文学者、京都大学教授としての業績も多い。

(田中章彦)

寄付され、昭和42年北海道立美術館が開館した。日本文芸家協会員。美術評論家連盟会員。「北大季刊」六号(昭29)に評論を書きつづける。

(工藤欣弥)

武井静夫 (1914～) 〔詩〕札幌生まれ。日本大学文学部卒。昭和34年から後志を

素材にした文学作品の背景ならびに文学運動の系統化を試み、さらに伊藤整の本格的研究にすすむ。主著に「後志の文学」(昭45、北書房)、「若き日の伊藤整」(昭49、冬樹社)があり、主要論文に「啄木・その小説と短歌の問題点」「お貞さんのこと―武者小路実篤の初恋」などがある。

(高山亮二)

竹内兎陽 (1915～1980) 〔短歌〕青森県生まれ。本名正俊。青森商業学校卒業後

(村井 宏)

「満洲短歌」「短歌中原」にも関係。昭和21年に帰国後、青森、帯広、小樽と転住を重ねたが、終生土屋文明に師事。汪洋かつ骨太なその作風は、「魂陽ぶし」とも称された短歌朗詠と共に人々に愛された。歌集に「霧の中」(昭50)がある。

(村井 宏)

寄稿している。独文学者、京都大学教授としての業績も多い。

(田中章彦)

寄付され、昭和42年北海道立美術館が開館した。日本文芸家協会員。美術評論家連盟会員。「北大季刊」六号(昭29)に評論を書きつづける。

(工藤欣弥)

武井静夫 (1914～) 〔詩〕札幌生まれ。日本大学文学部卒。昭和34年から後志を

素材にした文学作品の背景ならびに文学運動の系統化を試み、さらに伊藤整の本格的研究にすすむ。主著に「後志の文学」(昭45、北書房)、「若き日の伊藤整」(昭49、冬樹社)があり、主要論文に「啄木・その小説と短歌の問題点」「お貞さんのこと―武者小路実篤の初恋」などがある。

(高山亮二)

竹内兎陽 (1915～1980) 〔短歌〕青森県生まれ。本名正俊。青森商業学校卒業後

(村井 宏)

「満洲短歌」「短歌中原」にも関係。昭和21年に帰国後、青森、帯広、小樽と転住を重ねたが、終生土屋文明に師事。汪洋かつ骨太なその作風は、「魂陽ぶし」とも称された短歌朗詠と共に人々に愛された。歌集に「霧の中」(昭50)がある。

(村井 宏)

人。48年「壺」復刊に際し同人として参加、52年壺中賞準賞を受賞。滝川市に齋藤玄句碑建立のため尽力。55年玄死去後の「壺」続刊の中核となり、発行名義人、同人会長。俳人協会員。(金谷信夫) 竹岡広一郎 (1931-) (小説) 札幌市生まれ。本名広。昭和25年に岩見沢東高校を卒業、郵政職員となる。28年「胎動文学」に加入して「去年の雪」などを、30年には「独立文学」を創刊して「ある序章」などを、「全通北海道文学」にも「ある小さな事実」を発表した。(木原直彦)

竹岡和田男 (1938-) (美術、映画評論) 福岡県生まれ。旧制福岡高校文科卒。昭和27年北海道新聞社入社。主として美術、映画、演劇を担当。現在編集委員。一方でさっぽろ市民劇場を中心に舞台制作にかかわり、代表作に「絵巻源氏物語」(昭和41制作、演出)、「ボーギーとベス」(昭和45、台本、演出)。著書に「感情的批評と創造」(昭和46)、「映画はいつでも映画だった」(昭和59)がある。「美術ペン」同人。(高橋昭夫) 武田仰天子 (1854-1926) (小説) 大阪生まれ。本名類。新聞記者生活を送る。関西文壇の重鎮であり、大衆文学の

先駆的存在。代表作の「蝦夷錦」(明治6、春陽堂)は舞台を日高国幌泉に置くアイヌ物語。(木原直彦) 武田繁太郎 (1909-) (小説) 神戸市生まれ。早稲田大学独文科卒。昭和27年の「生野銀山」は芥川賞候補になった。短編小説「石狩」(昭和29、6、「文芸」)は、七〇の声を聞く馬追いの物語で、石狩川の上流に沿った人口一万足らずの町(深川は隣町)が舞台となっている。(木原直彦)

武田泰淳 (1912-1976) (小説) 東京生まれ。父は住職で大正大学教授だった。浦和高校入学(昭和3)後、中国近代文学に親しみ左翼運動に加わる。東京大学支那文学科入学(昭和6)後まもなく逮捕され一カ月拘留。昭和9年竹内好らと中国文学研究会を結成。12年召集、中支に派遣される。親炙する中国への侵略者となった心の傷は「司馬遷」(昭和18)の「生き恥さらした男」の痛恨に通う。敗戦を上海で迎えた19年帰国。「娘のすゝめ」(昭和23)にその内面をうかがえる。22年10月新設の北海道大学法文学部助教授となるが翌春辞職、作家生活に入り「愛のかたち」「異形の者」「風媒花」などで戦後文学に屹立する存在となった。代表作

日本女詩人会、日本詩人クラブ、日本現代詩人会、日本ペンクラブ、日本文芸家協会所属。詩集に村上郁美のペンネームで「拾う集めたもの」(昭和6、第一の街)、「雨の海」(昭和27、北方浪漫社)、「木の葉祭り」(昭和33、時間社)、「雪まつり」(昭和35、書肆ユリイカ)、「重粘土地帯」(昭和40、自家版)、「小鳥のかげ」(昭和45、紅花社)その他。随筆集「冬鳥」(昭和46、母岩社)ほか。詩集「小鳥のかげ」で第三回日本詩人クラブ賞受賞。北海道の女流の草分けといえる詩歴の長い詩人である。詩風は魂の故郷である北方の情景をはなさず、そのなかに血肉のやさしさと多彩な人生の重さを描きだしている。人間の孤独と心の傷をみつめる心は、常に他者への思いやりとなり、精神の美しさを放っている。(小松漢子)

竹田つてを (1908-1915) (俳句) 宗谷管内中頓別町生まれ。本名哲男。砂川南高校卒。陸上自衛官。昭和42年より職場俳句サークル「ななかまど」「白の会」などにより句作に入る。鮫島交魚子、寺田京子らに師事。48年「道」同人を経て現在「にれ」同人。54年第一三回北海道俳句協会賞、札幌市民芸術祭奨励賞、59年第六回にれ賞等受賞。放胆と細心を織り交ぜた明るい

作風。(木村敏男)

竹田凍光 (1892-1974) (俳句) 兵庫県生まれ。本名輝二、別号芦月、雪天楼。明治27年父母と共に来道。中学生時代から作句を始め、内藤鳴雪に師事。大正5年白田亜浪門下となり「石楠」同人となる。9年旧派花の本聴秋の「鴨東新誌」に拠るが、月並俳句と決別し「凍海吟社」を創立。勤務の関係で道内を転々とするが、各地で斜里俳句連盟、麓吟吟社等を創立し、地方俳句文化の指導に努める。昭和16年俳誌「北光」を刊行するが、二年で休刊。戦後、後志管内倶知安町に発行所を置いた俳誌「ふもと」の主幹となる。26年網走で「ふもと」復刊、「北光」誌を発行するが、第五号をもって休刊。27年以降はフリーの立場をとり、「葦牙」客員待遇となる。網走刑務所矯正機関の俳句講師として、鉄窓文芸に尽力した。著書に「北海道俳壇系派分類概要」がある。(北 光星)

武田友寿 (1916-1961) (評論) 宮城県生まれ。昭和21年室蘭に移り、青年学校卒業後は日本製鋼所室蘭製作所の技術者。24年カトリックに入信し、28年洗礼を受けた。そのことから文芸評論を書き始め、カトリック実存主義に批評の根拠を置いて「宗教と文

に「ひかりごけ」(昭和29)、「森と湖のまつり」(昭和33)、「貴族の階段」(昭和34)、「わが子キリスト」(昭和43)、「富士」(昭和46)など、評論集も「人間・文学・歴史」(昭和29)など重要なものが多い。増補版「武田泰淳全集」全一八巻別巻三巻がある。「森と湖のまつり」長編小説。昭和30年8月、33年5月「世界」連載。新潮社(昭和33、6)刊。東京からアイヌ風俗を描こうとやってきた女画家を一視点とし、アイヌ統一委員会の動向を基軸に、アイヌとシヤモの結びつきや離反を多彩に百科事典ふうがちりばめ、民族差別の深淵を垣間見、贖罪をほらませた力作。「ひかりごけ」短編小説。昭和29年3月「新潮」。「美貌の信徒」(昭和29、9、「新潮社」)収。知床半島最辺境での人肉食という衝撃的素材を見据え、善悪の彼岸にある極限状況下の反人間的行為を、夢幻能に似た世界で追尋する。生き抜くことの戦慄的在りように撃たれる。(小笠原克)

武田隆子 (1914-) (詩) 旭川市生まれ。旧制高等女学校卒。旭川で文学グループ「朱蘭会」に入会、「独活」同人。上京後「時間」「女性誌」「深海魚」「風」「幻視者」同人。学」のテーマを追究し、亀井勝一郎と唐木順三を論じた「美神の宿命」(昭和43、10、中央出版社)を発表した。一方では判事を志し、39年に独学で司法試験第一次に合格、大学修了資格を得た。44年10月に刊行した「遠藤周作の世界」(中央出版社)は翌45年に第二回亀井勝一郎賞を受賞、46年あらためて講談社から出版された。現在は清泉女子大学助教授。主な評論に「救魂の文学」(昭和49、6、講談社)、「遍歴の求道者亀井勝一郎」(昭和53、11、講談社)がある。小説「アヴェ・マリア」(「エスプリ文学」9号)は北方ジャーナル同人雑誌賞を受けた。(神谷忠孝)

武田信義 (1917-) (短歌) 十勝管内陸別町生まれ。釧路管内厚岸町内で教員、北海道学芸大学旭川分校図書館員を経て、旭川で薬局を経営し、長く保護司を務める。昭和18年斎藤茂吉の「アララギ」に入会し、戦後「北海道アララギ」同人。地域的な「旭川アララギ」を主宰する。29年「短歌研究」第一回新人五〇首詠に「水 downstream」が入賞。透明な表現をめざす作風は誠実で丹念な抒情をすくい上げ、歌集に「笹舟」「雪標」がある。また詩集「OEKAT城の門」「円坐の譜」を出し、書誌随筆集として「筐底の本」「座右の

本「鏤刻の本」を刊行。53年上川管内中川町の依頼を受け、斎藤茂吉の作品を選び、同町内の見晴公園と茂吉の実兄守谷富太郎が勤務した共和の元道立診療所前に、北海道としては最初の茂吉歌碑を二基建立した。△誘蛾灯めぐれる蝶の舞ふ如く窓に影してゆふべ降る雪▽

(江口源四郎)

建富義夫 大1・12・27▽昭45・3・31 (1912～1970) [評論] 岩手県生まれ。東京東海商業学校卒。室蘭簡易保険局勤務のかたわら文学活動。昭和27年「札幌文学」に「大岡昇平『武蔵野夫人』」「林芙美子『浮雲』について」を発表。48年室蘭簡易保険局ペン会長。29年「室蘭文学」編集同人。同誌に長編「長恨歌」「同人誌散步」を連載。45年随筆誌「風貌」編集。47年「山音文学」編集(23～59号)。本名出堀四十三。

(木村南生)

竹中雨蘭 大2・1・13▽ (1913) [俳句] 函館市生まれ。本名寿光。函館工業学校卒業後、南樺太鉄道に就職したが、退職して鉄工場を経営する。一時口語短歌に関係したが、昭和7年「水下魚」に入会、伊藤凍魚に師事、同人となる。戦後後、泊村役場吏員、労務者、行商等のあと札幌の鉄工関係に就職したが、難病の家族を抱え、この間の辛苦を

題材とした作品が多い。昭和17年俳句研究賞、55年北の雲大賞を受賞。

(菊地滴翠)

竹中征樹 昭18・10・12▽ (1925) [詩] 渡島管内茅部町生まれ。本名征機。北海道教育大学函館分校卒。中学校教員。詩集「わが天の燈」「噴火湾」「梵唄集」がある。また郷土史「陸の細道」「尾札部漁業協同組合史稿」などがある。詩風は故郷への、その風土への内的望郷が基調になったリリズムにあり、素朴で明解な語り口が個性的である。道南地方史の若手郷土史家としても期待されている。

(鷲谷峰雄)

武林無想庵 明13・2・23▽ 昭37・3・27 (1880～1963) [小説、翻訳] 札幌市生まれ。父は三島常磐。本名馨雄、のち盛一。明治17年武林家の養子となり東京に移り住む。上京以来初めて札幌に赴いたのは明治30年で、重病中の実母を見舞うため。この旅の所産に「因縁生」があり、その後徴兵検査のため32年ごろ、37年、大正3年と来道しているが、「むさうあん物語」「ベンケネセより」「登別温泉随筆」などでその模様を知ることができる。明治32年一高に入学、同期に小山内薫、川田順らが出た。36年東京大学英文科に入学し、「帝國文学」の編集委員となり、自伝小説「神

詩の傾向は多彩である。

(矢口以文)

武部礼代 昭2・3・4▽ 昭51・12・24 (1927～1976) [俳句] 後志管内岩内町生まれ。昭和40年札幌市成人学校俳句教室で寺田京子の教えを受けたのち水声会に加入し、44年水声第一回新人賞を受ける。直腸ガンで早世し、49年遺句集「花恋」が上梓された。

(園田夢蒼花)

竹村茅雨 明44・2・25▽ (1912) [俳句] 鳥取県生まれ。本名喜代松。定年まで国鉄職員。昭和15年ころ岩見沢にあった芭蕉正風派の句会に出席したことより句作。石田雨圃子選の新聞俳壇により増水小城を知り、義弟谷口白葉と共に師事、ホトトギス俳句を学ぶ。昭和17年ガリ版刷りの俳誌「案山子」を白葉等と発刊。「ホトトギス」「夏草」「花鳥」「石狩」などに投句。「案山子」は最初小城選であったが、小城応召のため加藤蛙水子らの選になった。ガリ版刷りのためにかえって戦時中発禁とならず、現在不定期刊ではあるが通巻四二六号になってくる。主選のほかに伊藤柏翠らの選もあった。昭和53年ホトトギス同人に推される。岩見沢ホトトギス会長、北海道俳句協会委員。(高原の駅に迫りて秋の雲)

(嶋田一歩)

竹村まや

明33・11・20▽ 昭54

秘」を連載して上田敏に認められた。小山内らと同人誌「七人」を創刊したが、38年に東大を中退したあと放蕩、放浪生活を送った。大正9年「ピルロニストのやうに」で無想庵文学を確立。中平文子と恋愛の末結婚してフランスに赴き、長女イボンヌをもうけた。11年帰国。小説「結婚礼讃」、エッセー集「文明病患者」を上梓したあと、翌12年再びフランスに渡りコキユ生活を送る。この時代の作品に「飢渴信」がある。昭和8年右眼失明。文子と離婚し、16年に波多朝子と結婚する。18年には左眼も失明して全盲となった。「無想庵独語」と「盲目日記」は戦後の代表的著書。妻朝子の協力を得て完成した「むさうあん物語」四五分冊・別冊一(昭32～44)にはこの作家の全生涯が語られており、他に例をみない特異な自伝である。大正期のダダイズムを代表する作家。

(木原直彦)

竹村陽 大13・4・8▽ (1924) [短歌] 旭川市生まれ。本名中山トキ子。旭川市立高等女学校、同校補修科卒。小学校教員、昭和電工旭川工場勤務を経て、晩年の池田勝亮が経営する「新郷土」文化協会に勤めた。昭和24年「あさひね」入会、「砂廊」「作風」などを経て、33年「かぎろひ」入社、現在に至る。歌集に「櫻路」(昭39)、歌文集

・12・7 (1900～1979) [短歌] 旭川市生まれ。旧姓若井。旭川実科女学校、日本産婆看護婦学校卒。大正7年医師竹村頭一と結婚。昭和3年ころより婦人会活動に入り、その後北海道助産婦会長、札幌市議会議員、北海道道産議員のほか、社会福祉関係の多くの公職を歴任。昭和42年財団法人竹村福祉事業団を設立、理事長ならびに系列の保育園長を兼務した。46年勲五等宝冠章。作歌は昭和3年より山下秀之助に師事、そのころ「橄欖」に入会、その後「原始林」「鴉族」にも所属。女性ながら小事にこだわらない悠々とした作風で風土と人事をうたった。歌集は「あかしやの花」(昭27)、「歳旦」(昭44)、「飛翔の像」(昭50)、「武華川」(昭54)、「鴉族合音歌集」(あらくさ) (昭48) など。54年に鴉族賞受賞。北海道護国神社境内と札幌東本願寺別院境内に歌碑がある。後者の碑歌は「つばくらめやしなふごとく乳たらひおん母のめはみ仏に」(村井 宏)

(村井 宏)

竹森一男 明治43・4・5▽ 昭54・12・31 (1910～1979) [小説] 胆振管内壮瞥町生まれ。住友工業卒。改造社の「文芸」創刊記念の懸賞小説に「少年の果実」が入選、昭和9年1月号に発表され、文壇にデビューした。つづいて同誌に「嘘の宿」(昭9・9)、「天使の蛇」

(昭11・11)、「駐屯記」(昭14・5)を書く。戦後は「文芸復興」「文芸首都」の同人。「レンバン島」(昭24・10、「若草」)のほか「小説陸軍省」(昭46・1、双葉社)がある。(神谷忠孝)

武谷成子 読み 大5・2・15(1916)「短歌」新潟県佐渡生まれ。昭和25年に「潮音」、28年「新墾」に入社、のちに「新墾」の選者として鋭い洞察力をもって後進の指導にあたる。作風は磨かれた感性と女歌として知性的個性をみせ、これに重厚なものを加えた作品が多い。「新墾」幹部同人。札幌在住。(太田光夫)

竹吉新一郎 読み 明43・6・24(昭59・7・3(1910)1984)「詩」旭川市生まれ。昭和4年芸芸誌「裸」創刊同人の下村保太郎と親交深く、旭川中学時代から作詩に入り、昭和5年下村と共に詩誌「登場」を編集発行したが、四号で廃刊。「登場」発行で「裸」の各同人と親交を得て、のちに「裸」が詩誌「不死鳥」と歌誌「疎林」と分離した折、「不死鳥」の同人となり、終刊の四一号まで毎月詩作を発表していた。昭和16年ころ関西に行き、19年東京の新北海新報社から北海タイムスに移り、30年帯広支社長。そのころ第一詩集「伏古詩集」を出している。28年ころより同人詩誌「情

緒」同人となり、51年「竹吉新一郎小詩集」を情緒刊行会より発行した。晩年は北海タイムス論説員として活躍。作品は独特のペーソスとユーモアに満ちている。(下村保太郎)

大宰 治 読み 明42・6・19(昭23・6・13(1909)1946)「小説」青森県生まれ。本名津島修治。亀井勝一郎と親交を結び、代表作に「ヴィヨンの妻」「斜陽」「人間失格」などがあるが、山崎富栄と玉川上水で心中したことはあまりにも有名。来道していないが、「新釈諸国嚙」(昭20・1、生活社)に収められてゐる「一人魚の海(蝦夷)」(昭19・10、「新潮」)は松前を舞台にした武士とその娘の怪奇物語。(木原直彦)

田塚源太郎 読み 大8・4・1(昭54・4・14(1919)1979)「短歌」国後島古釜布生まれ。日本歯科医学専門学校卒。歯科医師。昭和17年札幌月寒の連隊に入隊。中国から21年復員。22年「青垣」同人、24年歌誌「海域」発刊、25年日本歌人クラブ会員、26年北海道新聞歌壇選者となる。32年歌誌「病雁」発刊に尽力、36年明治神宮春の大祭献詠で入選。43年交響組曲「北国讃歌」を作詩、46年根室市文化賞を受賞。55年遺稿集「田塚源太郎」が妻栄子によって刊行された。へあてありて航く船といへさみし

公金横領の罪で大正5年一年半の実刑に服す。以後、朝鮮に渡り、帰国後貿易商を営む。大正11年有島武郎の序文を付した札幌取材作「太陽の沈みゆく時」を出版、好評に乗じて第三巻まで書き継ぎ、以後数冊の作品を出版。昭和11年「酒場ルーレット紛擾記」が「文芸春秋」実話募集に入選、13年「ナリン殿下への回想」が第七回直木賞を受賞。太平洋戦争中は新京で満州書籍配給会社課長として活躍。戦後再び創作活動に入り、「小説新潮」に「私は前科者である」(昭30)、「ある小説家の思ひ出」(昭32)34)などを連載。「橋外男傑作選」全三冊(昭52、現代教養文庫)などがある。(和田謙吾)

橋智恵子 読み 明22・6・15(大11・10・1(1889)1922)「啄木のおもひ人」札幌市生まれ。庁立札幌高等女学校卒。啄木の函館弥生小学校教師時代の同僚。のち空知管内北村の牧畜業北村家に嫁ぎ二男五女の母。産褥熱により三四歳の若さで死去。(福地順一)

たち・ひろし 昭9・11・29(1634)「シナリオ」小樽市生まれ。本名大石章。小樽商科大学短大部卒。小樽市役所勤務のかたわらシナリオを独学。昭和37年シナリオコンクール入選佳作、45年テレビドラマコンクール入選佳作。以

けれ島なき海の上に目覚めぬ(宮本貞子)

只木かほる 読み 大9・11・23(1920)「詩」名寄市生まれ。昭和31年「環の会」(名寄)を創立し、母親の詩を作る運動をすすめて三〇年余になる。一年一回の「環」作品集のほか研究誌「つながり」を継続して発行。会創立二〇周年に刊行した「日本母親詩集」、二〇年目の第二集とも高い評価を得た。個人詩集「朱の川」を刊行。(入江好之)

多田東浦 読み 明29・10・2(昭60・7・8(1895)1985)「俳句」愛知県生まれ。本名幸順。僧侶。大正9年北海道に移住、10年札幌白石区の智徳寺に入る。昭和2年「雲母」に入会。飯田蛇笏、飯田竜太に師事。15年以來「水芭蕉」を毎月発行。17年「水下魚」入会。空知管内栗山町の上原紅実、渡辺手寒との交流が深い。昭和48年句集「水芭蕉」、58年夫人多田チエノと共著の句集「延齡草」がある。(菊地滴翠)

橋 外男 読み 明27・10・10(昭34・7・6(1894)1969)「小説」金沢市生まれ。軍人の家庭に育ち、群馬県高崎中学を中退。明治44年夏、鉄道院札幌工場長の従兄に預けられ、工場の道具番になったと本人は記すが、札幌の記録では大正5年4月札幌駅貨物掛採用とある。

後主としてNHKにラジオドラマを執筆。「ゲソを持つ男」(昭57)、「大里昇の場合」(昭58)ほか。戯曲に小樽市民劇場公演の「朔風」(昭46、54再演)。共著に「おたる再発見」がある。小樽市博物館長。(佐々木逸郎)

辰木久門 読み 大2・2・23(1911)「児童文学、随筆」小樽市生まれ。本名達本外喜治。旧制小樽市立中学校卒業後北海道庁統計課に勤務。戦時中、北海道芸芸協会「北方文芸」第三巻より編集責任者となる。創作に「望楼の人」「わんわん保健所」「北海道のうまいもの屋」札幌編(講談社)、「北海道さいじ記」(HBC放送)、「北の魚歳時記」「ほっかいどう味の風土記」(北海道新聞社)などの随筆がある。児童文学作品は、昭和51年童心社より「少年の青い海」を出す。この作品は昭和21年「小樽小学生新聞」に一一〇回にわたって連載、その後22年に玄文社より「海のろうそく」として刊行。小樽の漁港を舞台に、ニシン漁末期の漁村の生活や少年少女群像が描かれている。「海のろうそく」は「北海道児童文学全集」第二二巻に収録。(柴村紀代)

館川京二 読み 昭2・1・18(1634)「俳句」函館市生まれ。本名西岡令二。東京化学工業学校中退。昭和18年

伊達邦成と開拓の労苦を歌に詠み交わしたりした記録がある。著作に「邦直日記」がある。(村井 宏)

館田大二郎 (たねだ だいじろう) 大10・8・4 (1921-) [シナリオ] 東京生まれ。本名小田自郎。樺太師範学校卒。美唄、札幌で教員生活のかたわらラジオドラマを執筆し、代表作に「昭和南山」「いかっ子」など、小説集に「寒流魚」(昭56・7)がある。日本放送作家協会会員。(佐々木逸郎)

立野正之 (たての しょういち) 明35・8・9 (1906-) [短歌] 佐賀市生まれ。大正12年小樽高等商業学校卒。北海道拓殖銀行勤務。名寄ほか幾つかの道内の支店長を経て、本店の部長を務めた。昭和22年定年退職。日本化学飼料株式会社で常務取締役として勤務し、50年退職。歌誌「水鏡」を経て昭和8年「潮音」に入社。翌9年続いて「新壱」に入社、同人となり、選者をつとめた。29年「潮」を創刊して主宰。新壱函館地区大会開催に努力した。函館市民文芸短歌の選者、道南歌人協会顧問。〈羚羊の蹠持たざる人間が目眩む壁をよち登り来つ〉(宮崎芳男) 館美保子 (たねだ ほうこ) 明26・3・11 (1906-) [詩] 新潟県に生まれ、札幌に育つ。本名ミホ。私立北海道高等女学校中退。小学校本科正教員試験に合格し、教

員生活のかたわら、大正元年創刊の「北国文壇」(札幌)に参加した札幌の女流詩人の草分け。川路柳虹に師事しその詩誌「現代詩歌」(炬火)(ともに東京)同人。大正12年創刊の「展望」(札幌)にも参加した。上京して第二詩集「明眸」(昭3)、次いで第二詩集「海の手紙」(昭7)を刊行。戦後は「詩声」(東京)同人を経て「草原」(東京)同人。戦後の詩集に「黒い椅子」(昭31)、「れんげうの館」(昭45)、「そこに在るもの」(昭53)がある。詩風は都会的に洗練された抒情で、戦後に入っても表現の深化を示しながら一貫して変わらない。日本現代詩人会、日本女流詩人協会会員。(佐々木逸郎)

館山専一 (たねやま せんいち) 大6・5・25 (1901-) [短歌] 渡島管内戸井町生まれ。昭和26年函館市青柳町に定住。12年函館新聞歌壇に投稿。14年から15年応召。辻昭を知り、北原白秋主宰の多磨短歌会に16年入会。19年4月再応召。20年8月宇都宮市中島飛行機製作所で復員。21年函館市水道局へ再就職。27年12月「多磨」終刊約一〇年間の「多磨」との関係が断たれた。28年宮柵二編集のコスモス短歌会に入会し、現在まで約三二年間、その一人として活躍。北海道歌人会、道南歌人会代表幹事。52年函館市水道局を定

橋」を刊行。(永平利夫)

田中和夫 (たなか ちかお) 昭8・3・13 (1933-) [小説] 江別市生まれ。江別高等学校卒。「札幌文学」同人、「国鉄文学」北海道支部長、「国鉄北海道文学」編集人、劇団「寒流」代表。主な作品は「橋のほとり」(札幌文学)、「昭和そのとき」(同)、「安藤准伍長のこと」(同)、「地の涯で」(北方文芸)、「トンネルの中」(国鉄文学)、「残響」(北海道新聞社)などがあり、「残響」で北海道新聞文学賞を受賞した。(小松 茂)

田中公平 (たなか こうへい) 明37(没年不詳)(1904-) [エッセー] 札幌市生まれ。立教大学文学部出身。NHK札幌放送局勤務後上京、劇団に関係し、戦後札幌に戻り、北海タイムスにエッセーを発表。著書に「沃土満州を拓く」(昭18)、「屯田兵・伝承と展開」(昭18、東光書院)、「新えぞ百話」などがある。国立札幌病院で療養中の昭和30年ころ病没。(史料源蔵)

田中小実昌 (たなか 小実昌) 大14・4・29 (1925-) [小説] 東京生まれ。東京大学文科中退。代表作に「幻の女」など。北海道の旅から「ムシちようだい」(昭45・12)、「オール読物」、「オホクツ妻」(昭48・2)、「問題小説」(「さぶろくのマリ」(昭48春)、「別冊小説現代」)など

年退職。54年歌集「虎杖の花」上梓。〈海峡の西も東も雪雲のとぎして重くうしほ照るなり〉(金坂吉晃)

館脇 操 (たねわき ますむね) 明32・9・8(昭51・7・1 (1899-1976)) [植物研究] 横浜市生まれ。北海道大学農学部卒。宮部金吾との共著「北日本植物への奇与」(昭8(昭16))で多くの新種を発表した。昭和24年度北海道文化賞受賞。27年北大教授。33年に「北太平洋諸島の森林生態学」を刊行。35年に日本農学賞を受賞。39年に代表論文一〇編を収録した「北太平洋諸島の植物地理学」を刊行。47年に北海道新聞文化賞を受賞。(小野規矩夫)

田所篤三郎 (たどころ たくさぶろ) 明26・5・15(昭37・5・3 (1893-1962)) [詩] 札幌市生まれ。仙台高等工業学校卒。大正8年米國に留学したが、翌9年人生に絶望的懷疑を抱いて帰国。有島武郎を訪ね親交を結ぶ。有島の援助で古書店を開き、同人誌を出し、放浪する。有島の晩年の作品「酒狂」「骨」「心に沁みる人々」のモデル。有島死後、禪に帰依。北海道伊達山中で鉱山を経営。洞爺湖温泉町に簡易郵便局を開設した。著書に「有島武郎の思い出」がある。(高山亮一)

田中章彦 (たなか しょうひこ) 大9・6・17 (1908-) [短歌] 神奈川県生まれ。秋田鉱が生まれた。紀行記に「大雪丸で釧路へ」(昭54・10)、「北の話」と「国境の見える最果ての港・羅臼」(昭47・8)、「旅」がある。(木原直彦)

田中五呂八 (たなか ぶろはち) 明28・9・20(昭12・2・10 (1895-1937)) [川柳] 釧路市生まれ。本名次俊。養父田中豊蔵のもとに在って庁立上川中学校を卒業、一時鉄道院に就職した。向学心に燃え北海道大学農学部林学実科へ入学したが、家事の都合で中途退学。大正8年結婚、川柳作句活動に入る。翌9年北海道公債公社へ入社、小樽支社長になり小樽に居を移す。翌10年小樽新聞文芸部の川柳選者となる。12年「小樽川柳社」(のちに「川柳水原社」と改称)を興し、「平凡なわれらの黎明」を巻頭に新興川柳誌「水原」を創刊、川柳に「生命主義」理論を打ちたてて川柳文学運動を展開する。この新風に対する関東、関西の既成派作家からの反論へ、理論闘争を展開、また森田一二、鶴彬らのプロレタリア派作家からも攻撃されるなど、その闘争は日本川柳史に残るほどの壮絶さを極めた。大正14年「新興川柳詩集」を発売。15年小樽新聞社に入社。昭和3年「新興川柳論」を発売、現代川柳の指針となった。昭和6年病のため「水原」を休刊。11年再刊したが編集、発行人を古田八白子に譲る。

山専門学校卒。昭和15年室蘭工業専門学校(現室蘭工業大学)助教、54年同大学教授。昭和12年から13年に作歌を始め「葦菴集」に感動し土屋文明に師事。15年「アララギ」、21年「羊蹄」入会。26年「道南アララギ月報」を発行したが、31年武藤善友の「北海道アララギ」創刊に参画。42年歌集「惜春譜」を刊行。以後、52年「凍雪」、54年「引き裂かれた旗」、58年「峠道」を発売。また随筆に、49年「私の写生手帖」、長年にわたる労作として「斎藤茂吉歌集句索引」(全5冊)がある。47年合同歌集「岬の風」を編集、発行。アララギの写実による着実な把握力と繊細な感覚を駆使し、生活、社会、自然を余すところなく捉えていて、抒情性の深い詠風を確立させている。〈濃く淡く緑重なる尾根の下わが住む町に雲の影落つ〉(笹原登喜雄)

田中一清 (たなか ひとひら) 大元・10・16 (1902-) [短歌] 旭川市生まれ。本名清。昭和5年「新壱」創刊年の第四号から本名で作品を発表し始める。10年に「潮音」入社。14年に渡満したが、胆振管内穂別の歌友堀恭一八田鉱業所長の招きで翌15年同所に入社。戦後穂別町の役場に移り、教育課長、総務課長、町立病院事務長などを歴任する。「新壱」選者も務め、矜持正しい詠風で、59年歌集「秋の

没後の昭和12年古田八白子編による「田中五呂八遺句集」が刊行される。新興川柳の祖といわれ、生涯を川柳文学の向上のために闘い抜き、現代川柳のルーツとなる。田中五呂八に関する研究も多い。〈人間を握れば風が手に残り〉

田中真人 しんま 明43・3・27～(60)

〔短歌〕上川管内当麻町生まれ。本名寿次。旧制農業学校卒。短歌は初め啄木に影響されてのち、牧水の旗下に入ったが、昭和の初期に谷口波人に師事、昭和2年菊池知勇の「ぬはり」に参加した。現在は下村照路の「かがりび」幹部同人、「新墾」の銀河同人、当麻短歌会代表。歌集は「山ふところ」「点心抄」「北炎」、ほかに当麻短歌会の合同歌集「稻花集」などがある。歌碑は昭和55年当麻神社境内に建てられた。〈霜牙ゆるあかとき空にくつきりと遠山峯呂はうかびたるかも〉

田中青坡 あおさか 大13・1・5～昭57

・7・1 (1924～1982) 〔俳句〕日高管内浦河町生まれ。本名正二。昭和17年より作句し、「緋衣」「葦牙」を経て47年「道」入会。52年「道」同人。男性的な力強さを感じさせる作風で、句集に「林響」がある。

田中草門 くさもん 明38・12・15～昭59

〔職退きて疾く衰ふるは何ならむ竹刀を振れば身が引き縮る〕(猪股 泰) 田辺城司 じまに 昭3・9・11～(68) 〔俳句〕旭川市生まれ。本名彰司。道立商業学校卒、旭川貯金支局勤務。昭和22年旭川営林局勤務。24年「はまなす」に鱈児の号で投句。30年「きさらぎ」の編集を担当し、ホトトギスに投句する。34年旭川俳句連盟発足に伴い庶務会計企画幹事。38年「石狩」の編集部長となる。56年旭川俳句連盟功労者賞を受ける。

田辺杜詩花 つとむ 明29・3・24～昭28・10・11 (1896～1953) 〔短歌〕愛媛県生まれ。本名稔香。明治41年父の札幌鉄道局勤務により札幌に移り住む。大正8年新潟医専卒。札幌市立病院、万字、幌内各炭鉱病院勤務を経て、昭和10年札幌市で開業。大正2年ころより作歌。初め「詩歌」に入り、一時休詠。昭和14年「ポトナム」同人となり、戦時下の歌誌統合によって山下秀之助らの「光」と合流、21年5月第二次「原始林」の再創刊に当たってはその発行責任者となった。16年北海道歌人協会設立に協力、その支部長となり、戦後も日本歌人クラブ道支部幹事のほか、北海タイムス歌壇、毎日新聞道内版歌壇選者など、本道歌壇の発展に尽力した。原始林ではその業績を伝

る。〈職退きて疾く衰ふるは何ならむ竹刀を振れば身が引き縮る〉(猪股 泰) 田辺城司 じまに 昭3・9・11～(68) 〔俳句〕旭川市生まれ。本名彰司。道立商業学校卒、旭川貯金支局勤務。昭和22年旭川営林局勤務。24年「はまなす」に鱈児の号で投句。30年「きさらぎ」の編集を担当し、ホトトギスに投句する。34年旭川俳句連盟発足に伴い庶務会計企画幹事。38年「石狩」の編集部長となる。56年旭川俳句連盟功労者賞を受ける。

・10・29 (1905～1984) 〔俳句〕東京生まれ。本名美之助。旧制商業学校卒業後、第百生命保険に入社。大正13年勝峯晋風の「黄灯」に入会。15年同人。昭和20年札幌市に入植。23年「緋衣」に参加、廃刊後「アカシヤ」に拠る。49年同木理集(無鑑査 同人。「河」「葦牙」「道」各同人。句集に「山はろか」「愉快」がある。俳人協会員。(岡澤康司) 田中長三郎 ながさぶろう 明22・8・10～昭33・8・12 (1889～1953) 〔短歌〕三重県生まれ。大正8年名寄町(当時)に弁護士開業。「自然」「芸林」に出詠。昭和6年より歌誌「水松」を主宰、発行。名寄の短歌会の基礎を固め、24年帰郷。33年歌集「泥火山」を刊行、名寄公園に歌碑が建立され、その祝賀会の帰途、飛行機事故により死亡。

田中冬二 ふゆじ 明27・10・13～昭55

・4・9 (1894～1980) 〔詩〕福島市生まれ。本名吉之助。旧制立教中学校卒。第三銀行(現富士銀行)入行と同時に文学を趣味とし、清澄 モダンな詩風は没するまで貫かれた。昭和27年秋、寒川光太郎、田辺茂一らと来道。「川湯にて」「根室行急行」「阿寒から釧路」「メイゾン・リラにて」「札幌」など一〇編を「北の話」(凍原社)に執筆、本道の旅

田中冬二 ふゆじ 明27・10・13～昭55

えるため、31年より田辺賞を設定。その歌は山下と同じように南国出身のせいのか、初めいくらか甘美で浪漫的な抒情風のものから、戦後は次第に現実的、生活的な色合いを深め、とくに多忙な開業医としてのあけくれを詠んだものに佳作が多い。また風土詠にも意欲的に取り組み、その内面化に努力している。26年に初めて歌集「緑日」を刊行、没後山下らによって遺歌集「青雪」が編まれた。〈老人の一人の死より時置かず鉛を手にして映画館に入る〉(中山周三) 田辺茂一 しげ 明38・2・12～昭56

田辺茂一 しげ 明38・2・12～昭56

・12・11 (1905～1981) 〔小説〕東京生まれ。中学時代から舟橋聖一と親交を結び、昭和初年代の有力文芸誌「行動」を主宰。戦後は船山馨、八木義徳、和田芳恵らを擁したキアラの会編集になる「風景」の経営に尽力した。東京新宿に紀伊国屋書店を興す。昭和27年6月に寒川光太郎らと共に道内を講演して回ったが、短編「灰色の釧路」(昭27・9、「文芸首都」)はその折のフィクションとも実録ともつかぬ気のきいた紀行小説。短編集「世話した女」(昭28・12、創元社)に収められている。

谷 克彦 かつひこ 昭2・4・21～昭58

・1・1 (1921～1983) 〔詩〕旭川市生まれ。十勝農業土木科を経て札幌文化専

をうたった。

田中北斗 きたと 大11・3・15～(1932)

〔俳句〕空知管内北竜町生まれ。本名保。長く農業協同組合に勤務のかたわら、昭和23年より北光星に兄事し作句。「水原帯」同人を経て、北光星、中村耕人らと「磔」を創刊。「磔」終刊による「扉」改題による「道」と行動を共にして、「道」同人会長。47年扉作家賞を受賞。句集に「空知」「一炉の奥」、合同句集「北竜」がある。現代俳句協会員、俳人協会員。(北 光星) 棚川音一 ねがひ 大11・6・20～(63)

棚川音一 ねがひ 大11・6・20～(63)

〔短歌〕網走管内美幌町生まれ。新井恰治の筆名を用いたことがある。旭川師範学校卒。網走管内で長く教職に携わり、昭和58年網走第二中学校長を退職。青森の傷痍軍人療養所で結核の療養中作歌を始める。昭和22年東北アララギ会「群山」に入会し扇畑忠雄の選を受け、24年には「アララギ」に入会し土屋文明の選を受けた。31年には「原始林」に属し、土蔵培人の選を受け、現在に至っている。その間38年原始林賞、40年田辺賞を受賞、同誌の主要同人として活躍した。歌集に「雪虫」(昭30)、「原始林十人皿」(昭38、共著)、「氷海」(昭57)がある。歌誌「北見歌人」(昭29～34)を発行、網走歌人会の運営に尽力して

門学院卒。昭和24年「詩人種」に参加。

翌年「北海道詩選」に「悲しい期待」を発表。42年9月詩誌「裸族」を創刊。編集、発行人として三二一(昭57・9・25)まで刊行。52年10月創刊一〇周年を記念して「裸族詩選」を刊行するなど、帯広、十勝の中心的詩誌を運営、多くの新進詩人を育成した。台湾の「笠」、韓国の「心象」グループと詩の国際交流を図り成果をあげる。40年詩画集「音階のない音階」、47年詩集「笛の承譜」刊行。50年度帯広市文化奨励賞が贈られた。代表作に「弔」がある。(千葉宣一) 谷川絵伊子 えいこ 昭7・5・5～(1932)

谷川絵伊子 えいこ 昭7・5・5～(1932)

〔詩〕札幌市生まれ。本名清水睿子。詩誌「笛ろ」「フラーゲ」同人、のちに個人誌「Frag」からフラーゲルへ)を発行。詩集に「四季を送る」(昭41・12、大弘社)がある。詩画展「三人のアンファンテリアル」、NHK「北の群像」詩を生きる」に出演、「北方文芸」の詩評を担当する。一貫した思想の詩人であるが、詩は形式的に抒情性のあるしずかな作品が多い。(小松瑛子) 谷口亜岐夫 あきお 昭5・9・25～(1930)

谷口亜岐夫 あきお 昭5・9・25～(1930)

〔俳句〕三笠市生まれ。本名明雄。空知農業高校卒。在学中に俳句を志し、主として「緋衣」「水原帯」に拠る。定型および季語には非拘束、創作上

での活用をはかり、人間にひそむ哀感を表出する手法が多い。昭和45年水原帯賞受賞、53年現代俳句協会会員。57年から「水原帯」俳句会同人会長。(川端麟太)

谷口波人 1889～1965 「短歌」岩手県生まれ。本名盛。明治40年夕張市に移住、43年北炭夕張鉱計理係勤務。結婚して谷口家の養子に入った。大正3年夕張製作用所に転職。10年札幌市に転住。北海道大学本部、北海タイムス社に勤め、その後、泉炭炭所、福山醸造の総務部長を務めた。歌歴は大正5年以来北炭機関紙「労働」歌壇選者、同6年「創作」社友、昭和2年「ぬはり」創刊に参加、選歌担当。歌風は平明な中にも、きびしい韻きを湛え、かつ闊達自在性に富む。若山牧水、菊池知勇、小田観螢、吹田晋平、近藤紫村など道内外の歌人と超結社的な交友があった。歌集に夫人東山月子との共著「小さき墓標」(昭38)および「谷口波人遺歌集」(昭57)がある。(へたかむらを吹き過ぐる風の命なり過ぎぬれば早や声もとどめず) (横井みつる)

谷口広志 1887～1963 「文化運動」旭川市生まれ。東京美術学校工芸科卒。大日本飛行協会、北海道新聞社勤務を経て、旭川文化団体協議会事務局長。小熊秀雄協会副代表。

梓。(竹田てつを)

玉井裕志 1899 「小説」釧路市生まれ。本名博。同人誌「朝霧」主宰、「北海文学」同人。根室管内別海町で酪農を営みながら創作に精進。「文芸首都」「釧路文学」にも発表。主要作に「霜がれの季節」「草原の鬃り」「ふるさとの訃」「蒼原の果て」(いずれも「北海道新鋭小説集」収)がある。(小笠原克)

玉川雄介 1910 「児童文学」後志管内ニセコ町生まれ。本名仲沢一郎。開拓農民の子。一〇歳前後に相ついで父母、妹と死別し天涯孤独。昭和10年童話を書き始める。札幌へ出て印刷工場その他転々。13年春、北炭夕張鉱で坑内作業に従事、その後厚生課に移され、機関紙「炭光」を編集発行。「炭光」に発表した童話「ハンノキ物語」は、会話だけによるもので、新しい分野の開拓をめざし、なお執筆続行中の長編童話である。27年2月日本児童文学者協会北海道支部を和田徹三(支部長)、八森虎太郎、諸角和傳、和田義雄(事務局)と共に発足させた。36年4月創刊の「森の仲間」の名付け親。昭和59年和田義雄亡きあと「森の仲間」代表。炭鉱の童話「コールの町のチツブ」(昭35・7)は、炭鉱街の少年の生

「旭川戦後文化運動史ノート」(旭川双書10)、「わが落穂ひろい」を刊行。

谷口三枝子 1918 「短歌」江別市生まれ。昭和21年創刊の「原始林」に参加、作品を発表。23年二年足らずで中断のち、44年再入会。復活後の活躍はめざましく、53年に田辺賞を、54年度には原始林賞を受賞。国内外に取材した意欲的な旅行詠に大作、佳作が多い。58年歌集「路」を刊行。知的で冷静、しかも正面から対象に立ち向かう情熱をあわせ持つ。(中山 信)

谷崎真澄 1912 「詩」札幌市生まれ。日本大学芸術学部卒。地方公務員。文芸誌「青銅文学」「薔薇科」「ZERO」に作品を発表し、現在は詩誌「パンと薔薇」が活動舞台。詩集は「ひとりの人間のために」を初刊とし、「想像力の母国」「さまよえる船」まで一〇冊に及ぶ。ヒューマニズムを基底とするが、痛みを共に背負い優しい眼で状況を追っている。長詩での告発は近年注目され、評価を受けている。(光城健悦)

谷 竜治 1911 「小説」函館市生まれ。函館師範学校卒。シベリア抑留体験をもとに書いた活を見事に描き出した代表作。(渡辺ひろし)

玉田秀雄 1913 「短歌」空知管内新十津川町生まれ。初め俳句を学んだが、大正9年に小田観螢に師事して短歌を学び「潮音」に入社。小学校長として赴任する先々の地域で短歌会を創設した。昭和28年砂川小学校長で退職後、同市公民館の初代館長となり、歌誌「象形」を上梓し、合同歌集等の出版をする。館長退職後札幌に居住。46年勲五等を受け、歌集「風塵集」を刊行した。(永平利夫)

玉手北肇 1920 「俳句」空知管内長沼町生まれ。本名肇。三井芦別炭鉱勤務を経て苦小牧市に居住。昭和19年青島陸軍病院入院中に句作を始め、復員後は富安風生門に入り、「はまなす」「若葉」に投句して頭角を現す。昭和38年「青女」創刊より参加、また「冬草」に加入。「若葉」「青女」「冬草」各同人。48年第六回北海道俳句協会賞を受賞。句集に「枯きびた」(昭55)がある。俳人協会会員。(新明紫明)

玉貫光一 1903 「農学」弘前市生まれ。父母に従って明治40年渡道し、夕張から札幌に移住

た「日曜日に(ウ・ワスクリセーニエ)」で北海道新聞社創立三〇周年記念事業のひとつとして設けられた「日曜版連載懸賞小説」の第一回に入選し、作品は同紙日曜版(昭48・6・17から15回)に発表された。当選時は函館深堀中学校教頭。単行本には「ウ・ワスクリセーニエ」(昭51、北書房)、「一本木」(昭55、同)がある。(神谷忠孝)

田上義也 1908 「建築」栃木県生まれ。本名吉也。早稲田工手学校卒。米田建築家ライイトに師事。大正12年関東大震災を機に来道し、本道の代表的な建築家として数々の建造物を残すかたわら、音楽をはじめ多方面の文化、芸術運動に尽力する。その全容は「北のまれば」と「エゾライイト・田上義也」(全二巻、昭52・10、現代出版社)に詳しい。北海道文化賞、北海道開発功労賞、北海道新聞文化賞、地域文化功労賞などを受賞。田上建築制作事務所社長。北海道国際文化協会会長。北海道建築設計事務所協会の会長。(木原直彦)

田原ますみ 1908 「俳句」小樽市生まれ。本名マス。小樽高等女学校卒。昭和40年札幌市成人学校で寺田京子の指導を受けて作句。「寒雷」「杉」「梓」に所属、「にれ」同人。昭和51年第一句集「花杏」を上

して青少年時代を過ごす。43年札幌西創成小学校に入学、作家島木健作と同級生となる。大正7年に島木、花見達二の三人で歌誌「樺の実」を創刊した。11年から北海道大学農学部の実験助手を勤め、昭和2年から敗戦まで樺太に住んだ。著書に「樺太風土記」「樺太博物誌」などがある。(木原直彦)

田宮慧子 1902 「小説」釧路市生まれ。本名鈴木悦子。釧路新聞記者。戦後「エコー」に「辛夷」などに所属して短歌活動に入る。のち「北海文学」同人。「骨」(昭58)、「喪装のとき」(昭59)、「野の百合」(昭59)が注目された。(鳥居省三)

田宮虎彦 1914 「小説」東京生まれ。東京大学国文科卒。代表作に「足摺岬」「落城」「銀心中」など。本道取材作は、愛に苦しむ姉のもとを去って室蘭、洞爺湖に流される青年を描く「木の実のとき」(昭37・12、新潮社)があり、「オホーツク海岸をゆく」(昭45・6、「旅」)は優れた紀行記である。(木原直彦)

和27年結核性眼疾のため北見日赤病院に入院。二度の肺葉切除手術に失敗。昭和31年「原始林」入会。原始林賞、田辺賞について北海道歌人賞を受賞。36年には「片肺」で短歌研究新人賞を受賞。苛酷な闘病生活の中で生命を直視する作歌態度は多くの後進に影響を与えた。

(田村哲三)

田村硯一 けんいち 明28・4・30〜昭47・11・1 (1895~1972) 「俳句」札幌市生まれ。青年時代小田観螢に短歌を師事し、「潮音」にあったが、のち離農、満州に渡ってから俳句に転向し、「水下魚」へ入門。かたわら「鹿火屋」に投句、その後「葦牙」に拠る。死の直前句集「十勝岳」を刊行した。

(鳥恒人)

田村哲三 せつぞう 昭5・4・10〜(昭30) 「短歌」滝川市生まれ。札幌第一高等学校(現札幌南高)を経て早稲田大学第二文学部国文科を卒業。高校時代、文芸部の活動を通じて短歌に触れ、同校の教師であった中山周三の指導を受けた。昭和23年原始林に入会。また早稲田在中近藤芳美と知り、「未来」の創刊に参加した。大学の卒業論文は「斎藤茂吉の初期作品研究」。28年北海道放送に入り、以後札幌、函館、室蘭、苫小牧、北見の各放送局に勤務、現在は事業局事業専任部長。この間一〇年程の作歌の中断がある。

るが39年に復活、「原始林」に拠って意欲的な活動を示した。40年には原始林賞、田辺賞を相つぎ受賞、47年には歌集「扇状地」を刊行、56年から同誌の選歌を担当している。北海道歌人會幹事。「扇状地」は歌集。原始林叢書第五三編。序文中山周三。昭和39年から46年までの作品五五九首を収める。理的、都会的、近代的に洗練された軽快で鋭敏繊細な写実によって、北海道の風土や生活、歴史に対する愛着と関心をうたった。標題は札幌の地形に因んでいる。北海道新聞文学賞の最終候補作品となった。三三四郎池はいかならむ清かりしメムの小川は酒れはてしはや

田村冬水 とうみづ 大6・10・9〜(昭27) 「俳句」渡島管内松前町生まれ。本名安蔵。函館師範学校卒。道南で昭和53年まで教職、のち松前町教育委員。俳句は昭和22年松前高潮吟社に拠り、同人。37年松風吟社との合流で発足した松風社の幹部同人、現在同社の事務局長。毎年行われる松前町桜まつり俳句大会の運営に尽力している。著書に「松前俳壇史考」がある。昭和56年より「葦牙」同人。

(猪股泰)

田村昌由 まさよし 大正2・5・17〜(昭13) 「詩」江別市生まれ。日本大

(佐々木子興)

え」を執筆連載、指針を明確にして高度の作品実作を第一義とした。病のため同誌は59年終刊。俳句道の究極のものとして、単に志向するだけでなく、觀念自在の写生道を一貫して向上至達する方向を目指す。昭和37年第一句集「流水」を刊行。

(鈴木青光)

山田花袋 かなば 明4・12・13〜昭5・5・13 (1871~1930) 「小説、紀行」群馬県生まれ。本名録弥。尾崎紅葉の門から文壇に出て、のち自然主義文学の代表的作家となる。明治34年5月「太平洋」に「北海道」(隨筆)を発表。38年島崎藤村の紹介で鳴海要吉を書生として預かる。その要吉がのちに留萌管内の増毛、苫前(古丹別)で教員生活をした時の話を素材にして大正3年3月「早稲田文学」に「トコヨゴヨミ」を発表。

(和田謙吾)

檀 一雄 けん 明45・2・3〜昭51・1・2 (1912~1976) 「小説」山梨県生まれ。東京大学経済科卒。佐藤春夫の門弟。代表作に「花筐」「リッ子・その愛」「リッ子・その死」など。昭和32年9月から翌年5月にかけて北海道新聞の夕刊に連載した「暖かい町」(昭33・9、角川書店)は網走管内斜里町を主舞台とした映画監督と女優の恋物語。

(木原直彦)

筑紫美生子 みの 大10・2・8〜(昭21) 「演劇」旭川市生まれ。旅芸人座主。父は白系露人。生後間もなく佐賀市の伯父夫婦に入籍。苦難の少女時代を経た一九歳で旅役者と結婚。翌年(昭16)一座を結成、芝居生活四〇年。自伝「旅芸人の唄」(昭56・11、章書房)のほか写真集に「筑紫美生子の世界」がある。

(佐藤喜一)

遅塚麗水 れいすい 慶応2・12・27〜昭17・8・23 (1866~1942) 「小説、紀行」

学専門部法律科卒。昭和9年泉芳郎主宰「詩律」に参加。(改題「モラル」「詩生活」)。11年東京モンパルナス「土旺会」創立。13年「詩と詩人」を泉らと創刊。14年詩集「戒具」刊行。16年大連に渡り、満鉄社員會「協和」編集員となる。17年「満州詩人」同人。詩集「蘭の国にて」刊行。昭和21年北京より引き揚げる。「詩と詩人」編集。新潟県詩人協會設立委員。「詩作工場」発行。24年「日本未来派」同人に参加し積極的な作品活動を展開、一時期「日本未来派」編集責任者となる。詩集「武蔵国分寺」「八月十五日」を日本未来派より刊行。ほかに「風」「続・武蔵国分寺」等の詩集がある。一つの主題を執拗に追いつづけた連作詩は成功しており、ライフ・ワークともいふべき大冊詩集「八月十五日」も、この系列におかれよう。

田元北史 きたし 明43・9・20〜(昭10) 「俳句」三笠市生まれ。本名政善。北海道大学土木専門部卒。札幌鉄道局、華北交通、釧路市役所に勤務。昭和9年俳句に入り、「木の芽」などを経て17年皆吉夷雨に師事、「雪解」同人、無鑑査同人。昭和37年「道東俳句會」で句の指導に当たり、39年流水俳句社を設立、俳誌「流水」を創刊した。創刊号以来四六回にわたって俳論「俳句の本道とその教

(八森虎太郎)

静岡県生まれ。本名金太郎。明治7年上京、幼少時親しんだ幸田露伴との合作で23年文壇に登場。郵便報知、都新聞記者。25年「都の花」に「蝦夷大王」を連載、寛文元年(二六六一)神居古潭の長老きりむかくるが松前藩と戦って奮死する長編を発表。40年9月初めて釧路まで来て「北遊日記」を残した。

千田三四郎 せんざう 大11・5・18〜(昭22) 「小説」宗谷管内礼文町生まれ。岩見沢市に育つ。「人間像」同人。早稲田大学国文科卒業後北海道新聞記者となり、断続的に習作を発表。昭和54年論説委員で定年退職後創作活動に入る。屯田兵から旅役者になった男を描く「流れの軌跡」、石川啄木の影に逆らう人々を追求めた「詩人の斜影」、地方政治の紛争をテーマにした「草の迷路」など物語性の強い作風である。日本文芸家協会員。

(和田謙吾)

千葉鳩光 とうと 大5・9・24〜(昭16) 「俳句」後志管内ニセコ町生まれ。本名幸道。昭和20年12月復員後新田汀花と父のすすめで「緋衣」入会。23年留萌管内小平村北炭天塩鉱診療所に就職、積極的に職場文化活動をする。35年「緋衣」廃刊、「葦牙」同人に、54年「人」創刊と共に入会、同人となる。主

(大須田一彦)

ち

ち

反怖陽子 はんぼう 昭11・7・5〜(昭30) 「短歌」釧路管内音別町生まれ。昭和31年「かぎろひ」入社。47年同釧路支部結成、現在「かぎろひ」運営委員、同釧路支部長。48年「浄化槽屋の妻」三〇首により北海道歌人會賞受賞。「釧路春秋」選者。釧路歌人會副会長。歌集「風の紋章」(昭49)。口語的発想による歌口に才気があふれ、しだいに肉声の重量感と逞しさをあらわしてきている。

(木村隆)

宰誌「仙人掌」二〇〇号記念大会を59年9月札幌で開催。処女句集「塑像の牛」を葦牙叢書第三四集として58年上梓する。(太田耕吐子)

千葉宣一 昭5・12・29 (68) (詩、文学) 旭川市生まれ。北海道大学文学部大学院修。在学中「北大季刊」を編集。昭和32年「詩学」新鋭詩人特集に選ばれた。詩誌「ATOM」「OMEGA」「木星」「眼」「秩序」などに参加したほか、「北海道詩学会」を主宰した。現在「核」「0の会」同人。詩風は新しい生命主義を目指し根源的な世界審判と文明批評を作品の核としている。

専門の比較文学研究では、日本文学の史的形に果たした外国文学の影響、日本文学の海外における受容史および二〇世紀のアバンギャルドなどを研究課題として多くの論文がある。著書に「現代文学の比較文学的研究―モダニズムの史的動態―」(昭53、八木書店)、「講座日本現代詩史」(昭48、石文書院)、D・キーン著「日本の近代小説と西欧」等の翻訳がある。帯広畜産大学教授。日本現代詩人協会、日本ペンクラブ員、日本文芸家協会会員。帯広市在住。(永井 浩)

千葉長樹 昭8・12・7 (68) (俳句) 後志管内島牧村生まれ。昭和28年ころから北光星に師事、30年代

む)で戦後文学賞、三田文学賞候補となつた。(千葉宣一)

趙 炳華 大10・5・2 (62) (詩) 韓国京畿道安城郡生まれ。京城師範学校卒。仁荷大学大学院長、韓国芸術院正会員、世界詩人大国会際運営委員および桂冠詩人、画家。昭和54年、ソウルで世界詩人会議を主催した折、河邨文一郎と親交を結び、56年金楨宇、成春福、金榮泰ら三人の詩人とともに札幌を訪れ、札幌在住の詩人たちと交歓、57年「核」の同人となる。著書多数。(河邨文一郎)

知里高央 明40・4・15 (昭40・8・25 (1907-1966)) (アイヌ語研究) 登別市生まれ。小樽高等商業学校卒業後、渋沢敬三、金田一京助の世話で東京に就職。のち道内の中学、高校教諭。弟の真志保の死後、金田一京助のアイヌ語研究に協力。未完の遺稿ノートを整理した「アイヌ語彙記録」が出されている。(藤本英夫)

知里真志保 明42・2・24 (昭36・6・9 (1909-1961)) (アイヌ学、言語学) 登別市生まれ。文学博士。北大教授。農、牧畜業の父知里高吉は胆振地方の園芸の草分け。母ナミは金成マツの妹で少女のころ、姉とともに函館にあったアイヌ伝道師養成の愛隣学校に学ぶ。

に入り「礫」同人、のちに「繩」同人となり、島津亮の影響を受ける。38年同人誌「象」創刊に参画、金子兜太を対象に評論「現代の自我の形態」を連載して注目される。52年「狄」創刊同人。58年総合俳誌「俳句斜塔」を創刊。句集に「草もなく木もなく」「羊歯村」がある。(辻協系一)

千葉 仁 大7・10・2 (61) (俳句) 渡島管内七飯町生まれ。幼少時茨城県笠間市で過ごす。昭和16年以後軍隊生活を体験、比島で終戦。昭和20年小樽に復員して三馬ゴムに入社、定年まで管理職、役員として勤めた。俳句は16年ソ満国境守備隊にある時、戦友にすすめられ「鶴」に投句したのが始まり。小樽に落ちついてから職場俳句会を作って指導に当たる一方、「アカシヤ」にも参加したが、やがて俳句への迷いを生じて一時中断。44年石塚友二のすすめで「鶴」に復帰するとともに、北海道鶴文部を設立、機関誌「さるるん」を発行。現在は「鶴」飛鳥集同人(無鑑査)。北海道鶴文部長、小樽俳句協会会長、俳人協会員。53年鶴叢書第一一五編として句集「大楫」を上梓、「北海道文学全集」にも収載された。(はららごの朱のきはまれば磨るなり) (園田夢蒼花)

長 光太 明40・4・8 (昭39・9・18 (1903-1922)) (トーカラ云承)

姉幸恵と親交のあった金田一京助のすすめと世話で第一高等学校、東京大学卒。一時、三省堂で辞典の編集。昭和15年から樺太庁立豊原高等女学校教諭、樺太庁博物館嘱託を兼務。樺太医学専門学校教授の和田文治郎や豊原高等女学校の福山惟吉の協力を得ながら行った樺太アイヌ語の研究は、その後の業績の基となる。太平洋戦争の敗色濃くなった昭和18年6月後援者の渋沢敬三の世話により北海道大学北方文化研究室の嘱託。学生時代からすでに著作があるが、樺太時代から目立って多くなり、独自のアイヌ学の確立をめざす。著作の中には、例えば「アイヌ語入門」のように、師の金田一や河野広道などの知友の研究業績に対して強い批判を行い話題になったものもあるが、その心理的背景には日本列島のマイノリティの歴史がもつ怨念が感ぜられる。ライフワークの「分類アイヌ語辞典」は全一巻の予定のうち、「植物編」「人間編」が生前に刊行され、死後、関係者により「動物編」が出された。晩年は持病の心臓病のため入、退院を繰り返した。昭和28年道文化財専門委員。24年北海道新聞文化賞、30年朝日文化賞を受ける。(藤本英夫)

知里幸恵 明36・6・8 (大11・9・18 (1903-1922)) (トーカラ云承)

「詩」大阪生まれ。本名伊藤信夫。少年期を広島市で送り、原民喜と交遊。早稲田大学仏文科中退。大正14年暮れ原民喜、山本健吉、熊平武二等と同人誌「春鶯囀」創刊。その後左傾し、労働運動やプロレタリア文化運動に参加。演劇雑誌「テアトロ」(第一次)、「文化映画研究」の編集に従事。詩劇「昨日今日明日明日」(昭11・12、「テアトロ」)を発表。喜劇「陽気な土曜日」(昭13・2、同)で発禁問題を起こす。昭和10年代は、記録映画の脚本や制作、戯曲批評を行う。戦後札幌市に転住。札幌詩人倶楽部に参加。HBC付属演劇研究所で指導的役割を果たし、ラジオドラマの脚本、演出を多く手がける。31年研究所の解散にともなって帰京。昭和21年1月「近代文学」創刊号に、詩「ワタシワ打チカエス波ノオオニ」「コノ光ノ波ノカゲニ」を発表。23年「聴覚的形象の可能」(至上律)をはじめ、「近代詩の音紋」(同)、「暗愚小伝」「動律考」(同)で、新しい韻律論研究の第一人者として注目される。25年「野性」に発表した「終末の覚醒」は、逸見猶吉論として異色。27年「日本凍苑」に実験詩「決断」を発表。同年「原民喜詩集」(細川書店)を編集し、跋を寄せる。「日本未来派」「樵人」「歷程」に関係。小説「花をさいな

登別市生まれ。知里高央、真志保の姉。幼時より旭川市近文で聖公会伝道師として布教していた伯母の金成マツに育てられた。大正7年同居していた祖母で叙事詩人のモナシノウクを訪ねてきた金田一京助に、すぐれた資質を見いだされ、アイヌの神話の記録をすすめられる。その一部の一三編をまとめたのが渋沢敬一、岡村千秋の後援により出された「アイヌ神話集」で、アイヌ自身による神話の本格的記録の初め。金田一のアイヌ語文法の研究に力をかしている。金田一家に寄寓中死去。(藤本英夫)

塚越博一 昭3・2・14 (68) (短歌) 東京生まれ。室蘭高等工業学校卒業。帯広柏葉高等学校を経て帯広三条高等学校教員。昭和23年OG歌壇で野原水嶺に認められて「辛夷」に入会。一時「山脈」にも参加。29年水嶺、渡辺洪らの「辛夷」復刊に当たり千葉一也、大野千代子、草野郊路(要)、林田礼子、浜中千枝らと共に参画、編集委員とな

233

る。その後運営委員、選者も兼務、特に編集発行人渡辺洪の助力者として運営面でも活躍し、同社内で重きをなす。即興歌人的な面を持ち、作品には自然を題材にした抒情歌が多い。洪との共編著に「歌人・野原水嶺」があり、54年辛夷功労賞を受ける。全道高校演劇の指導者としても活躍。(星ひとつ星ふたつづきで消ゆるなるあかとき潮をわたるゆくり) (渡辺 洪)

塚本邦雄 (くさもと くにたけ) 大11・8・7 (1683) (短歌) 滋賀県生まれ。前衛短歌の驍将として、現代短歌の展開に決定的影響を与えた。北海道には、北の会設立三周年記念講演会(昭53・8・18)のため来道。「短歌に何をかけるか」の演題で札幌で講演。韻文が滅亡に瀕している時代の中で、歌人が日本文学のプロテアであるべきことを強調、深い感銘を与えた。講演内容は「涯」三号(昭54・9)に収録。(菱川善夫)

塚本二郎 (くさもと じろう) 大1・9・16 (昭58・7・31) (1912~1983) (短歌) 台湾生まれ。本名戸塚元二郎。千葉県成田中学校卒。全道庁「赤煉瓦」編集委員。昭和3年純正詩社、7年短歌クラブ(渡辺順三)、27年「新短歌」、26年から29年「名寄短歌」編集発行人、35年「凍土」同人。47年「彩北」創刊に参加、運営同人

市生まれ。本名八郎。寺井尺一に師事し雅号をもらう。大正末期函館川柳社同人。昭和6年樺太太泊へ転住。樺太川柳社同人、23年引き揚げ、二男と共に砂川で生活。千葉県で病没。(辻 星行)

辻 晩穂 (つじ ばんすゑ) 昭5・3・5 (1688) (川柳) 網走管内端野町生まれ。本名小次郎。昭和27年「オホーツク」創刊。川柳の古い概念を破って人間性の追求を主張した。同社主幹。38年から道東川柳大会年次大会を主催、同会長。43年北海道川柳人名鑑発行。45年「オホーツク」二〇〇号記念合同句集「凍原」を発行した。(土江田千治)

対馬俊明 (たいま ともあき) 昭13・3・19 (1688) (小説) 札幌市生まれ。弘前大学在学中の昭和33年「文学界」に小説「鳥」を発表。34年「鈴の音」を「弘大文芸」に発表。卒業後木古内高等学校を経て現在函館東高等学校教諭。この間同人誌「表現」に加わり、同誌に「海辺の部屋」(昭38)、「楡の木のある庭」(昭44)などを書く。55年の「街」(月刊はこだて)は「北方文芸」に転載され、「北海道新鋭小説集」(昭56、北海道新聞社)に収録された。(安東璋二)

辻村もと子 (つじむら もとこ) 明39・2・11 (昭21・5・24) (1906~1946) (小説) 岩見沢市生まれ。本名元子。函館遺愛高等女

として編集、発行に協力。53年歌集「侏儒国」上梓。55年評論集「雑々の皿」発行。「猫をつるした枯木がある眠ろうとする險の裏の荒地」(矢島京子)

都郷栄一 (みやが 栄一) 明43・1・17 (1680) (小説) 後志管内余市町生まれ。本名佐藤進。昭和34年同人誌「北限」を創刊。同誌に「さまよい」「十郎の旗」「えぞ山椒魚」「吹雪の客たち」「つまぐれない」「浜っ子」「たてこう夫人」「石狩湾入り合い」「寒海辺」「崖」などを発表。(西村 信)

辻岡一羊 (つじおか いひや) 明39・6・23 (1680) (俳句) 美唄市生まれ。本名教作。酪農関係の会社勤務。大正13年ころより兄の何首烏の教えを受け作句を始め、矢田枯柏、青木郭公に師事、のち牛島藤六の「時雨」に入会、引き続き「葦牙」同人として活躍。戦後「緋衣」(古田冬草)、「えぞにう」(久保洋書)にも所属。「えぞにう」の洋青賞(昭58)を受賞。現在「葦牙」の金剛集同人、「えぞにう」客員。(佐々木子興)

辻岡何首烏 (つじおか げしう) 明37・8・2 (1904) (俳句) 美唄市生まれ。本名教太郎。大正9年ころから句作を始め、青木郭公、牛島藤六に師事、「暁雲」「時雨」で活躍。「高潮」「水鳥」「石鳥」などにも投句。現在「葦牙」同人。江別市

学校在学のところから文学に親しみ、昭和3年に日本女子大学国文科を卒業したが、卒業記念に「春の落葉」(昭3・4、東京詩学協会)を出版した。その年に帰郷して岩見沢町立女子職業学校の教師となったが、翌年上京、吉久保恒之介と結婚。15年に性格の相違から離婚し、文学に専念する。「火の鳥」「風土」「文芸新潮」に所属。17年5月に新文芸叢書の一冊として風土社から長編小説「馬追原野」を上梓し、第一回樋口一葉賞を受賞した。父直四郎は神奈川県小田原の出身で、空知管内長沼町の初期開拓者だが、この小説はその父が書き残した詳細な開拓日誌をもとに成立した農民小説である。「あとがき」に「私は生まれた土を愛する」とみえる。受賞発表の「戦時女性」19年6月号に短編「早春箋」が載ったが、母梅路がモデルで、開拓地に入った新妻がその模様を郷里の母に知らせるみずみずしい書簡体の小説である。本道農業の一技術者を描いた「月影」は青年文学奨励賞の候補になった。20年4月郷里に疎開し、間もなく入院のジン臓病で岩見沢市立病院に入院、いったん退院したが再び入院し、翌年永眠した。死の前日、急造した短編集「風の街」(昭21・6、白都書房)が詩人加藤愛夫の手で病床に届けられた。47年8月長沼町馬追丘

に居住。(佐々木子興)

辻 義一 (つじ ぎいち) 明22・4・没年不詳 (1886~?) (短歌) 青森県生まれ。厚田小学校の教員時代に支部沈黙と交友を持つ。大正元年12月発行の「北国文壇」に短歌を発表しているが、9年9月には沈黙と共に同人雑誌「路上」を創刊し、編集発行人となる。のち十勝に移り住み、13年弘前市に転出して出版業を営んだが、以後消息不明。大正11年に詩歌集「生長する草木」を刊行した。同人雑誌草分けの一人。(木ノ内洋二)

辻 邦生 (つじ くにたけ) 大14・9・24 (1689) (小説) 東京生まれ。東京大学仏文学科卒。「廻廊にて」で近代文学賞を受け、代表作に「夏の砦」「安土往還記」(背教者ユリアヌス)がある。「北の岬」(昭41・10、「審美」)は日本人留学生と修道女の純愛を宗谷岬で結ぶ。短編集「北の岬」(昭45・9、筑摩書房)に収められ、51年に映画にもなった。作者が初めて宗谷岬に立ったのは47年冬で、「荒涼の地の果て 宗谷岬」(昭47・2、「旅」)はその折の紀行記。長編「時の扉」(昭52・11、毎日新聞社)はオホーツク海の大都市を舞台に愛のかたちを抒情的に描いている。(木原直彦)

辻多一郎 (つじ たごいちろう) 明25・5・21 (昭29・12・2) (1892~1954) (川柳) 函館陵の一角、マオイ文学台に「馬追原野」の一節を刻んだ文学碑が建った。(木原直彦)

辻脇系一 (つじわき けいいち) 昭12・1・20 (1689) (俳句) 空知管内奈井江町生まれ。本名啓一。札幌市職員。俳句は昭和29年「水原帯」入会、42年水原帯新人賞、40年「粒」同人。以後「渦」同人、47年渦賞を受賞。源二逝去後「水原帯」同人を辞退。57年「渦」に「北方句情」の題で源二作品研究を執筆。道内各誌に俳論執筆。現代俳句の革新に熱情をもやす理論家として注目を集める。現代俳句協会員。(山田緑光)

続橋利雄 (つづはし としたけ) 昭3・12・26 (1688) (児童文学) 秋田県生まれ。小学校長。五歳の時渡道、法政大学文学部を卒業後、「文芸広場」に童話「アワビ」を発表し、昭和41年文芸広場童話年度賞を受賞、44年「魔法の竹ぶえ」が童話懸賞に入選、のち単行本になる。49年「ポロン森の王者」を北書房より刊行。57年全国学芸コンクールに小説「仮面を剥ぐ」が佳作入賞。日本児童文芸協会協会員、後志児童文学の会「北の虹」代表。小樽市在住。(柴村紀代)

津田 仙 (つじた せん) 天保8・7・6 (明41・4・24) (1837~1908) (西洋農学研究) 千葉県生まれ。小島良親の四男、のち津

田栄七の養子。慶応3年渡米、農業の重要さを認識。帰国後、西洋野菜の栽培、花粉交配等、育種、増産法に努め、明治13年学農社から「北海道開拓雑誌」を刊行、北海道開拓の世論づくりに貢献。佐々城豊寿、信子、独歩らの渡道にも影響を与えた。津田塾創始者の二女梅子は開拓使派遣女子留学生第一号として八歳で渡米した。(木村真佐幸)

津田蓬子 昭11・10・12 (1889) (詩) 東京生まれ。本姓八重樫。秋田大学中退。疎開先の秋田で詩を書き始め、童詩集「風とはなびら」がある。のち西条八十に師事。「青魚」「序」「木馬」同人を経て西条八十主宰の「ポエトリア」(東京)に参加し同人となる。詩集に「雪明かり」(昭43)がある。夫の小説家八重樫実とともに随筆雑誌「北の話」を刊行、発行人。(佐々木逸郎)

津田露木 明45・2・1 (1930) (俳句) 留萌管内天塩町生まれ。本名醇三。旧制小樽中学校卒。木材販売業。大正13年歌人小田観螢が小樽中学校に教師として赴任、俳句の指導を受け、校内誌の編集にあたる。服部畊石主宰の俳誌「高潮」に入会。昭和5年より二年余俳誌「雄冬」を発行。8年小樽より久末永雷主宰の俳誌「あきあじ」が発行され、川上磨古刀、唯是日出彦、一原九

糸、社八郎、武石五加木、小野光丘、小野崎順子らと共に参加する。石井露月主宰「併星」に加入し、のち「雲母」「秋」に入会。飯田蛇笏、飯田竜太、石原八束に師事。「雲母」同人、「秋」同人。12年応召して中国に転戦、15年帰国。この間の陣中俳句作品を編し、昭和17年句集「石人」を高潮社より発行。序文服部畊石、鈴木寿月。小樽俳人最初の個人句集である。現代俳句協会員、小樽俳句協会副会長。(菊地満翠)

土谷重朗 明37・3・10 (1892) (短歌) 山梨県生まれ。千葉高等園芸学校卒。昭和3年十勝農業学校に赴任。戦後は道庁視学、川西、永山、岩見沢の各農業高校長を歴任。昭和39年より駒沢大学附属岩見沢高等学校教頭として一〇年間勤務。一七、八歳より作歌を始め、「文章世界」、若山牧水の歌誌「詩歌時代」にも投稿。昭和8年「アララギ」に入会、土屋文明に師事。21年「羊蹄」に入会、「北海道アララギ」創刊に参加。22年土屋文明来道の全道アララギ歌会に出席、その後の道東、道北旅行に同行。46年歌集「狩勝」を刊行。現在札幌アララギ会の長老として歌評を締めくくっている。自己の感情を抑え、あくまでも写実に徹したその詠風は北国の自然を確実に捉えている。その深遠な作品と作歌態度

は範となる所が大きい。(十勝野の遠山並に雪降りて木草枯れたる国ひろきかも) (笹原登喜雄)

土屋祝郎 明41・11・27 (1888) (小説) 秋田県生まれ。京都大学中退。戦前に非法活動で拘禁、戦後解放されて以来、釧路地方の労働組合結成に奔走する。「釧路文学」創立を發議、民主主義文学を推進した。主な作品に「迎春哀歌」「虹と落林橋」「蜻蛉の河」。著書に「獄中日記」(釧路文学会)、「釧路の語源」(釧路叢書)、「紅もゆる」(岩波書店、新書)。ほかにアイヌ研究と地名に関する論文が多数ある。(鳥居省三)

土屋のぼる 昭8・1・5 (1883) (小説) 樺太豊原市生まれ。本名土屋昇。昭和26年より郵便局に勤務。「全通北海道文学」「全通文学」会員。「自動押印機」「ハイテン」「逃げる」「童話の時代」等を「全通北海道文学」に発表。横浜市在住。(山下和章)

土屋文明 明23・9・18 (1888) (短歌) 群馬県生まれ。高崎中学校、第一高等学校を経て大正5年東京大学哲学科卒。明治42年上京、伊藤左千夫の家に寄食、牛舎に労働しながら左千夫の庇護の下に二高に入学。かたわら赤彦、茂吉、千櫻、憲吉らと共に「アララギ」で活躍、東大卒業と同時に同誌選者

となる。大正7年より諏訪高女、松本高女の校長を歴任。13年退職して上京、法政大学予科教授となる。14年処女歌集「ふゆくさ」出版。知性と抒情の交錯した主情的な作風でたちまち注目を浴びる。昭和5年「往還集」を出し、「アララギ」編集発行名義人となる。10年に刊行した「山谷集」は大胆にして奔放、しかも厳しい技法で歌壇を震撼させる。19年報道班員として大陸に渡り、「菲青集」を残す。20年5月戦災に遭い、26年まで群馬県原町に疎開。その間の実生活、実人生を尊重した作品に溢れる「山下水」「自流泉」はその記録でもある。また戦後しばらく担当した「アララギ」のいわゆる文明選歌欄は、文明の「生活即文学」の主張に従って新しい歌を夥しく輩出した。27年より35年まで明治大学教授。歌集は前記を含め九冊、自選歌集三冊。さらに「短歌入門」等の歌論書。

「万葉集年表」「万葉集私注」全二〇巻等の研究書など膨大なものがある。59年文化功労者に選ばれる。北海道へは昭和5年、9年、22年と単独あるいは夫人同伴で三回訪れ、各地を巡り歌会も開いた。(谷地だもの防雪林監獄の煉瓦堀今日また見れば今日又かなし)

筒井宣彰 昭9・1・5 (1892) (小国孝徳)

33) (短歌) 日高管内三石町生まれ。本名宣昭。昭和28年「新墾」「日高路」に入社。小学校教諭として日高に勤務。のち石狩町に転入して作歌や歌壇活動に入る。49年地域の超結社の団体として北広島短歌会を結成、その事務局長。会報発行のほか、年刊作品集「かえで」も続刊した。他地区との交流も積極的に行い、「北広島文芸」の編集委員もつとめた。(永平利夫)

堤 寛治 昭9・5・10 (1884) (詩) 釧路管内白糠町生まれ。仏教大學卒。昭和31年詩誌「かばりあ」創刊に参加、その後一時、釧路現代詩話会発足に伴って同会の作品活動に参加した以外は一貫して「かばりあ」に拠って作品を発表してきた。42年「かばりあ」四九号より編集発行人として同誌を主宰している。詩風は北方の荒涼とした情景をモチーフにしての現代文明批評を主題としている点に特色がある。詩集に「かばりあ」四〇号として刊行した「半島」がある。北海道詩人協会員。(木井 浩)

堤 白雨 大11・3・10 (1892) (俳句) 砂川市生まれ。本名正雄。芦別で「草の実吟社」の熊谷杜宇に俳句の指導を受け、昭和26年より「雲母」に入会現在に至る。29年「水下角」に入会、伊藤藤魚の影響を受ける。46年より

「北の雲」同人。49年芦別市文化功労賞(俳句部門)受賞。句集に49年「黒い谿」、58年「梅雨の蝶」などがある。

堤 房子 大13・5・24 (1894) (俳句) 網走管内女満別町生まれ。本名鈴木フサ子。旧制網走高等学校卒業後、北見市南小学校、佐呂間町若里小学校教員。昭和24年土岐鍊太郎を知り「アカシヤ」入会。37年アカシヤ賞を受賞して同木理集同人(無鑑査)に推される。俳人協会員。(岡澤康司)

網淵謙錠 大13・9・21 (1894) (小説) 樺太生まれ。昭和17年真岡中学校卒。翌年樺太を離れて新潟高等学校に入学。20年1月旭川第七師団に入隊し敗戦を迎える。東京大学英文科卒。中央公論社に勤め、本格的な作家生活に入ったのは47年「斬」で直木賞を受賞してから。北溟の地を志向する作家といわれ、樺太、千島、北海道を描いた作品が多い。対露交渉の経緯を綴った「朝」(昭46・11、「歴史と人物」)、樺太の地で日露紛争に巻き込まれてゆく「狄」(昭47・9・48・9、「別冊文芸春秋」)、択捉島での紛争を描いた「怯」(昭49・1、「オール読物」)、アイヌ人とロシア人との紛争悲話の「夷」(昭52・12、「中央公論」)、北千島占守島の拓

殖に生涯を賭けた郡司成忠大尉を描く「海」上・下(昭54・3、河出書房新社)ほかがある。「樺太」を求めて」など北方に関するエッセーも多い。

(木原直彦)

常田英男 大8・2・22(1919)「小説」函館市生まれ。旧制函館商業学校中退。昭和27年「海峡文学」発行。同誌に高槻英史の筆名で「神居の落日」コシヤメイン戦争」を連載、37年に単行本になる(道南の歴史を綴る会発行)。「海峡文学」は年一冊発行、37年まで続いた。函館ドックの職員で、退職後、ルポルタージュ「続豊治伝」がある。(木下順一)

角田弟彦 天保11・3・2(1840)「短歌」名古屋生まれ。通称主税。旧尾張藩士。明治維新の際は官軍方だったが、廃藩後の困窮は勝者も同じで、明治11年家族らと八雲に入植した。鈴屋派植松茂岳門下の大島為足に歌を学んでいたが、入植当初より労働の余暇に歌会を開き、長く指導者をつとめた。合同歌集「八重垣集」(昭15、岡野隆磨編)に八雲歌会の層の厚い詠草が収録されている。大正5年失明するまで「胆振日記」三九巻を書き続けた。(村井 宏)

角田 博 昭4・1・5(1929)

「詩」福島県生まれ。法政大学文学部卒。坂本越郎に師事し、昭和20年ころから詩作を始め、「文芸首都」などに発表。35年から54年まで北海道に住む。「小樽詩話会」「情緒」等に作品を発表。詩風は平易を守り、自然を中心に題材をとらえている。詩集に「子守うた」(昭45)、「冬の月」(昭48)等がある。44年度文芸広場年度賞受賞。北海道詩人協会、日本詩人協会、板橋詩人協会。

(秋原 貢)

粒来哲蔵 昭3・1・5(1888)「詩」米沢市生まれ。昭和25年福島師範学校卒。東京都教員。昭和21年ころから詩作を始め、「銀河系」同人となり、23年に「虎座」「木星」両誌に加わる。「木星」第八号(昭23・3)に初の散文詩「魔」「策謀」を発表、以後今日までこの形を崩していない。現在「歷程」同人。第四詩集「孤島記」で47年度H氏賞を、第六詩集「望楼」で52年度高見順賞を受賞した。(坂井 一郎)

坪川美智子 大9・9・16(1920)「短歌」歌志内市生まれ。昭和27年「新壘」入会。小田観螢に師事。のち同誌選者。31年野原水嶺の「辛夷」にも入会。45年斎藤史を慕い、長野県の「原型」に入会し、現在同人。前二誌を退社後57年「岬」創刊に編集委員として

昭は夫。東京府立第五高等学校卒。夫と二人で行商を続け、29年の根室での体験を描いた「さい果て」(昭39・12、「新潮」)で新潮同人雑誌賞を受賞。芥川賞の候補作にもなった。「玩具」で芥川賞を受賞したのは40年で、「さい果て」を含む自伝的連作五編をまとめて47年3月に「さい果て」(筑摩書房)を上梓した。(木原直彦)

敦賀風焰 明45・3・16(昭52)「俳句」富山県生まれ。本名敏夫。農業土木学会農業土木高等技術講習所修。満州拓殖公社に就職。俳句はハルビンで佐々木有風に師事、「鞆鞆」に入会。昭和20年応召、敗戦後戦犯として死刑を宣告されたが、減刑され22年出獄、中国東北農科大学講師として留用される。28年に帰国、北海道庁勤務のあと会社役員。「雲母」「水 downstream」に学び「北の雲」客員。(菊地滴翠)

敦賀谷夢楽 明19・8・19(昭30)「小説」(1895)「1955」(「川柳」松山管内江差町生まれ。本名謙治郎。大正4年旭川で司法書士を開業。5年初春旭川最初の川柳団体「熊」会結成に参加。以後、「川柳あさひ会」を経て昭和11年5月「旭川川柳社」創立と同時に主幹となり、「川柳あさひ」を発刊する。16年日

参加、同誌の運営に当たる。華道教授。北海道青年歌人会の活動に参加し、50年現代短歌・北の会幹事。道内歌壇では、最もよく戦後前衛の切り拓いてきた現代短歌の道程を理解している女流のひとり。斎藤史、山中智恵子、馬場あき子ら現代第一線の女流の影響を受けている。その非日常的なロマンは、次第に内面的な深化をみせ、透徹した感性は他の追隨を許さない。作品批評の眼識には定評があり、道歌人会賞の選考委員も委嘱され、後進の指導に力を発揮している。47年東京・柏葉書院より歌集「飛花」を出版。その後の作品に「秋色」三〇首(「北の会76」所収)等がある。

「飛花」歌集。著者の第一歌集で、題名は「飛花落葉」の心をもつてみずから「魂鎮め」となす、という強い願望から名付けられた。危ふきまで明るき玻璃窓のかなたにて飛花落葉をつくして今日へ)にその出典がある。昭和36年以降一〇年間の作品から四〇八首を自選した。夜の髪解きてねむれば一条の河をたゆたふ螢火ひと(増谷電三)

坪松 一郎 明43・5・24(昭44)「詩、童謡詩」茨城県生まれ。昭和初頭石狩地方に移住。昭和10年より石狩、空知、渡島等で小、中、高校の国語教師。その間北海道

本川柳協会旭川支部長。戦後は25年3月柳誌の復刊を果たすとともに、北海道日新聞、北海道新聞などの柳壇選者となる。31年6月一周忌にあたり、旭川市上川神社境内に北海道最初の川柳句碑(陽の露の恵み柳の芽が育ち)が建立された。(大野信夫)

鶴田知也 明35・2・19(1892)「小説」福岡県生まれ。東京神学校に入學したが、信仰に懐疑して退学。渡島管内の八雲を訪れ、酪農に魅かれた。大正12年名古屋に移り、葉山嘉樹の指導のもとに労働組合運動に従事、第一次共産党事件後各地を転々。昭和2年上京、労働芸術家連盟に加入し、機関誌「文芸戦線」同人となり、プロレタリア作家として処女作「子守娘が紳士を殴った」(昭2・10、「文芸戦線」)以後一四の小説を発表した。昭和7年文芸戦線派解散後、左翼芸術家同盟、機関誌「レフト」に加入、「ペンケル物語」(昭8・9、「レフト」)を書き、叙事詩の文体の熟成を見た。10年伊藤永之介らと同人誌「小説」を発行、その2月号に「コシヤメイン記」を発表し、翌11年芥川賞を受賞、同年9月の「文芸春秋」に再録。この叙事詩の文体は、アイヌのユーカラなどの伝承に素材を負っているが、文体としては鶴田が親しんだ文語体聖書の影響

郷土童謡研究会等を主宰し、文学運動、農民運動を続ける。戦後政治活動もしたが結核に倒れ闘病。昭和11年「ランプと仔馬」、12年「納屋の子供等」など童謡詩集を発行。地に根ざしながら水準高い作品は貴重である。(加藤多一)

坪谷京子 大5・11・24(1915)「児童文学」松山管内熊石町生まれ。庁立札幌高等学校専攻科卒。教職に就く。日本児童文学者協会会員。同会北海道支部長(昭46)52)を務める。北海道児童文学の会会員。「森の仲間」同人。主な作品として「はまひるがお」「柏蔵和尚」「シルクロードの子どもたち」がある。主として民話、伝説を手がけ、月刊誌「幼稚園とおかあさん」に北海道の民話、伝説を連載(昭44)51)、ほかに北海道の伝説、民話、歴史に関する数編の共著がある。札幌市丘珠小学校長在任中に、公立小学校におけるオーブンスクール教育の全国初の実施に踏み切ったことは有名で、明治図書より「教育の壁を開く」(共著)が発刊された。また作家、児童、教師三者一体の研究会を開いて読書指導に効果を挙げ、同人誌「森の仲間」に「子どものための楕円形の集団読書」を発表している。(長野京子)

津村節子 昭3・6・5(1938)「小説」福井市生まれ。小説家吉村

が強いと考えられる。その後の作品は、ルポルタージュ風な小説、啓蒙的な語りものに移り、日本の戦争体制強化の中で創造的文学への意欲は衰えを見せた。戦後は酪農問題の専門家として生きたが、28年伊藤永之介らと「社会主義文学」を発行、29年和田伝らと日本農民文学会を結成した。39年「農業問題研究会議」を結成し、事務局長となる。野草に興味を持ち、「野草譜」などの画文集もある。

(神谷忠孝)

鶴谷忠孝 昭2・3・14 (16) (短歌) 後志管内寿都町生まれ。海軍飛行予科練習生として終戦を迎えた。金沢市北国新聞社社会部勤務を経て鍼灸師。昭和43年「青空」入社。44年「原始林」、次いで「鴉族」に入社。45年度北海道歌人会賞を受賞。伝統の枠にとられない自在な発想と詠風を目指す。研修上京による空白と、57年夏、歌人であった佳志子夫人を失った心痛もあったが、これらを克服して、再起。小樽市在住。(北川緑雨)

て

出口裕弘 昭3・8・15 (16) (小説、翻訳) 東京生まれ。東京大学仏文科卒。北海道大学(フランス語助教)を経て、現在一橋大学教授。北大時代に小説「八月堂始末記」(昭34・12、「北大季刊」17号)を発表。モリス・ブランショの「文学空間」やジュール・バタイユらの翻訳につとめ、小説集「京子変幻」(昭47、中央公論社)、「海」に「吉本隆明私論」(昭48・5)、「カンブリアの影」(昭48・9)などを発表。(神谷忠孝)

手代木啞々子 明37・2・9 (昭57・12・5 (1904-1982)) (俳句) 伊達市生まれ。父母と道内を転住。大倉高商卒業後、東京で就職。昭和11年「句帖」同人。15年「合歓」創刊、16年廃刊。同年句集「緑層」刊行。22年秋田県協和町へ移住し開拓農となる。24年中学校教師。26年「合歓」復刊。39年「海程」同人。45年句集「天歩」刊行。49年8月札幌市で開催された現代俳句座談会

に出席。(山田緑光)
手塚 甫 明44・10・5 (昭59・4・23 (1911-1984)) (俳句) 札幌市生まれ。本名若杉清治。青年時より音楽、文学、映画等に親しみ、昭和13年池田六象に師事して短唱を始め、短唱詩人連盟機関誌「短唱詩派」編集委員となったが、昭和11年より俳句も作り、天野宗軒主宰「水声」に加入し、編集同人となる。以来金崎霞杖、鈴木白歩と共に宗門トリオを組み、宗軒没後は霞杖の「水声句箋」同人、企画委員長として活躍した。(金崎霞杖)

手塚英孝 明39・12・15 (昭56・12・1 (1906-1981)) (小説、評論) 山口県生まれ。慶応大学在学時から社会運動に入り、非合法活動中の昭和8年9月検挙され、11年出獄。生前の小林多喜二をよく知り、戦後は完全な「小林多喜二全集」編纂と精密な評伝「小林多喜二」(昭45、新日本出版社)を残した。「手塚英孝著作集」三巻(昭58)がある。(小笠原克)

寺崎律男 大14・3・1 (昭55) (短歌) 芦別市生まれ。本名隆太。昭和22年与謝野晶子門下の西村一平の指導で作歌を始める。31年1月「形成社」に入り、32年同第二同人。35年退会。45年4月芦別市短歌連盟の創立に参加、以来事務局を担当し、機関誌「はしどい」の編集に当たる。同連盟副会長。58年3月沖積舎より処女歌集「炎立ちたる」を刊行。同年芦別市役所を退職。(川辺為三)

寺師治人 大5・9・14 (昭55) (短歌) 十勝管内音更町生まれ。本名豊治。昭和20年小樽協会病院放射線科より帯広協会病院放射線科主任技師に転任、31年退職。大正火災海上保険に入社、帯広営業所長。48年定年退職後、大成興産を経て帯広大成社専務取締役。昭和8年より作歌、作詩を始める。新聞、同人雑誌等に投稿、同人文芸誌「炎」「地平線」等に作品を発表。21年3月病院職員芸芸誌「花園」を創刊。23年職員

と患者の交流芸芸誌「オアシス」、24年「銀の壺短歌会」を発刊。26年歌誌「山脈」を創刊、庶務、編集委員となる。28年6月同誌休刊後、29年9月新田寛、舟橋精盛らと同人短歌誌「鴉族」を創刊、発行人、のち編集人を兼ねる。鴉族二十人集「凍日」、合同歌集「あらくさ」「まどか」、京極正宵遺歌集「望郷」、菊池蒼村全歌集その他数冊を編集出版。60年1月歌集「凍雲」を出版。40年帯広市文化奨励賞受賞。54年舟橋精盛歌碑建設委員長。55年3月中城ふみ子会を結成、歌碑建設も提唱し実現を見る。新人育成に努力し、現在、幕別あゆみ会、径の会、ポブラの会、銀の鈴会で指導に当たっている。(上田 豊)

寺島証史 明26・10・24 (昭27・4・22 (1893-1962)) (小説) 根室市生まれ。本名政司。一二歳のころから詩を書き始め「秀才文壇」などに投稿。未完の自伝風小説「希望の斧」(昭22・23、「青年論壇」)は主人公岸本伝吉の人生の発表を描く。貧しい大工の子として育った伝吉は、根室の小学校を卒業すると大工の徒弟となり、講義録で勉強し、やがて上京する。明治末期のことで、築地の

てらしまま (人名編)

員保養所退所者の同人歌誌「培養器」参加。28年中央歌誌「コスモス」に入会して宮柁二に師事する。31年小林孝虎主宰の「北方短歌」の創刊に尽力する。特別維持同人、選者。31年歌集「教児」を出版する。「北方短歌」に毎月文法編「うたの詞」を連載。その作風は客観的具象を対象とした叙景歌のなかに、現代人としての抒情の拡大と深化を目指す努力がみられる。「北方短歌」江別支部長。(寒林のそら統ぶるごと夜の丘に見えてまたたく塔のひとつ灯) (江口源四郎)
寺久保友哉 昭12・6・4 (1937-) (小説) 東京生まれ。昭和42年北海道大学医学部卒。京都大学病院を経て昭和47年から札幌で精神神経科医。昭和40年「くりま」入会。同誌に「ウラヌスの序章」ほか数編を発表。「芸芸」学生小説コンクールに「ジャンパー」(昭41・9)が佳作第一席。「停留所前の家」(昭49・8、「北方文芸」)で第八回北海道新聞文学賞受賞。「文学界」に発表の「葉小舟」(昭51・5)、「陽ざかりの道」(昭51・12)、「こころの匂い」(昭52・5)、「火の影」(昭52・12)がいずれも芥川賞候補となった。その後「新潮」に「翳の女」(昭53・4)、「爪痕」(昭53・12)、「白く部屋」(昭54・5)、「狂ったカード」(昭55・9)、「文

成興産を経て帯広大成社専務取締役。昭和8年より作歌、作詩を始める。新聞、同人雑誌等に投稿、同人文芸誌「炎」「地平線」等に作品を発表。21年3月病院職員芸芸誌「花園」を創刊。23年職員

てらしまま (人名編)

白木陸郎の筆名による「鹿鳴館時代」(昭4・1、万里閣)。歌古川文鳥など二〇に近い筆名を持つ。戦前すでに三五ほどの著書を上梓しているが、発明ものや史話ものが多い。短編集「維新の処女地」(昭15・10、読切講談社)、同「国境」(昭17・4、日本公論社)、「寺島柱史選集」(昭17・11、文松堂)、史伝「開拓者郡司大尉」(昭17・12、鶴書房)などはいずれも北海道、千島、樺太もの。戦災で帰郷し、風連湖畔では劇作家仲木貞一と一緒に学園都市建設を夢みる。ひととき深川市一己にも住む。戦後には長編「貧者の幸福」(昭21・11、青年論壇社)、「随筆集」湖畔の随想」(昭22・4、能瀬文洋堂)、長編「田園憂愁記」(昭22・8、青年論壇社)、「根室郷土史」(昭26・6、岩崎書店)などがある。千島を舞台に北洋特有の風土病を扱った「孤島病」(昭26・4、「文芸新風」)は戦後の代表作。室蘭で没した。(木原直彦)

寺島露月 かくらつき 大13・12・1(1925)〔俳句〕網走市生まれ。本名静。雄別炭山閉山後建設業に従事。昭和20年より句作。21年「えぞにう」創刊と同時に入会、現在同人。この間「寒流」など同人誌主宰。現在「道標」「北群」同人。現代俳句協会員。(鈴木青光)

寺田京子 きょうこ 大11・1・11(昭51)

いった九組の男女のさまざまな生を描き、閉塞した状況の中でいらだち、流される若者の姿を捉えた。(日高昭二)

唐笠何蝶 たらかぎ 明35・5・25(昭46・8・17(1902)~1971)〔俳句〕神奈川県生まれ。本名学。昭和4年千葉大学医学部卒。札幌テレビ監査役。剣道七段教士。千葉大医学部在学中に高野素十、水原秋桜子の指導を受け作句生活に入り大学に俳句会を作る。以後素十の直弟子として虚子門に入り「ホトトギス」で活躍。昭和5年俳句剣々子を素十により何蝶と改める。9年千葉より岩見沢に転居。12年北見市で産婦人科病院を開業。吉岡秋帆影、青葉三角草、山下武平らとホトトギス会を結成。21年俳誌「阿寒」を発刊主宰。24年ホトトギス同人に推される。「ホトトギス」「芹」に投句。何蝶の門下よりは多くのホトトギス巻頭作家が輩出した。33年札幌に転居。36年健康不良のため「阿寒」を廃刊したが、晩年も句が出来なくなると京都まで素十を訪ね作句に精進した。28年北海道文化奨励賞受賞。句集に「何蝶句集」がある。

〔何蝶句集〕 何蝶の死後一年、昭和47年に娘夫婦、嶋田一步、摩耶子の編集により出版された遺句集。「ホトトギス」「芹」の入選句、虚子選、「阿寒」に発表された句より一步が選んだ。序文

・6・22(1923)~1976)〔俳句〕札幌市生まれ。本名キヤウ。満州鞍山女学院中退。少女期から肺結核のため闘病生活を送る。のちフリーの放送作家として自立。昭和19年療養時代に友人のすすめで句作に入る。間もなく天野宗軒の「水声」同人となり、23年高橋貞俊の「水輪」、25年斎藤玄の「壺」同人を経て、加藤楸邨を生涯の師として「寒雷」に拠り、29年同人。また45年創刊の森澄雄の「杉」にも参加。戦後北海道の生んだ女流俳人の代表と目された。昭和31年第一句集「冬の匙」でみずみずしい清新な詩情で注目を浴び、42年の第二句集「日の鷹」で、道内で初の現代俳句協会賞を得たが、その鋭い感受性と独特のシャープな表現力は、他の追隨を許さぬ独自の秀句を多く成した。50年第三句集「鷹の巢」を刊行。没後58年に遺句集「雛の晴」刊行。現代俳句協会員、北海道文学館常任理事、読売俳壇(北海道版)選者等に幅広い活躍を示し、フリーライターとしても数々の作品を残した。(日の鷹がとぶ骨片となるまで飛ぶ)

〔日の鷹〕 句集。昭和42年7月雪樫書房刊。昭和31年から一〇年間の作品を収めている。病身をひきずりながら、放送ライターとして自立の道を歩き始め、作句にめざましい燃焼を遂げた時代

で素十は、何蝶は私の最も古い弟子であると言ふ、何蝶に接するところにもまた一生懸命であった、と書いている。(見えながら漢の花のひきこまれゆく)

東郷克郎 かつらぎ 大2・4(昭56・9・20(1933)~1981)〔詩〕小樽市生まれ。本名猿田栄。小樽水産学校卒。昭和6年、滝口孝太郎、榊森元、姉小路マリらと「ポエジイ」を創刊。8年同誌を「整態派」と改題、編集にあたる。10年ころから「詩法」に次いで「新領土」同人となる。13年上京して「子供の科学」(誠文堂新光社)の編集にたずさわる。「北海道詩集」(昭17・1、山雅房)編集。19年村野四郎、滝口修造の序文により詩集「緑の歌」を刊行。20年山梨県に疎開。30年甲府の詩誌「甲府派」同人。北海道日日新聞東京支社を経て33年北海タイムス社へ入社。同年札幌テレビ放送に転じ、北見支局長を経て45年退職。日放株式会社札幌営業所長。この間に「情緒」同人となり、同誌および「北の話」に作品を発表。札幌で没した。死後に「情緒」同人有志および竹田敏道、八重樫実らにより遺稿詩集「火の祭」が刊行された。

塔崎健二 けんじ 昭19・2・14(1906)〔評論〕網走市生まれ。本名内藤

の作で、まぶしいほどの生命感をうたい上げ、それが見事に昇華した句集である。(木村敏男)

と

土居良一 りょういち 昭30・3・23(1905)〔小説〕札幌市生まれ。札幌市立旭丘高校から米國フレイズノ・アダルト・スクールに学ぶ。小説「カリフォルニア」(昭53・12、「群像」)で第一回群像新人長編小説賞を受賞。アメリカ西海岸を舞台に日本青年と混血の白人娘の青春彷徨をみずみずしく描いた。受賞第一作は「凍傷」(昭54・10、「群像」)で、大学受験を控えた札幌の高校生を描き、次いで55年度下半期の八四回芥川賞候補作となった「鳥影」(昭55・8、同)は、根室半島あたりの漁港を背景に、北方の島への帰還を祈念する老漁夫とその息子の物語。翌年4月短編集「鳥影」(講談社)にまとめる。以後の作品には「狩野」(昭57、講談社)のほか近作の連作集「夜界」(昭59、河出書房新社)では、北国の都市を舞台に恋人、夫婦、友人と

昭。北海道教育大学旭川分校卒。地元旭川の劇団「河」幹部。テレビ「北の国から」(昭58、倉本聰脚本)グループの一人。評論「小熊秀雄論」を「劇と評論」「寒々計」「北方文芸」に発表。

東田扇果 せんか 明44・5・10(1911)〔川柳〕札幌市生まれ。本名基夫。北海道大学土木専門部卒。土地家屋調査士。昭和23年に小樽川柳粉雪吟社(現小樽川柳社)に入会。25年同人となり「川柳こなゆき」の編集を担当。46年副主幹に就任。同誌雑誌「あけぼの集」の選者となる。(長沢としを)

東野ひろ子 ひろこ 昭2・2・20(1907)〔小説〕小樽市生まれ。本名阿部てい子、旧姓那須。小樽市立高女を経て昭和17年庁立滝川高女卒。30年留萌ベンクラブ発足以来事務局長として地域文化活動に貢献。機関誌「PEN」(留萌文学)と改称)の主力作家として注目された。「ニセコアンヌブリの樹水」(昭46、「北海道文学選集」女流小説集5、北書房)がある。(和田謹吾)

百目鬼恭三郎 きょうさぶろう 大15・2・8(1926)〔評論〕小樽市生まれ。昭和6年小樽を離れる。東京大学卒。朝日新聞社に勤務しながら幅広い評論活動を展開し、代表作に「現代の作家一〇一

人」(昭50、新潮社)、日本エッセイストクラブ賞の「奇談の時代」(昭53、朝日新聞社)、「新古今和歌集一夕話」(昭56、新潮社)など。57年朝日新聞社退社。

(神谷忠孝)

堂本 茂 (しょうもと) 大13・8・2 (1924) (小説) 愛媛県生まれ。本名永野滋之。北海道大学医学部卒。外科医院開業。「空知野」「日高ペン」主宰。「静内文芸」代表。主な作品として「肢」「ある青春」(空知野)、「海からの声」(静内文芸)、「花びらの舞」(「知覧巡礼」(北方文芸)などがある。単行本として「小さな騎士」「壁」のほかに、エッセー集「夜の喫茶店」「砂金帯」などを上梓している。(小松 茂)

富樫箇彦 (とがし かんご) 明42・3・20 (昭46・4・20 (1909~1971)) (詩) 石狩管内石狩町生まれ。本名定雄。昭和5年亀山行男らと詩誌「かがりび」(昭6、「北斗文芸」と改題)を創刊、編集人となる(筆名蛙多男)。このころ竹内てるよ、草野心平らと文通交流、また喜多幸章らの農民運動に参加。詩作品にもアナキズムの影響が濃い。昭和7年長野唯始、枯木抗三らと「詩宗族」を創刊、編集発行人となる(筆名川淵箇彦一郎)。10年11月「札幌市アナ系の有力者」と目されて治安維持法により検挙、筆を断たれた。

ある。

(木原直彦)

土岐善麿 (とがき ぜんまろ) 明18・6・8 (昭55・4・15 (1885~1980)) (短歌) 東京生まれ。早稲田大学英文科卒。読売新聞、朝日新聞に勤務、のち早大教授。晩年は「周辺」を主宰。歌集、歌書、随筆等多数。最初の来道は、大正6年8月で、画家近藤浩一路と同行、札幌、道南をめぐる。その歌は歌集「緑の地平」(大7)、「緑の斜面」(大13)に収録、昭和14、28年にも来道したが、作歌は見られない。啄木と並んで地元歌人に大きな影響を与えた。(中山周三)

時田則雄 (ときた のりお) 昭21・9・24 (1946) (短歌) 帯広市生まれ。帯広農業高校、帯広畜産大学別科卒業後、二二歳で農業を経営する。中学時代から啄木短歌に傾倒し、口語自由律などを経験したのち文語定型作家となる。昭和39年「辛夷」入会。54年第一回中城ふみ子賞、58年第二回辛夷賞を受賞した。56年には帯広市文化奨励賞を受賞。55年「一片の雲」で角川短歌賞を獲得、ついで57年発刊の第一歌集「北方論」(雁書館)が現代歌人協会賞に輝き、歌壇に「北方論」旋風を巻き起こした。作品は一貫して北緯四〇度圏内の広大な地に生きる農の一家の四季の生活が鮮烈にうたわれているが、本人は農民歌人とはばれること

以後電気技術者として敗戦を迎える。21年更科源蔵らの「野性」同人として執筆を再開。浅井十三郎らの「詩と詩人」にも参加した。33年藤田光則と「月刊詩評」を、34年河邨文一郎らと「核」を創刊。詩集「オホーツクの意志」(昭30)、「富樫箇彦老詩集」(昭47、没後友人らの編により刊)。他に児童文学、郷土史関係の共著多数。(古川善盛)

十川信介 (とがわ しのぶ) 昭11・12・21 (1936) (国文学研究) 札幌市生まれ。旭川北高校を経て京都大学大学院博士課程修。学習院大学教授。「二葉亭四迷論」(昭46、筑摩書房)、「島崎藤村」(昭55、同)、「島崎藤村」(昭57、角川書店)などの著書がある。「二葉亭四迷全集」の編集担当。(神谷忠孝)

登川正雄 (とがが しょう) 昭8・2・17 (1933) (評論) 夕張市生まれ。本名自藤正雄。立命館大学国文科、経済学科卒。札幌東陵高校教諭。「芥川竜之介小論」(昭38)、「文学会議」(昭40)、「戦争文学の系譜」(昭46)、「同」。単行本に「主宰治論」(昭50、北書房)がある。(神谷忠孝)

戸川幸夫 (とがが けいお) 明45・4・19 (1912) (小説) 佐賀県生まれ。生後すぐ養子となる。早くから動物に興味を抱く。昭和11年旧制山形高校を退学し、翌年東

を好まず、自ら「野男」と称する。「辛夷」運営委員、編集委員。「潭」主要同人。現代歌人協会員。帯広市森林組合理事。(大塚陽子)

土岐則一 (とがき のりかず) 昭23・2・6 (1948) (詩) 網走管内上湧別町生まれ。稚内市北海郵便局に勤務しながら詩作に励み、詩誌「青芽」「北海詩人」に参加する。昭和44年詩集「蒼ざめてゆく季節」を青い芽文芸社から出版。47年「青春・その荒野」を出版して注目をあびる。その後、詩集「哀海」の詩人水無川理子と結婚。紋別郡下興部に転勤ののち文芸誌「ひとびろ」同人。(新井章夫)

土岐鎌太郎 (とがき けんたろう) 大9・10・1 (昭52・7・14 (1920~1977)) (俳句) 空知管内新十津川町生まれ。本名金竜慶法。竜谷大学文学部卒。僧侶。俳句は大学在学中の昭和15年頃、有川武彦教授に手ほどきを受けたが、同教授の長逝に遇い昭和17年「旗艦」に拠り、日野草城に師事する。18年「琥珀」同人となる。20年10月二五歳の時、郷里新十津川町で、近隣に呼びかけると共に日野草城を主宰に迎え、草城門の八幡城太郎、小寺正三、楠本憲吉、桂信子等を擁して戦後より早く俳誌「アカシヤ」を創刊した。27年より「アカシヤ」主宰。その主張するところは抒情の復活、人間性の回復にあ

京日日新聞社社会部に入社。30年に「高安犬物語」で直木賞を受賞し、作家生活に入った。26年の初来道以来、本道の野性美に満ちた秘境と動物に魅せられて何十回となく来道し、多くの作品をものしている。その数と質において、戦後の来道作家のなかでは最右翼といつてよい。その頂点に立つ秀作が「オホーツク老人」(昭34・12、「オール読物」)で短編集「オホーツク老人」(昭35・9、新潮社)に収録された。冬になると知床半島は氷結するが、彦市老人は半年ものあいだ死のような水と雪の世界に閉じこめられ、海明けの季節にかわいがっていた猫を助けようとして海に落ちて死ぬ知床番屋残酷物語であり「地の涯に生きるもの」として映画にもなり評判を呼んだ。「野性への旅(1)知床半島」(昭36・8、新潮社)は知床の自然の野性を描いた優れた紀行記。ほか取材作としては、大正4年苦前の三毛別で起きた日本最大の獣害事件を扱った「罷風」(昭40・8、「小説新潮」)をはじめ「三里番屋」(昭41・7、「別冊小説新潮」)、「狼捕り三十郎」(昭46・11、「小説サンデー毎日」)、「コムケ湖の怪」(昭47・4・9)、「6・11、北海道新聞」、「北狐の挽歌」(昭47・12、「別冊小説宝石」)などがある。動物小説というジャンルを開拓した第一人者で

ったが、その後、即物性の重視と、それを基盤とした生活のうたごえに展開する。その俳風は、個人と社会の接点において、知性と抒情の均衡の上に結実。主観に墜ちず、客観に偏せず、個人的な詠歌や感慨から突き抜けたところがあった。さらに昭和24年以來北海道新聞俳壇の選者を担当するなど、広く俳句の普及と指導に心血を注いだ。51年北海道文化奨励賞受賞。同年新十津川町に句碑二基建立。句集に「秋風帖」「冬木の唄」、遺句集に「北溟抄」がある。朦朧ガンで逝去。八汲水に水仙いのちうつつしけり (岡澤康司)

徳田一穂 (とくだい すゑ) 明37・3・20 (昭56・7・2 (1904~1981)) (小説) 東京生まれ。徳田秋声の長男。慶応大学中退。「文学者」同人、「あらくれ」編集人。「縛られた女」(昭13)ほか数冊の短編集がある。船山馨と知り、昭和14年と15年、二夏続けて来道、16年「北海道の作家達」を北海タイムスに連載。17年「北の旅」(桜井書店)出版。17年7月には父秋声、妹百子と来道、父、妹は札幌から帰京、一穂は樺太に旅した。(和田謹吾)

徳田秋声 (とくだい しゅうせい) 明4・12・23 (昭18・11・18 (1872~1943)) (小説) 金沢市生まれ。本名末雄。四高中退。上京し

て尾崎紅葉の門に入り、明治28年「藪かうじ」で文壇に登場、のち自然主義の代表的作家となる。明治40年代から大正初期にかけて北海タイムスなど道内紙に一〇編ほど連載小説を発表。昭和13年「心の勝利」をタイムスに連載。昭和17年7月の一穂、百子と北海道旅行を試みたが札幌までで帰京。(和田謙吾)

得田秋扇 じゆせん 昭2・1・11、昭55・3・26 (1927-1980) 「俳句」後志管内余市町生まれ。本名田藏。昭和24年岩手医専卒の医師。昭和49年より「鯨」で作句。以後「馬酔木」「沖」を経て「海流」「広軌」同人。56年遺句集「烏賊灯」が上梓された。(園田夢蒼花)

徳富蘇峰 すすきみ 文久3・1・25、昭32・11・2 (1863-1957) 「新聞、政論、歴史」熊本県生まれ。本名猪一郎。小説家徳富蘆花は弟。国民新聞、「国民之友」の刊行者でもあり明治の代表的な言論人。「烟霞勝遊記」上巻(大13・6、民友社)に収められている「北海道漫遊記」は大正11年8月から9月にかけての紀行記。道南、道央、道東と広く旅している。十勝管内陸別町のユクエビラチャシに建つ関寛翁碑(昭11)の題額は蘇峰の手になる。(木原直彦)

徳富蘆花 ひろたか 明元・10・25、昭2・9・18 (1868-1927) 「小説」熊本県「ト」を連載。紀行集「北欧の風土と教育」などもある。(十勝平野を吹きあげきたる砂風か沢を覆ひて太陽くらし)

所 雅彦 まことひ 昭10・7・5、(69) 「小説」函館市生まれ。筆名黛恭介。北海道大学英文科卒。札幌テレビ編成局長。学生時代から「北大季刊」に「終バス」(昭30)など四編を発表。「失われた夏」(昭51)で第四回北海道新聞日曜版懸賞小説当選。「眼の生け贅たち」(昭51、「月刊ダン」)、「ガラスの罍」(昭53、54、「月刊クオリティ」)。第三回北海道文学賞受賞。昭55、「くまブツクス」として単行本などがある。(中山周三)

戸崎 繁 しげしげ 大5・4・19、(1919) 「評論」後志管内俱知安町生まれ。戦後北海タイムス論説委員を経て昭和24年「監獄部屋」を出版。29年札幌ペンクラブを設立し「札幌ペン」を創刊。31年同クラブから寺田京子句集「冬の匙」を発売。同誌に政治小説「票の裏」を発表した。(八重樫実)

戸沢寒子房 かむしやう 明44・10・30、(1911) 「俳句」青森県生まれ。本名清。大正8年渡道、奔別炭鉱に育つ。日中戦争から復員後、住友奔別第一線に三四年間勤め、昭和41年定年退職。昭和

(水俣)生まれ。本名徳富健次郎。京都に出て同志社に学ぶ。明治22年兄蘇峰経営の民友社に入って執筆生活にすすむ。作家としての自立は「不如帰」(明31、32、国民新聞)の成功による。そのホームドラマ作家が、旭川に36年夏と43年秋二度きている。36年4月に原宿の蘆花宅を訪れ、自伝的ノートを持ちこんだ岩手県宮古市出身で、旭川七師団二七連隊所屬の小笠原善平をモデルにした「寄生木」執筆のためだった。43年は家族同伴での北海道の旅で、陸別に住む奇人医師関寛齋訪問も含まれていた。善平には二度とも会っていない。あとに来旭した時は善平(小説では篠原良平)はずでに故郷宮古で二八歳、筆銃自決していた。随想「みずのたはこと」中の「熊の足跡」、長編「富士」に記述がある。「寄生木」(明42・12、警醒社)は、立志伝の体裁を取った日露戦後の青年士官の失敗譚だった。蘆花は道北は名寄まで行き引き返した。旭川では「寄生木」の主人公が血涙をしばって彷徨した春光台や官舎付近を歩き、短歌をのこした。「寄生木」刊行後、たちまち流行歌曲が作られ、演劇となつて本郷座上演となる。戦雲が濃くなるにつれこの作品は文壇文学から次第に遠ざけられる。戦後、旭川の春光台上に「蘆花寄生木ゆかりの地」の文学碑が

12年に石田雨圃子に俳句の手ほどきを受け、「ホトトギス」に投句。高浜虚子、年尾に師事、34年「ホトトギス」同人となる。俳人協会会員。「朝日俳壇入選句集」(昭55)がある。(白幡千草)

戸沢みどり みどり 大12・8・8、(1923) 「小説」胆振管内鶴川町生まれ。室蘭高女卒業後、分教場勤め。講談社および新興キネマ募集小説一等当選(昭16・5)。賞金三〇〇〇円。敗戦の前年、旭川の忠別川河畔の掘り立て小屋に二児を抱えて苦渋の生活を続ける。詩集に「朝の設計」(昭19)、「過渡期の歌」(昭21)、「小さな願い」(昭33)がありニコヨン詩人として知られる。小説集には「分教場の娘」(昭49、北書房)、「礼文の落日」(昭53、北書房)、「露の迷路」(昭57)がある。(佐藤喜一)

利根逸男 だに 明38、昭15・6・22 (1905-1940) 「短歌、詩」大分市生まれ。高小卒後安部幸商店大阪支社に入社。昭和3年の暮れ小樽に転勤、6年夏離職上京。在道中の著書、歌集「ほがらかな歌」、「花嫁を満載した装甲列車」、詩集「海と緑陰のバイブ」。

戸塚新太郎 しんたろう 明32・1・2、昭40・11・16 (1889-1965) 「短歌」群馬県生まれ。明治33年一家転住により来

建立され、宮古市には「寄生木記念館」が開館(昭44)された。(佐藤喜一) 土蔵培人 せいじん 明44・9・22、(1902) 「短歌」福井県生まれ。本名勇。高小卒。六歳のとき父母と共に来道、十勝管内本別町で農業を営み、かたわら町議会議員、教育委員、同全国連合委員会副会長をつとめ、文部大臣表彰や、北海道教育功績者の表彰、昭和57年には本別町文化賞を受賞。また58年8月には同町本別山溪内に歌碑が建立された。(下草を焼きし新墾のまだら雪濁きて食へばけむり臭しも)。昭和8年「橄欖」に入会、吉植庄亮、山下秀之助に師事。21年5月第二次「原始林」創刊に参加、後年選歌を担当、今日にいたる。45年歌集「谷地坊主」を刊行、山下秀之助がその序文で「万葉集の東歌に見られるような、おほらかさと素材さを見え」また「北海道東北部の生きた自然風物をこれだけ豊饒にうたいあげた歌人はおそらく外にあるまい」と述べている。つづいて「幹」(昭50)、「孤蜂」(昭54)を刊行、国内外の旅行詠を加え、歌境の拡がりを見せ、その歌は厳寒の風土に生きる人間の純情を一貫して変わることなく追求している。北海道歌人会委員、日本歌人クラブ地区委員、現代歌人協会員として、全国歌壇でも活躍。ほかに「原始林」に「培人ノ

道。旧制小樽中学校卒業後、日本火災海上、新洋商事、北栄社などの保険業務に携わる。大正5年頃より作歌。8年「くろばあ」を創刊。11年「橄欖」に入社。吉植庄亮に師事。12年「新樹」を創刊。13年4月第一次「原始林」創刊に当たり、これと合流したが、14年10月同誌休刊に伴い「新樹」を復刊、短命に終わる。昭和21年第二次「原始林」創刊に参加、選歌を担当。ほかに北海タイムス歌壇の選者、日本歌人クラブ北海道地区幹事、北海道歌人会幹事や委員として道歌壇の指導的存在であった。40年小樽市花園公園に歌碑建立。(森にひそむかの妖精もいでて遊べ木洩れ日うごく羊歯の葉の上)。ほかに小樽山岳会名誉会長、同山草会会長としても活躍。「原始林」連載の随想をまとめ、52年「北の植物」も刊行された。歌集には昭和4年刊行の「樹海」をはじめ「雄冬岬」(昭30)、没後刊行の「石狩湾」(昭46)がある。その歌は、写実を基調としながら、時には洒脱で奔放なものも見られた。人生の機微に通じ、一方では長年の山歩きの体験を生かし、北方の自然、とくに高山植物に愛情ある目を注いでいるものが多い。(待合室にて顔合はす人らみな平凡の顔なれどこの平凡のよき) (中山周三) 戸田正彦 まさひこ 大13・1・22、(1906)

24)「新聞記者」網走管内湧別町生まれ。旧姓宮崎。早稲田大学文学部国文科卒。昭和20年北海道新聞社入社。本社出版局次長などを勤め、本道の出版文化の向上に尽くす。57年退社。昭和20年12月北見市で創刊の「私たち」編集兼発行人。織田作之助没の直後、22年1月20日付北海道新聞に「織田作之助の方法論と作品」。「青年作家」新鋭小説集(昭23・1、青年評論社)に短編を発表。のち27年9月小樽で「浮標」創刊に携わる。(木原直彦)

戸津高知 明5・1・13〜昭34

12・3 (1872〜1959)「教育」仙台市生まれ。札幌農学校を卒業後、庁立札幌中学の教諭を経て、明治34年北海道中学(当時の北海英語学校)の教頭となる。大正3年初代校長浅羽靖のあとを継ぎ校長となり、昭和23年退任するまでの生涯を私学教育に捧げた。仁愛、自由闊達、質実剛健を基に真の人間教育を目指す理念と情熱は、大正9年創立した札幌商業を含め多くの人材を世に送った。後年、札幌市議、道議を務めた。(西村 信)

刀福無句 明31・2・11〜昭43

4・23 (1898〜1968)「俳句」松山管内江差町生まれ。本名房吉。三菱系各社に勤め昭和5年釧路へ赴任。配炭会活動のあと釧路菱雄石炭販売社長を務めた。

富沢有為男 明35・3・29〜昭45

1・15 (1902〜1970)「小説」大分市生まれ。大正9年東京美術学校を中退し新愛知新聞社に入社。短編集「凍土」(昭17・6、小学館)のなかに二つの本道取材作「北進物語」「海豹島紀行」がある。「地中海」は代表作。(木原直彦)

富田正一 昭2・3・30〜(1927)

「詩」名寄市生まれ。本名昭一。陸軍航空通信学校卒。網走駅長を最後に国鉄を退職後、近宜旭川営業所長。昭和21年7月「青芽」を創刊。同誌の発展に情熱を注ぎ、詩の社会化を指導理念に四〇号に至る現在まで一〇〇〇人を越える新進詩人を育成。31年名寄詩人協会を発足させ初代会長。名寄文化協会長として地域文化の活性化に貢献し、36年名寄文化奨励賞、46年道北文化奨励賞を受賞。54年詩集「天塩川」、54年「流れ雲」、「生きていくことは」を刊行。人生派の心境詩の典型的詩風は、詩の大衆化に多くの影響を与えた。59年「名寄地方詩史」を完成。道北の詩精神の史的系譜を実証主義的方法で確立した。51年北海道文団協賞を受賞。北海道詩人協会常任理事、北海道文学館理事、旭川詩人クラブ事務局長として詩の啓蒙活動に奉仕している。(千葉宣一)

(千葉宣一)

俳句は函館在学時代の正11年長谷川零餘子門に入り、昭和5年牛島藤六の「時雨」に加入、同人として釧路支部「草の実吟社」を主宰した。「時雨」のあと「葦牙」に参加し同人。21年「えぞにう」創刊を支援、同年編集同人となり、33年編集同人代表として運営責任を負った。37年釧路俳句連盟会長に推され市内各派の交流俳句の振興に寄与した。没後未亡人から俳連への寄付金を基金に「刀福無句賞」を制定、44年から一〇句公募による授賞を毎年行っている。44年遺句集「一と掃きの雪」が刊行された。49年釧路幣舞公園に句碑へ入出船今大夕焼の只中に「が」建立された。(鈴木青光)

外崎書石 明30・8〜昭57・4

10 (1897〜1983)「俳句」松山管内瀬棚町生まれ。本名石太郎。大正6年松湯一雷に師事し作句を始め、14年渡樺、引き揚げ後昭和40年札幌転入まで農業に従事。その間「高潮」「水下魚」「はまなす」「葦牙」に拠り活躍。著書に句集「雪晴風」。(佐々木子興)

土橋慶民 昭11・2・21〜(1939)

「俳句」空知管内浦臼町生まれ。本名慶民。北海道立農業技術講習所卒。本別町役場企画課長。昭和30年滝川蘭花、土岐鍊太郎を識り「アカシヤ」入会。35年同百花集同人。50年同木理集同人。句

富原 孝 大9・7・15〜(1928)

「詩」渡島管内七飯町生まれ。旧制宇都宮高等農林農学校卒。札幌の雪印乳業勤務後、昭和21年函館新聞を経て、31年東京でアートフレンド・アソシエーションに入社、そのちアート・ソサエテを興し社長となる。函館の「ボエム」札幌の「野性」等を経て昭和33年河邨文一郎らの「核」の創立に参加。象徴主義的イメージに音楽性を重ねた華麗でダイナミックな詩風で、特に北海道南部を舞台とするコシヤマインの反乱に取材した長編叙事詩「クオンタインとシクフ」(昭59)は、東京の鳥影社から出版され、好評をあつめた。ほかに詩集「入江と錯乱」(昭56、核の会)がある。

富盛菊枝 昭12・9・18〜(1933)

「児童文学」室蘭市生まれ。室蘭清水丘高校をへて日本女子大学家政学部児童学科卒。大学在学中「小さい仲間」に入会したこともあるが、本格的に児童文学の創作に取り組んだのは「だ・かぼ」の入会から。処女作は「ぼくのジャングル」(理論社)で、昭和40年の出版。寡作なため作品数は多くないが、発表される作品はどれも優れたものである。代表作は46年にあかね書房から出た「鉄の街のロビンソン」。室蘭を舞台にアイヌ

集「明日の歌」。俳人協会員。(岡澤康司)

苦州みつる 昭4・5・28〜(1926)

「小説」苫小牧市生まれ。本名瀬戸一幸。昭和34年同人誌「北限」を創刊。同誌に小説「三つ」「戯れる海」「北田浦男の話」「植物園」、評論「画家たち」「作家こそ技法である」などを発表。現在、雑誌「草地」を発行。(西村 信)

富岡木之介 大8・4・5〜(1919)

「俳句」網走管内訓子府町生まれ。本名七郎。昭和18年頃より俳句を始める。21年「青炎」を創刊、27年廃刊まで主宰。富沢赤黄男、中野重治などの影響を受け、20年代の道内新興俳句復権の過中に活躍、「北方俳句人」「北海道文学」の創刊等に関係。その後俳句を離れ随筆等を書く。北海道文学館理事、「北方文芸」事務局長。著書に「さっぽろラ」メン物語」がある。(辻脇系一)

富岡由香子 昭5・6・12〜(1930)

「詩」旭川市生まれ。本姓村田。鈴木政輝、下村保太郎の影響を受けて詩を書きはじめ、詩誌「木星」同人となって詩作を発表。昭和30年頃より詩誌「情緒」同人となる。詩集「きざらぎ」「片陰の道」「わたしの四季」。北海道詩人協会、旭川詩人クラブ会員。

富安風生 明18・4・16〜昭54

2・22 (1885〜1979)「俳句」愛知県生まれ。本名謙次。東京大学法科卒。通信省に勤め通信次官で退官。高浜虚子門「ホトトギス」同人、「若葉」主宰、芸術院会員。昭和21年「はまなす」創刊と共にその主選者に迎えられて、29年まで同誌雑誌選に当たり、多くの道俳人を育成している。句集、随筆、鑑賞等著書多数。東京で死去。(新明紫明)

富山放浪 明44・10・17〜昭56

11・18 (1911〜1981)「俳句」小樽市生まれ。本名芳郎。昭和初期地元誌「虎落笛」、つづいて「ホトトギス」等に投句。石原八束の來樽を機に傾倒、「秋」小樽支部長として精力的に活動。また昭和20年小樽俳句連盟の創設に尽力、後年代表委員。現代俳句協会員、北海道地区協議委員の業績も多大。平明な人生の哀歎の表白に妙である。(鳥 恒人)

留岡幸助 元治元・3・4〜昭9

2・5 (1864〜1934)「社会事業、教育」岡山県生まれ。同志社神学校卒業

後、明治24年北海道空知集治監監教誨師となる。27年アメリカに渡り欧米の行刑制度を研究し、帰国して少年教護事業を發起し、32年東京巢鴨に家庭学校を創立。大正3年その分校として網走管内遠軽に北海道家庭学校を開設して、監獄改良や少年教護事業の先覚者の一人となった。また、明治33年内務省囑託となり二宮尊徳の報徳教による地方改良事業や社会事業の普及に全国を遊説し、第一次世界大戦以後は社会事業調査会委員として活躍した。著書に「留岡幸助著作集」五巻(昭54)、「留岡幸助日記」がある。遠軽の北海道家庭学校は大町桂月の来訪(大10)をはじめ、藤森成吉の短編「少年の群」(大10)、真船豊の戯曲「太陽の子」(昭11)のほかテレビドラマ「森の学校」「愛の学校」の舞台としても知られる。(佐々木逸郎)

友田多喜雄 昭6・4・4(一) 33)「詩」東京生まれ。成城中学中退。昭和20年東京で戦災を受け東京都被災者集団帰農団の一員として北海道に渡り市別市下別に入植。26年詩誌「かるす」(のち「群青」と改題)を発刊し谷川俊太郎との交流はじまる。33年第一詩集「冬の旅前後」を刊行。農民運動に参加し、安保闘争を経て上川地区農民同盟執行委員青年部書記長を務めたが、39年

余市を舞台にした牧歌的な作品。
虎谷霞洋子 明44・5・1(191)「俳句」後志管内古平町生まれ。本名勇作。北海道大学臨時教員養成所卒、高校教員。後志で高校長を最後に勇退。俳句は昭和14年新田汀花に師事、「緋衣」創刊に参画。「葦牙」「河」「人」同人。俳人協会会員。仁木町在住。(木原直彦)

鳥井綾子 昭20・4・25(1945)「小説」十勝管内大樹町生まれ。大樹高校卒。大樹町立病院勤務。「晩秋の陽」(昭52、帯広「市民芸」)、「草いきれ」(昭53、同)、「やまぶき色の指輪」(昭54、「黎」)、「五月の雪」(昭55、同)などがある。(神谷忠孝)

鳥居省三 大14・8・1(1925)「評論」紋別市生まれ。本名良四郎。二歳から釧路地方で生活し、国鉄、私立太平洋炭鉱図書館を経て昭和26年から市立釧路図書館に勤務。昭和59年同館長から標茶町図書館長を務める図書館人。昭和27年に「北海文学」を創立、主宰して今日に至る。原田康子の「挽歌」をガリ版刷りで連載、世に送り出した。主な著書に「釧路文学運動史・明治大正篇、昭和篇、戦後篇」(昭39、釧路叢書第6巻。昭44、第10巻。昭53、第19巻共

牧草花粉アレルギー症のため離農し、札幌に移り「農村と婦人」編集、社会党北海道本部農民対策担当などを経て、40年全北海道農民連盟書記。41年貞壁仁の解説を得て第二詩集「友誼果樹園」を刊行。谷川俊太郎のすすめではじめた子供のうちを「新しい子供のうち創作コンクール」に出品し特賞となる。以後の詩集に「詩法」ベトナム反戦と愛の詩集(昭44、第2回小熊秀雄賞受賞)、版画家清水敦との詩画集「ちいさなものたち」(昭53)、いも版画家香川軍男との詩画集「仔馬・羊たち」(昭54)、少年詩集「サイロのそばで」(昭56)、清水敦との詩画集「ちいさなものたち・以後一」、版画家白砂妙子との詩画集「ちいさなものたち・以後二」(昭58)などがあり、「戦後北海道農民運動史」(昭41)、エッセー集「ズボンについた草の種子」(昭46)のほか農村と農民生活に関する多くのレポートがある。農民団体書記局勤務。空知管内長沼町在住。(佐々木逸郎)

外山卯三郎 明36(昭55)1903(1980)「美術評論」和歌山県生まれ。京都帝国大学文学部哲学科卒。武蔵野音楽大学教授。造形美術協会理事長。京大に入学する前の四年間だけ札幌に住み(北大予科学生)、その短期間、演劇、

著、「石川啄木」(昭55、釧路新書)等がある。道東地方を作品形成の根底に据えた作家達に焦点をあて、昭和33年から58年までの評論をまとめた評論集「異端の系譜」(昭58、北海道新聞社)で、59年度北海道新聞文学賞を受賞。作品を通して見える作者の「人間」に興味を覚えるという鳥居は、道東が生み出した作家を媒体として自己を語る。(米坂ヒデノリ)

鳥井十三雄 大13・1・4(1932)「新聞記者」夕張市生まれ。東京大学卒。昭和28年北海道新聞入社、48年から57年まで論説委員。この間、52年から56年同紙朝刊コラム「卓上四季」を執筆。著書に「卓上四季―鳥影抄」(昭57、みやま書房)。57年退社。北海学園大講師。札幌市在住。(五十嵐健二)

直江武骨 明32・4・13(昭57)6・30(1889)1932)「川柳」小樽市生まれ。本名清次。薬局経営。大正9年軍隊勤務中に川柳作句の道に入る。14年

な

美術に精力的に活躍した。大正13年詩学協会演劇部を結成、ストリンドベリイ作「熱風」などを演出、北海道新劇の草分けである。美術団体「黒百合会」結成の功績も大きい。(本山節弥)

外山定男 明39・11(1906)「詩、翻訳」函館生まれ。慶応大学卒業後、英国ハル大学に学ぶ。太平洋戦争前の「新領土」同人。戦後北海道学芸大学函館分校教授。詩誌「至上律」「核」でロビンソン・ジェファーズの叙事詩を格調のある筆致で紹介。一六世紀一七世紀の英国文学の研究では、質的にも注目された業績を残している。詩集では「感情漏洩」「歎きと祈り」。翻訳では「仙女王」「バイロン全集第一巻」等がある。(堀井利雄)

豊島博男 大3・6・23(昭2)「俳句」茨城県生まれ。土浦中学校卒。昭和9年札幌に来住し、警察官、釧路、旭川社会保険事務所長を務めた。昭和27年「俳句ロマン」を編集主宰。句集「素顔」がある。(川端麟太)

豊田三郎 明40・2・12(昭34)11・18(1907)1939)「小説」埼玉県生まれ。結婚して森村姓。森村桂は長女。東京大学独文科学卒。行動主義文学の代表的作家の一人で、「仮面天使」が代表作。「林檎畑」(昭16・8、「新潮」)は

東京「きやり吟社」に入会。15年小樽柳吟社同人となり「はららご」に作品発表。昭和11年に「きやり吟社」社人に推薦される。15年小樽川柳社同人となり「川柳誌番茶」に作品発表。23年「粉雪吟社」に参加、同人となる。25年北海道工業、北海道葉菜新聞川柳欄の選者を担当。川柳粉雪吟社が小樽川柳社と改め、主幹田沢村茂角逝去により昭和31年7月主幹となる。42年北海道川柳連盟会長に就任。49年小樽教育文化功労賞受賞。同年小樽川柳社顧問。51年北海道文化団体協議会賞、54年北海道川柳功労賞受賞。55年11月川柳句集「歩み」を発売。(金屏風今日は酔ってはならぬ酒)

中家金太郎 明41・10・21(昭29)12・13(1908)1954)「詩、小説」旭川市生まれ。本名金一。他に習志野軍七で小説を書き、井伏鱒二の筆名を用いたこともあり、また中家ひとみ名で多くの詩作品を発表している。旭川商業学校より早稲田高師部中退。昭和4年詩誌「裸」創刊に参加。同「不死鳥」創刊に参加。詩人として認められたが次第に小説を書く。詩にも小説にも諧謔の味を見せはじめ、それまでに他には見られなかつた露惠の面を表現、無頼派とか自虐趣味とかを詩にうたったものは類例がなく

眼を見張らせるものがあつた。金太郎像は昭和48年佐藤喜一による「旭川叢書第七巻」に集約されている。中家金太郎第一詩集「錢」は昭和11年国詩評林社（刊行者鈴木政輝）から発刊。12年佐藤喜一の「燔祭」が創刊されたが中家の小説により発禁処分となつた。この年より北海タイムス校正係に籍を置く。昭和14年岸本と結婚。戦中戦後にかけて「冬涛」「北の女性」「小説暦」「北海道文学」「情緒」等に小説、詩の作品をさかんに発表。昭和42年第二詩集「我が墓碑銘」（死後）が現代書房より出版された。

（入江好之）

長井菊夫 大15・7・30（1936）

昭和18年庁立空知農業学校卒業の頃より詩を書きはじめる。「建設詩人」（九州、徳永寿）、「詩と詩人」（新潟、浅井十三郎）の同人。昭和24年加藤愛夫、奥保、伊東廉、佐藤初夫らと「詩人種」を創刊し編集。30年奥保と「詩新潮」、33年奥保、古川春雄らと「呪」創刊。アンソロジー「北海道詩選」（昭25）、「日本凍死」（昭37）を編集、詩人種社より刊行。詩集は持つていないが「日本農民詩史」（昭45、法政大学出版局）に農民詩人として紹介され作品が集録されている。「樺美智子遺稿集」（昭25、三一書房）

鮎 などがあつた。

（和田謙吾）

中江良夫 大13・5・3（1910）

（劇作）登別市生まれ。本名吉雄。高等小学校卒。昭和10年NHKの懸賞ラジオドラマに「かし家」が入選。新宿のムーラン・ルージュ文芸部に入って劇作家として出発した。戦後同劇団が復活すると「生活の河」を書き、昭和23年「日本演劇」に発表した「にしん場」は北海道に取材した男性的作品で軽演劇界に新風を送った。一方ラジオドラマにはラジオ東京（現東京放送）初期の連続シリーズ「うっかり夫人とちやっかり夫人」がある。また新国劇に「どぶろくの辰」（昭23）を書き、「無法一代」「六人の暗殺者」を脚色、商業演劇界で活躍した。

（佐々木逸郎）

長岡秋郎 大11・12・1（1912）

（俳句）山形県生まれ。本名清四郎。大正9年渡道、網走管内上湧別町に居住。大正12年頃より作句、14年栗木踏青に逢ひ武田篤塘「南柯」に入会。15年牛島藤六「時雨」に入会。昭和2年養父追善句集発行。3年南柯北見支社を発足させ、鶯塘主選「樹心」月刊誌を発行。服部畔石「高潮」入会。7年「南柯、高潮、時雨」各同人。22年「葦牙支社こだま吟社」を発足させ、27年滝上に虎杖子句碑を、知内

に追悼詩を載せるなど正義派の一面を持つ。職務の関係上一時岩見沢を離れ、留萌、北見、旭川など転勤しその地の詩人達と交流を深める。「尚」の創刊からの同人で、復刊後も主力を「尚」において作品発表。農水省札幌統計情報事務所勤務。

（伊東廉）

長井敏子 大12・3・10（1923）

（短歌）愛媛県生まれ。愛媛県立周桑高女卒。華道池坊教授。昭和28年「アラギ」、31年「北海道アラギ」に入会。土屋文明、樋口賢治に師事。旭川アラギ月報にも参加。54年歌集「みやこわすれ」刊行。岩見沢市在住。

（笹原登喜雄）

永井 浩 昭4・1・24（1929）

（詩）後志管内島牧村生まれ。帯広畜産大学獣医学科卒。同大在学中より詩作をはじめ、詩誌「塑像」を創刊。以後「オメガ」「野性」「波紋」「オルフェ」「山の樹」の同人となる。33年河邨文一郎らの「核」創立に参加。36年盛口襄らとともに「詩学」新鋭詩人特集に収録。39年札幌医科大学臨床動物実験室長。詩作のかたわら放送シナリオを執筆。39年NHKラジオ郷土劇場の放送詩劇「祭」により年間最優秀賞を受け、45年に詩集「陶器の時代」で北海道新聞文学賞、46年には合唱組曲「白い世界」（NHK、

助川敏弥曲）で芸術祭優秀賞を受賞した。北方の暗鬱な天地を詩的土壌とする詩人で、息のながい思考のテンポとおだやかな口調で、一言ずつその意味と効果を確かめながら、辛抱よく読者と自分自身とを説得してゆくが、そこには求道的なモラリストの姿勢があり、広大な宇宙のひろがりや時間のなかに、短く苛酷な生をいとなむ生きものたち、またかれらとともに生きる人間の生の意味への照射が見てとれる。一見、地味であり、けんならぬ詩句の輝きは見られないが、しかし目を凝らすと、無数の星の影を沈めた山中の沼の面のような燻した華やきが見えてくる。日本現代詩人協会。日本放送協会員。詩集はほかに「余白」「反世界」がある。

（河邨文一郎）

中江兆民 大14・4・11（1872）

明治34・12・13（1871-1901）[評論]高知県生まれ。本名篤助または篤介。フランス学を学び、自由主義、民主主義思想を推進した。明治24年4月小樽で創刊の北門新報主筆に招かれ7月末着任（11月から翌年3月まで帰京）、25年秋、同社退社。札幌で紙問屋土佐屋を開業したが年末に東京に引き揚げた。「中江兆民の紀行文」東京より北海道に至るの記（昭33、「学苑」）があり、代表作に「一年有半」「続一年有半」（明34、博文

に膝六句碑の建立に尽力し、33年には故踏青句碑を明光寺の境内に建立。44年には上湧別神社境内に句碑（凍てぎびし日輪あさの野を歩む）が有志により建立させた。46年函館市転任、豊川句会を発足させた。53年1月句集「邂逅」を葦牙叢書一九集として上梓。55年遺句集「冬帽子」（葦牙叢書24集）が発行された。上湧別在住二三年、自治功勞、文化功勞褒賞等を受賞。

（神谷忠孝）

中川悦子 大15・5・1（1916）

（詩）帯広市生まれ。昭和41年高田敏子主宰「野火」創立会員となる。45年阿部三恵、来栖美津子、菅原おほみ、塚原信子と詩誌「サ・エ・ラ」を創刊。所属詩誌「情緒」「パンと薔薇」。北海道詩人協会会員。詩集「木片」。

（東 延江）

中川李枝子 大10・9（1919）

（児童文学）札幌市生まれ。東京都立高等保母学院卒。児童文学グループ「いたどり」同人。いぬいとみこ、小笹正子、小池タミ子、鈴木三枝子などがいた。昭和34年画家中川宗弥と結婚。37年童話集「いやいやえん」を福音館書店より発行。これは「いたどりシリーズ3」として昭和34年に発表されたものだが、福音館から発売になると大評判になり、NHK児童文学奨励賞、サンケイ児童出版文化賞、厚生大臣賞、野間児童芸賞推奨作品賞などを受賞した。幼児の日常生活の中での、遊び、行動、空想をあざやかな色彩感覚と思いがけない発想で描いたこの作品は、何より多くの幼児読者を獲得した。他に「ぐりとぐら」「そらい

ろのたね」「かえるのエルタ」「もいろいろのきりん」「ぐりとぐらのおきやくさま」「らいおんみどりの日ようび」など多数。(笠原 肇)

長木谷梅子 ながきやま 明34・2・12(1901)〔短歌〕伊達市生まれ。夫の転勤に伴って札幌、夕張、雨竜などを経て大正14年から室蘭に居住。昭和21年「新墾」に入社、選者も務める。26年「潮音」入社、現在幹部同人。27年に岡本高樹の主宰する「いぶり路」の同人となるが、同誌が一〇〇号で終刊を機に、いぶり路第一歌集「たんぼぼの実」を発行。41年に「むろらん歌会」を結成し月刊「むろらん」を編集発行して室蘭地区の歌壇を形成すること一六年、57年12月に二一〇号をもって終刊した。この間、毎月の歌会のほか地区の短歌大会開催、同会の合同歌集の発行、一〇〇号記念合同歌集、二〇〇号記念合同歌集の発行などの活躍をした。49年随筆集「ちいさな足跡」を刊行。59年に石森延男の序になる歌集「面影」を発売。53年には室蘭文化連盟から文化功労賞を受けている。(水平利夫)

中桐雅夫 なかとう 大8・10・11(1919)〔詩〕岡山県生まれ。本名白神鉦一。日本大学芸術科卒。読売新聞記者を経て青山学院大学講

師。「荒地」「歷程」同人として知的市井人のハイブラウな哀傷を歌った。昭和25年札幌を訪れ地元の人と交歓。昭和44年札幌での「核」創刊一〇周年記念会で講演。詩集に「中桐雅夫詩集」(思潮社)ほか、訳書にW・H・オーデン「わが読書」(晶文社)等がある。(河野文二郎)

中越華章 なかつく 明41・2・16(1900)〔俳句〕小樽市生まれ。本名和雄。電機学校卒。浜益村議会議長を経て浜益村長を務めた。昭和21年頃より句作に入り、「阿寒」「緋蕪」等を経て古沢太穂に師事し「道標」同人。「北群」「九十九里」同人。55年第一句集「枕の石」刊行。風土の中からつかみとつたものを、肉声で表現する骨太な作風を目指す。現代俳句協会会員。59年勲五等瑞宝章受章。(木村敏男)

仲財けんじ なかつね 昭11・6・15(1936)〔小説〕大阪生まれ。本名修二。戦時中、留萌管内羽幌町に疎開永住。北海道学芸大学旭川分校卒。昭和45年講談社児童文学新人賞候補の「竜泉洞の宝」が処女作。46年留萌ペンクラブ会員。「留萌文学」の小説、俳句の中心的執筆者として活躍中。49年句誌「水原帯」に「細谷源二研究ノート」を連載。細谷がモデルの小説「炎の海」(昭57、近代文芸社)が代表作である。留萌中学

校教員。(東野ひろ子) 中座 伶 なかつま 昭8・2・20(1908)〔詩〕十勝管内芽室町生まれ。玉川大学文学部教育学科卒。昭和36年詩誌「青芽」(名寄)に参加。翌年同人となり、44年第一詩集「日々々(ノタヨリ)」を刊行。45年「詩の村」(札幌)同人となる。47年第二詩集「長い刑罰」を刊行した。宗谷管内の小、中学校教諭を歴任して、現在は東利尻町で教諭。(佐々木逸郎)

永沢茂美 ながさわ 明37・3・25(1900)〔小説〕栃木県生まれ。ペンネーム石狩三平。日本大学法文学部美学科卒。いばらぎ新聞、福島民報を経て、昭和8年北海タイムス(現北海道新聞)入社。15年「北方文芸」創刊と同時に同人として、編集兼発行名義人となり、同誌に「目白」「孤影」「おろしや漂流記」などの好短編を発表。19年福島民報に戻り、戦後北海タイムス創刊により昭和26年から34年まで同社にあり、再び本州に去る。(更科源蔵)

中沢 茂 なかさわ 明42・1・4(1900)〔小説〕石川県生まれ。大正3年一家根室に移住。闘病生活のため根室商業を中退。昭和7年個人雑誌「測量船」を刊行して文学活動に入る。翌8年マルキシズムに誘われて無断上京、思想狂乱

の政治に敗北を意識して間もなく帰郷。10年同人誌「どろの木を育くむ人々」(根室)に参加。両誌を通じて釧路の更科源蔵、渡辺茂、山形の真壁仁と交友を持つ。戦前に三冊の著書がある。志賀直哉、滝井孝作の影響ある「狼星」(昭12)、自然描写に徹して己れを見つめた「中沢原」(昭15)、架空の野原を食愛山なる人物に重ね合わせて自己葬送をはかった「愛山供養」(昭16)が、いずれも自費出版。戦後は主として「札幌文学」に作品を発表。「鷗の店」「毀れた時計師」「不在の仲間」「落葉松頼末」「画家チヌカルコロ」「紙飛行機」「太陽叩き」などは、すべて近年の問題作として注目されたが、いずれも戦前の三作がその主題に濃い影を落としている。戦後の著書に「助命歎願」(昭34)、「連帯孤独」(昭37)、「太陽叩き」(昭48)、「画家チヌカルコロ」(昭54)等。昭和44年北海道文化奨励賞。「紙飛行機」で53年北海道新聞文学賞を受賞した。

〔画家チヌカルコロ〕 長編小説。「札幌文学」(昭36・8、29号)に発表。昭和54年6月北方文芸社刊。主人公チヌカルコロに託して、二つの顔を持つ人物を同時に棲ませた人間の悲喜劇を、自画像ふうりに構成した著者告白の代表的作品。(島居省三)

長沢としを ながさわ 大9・9・8(1920)〔川柳〕夕張市生まれ。昭和17年小樽川柳番茶会入会、「番茶」に投句。佐藤冬児に師事し川柳を学ぶ。翌18年東京きやり吟社入会、中央の川柳作品の研究に励む。23年小樽川柳粉雪吟社(現小樽川柳社)設立と同時に発行された川柳誌「こなゆき」に投句。26年に粉雪吟社の同人になる。37年「こなゆき」の雑詠吟「山彦集」の選者となり、新人育成をふくめて長期にわたり指導に当たった。45年小樽川柳社の副主幹に選ばれた。翌年北海道川柳連盟年度賞選考委員となる。また49年小樽川柳社の主幹となり、58年主幹を退き顧問となる。その間小樽川柳社はもとより北海道川柳界の発展に大きく寄与した。59年小樽川柳社より功労賞を受ける。53年川柳活動の総決算ともいべき句集「やまびこ」を発売。〈忘却は哀しき過去を虹にして〉(石井有入)

長沢美津 ながさわ 明38・11・4(1905)〔短歌〕金沢市生まれ。大正15年日本女子大学国文科卒。在学中より古泉千櫻に師事。昭和24年「女人短歌」結成以来編集責任者。47年「女性和歌の史的研究」により文学博士の学位を受ける。55年「現代短歌大賞」、56年勲四等宝冠章受章。著書に歌集一五冊、随筆集五

冊、研究書「女人和歌大系」六巻。和歌文学会、日本文芸家協会、日本ペンクラブ会員。来道三回。〈丘ありて羊の群は越えゆけりおのおの子をあとにしたがへ〉(矢島京子) 中嶋音路 なかじま 明35・4・4(1900)〔俳句〕後志管内黒松内町生まれ。本名英男。函館通信講習所卒。大正15年から郵政事務関係、昭和37年から帯広北高校事務を勤める。俳句は高小時代に校長が手ほどき。大正15年松前郡大島村(現松前町)で「若葉会」を結成主軸となる。帯広市に移って昭和28年井浦徹人らと「帯広ホトトギス会」を結成。また徹人を助けて「あきあじ」を創刊、課題句欄を受け持つ。46年徹人没後「柏林」を創刊して主宰。その間、「はまなす」「岬」、46年「若葉」の各同人となる。45年十勝俳句連盟結成、参加。副会長を務め、現在顧問。俳人協会会員。北海道若葉会副会長。帯広ホトトギス会長。句集に「柏林抄」(昭47)があり、55年幕別温泉に句碑建立。〈天高し平原を行く十勝川〉(佐々木露舟)

中島竹雄 なかじま 明14・3(1881)〔短歌〕鹿児島県生まれ。東京医学校卒業後池田町で医院開業。のち十勝医師会長。大正12年短歌結社「牛蘭社」会長。「吾妹」幹部同人。

東北道短歌大会を毎年開催するなど地方の文学活動に先鞭をつけた。昭和17年清見丘中腹に歌碑が建立された。没後、池田町第一回文化賞、45年池田町名誉町民となる。
(寺師治人)

中島葉那子 はなこ 明42・12・20～昭14・4・20 (1909～1939) [詩] 空知管内栗山町生まれ。本名更科はなま。角田村(現栗山町)の継立尋常小学校卒。村は開拓者泉麟太郎の影響を受けて詩歌の盛んな土地がら。高等女学校講義録の文芸欄に短歌を南条美鈴のペンネームで投稿、のち昭和5年頃竹内てるよと交友をもち詩作に入る。大正末から角田村で小作問題にまつわる農民運動があり、その影響で、詩は次第にはげしくなる。栗山の詩人小柄沙岐の黒潮時代社から竹内てるよの「第一の曙の手紙」を出し特高におさえられる。詩「幼な物がたり」を小柄の詩誌「くさみち」に寄稿。まもなく弟子屈の更科源蔵の詩集「種薯」を見て感動、更科の詩誌「北緯五十度」に「馬鈴薯階級の詩」を発表。農村階級の立場から詩を書きつづけた。昭和6年更科と結婚、二女をもうける。女性としては珍しい論理的な詩で、権力打倒の思いが、働く者の視点で力強くうたわれている。

〔「短歌」十勝管内鹿追町生まれ。十勝ラジオ歌壇を経て、昭和23年「新墾」入社。地元の短歌誌「山脈」などでの活躍につづいて「辛夷」に入会。54年辛夷功労賞を受賞している。「辛夷」運営委員、選者。幕別町札内在住。〕

中嶋 立 りつか 昭8・3・28～(63)〔俳句〕札幌市生まれ。昭和27年療養生活中に俳句を始め、加藤楸邨、古沢太穂、中島斌雄らの作品を読み独学。34年若手作家と同人誌「園」を創刊、のちに「車軸」と合併して「r」(草皆白影子)の創刊に参画するなど同人誌を中心に活躍。有季定形を持しリアルな生活感情の表出を思考する。「道標」同人。53年「北群」を創刊し発行人。「これ」同人。現代俳句協会員。
(辻脇系一)

中嶋 立 りつか 昭8・3・28～(63)〔俳句〕札幌市生まれ。昭和27年療養生活中に俳句を始め、加藤楸邨、古沢太穂、中島斌雄らの作品を読み独学。34年若手作家と同人誌「園」を創刊、のちに「車軸」と合併して「r」(草皆白影子)の創刊に参画するなど同人誌を中心に活躍。有季定形を持しリアルな生活感情の表出を思考する。「道標」同人。53年「北群」を創刊し発行人。「これ」同人。現代俳句協会員。
(辻脇系一)

中城ふみ子 ふみこ 大11・11・25～昭29・8・3 (1922～1954) [短歌] 帯広市生まれ。呉服商を営む野江豊作の長女。帯広小学校、帯広高等女学校を経て東京家政学院に学ぶ。卒業後帯広にもどり、昭和17年札幌鉄道施設部勤務の中城博と結婚。三男一女を産むが博の失脚により生活が乱れ、25年別居する。歌誌「新墾」には22年に入社。26年帯広の超結社誌「山脈」の創刊にもない同人として参加。中城に強い精神的影響を与え

た大森卓への相聞歌と挽歌をここに発表した。ふみ子の創作欲は放送劇にもおよび、「冬の花」等の作品を書く。26年博と協議離婚。自活をめざして上京するが、一月で故郷に戻る。27年帯広の新津病院で「左乳房単純ガン」と診断されて左乳房切除。翌年右乳房に転移して再手術。札幌医大病院へ放射線治療のため海よ今少し生きて己れの無惨を見むかの作なる。のちこの歌は歌碑に刻まれた。昭和29年短歌研究社の「第一回五十首歌」に応募して入選。入選作「乳房喪失」が「短歌研究」四月号に発表になる。乳ガン手術と離婚、それに恋の記憶を重ねて華麗なロマンに仕立てあげた作品は、騒然たる反響をよび歌壇内外に強い刺激を与えた。ふみ子は入選の知らせを札幌医大病院のベッドで受けとったが、すでにガンは肺にも進行、頸部淋巴腺を侵して呼吸困難をともなっていた。その苦痛の中で、自己客観と自己演技を武器とする美しい作品をつむぎだした。取材に来た時事新報記者若月彰の愛にであい、のち若月はその経緯を「乳房よ永遠なれ」に綴った。死の直前、中井英夫によって第一歌集「乳房喪失」が刊行になる。「花の原型」(昭30)も死後中井英夫の手によって編まれた。第一、第

二歌集とも相聞歌が魅力的。渡辺淳一は、中城モデルとして小説「冬の花火」(昭50)に、その鮮烈な生涯を書きこんだ。
(菱川善夫)

を培ったといえる。昭和35年「寒雷」同人。札幌へ転出して55年「梓」を創刊主宰し、この間森澄雄の「杉」、同人誌「広軌」の各同人となる。昭和44年第一句集「氷紋」、50年第二句集「海耕」、56年第三句集「方途」刊行。著書に「北ぐに歳時記」がある。49年寒雷清山賞、57年北海道俳句協会鮫島賞等受賞。俳人協会員。(鳥がきてゐる木の冬の声)〔方途〕句集。昭和56年6月卯辰山文庫刊。昭和49年から56年3月までの三百余句を収録。長く住みついた道北の寒村体験が大部を占めるが、後半の一部に札幌へ転出後の作を加えている。「句の表面から『我』を消すこと」によって、蘇生してくる一つの世界」を表現したいと後記に述べているが、暗く重いものを含んだ、強靱な句集である。
(木村敏男)

中島文子 ぶんこ 大8・11 (1919)

中田耕治 こうち 昭3・11・5 (1928)

中台泰史 たいし 大12・5・26 (1935)〔俳句〕奈良県生まれ。本名泰士。大阪大学医学専門部卒。常呂町中台外科産婦人科医局長。昭和40年「浜」に所属、47年同人。46年「丹精」素玄集を経て48年「壺」復刊時同人参加。55年素玄集(無鑑査)同人、同人会副会長。48年俳人協会員。58年句集「流水の町」によって第二回鮫島賞特別賞を受賞した。
(金谷信夫)

中嶋 立 りつか 昭8・3・28～(63)〔俳句〕札幌市生まれ。昭和27年療養生活中に俳句を始め、加藤楸邨、古沢太穂、中島斌雄らの作品を読み独学。34年若手作家と同人誌「園」を創刊、のちに「車軸」と合併して「r」(草皆白影子)の創刊に参画するなど同人誌を中心に活躍。有季定形を持しリアルな生活感情の表出を思考する。「道標」同人。53年「北群」を創刊し発行人。「これ」同人。現代俳句協会員。
(辻脇系一)

永田耕一郎 こういちろう 大7・9・20 (1918)〔俳句〕朝鮮木浦生まれ。旧制木浦商業学校卒。戦後満州から引き揚げ、地方公務員として留萌管内遠別町助役を務めた。少年期に兄の師である清原拐童に句作を学ぶ。復員後大連で「石楠」同人金子麒麟草の指導を受け、句作に入る。昭和22年「寒雷」に投じ、以後加藤楸邨に師事して今日に至る。青少年期を外地の朝鮮で過ごしたということと、引き揚げ後間もなくビュルゲル氏病に侵され、右足を切断せざるを得なくなつたということが、その後の俳句に大きな陰翳を与えていることを見逃せな。さらに道北の辺地での生活が今日の作風

中田耕治 こうち 昭3・11・5 (1928)〔評論〕東京生まれ。明治大学英文科卒。昭和37年札幌で道内の主な同人誌の同人との「文芸懇話会」に出席、それをもとに「文芸」(昭38・3)に「北海道の文学」を発表。著書に「聖家族」ほか。翻訳書が多数ある。
(西村 信)

永田秀郎 ひであき 昭9・7・16 (1934)〔劇作〕釧路市生まれ。明治大学文学部卒。昭和33年以降顧問として高校演劇部の指導に当たり創作劇を執筆、発表。昭和40年戯曲研究会を発足。翌年から公演をはじめて釧路の劇団「さらまぐるうぶ」を創立した。戯曲に「さいはての啄木」「海を見つめる男」「傘おどり修羅」があつていずれも公演される。「釧路叢書」に「戦後釧路演劇史」を書く。釧路湖陵高校教師。
(鳥居省三)

中田美恵子 みづこ 昭11・6・18 (1936)〔詩〕滝川市生まれ。本姓浅野。

中田美恵子 みづこ 昭11・6・18 (1936)〔詩〕滝川市生まれ。本姓浅野。

中田美恵子 みづこ 昭11・6・18 (1936)〔詩〕滝川市生まれ。本姓浅野。

中田美恵子 みづこ 昭11・6・18 (1936)〔詩〕滝川市生まれ。本姓浅野。

中田美恵子 みづこ 昭11・6・18 (1936)〔詩〕滝川市生まれ。本姓浅野。

中田美恵子 みづこ 昭11・6・18 (1936)〔詩〕滝川市生まれ。本姓浅野。

中田美恵子 みづこ 昭11・6・18 (1936)〔詩〕滝川市生まれ。本姓浅野。

中田美恵子 みづこ 昭11・6・18 (1936)〔詩〕滝川市生まれ。本姓浅野。

中田美恵子 みづこ 昭11・6・18 (1936)〔詩〕滝川市生まれ。本姓浅野。

中田美恵子 みづこ 昭11・6・18 (1936)〔詩〕滝川市生まれ。本姓浅野。

中田美恵子 みづこ 昭11・6・18 (1936)〔詩〕滝川市生まれ。本姓浅野。

中田美恵子 みづこ 昭11・6・18 (1936)〔詩〕滝川市生まれ。本姓浅野。

中田美恵子 みづこ 昭11・6・18 (1936)〔詩〕滝川市生まれ。本姓浅野。

中田美恵子 みづこ 昭11・6・18 (1936)〔詩〕滝川市生まれ。本姓浅野。

中田美恵子 みづこ 昭11・6・18 (1936)〔詩〕滝川市生まれ。本姓浅野。

詩誌「北海詩人」を経て二人詩「アンドロメダ」同人。「ベルシャ」編集同人。詩集「薔薇狂人」(昭47、創映出版)、「抱擁」(昭51、北海詩人社)。性への認識を觀念にまで高めた詩を書く。

(小松瑛子)

長田幹彦 明20・3・1〜昭39・5・6 (1897〜1964)「小説」東京生まれ。兄は詩人で劇作家の長田秀雄。東京高師附属中学卒業後、札幌農学校に進むべく入試に合格したが、父の反対で早稲田大学に入学した。兄の影響で「明星」「スバル」に加わったが、放蕩の味を覚えて学業を放棄、明治42年7月東北に流れた。9月に入り独歩と農学校の幻影に誘われて北海道の土を踏む。その放浪の模様は自伝「青春時代」(昭52・11、出版東京)に詳しいが、旅役者の群れに交じって石狩、後志、胆振一円を興行して回り、解散後は漁場の帳方見習、修験者の助手、炭鉱夫、鉄道工夫、石炭船積み、飯場生活などを体験する。翌年11月帰京。旅役者の生活に取材した「濤」(明44・11〜45・3、「スバル」)で注目され、世評を呼んだ「零落」(明45・4、「中央公論」)を発表するにょよんで文壇の地位を確立した。「厨昇の話」を含む一連の旅役者ものは幹彦文学の金字塔であり、明治期の北海道文学の秀作

である。朝日新聞連載「霧」の主人公を駒ヶ岳山麓での情死で結んだ幹彦は、大正3年こんどは「栄耀の旅」で来遊する。この折の取材作に「漁場より」「網走港」「アイヌの子」「老兵の話」「続金色夜叉」などがあり、本道を描いた作品が三三編ほどあるのは戦前までに北海道を訪れた作家では幹彦のほかに見当たらない。池北線置戸駅のホームに「再会の松吹雪する春五月」の句碑が建っている。

(木原直彦)

中田 稔 大10・11・2 (1907〜)「俳句」函館市生まれ。昭和18年拓銀入行。51年定年退職。昭和15年「壺」創刊同人。28年「壺」休刊により句作休止。48年「壺」復刊と同時に復帰、編集同人。58年同輩中賞受賞、素玄集(無鑑査)同人になった。

(金谷信夫)

永田洋平 大6・10・10 (1902〜)「動物文学、詩」静岡県生まれ。昭和20年小学校教員を退職後、フリーの動物生態写真家としてたち、野外動物研究に進む。釧路短期大学教授。戦後釧路市で詩の雑誌に関係する。著書に「山の生きものたち」(昭31、日本林業協会)、「北海道動物記」(昭33、法大出版局)、「北海道の大自然」(昭53、タイムライフ社)、「北国の動物たち」全五巻(昭55、偕成社)、「たんちちようづる」(昭56、

世界文化社)ほか。

(鳥居省三)

中津川俊六 明34・4・9 (昭56・10・19 (1901〜1981))「小説」札幌市生まれ。本名武田暹。明治40年小樽市に転居。庁立小樽中学校在学中に同人誌「群像」を創刊し短編「その自殺」ほかを掲載。同校卒業後北海道帝国大学附属図書館、大正13年より小樽市立図書館に勤務する。この年小林多喜二主宰の同人誌「クラルテ」に参加。二号から終刊号まで毎号作品を掲載。昭和5年多喜二らと同人誌「新機械派」を創刊。北条道太郎の筆名で「カタムク大尉」を発表。7年小樽市立図書館を退職し、古書店を経営するが失敗。一時山形県鶴岡市、東京で生活する。15年北海道帝国大学附属図書館に復職、以後札幌に居住。16年5月北海道文芸協会の結成に参加。同協会発行の「北方文芸」に中津川俊六の筆名で幕末の北方経略をめぐる情勢に取材した「五郎治千島日記」(1〜3号)、「北方」(6〜8号)を連載。「北方」は、北方文芸賞の第一回受賞作品となる。またこの時期「詩人松浦武四郎伝」を執筆し、19年6月北海道實業社年団本部から刊行された。戦後「北方風物」に連載した随筆や小林多喜二の回想をまとめて「新蝦夷草紙」(昭21、柏葉書院)を刊行。北海道大学定年退官後、遺稿となっ

た長編小説「新山燃ゆ」を執筆する(昭52、脱稿)。没後「中津川俊六全集」二巻(昭57・10、立風書房)が刊行された。

(玉川 蕙)

中戸川吉二 明29・5・20 (昭17・11・19 (1896〜1943))「小説」釧路市生まれ。明治大学中退。父は釧路の牧場主であったが東京に住んでいたため、管理していた叔父の養子となって吉二は一時釧路に住んだ。叔父の死とともに東京に戻り、夏休みなどを利用して釧路の養母を訪ねた。「法要に行く身」(大9)、「犬に顔なめられる」(大8)、「反射する心」(大9)などの作品はいずれも釧路に材を得たもの。またそのころ釧路の雑誌にも小品を掲載した。「兄弟とピストル泥棒」(大8)はその当時、兄弟で塘路、弟子屈、標茶、屈斜路を旅した時の話を書いたもので、釧路川下りの船の中の様子が面白い。短編集「イボタの蟲」(大8)で作家としての地位が確立したといわれる。「中戸川吉二選集」一卷(大12)がある。

しかし離れかねている青年の傷つきやすい心を描いた自伝小説で、代表作。

(鳥居省三)

中西悟堂 明28・11・16 (昭59・12・12 (1897〜1984))「詩、随筆」金沢市生まれ。曹洞宗中学、天台宗学林卒。住職だが文学にひかれて詩歌の道に入り、白樺派、民衆詩派の影響を受け、詩集「東京市」「花巡礼」「武蔵野」「山岳詩集」「叢林の歌」を出版。のち自然にひかれ、昭和9年日本野鳥の会を創設。昭和14年来道「野鳥を訪ねて」に「野幌原始林」「厚岸大黒島」「根釧原野」「大雪山紀行」などの名文を発表した。

(更科源蔵)

長沼皎平 大6・8・1 (昭59・12・12 (1897〜1984))「小説」函館市生まれ。法政大学卒。太平洋戦争の終結を恵山岬の暗号隊で聞く。東京の焼け跡に立ち、商売など試行錯誤の道を経て北海道に帰り、辺地高校の教師生活をしながら創作の道に入る。札幌の同人誌「表情」に「髪の実て」「白く夏」など、帯広の同人誌「夷狄」に「豆選り場」を発表した。「豆選り場」を改題した「十勝の女」が34年に小説新潮賞の次席となる。35年の「室蘭文学」に「屠所の男」を掲載した翌年に再上京。学術団体勤務の傍ら「文芸首都」の編集委員をつとめ、同誌に女流歌

人中城ふみ子をモデルにした「冬の皷」(昭37)をはじめ「杜ヤフーの悲しみ」などを発表した。大学紛争のさなか勤務の関係で東大構内の片隅に住み、安田講堂の炎焼を目撃する。やがて同人誌「山河」を創刊主宰し、45年の三号に「道化の塔」を掲載したが、エリート記者集団の生態を描いたもの。経営者の伝記等多数。

(木原直彦)

長沼久夫 明44・3・25 (昭59・12・12 (1897〜1984))「短歌」福島県生まれ。本名久男。九歳の時、網走管内滝上町に移住。滝上町役場民生課長、町立病院事務長などを歴任。同町郷土史研究会会長、郷土資料館運営委員長、滝上歌人会長。昭和21年「ぬはり」入社。32年「かぎろひ」入社、現在運営委員。別に歌誌「山脈」を主宰。歌集に「雪の原型」(昭52)がある。

(木村 隆)

長野京子 大正3・1・1 (昭59・12・12 (1897〜1984))「児童文学」函館市生まれ。庁立函館高女(現函館西高)卒。日本児童文学者協会会員、北海道児童文学の会代表。はじめ放送劇を手がけ、昭和27年ごろのNHK「クレヨンさん」、HBC「子供の国」「母と子の童話」(昭43、44)などの仕事がある。その後、童話、児童文学に移行し、作品集に「雪ふり峠」(昭52、北海道新聞社)がある。こ

れは、長野の代表的な短編が一四収録されておられ、素材、作風ともに多彩。解説の加藤多一は作品を、おふくろのやさしさ、おふくろのしたたかさ、おふくろの全存在で書かれたものの三つに分類しているが、たしかに、どれも母親のあたたかさ、やさしさ、願いなどがリリックな文体とあいまって作品効果を高めている。ふつうの母親童話とちがうのは、盲目的な愛などではなく、文学者としてのエスプリ、ユーモア、批判精神が厳然と据えられているからであり、さらに放送作家としてきたえた場面転換の技術、会話の妙、色彩感覚などが特色となっている。(笠原 肇)

中野重治 註 明35・1・25 昭54・8・24 (1902～1979) 「小説、詩」福井県生まれ。旧制四高在学時に北海道を旅し、詩「北見の海岸」を生む。戦前はプロレタリア文学の担い手として、戦後は民主主義文学の推進者として活躍。敗戦直後の来道が小説「よこれた汽車」(昭24・10、「人間」)に描かれたほか、小林多喜二らに関する多くのエッセーや、北海道文学展(昭41・10)の記念講演「北海道の作家たち」がある。(小笠原克)

長野唯始 註 大3・11・22 昭56・8・28 (1914～1981) 「詩」札幌市生まれ。高村光太郎の後継者として日本近代彫刻史上重要な位置を占めている。(工藤欣弥)

中平一馬 註 大4・1・29 (1915) 「短歌」旭川市生まれ。美唄や札幌で高校教師を勤め、昭和31年美唄実務学院を創設。昭和16年に「潮音」、翌17年「新壘」に入社、選者も務める。美唄歌人会長、市文化協会副会長。49年離道。(永平利夫)

永平利夫 註 昭2・2・11 (1927) 「短歌」日高管内浦河町生まれ。21年「新壘」に入社して小田観瑩に師事。浦河の教員時代は、同地の「日高路」や、日赤浦河病院の文芸活動、短歌会の指導にあたった。札幌市の高校に赴任後は「新壘」の編集委員、選者をつとめる。とくに32年同誌の編集発行人が村田豊雄から宮崎芳男に引き継がれた時代の若手編集委員として敏腕をふるい、35年「新壘」の全国短歌雑誌連盟賞の受賞に大きく貢献、自ら評論活動をするなど結社誌編集の現代化に努力した。50年北海道歌人会の幹事代表となって事務局を担当し、種々の行事や年鑑の発行等を通して北海道歌壇の発展に尽力した実績も高く評価されている。著書に歌集「野の仮象」(昭41)があり、主知的なものとして

まれ。本名正。明治大学文芸科卒。クリスチャンの家庭に育ち早くから詩作にかかわる。札幌一中(現札幌南高校)卒業直後に詩集「日南の窓」を刊行。終戦時は樺太に在り、帰国後はたびたびソ連を訪れ日ソ友好親善に尽力、ロシア料理店「アンナ」を経営する。昭和33年詩誌「核」の創刊にかかわる。著書に評論集「D・H・ローレンスの下に」(昭12、東京健文社)、詩集「日南の窓」(昭8)がある。(新妻 博)

永野照子 註 昭17・1・25 (1926) 「俳句」江別市生まれ。昭和48年より北光星に師事。「道」入会、同人となる。屈指した女性心理を巧みに表現し、昭和56年度「道」俳句作家賞受賞。句集に「万華鏡」がある。現代俳句協会員。(北 光星)

中野美代子 註 昭8・3・4 (1933) 「小説、評論、中国文学」札幌市生まれ。北海道大学中国文学科卒。北大助手を経て昭和40年から42年末までオーストラリア国立大学太平洋学研究所の研究員。北大言語文化部教授。創作は「黄河源流考」(「位置」4・5号)をはじめ、45年の「北方文芸」に「蜚気楼三題」(4月)、「ゼノンの時計」(5月)などのほか、「三田文学」「海」などにも発表しており、長編小説「海燕」(昭48、

主情的なものとを混交させていて内容的にも厚みがあり、若手の意欲的な作品として注目された。ほかに高校の定時制通信制教育の仕事を通じての実践記録物語「夕べの詩」(昭47)がある。現在北海道有朋高校教頭。「潮音」「新壘」の幹部同人。古典や近代短歌に対して深い研究があり、優れた行動性と活動力をもって北海道歌壇の質的向上に果たしている役割は大きい。(足立敏彦)

永平緑苑 註 昭7・1・1 (1932) 「短歌」国後島生まれ。本名緑。永平利夫夫人。昭和29年「新壘」に入社。熱心な作歌活動を通してすでに自己の歌風を確立し、その柔軟で豊かな感性と張りのある表現には定評がある。47年に「新壘」の評論賞を受賞した。茶道教授の活動とともに新聞のコラム欄や各種雑誌での随想などの執筆も多く、「バスケット野郎」(昭52)は、自らの家庭の親子の生き生きとした会話を主体に独特な口調で書かれた随筆集である。49年「潮音」同人。旺盛な表現意欲と多彩な文才に恵まれて、作歌のみにとどまらず、とくに「新壘」誌上での「新壘女流歌人論」の連載は、代表的な仕事である。現在「新壘」幹部同人。(足立敏彦)

中部川信一郎 註 大14・5・12 (1925) 「小説」美唄市生まれ。本名本橋一衛。昭和17年苫小牧工業卒。三菱美唄で炭坑測量に従事している折に四條三津彦、竹岡広一郎らの「胎動文学」「独立文学」に拠って文学活動を行う。作品に「谷川の流れゆくところ」「もつれた絆」「狂人誕生」「陸橋」などがある。(木原直彦)

潮出版社)がある。評論は「北方論」(昭47、新時代社)、「砂漠に埋もれた文学」(昭46、塙書房)、「迷宮としての人間」(昭47、潮出版)、「中国人の思考様式」(昭49、講談社)、「カニバリズム論」(昭50、潮出版)、「悪魔のいない文学」(昭52、朝日新聞社)、「辺境の風景」(昭54、北大図書刊行会)、「孫悟空の誕生」(昭55、玉川大出版部。芸術選奨文部大臣新人賞)、「中国の妖怪」(昭59、岩波新書)、「西遊記の秘密」(同、福武書店)など。(神谷忠孝)

中野祥子 註 大2・6・11 (1919) 「俳句」滝川市生まれ。本名ソト。俳誌「道」同人。弟に「道」同人会長田中北斗、娘に「道」女流として活躍する瀧川緑をもつ。ヒューマニスティックな作風で句集「花鏡」。随筆集「空知川」がある。(北 光星)

中原悌二郎 註 明21・10・4 (大10・3・28 (1888～1963)) 「彫刻」釧路市生まれ。札幌中学校を中途退学して上京、白馬会研究所に入るが、のち彫刻家萩原守衛を知り彫刻に転ずる。大正3年旭川第七師団ロシア語教官米川正夫を知り同人雑誌「呼吸」に作品を発表したりなどする。大正5年日本美術院彫刻部に入り、同春秋の院展に出品した「石井鶴三像」で犇牛賞を受ける。現存する作

永松健夫 註 明44 昭37 (1911～1962) 「絵画」旭川市生まれ。本名武雄。旭川中学から蔵前高等工芸校染色図案科に学ぶ。鈴木平太郎の「黒バット解決篇」に「黄金バット」を登場させ、絵は苦学生の永松の担当となり下町の子供の人気を博した。のちに映画化。(佐藤善一)

中村勝栄 註 昭3・8・29 (1908) 「短歌」函館市生まれ。余市町に移住する。昭和25年北見恂吉の主宰する短歌月刊誌「落葉松」に入会し作歌。続いて35年より月刊歌誌「海鳴」の同人として編集に参加。44年以降は編集責任者。「落葉松」八八号、「海鳴」三〇二号を続刊。この間30年12月合同歌集「真摺」を、48年12月同「海ぞひのみち」を刊行し出詠する。53年「山本真砂夫遺歌集」を刊行。51年8月海鳴叢書の二二三編として「余市歌壇史・戦後篇」を執筆出版した。49年以降は余市公民館短

歌サークル代表として月例歌会を司会する。
中村 暎一 雑誌 明31・4・7、昭51・4・20 (1898~1976) 「俳句」 栃木県生まれ。小学校卒業後上京、服部時計店の下請け工場(歯刻工)などで働き社会主義思想に目覚める。大正2年頃から雑誌や新聞に俳句、随筆等を投稿、5年頃には「文章世界」(博文館発行、ペンネーム木村一郎)の常連となる。同年時計工場火災のため失業。雑誌「労働青年」(渡辺政太郎、和田久太郎ら)に関係。その後月刊「労働運動」(大杉栄)の創刊同人。後に辻潤を通じマックス・シュテールナーに傾倒、大正13年創刊の「虚無思想研究」誌に「思想の挽歌―思想生活のコペルニクスの転回について」(昭8、思想教育研究所より「転向者の言葉」として刊行)を発表し、労働運動を離脱。大正末期新感覚派として注目された雑誌「文芸時代」に評論を発表。月刊「実益農業」の編集などにかかり、昭和16年愛媛県中津砥業所支配人、17年北海道に渡り、宗谷炭礦専務取締役を経て社長。22年俳誌「樹海」(松村巨樹主宰)同人。24年細谷源二と会い「水原帯」基幹同人に迎えらる。以後源二及び水原帯の活動を理論づけ、道内俳句評論の中心を成す。日刊宗谷、北海道日新聞等に

随想、時評、論説など多数、のちに北海道タイムス論説委員。45年「海程」幹事同人。48年「粒」客員。札幌市で没した。著書に「俳句と人生」(昭45、水原帯社)、「異端の舌」(昭41、プラヤ新書第27巻)等がある。
中村 喜一 雑誌 明38、昭6・9・18 (1905~1931) 「詩」 釧路市生まれ。本名樹一。釧路中学卒。「潮霧」(大14)、「北方芸術」(大14)の同人。感覚的にモダンで新鮮な作品を書いた。作品に「青ざめた感覚」(大14)、「日向葵の花の詩」(遺稿)がある。釧路新聞で追悼版(昭6・10・2)。(鳥居省三)

中村 草田男 雑誌 明34・7・24、昭58・8・5 (1901~1983) 「俳句」 中国廈門生まれ。本名清一郎。昭和4年虚子に師事。8年北海道ホトギス大会に出席。(玫瑰や今も沖には未来あり)はその時の作。昭和12年句集「長子」、14年「火の鳥」、15年「万緑」、22年「来し方行方」、28年「銀河依然」、31年「母郷行」、42年「美田」、55年「時機」を刊行。昭和21年に俳誌「万緑」を創刊した。俳句文芸は一重性を持つことによつてのみ完全なものとなるとして、芸と文学、特殊性と普遍性、有限性と無限性等の二元的要素の一元化の方向に俳句の本質を見定め、漂たる一詩型を象徴詩とし

て確立しようとした。楸邨、波郷と共に人間探求派と称された。44年万緑大会に來道した際の一句(玫瑰や「身散じ」「氣散じ」めぐり合ひ)。ヨハネの黙示録の一切の終末を意味する「見よ時機は近づけり」から最後の句集の題を選んでいるが、永眠直前の「受洗」と無縁ではあるまい。(後藤軒太郎)

中村 啓子 雑誌 大13・1・9 (1902~) 「俳句」 札幌市生まれ。旧制札幌藤高等女学校卒。昭和35年山西秋村に師事し「とちか俳句会」に入会して俳句の骨法を学ぶ。38年土岐鍊太郎を識り「アカシヤ」に入会。45年同百花集同人、50年同木理集(無鑑査)同人に推される。53年句集「茄子の花」を上梓した。アカシヤ俳句会の運営委員。俳人協会会員。(岡澤康司)

中村 耕人 雑誌 昭6・1・7 (1902~) 「俳句」 空知管内北竜町生まれ。本名利弘。昭和24年より北光星に師事。同年「水原帯」に入会。28年第二回水原帯賞受賞。31年北光星、田中北斗らと「磔」を創刊。以来「扉」「道」と行動を共にし「道」同人。32年上梓の句集「農夫の旗」は社会性俳句全盛の中、高い評価を得る。46年扉作家準賞受賞。ほかに句集「櫛」、合同句集「北竜」がある。(北光星)

仲村 参郎 雑誌 大12・8・25 (1902~) 「俳句」 釧路市生まれ。北海道大学農学部卒。地方公務員(北海道林務部長)を経て石狩開発株式会社役員。昭和16年「案山子」により句作。のち「ホトトギス」「まはぎ」のほか、道内のホトトギス系誌「石狩」「緋燕」等を経て、山口青邨に師事し「夏草」入会、のち同人。平明な活写による清新な伝統俳句を目指す。昭和55年第一句集「天邪鬼」刊行。
中村 純三 雑誌 大正12・1・12 (1903~) 「ノンフィクション」 渡島管内上磯町生まれ。函館商業卒。函館新聞記者当時、同紙に「江差の繁次郎」(昭37、みやま書房)、「函館明治大正昭和捕物帳」を連載、好評を得た。その他「おれは魚だ」(昭28、「キング」)、「運命の生理日」(昭29、「実話雑誌」)などがある。(安東璋二)

中村 星湖 雑誌 明17・2・11、昭49・4・13 (1884~1974) 「小説」 山梨県生まれ。本名将爲。早稲田大学英文科卒。鳥村抱月門下として「早稲田文学」記者で活躍。「少年行」(明40)で認められた。戦後、山梨学院短大教授。山梨県文化功労者。岩見沢・志文出身の女流作家辻村もと子の母方のいとこに当たるので、もと子が昭和3年「春の落葉」を出

版した時に序文を寄せ、親族の趣味の遺伝と書してゐる。(和田謹吾)

中村 唯克 雑誌 大11・3・3、昭58・4・28 (1902~1983) 「小説」 十勝管内池田町生まれ。本名忠一。二松学舎大学卒。函館東高教諭時に同人誌「表現」を発行主宰する。代表作「亡霊の歌」(昭32)、36、「表現」は、後に「港ある街の風景」と改題、山音文学会より刊行。ほかに「常夏の花」(昭31、「札幌文学」)、「杜若」(昭32、「海峡」)など。(安東璋二)

中村 文昭 雑誌 昭19・12・18 (1902~) 「詩」 旭川市生まれ。旭川東高校卒。「あぼりあ」編集者のころ、詩集「北てんのうた」(私家版)、「風の棲み家」(沖積舎)、評論「宮沢賢治」(冬樹社)、「銀河鉄道の夜と夜」(同)、「中原中也の経験」(同)ほかを出す。(佐藤喜一)

中村 光夫 雑誌 明44・2・5 (1902~) 「評論」 東京生まれ。現代文芸評論の重鎮。「風俗小説論」(昭25)、「二葉亭四迷伝」(昭33)ほか多数。昭和22年小林秀雄らと、北海道出版文化祭に來道、バネル・デイスカッションに出席した。
中村 武羅夫 雑誌 明19・10・4、昭24・5・13 (1886~1949) 「小説、評論、

編集」 岩見沢市生まれ。鳥取県から集団移住した旧土族開拓者の子。岩見沢尋常高等小学校を出て上級学校を望んだが、林檎園経営が没落したため独学を続け、傍ら絵を学び、小栗風葉の「青春」に魅せられて文学を志す。明治37年に仲間と同人誌「曙光」「北海文学」を創刊し、上京の費用を得る目的で清真布南尋常高等小学校(現栗沢小)の代用教員となった。博文館の「文章世界」に泣花のペンネームで小説が次点佳作となり、加藤武雄と文通する仲となる。40年4月に上京、大町桂月の門を叩いて田山花袋を識り、風葉に師事した。真山青果の紹介で「新潮」の訪問記者となって頭角を現し、斬新な企画力で「新潮」を一流文芸誌に育てた。大正期の名編集長として「中央公論」の滝田樗陰と並び称される。大正14年には岡田三郎らと文芸誌「不同調」を創刊して菊池寛の「文芸春秋」に対抗し、昭和4年には「近代生活」を創刊して新興芸術派運動の中心人物となった。反マルクス主義文芸の立場を表明した「誰だ?花園を荒す者は?」は純文学の皆を守った評論として有名。純文学を志した「人生」は中絶し、以後は婦人雑誌などに通俗小説をつぎつぎに発表して大衆文壇の大御所となる。代表作に「地霊」「嘆きの都」などがあり、

故郷を舞台にした小説では「渦潮」（大12、新潮社）が知られる。「明治大正の文学者」（昭24、留女書房）はすぐれた回想録であり、随筆集「わが自然と人生」（昭10、岡倉書房）、「涛声」（昭18、文松堂）には故郷への想い出が多い。岩見沢には文学碑と生誕碑が建っている。「明治大正の文学者」回想録。昭和17年から二年間「明治大正の文学者たち」と題して「新潮」に連載し、24年6月に留女書店から「明治大正の文学者」と改題刊行した。この文学者の文壇に生きた長い経験が語られており、後世に残る優れた回想録。文壇に出る前、北海道時代も熱心に語られている。

（木原直彦）

中村美彦 昭16・11・27（62）
〔演劇評論〕東京生まれ。早稲田大学卒。在学中に米國留学、会社勤務を経て現在フリーライター。「篠路歌舞伎ノート」（昭58、私家版）、「篠路歌舞伎私論」（昭59）、「さっぽろ市民芸芸」などを発表して注目された。（神谷忠孝）

中谷宇吉郎 明33・7・4（昭37・4・11）（1900～1962）
〔物理学〕石川県生まれ。大正14年東京大学理学部物理学科卒。在学中寺田寅彦の影響強く、以後その学風を継いだ。理化学研究所員を経て、昭和3年英国に留学、

5年北大理学部創設とともに物理学講座教授となる。顕微鏡で見た雪の結晶の美に魅せられ、以後雪の研究に没頭、大量の雪の結晶写真を撮り、分類。昭和10年低温実験室を設けてその結晶の生成条件を究明、その業績により16年学士院賞が与えられた。研究の余暇に書かれた科学随筆は「冬の華」（昭13、岩波書店）、「続冬の華」（昭15、早稲田書林）、「第三冬の華」（昭16、同）などにまとめられた。以後、低温科学研究所長として着水、凍上、霧などについて研究を推進した。戦後、角川文庫にも「中谷宇吉郎随筆集」が収められたが、没後「中谷宇吉郎随筆選集」全三巻（昭41、朝日新聞社）が出版された。（和田謙吾）

中屋繁城 明37・12・10（904）
〔俳句〕十勝管内池田町生まれ。本名繁次郎。高小卒。国鉄技術関係に大正10年より昭和35年まで在職。昭和7年頃より俳句に親しみ「ホトトギス」「石狩」ほか七誌を経て現在「柏林」題詠選者。音更町で「文芸おとふけ」（年刊）の編集に協力。音更文化協会理事、著書に、句と随筆の「郷土」（昭48）がある。（佐々木露舟）

中山山融 大3・5・20（914）
〔短歌〕富山県生まれ。金沢真宗学院卒。昭和10年渡道して永山最勝寺院

文科教授。作歌は北原白秋「桐の花」との出会いにはじまり、大学入学前後「短歌研究」などに投稿。昭和12年「歌と観照」に入り岡山巖に師事。18年退会。戦後21年「原始林」創刊に参加、山下秀之助に師事。28年田辺杜詩花の没後同誌を編集、発行。北海タイムス、十勝毎日新聞歌壇の選歌につき、33年4月山下の東京転出後、北海道新聞歌壇の選歌を担当する。歌集は「天際」（昭27・4）、「陸橋」（昭45・3）がある。中山が原始林誌上に連載した「札幌歌壇史資料ノオト」「北海道歌書採集」「北海道歌壇史ノオト」は、北海道文学史、歌壇史研究上看過することの出来ない業績である。また「白楊雑記帳」に書いた斎藤茂吉に関する数々の研究、評論は、敬愛する茂吉研究への情熱を物語るもので、中山の作歌理念の拠としても重要である。29年北海道歌人会創立の原動力となった。現代歌人協会会員。日本歌人クラブ北海道地方幹事。

〔天際〕 歌集。原始林叢書第四編。短歌雑誌社。昭和27年4月刊。中山周三第一歌集。山下秀之助は序文で「近代的な教養と鋭い良心とを持った若い教師たる著者が一戦後の異常な時代の激流に、ある時は抗い、ある時は捲きこまれ、身を以て生活と文学に対決して来た貴重な

ドキュメント」で「短歌の世界に今までのなかつたような新しいスタイル」を現出している」と評価している。巻末に収める「魔都の春をあるきて」は修学旅行引率の所産で、第二歌集「陸橋」以降の諸作に顕著にあらわれている専攻の日本の古典文学と、その歴史的背景への関心と憧憬につながる。近年韓国に万葉のルーツを訪ね、またアメリカ旅行や関西旅行を重ねて佳作をのこしている。（田村哲三）

中山昭華 明26・1・15（888）
〔俳句〕富山県生まれ。本名長太郎。勇払に入植。一六歳より俳句を始め、服部畊石、青木郭公らに師事、苦小牧俳句会「やまなみ」会長。「葦牙」同人。昭和42年と56年の二度、句集「そぞろある記」を上梓した。（太田耕吐子）

中山 信 大9・6・9（688）
〔短歌〕札幌市生まれ。有島武郎の小説「星座」の舞台、「白官舎」跡（現札幌市中央区南2西6）で大正14年から少女時代を過ごした。昭和13年結婚、夫周三に従って長く「原始林」発行に従事。作歌は「歌と観照」を経て「原始林」入社。はじめ山下秀之助選、33年山下が東京に移った後、中山周三の選歌を受ける。30年原始林賞受賞、28年合同歌集「原始林十八人」に参加、53年歌集「視野」を刊行。自らは「私の歌は門前

代。応召後教員となる。52年定年退職し旭川市身障者施設に勤務。昭和18年「多磨」入会。21年「あさひね」、29年「コスモス」に入会し現在第一同人。31年「北方短歌」創刊に参加して特別維持同人、選者。57年歌集「大悲善巧」発刊する。（握るより投げけるが至難の麻痺の児のむつかる輪投げ吾は見守る）

中山義秀 明33・10・5（昭44・8・15）（1900～1969）
〔小説〕福島県生まれ。本名義秀。早稲田大学英文科卒。昭和13年に「厚物咲」で芥川賞を受け、代表作に「碑」「台上の月」「咲庵」など。敗戦直後、小説家真杉静枝との間に生まれた赤田哲也が北海タイムス社員だった関係からたびたび来道。「迷路」（昭22・6）、「群像」は石狩川の神居古潭の描写からはじまる。案内役は小説家の宮之内一平がモデル。敗戦間もない道東一円を歩く一種の紀行記的小説。取材作に「闇に浮く睡蓮」「月魄」もある。（木原直彦）

中山周三 大5・8・13（916）
〔短歌〕札幌市生まれ。昭和13年国学院大学卒。札幌商業学校に就職し結婚。12月に応召し渡満、16年春帰国して札幌商業に復職。その後母校の札幌一中、札幌東高校を経て現在藤女子大学国

の小僧」であり「家にとじこもりがちな狭い視野のまま振幅の少ない歌」（「視野」あとがき）といっているが、屈折する日常印象を覚めた目で見つめる底に、作歌の初期にごく自然に記憶したという啄木の「りんりんととなり風鈴なつてあるうちの風鈴もつとなれなれ」につながるプリミティブな人間の生の憧れと裏腹の、いのちの淋しさがにじむ独特の雰囲気をもつ女流である。（田村哲三）

中谷真風 昭9・11・12（884）
〔俳句〕胆振管内豊浦町生まれ。本名真敏。農業に従事するかたわら郵便集配員。昭和30年頃より土岐鍊太郎に師事。「アカシヤ」「道」「これ」で学び、のち各同人。昭和46年第一句集「指紋」、54年第二句集「噴火」刊行。（木村敏男）

中山正男 明44・1・26（昭44・10・22）（1911～1969）
〔小説〕網走管内佐呂間町生まれ。金子きみは実妹。専修大学法科中退。雑誌「維新」「陸軍画報」の編集にあたる。日中戦争に陸軍嘱託として従軍。「協坂部隊」（昭14・1、陸軍画報社）以下一連の従軍記を発表。また自伝小説「北風」（昭17・3、平凡社）を出版した。戦後は戦争協力のため追放されたが、解除後、木材、石油、出版などの会社を興すかたわら「馬喰一代・正統」（昭27・7、日本出版協同株式

会社)は映画化されて評判を呼んだ。「馬喰一代・風雪篇」(昭28・6、東光書房)を含めて、大自然のなかの野性的な父性愛を描く自伝小説である。短編集「無法者」(昭28・9、日本出版協同株式会社)も北海道もの。日本ユース・ホテル協会会長、新理映画社長もつとめた。るべしベユースホテルに中山記念室が設けられている。(神谷忠孝)

中山 勝 なかつか 明39・3・24(1968)

〔短歌〕上川管内鷹栖町生まれ。神宮皇学館本科第一部卒。東京右文書院に就職、高等女学校国語科用教科書編纂。昭和9年旭川市上川神社、ついで平壤神社に神官として勤務。20年現地召集、終戦後抑留。21年復員、上川神社勤務。24年旭川商業高等学校教諭。46年まで旭川市内の各高等学校に勤務。神宮皇学館入学以来「五更短歌会」「アララギ」「香蘭」「あさひね」「鶏苑」「砂廊」「作風」等で作歌。29年かぎろひ詩社結成、ついで編集発行人。44年「作風」退社以後は専らこれを活動の場とし、後進の指導育成に努める。56年より顧問。一方42年より古典読書会の指導にあたる。55年鷹栖文化協会等により同町に歌碑建立。あわせて中山玄穹賞歌会を設定。45年旭川市文化奨励賞。歌集に「環状路」「野馬」「玄穹」「逍遙神」「天の容花」「改訂

環状路・野馬」「秋津羽」がある。「改訂環状路・野馬」(昭31)と第二歌集の「野馬」(昭41)を改訂、合本した。21年復員以後の作品集であるが、古語を駆使して現代の叙情と思想を追求しつづける独特の歌境の基盤を示すものである。付録に「初版収載作品の文法及びことばごひの過誤訂正例」を付けている。ことばの探求や、作品の完成度に対する実作者のあくなき執念を感じさせて貴重である。(木村隆)

名塩呑空 なごほ 明16・3・1(昭42)

7・26(1883~1967)〔俳句〕大阪生まれ。本名良造。明治42年渡道、大正3年より北見に定住。菓子卸商。昭和17年旧商店を北見市に図書館として寄贈する。大正中頃より北見の「梧桐会」「野牛」に属し本格的に句作。「阿寒」創刊に協力「阿寒のつどろ」の選を担当。「ホトトギス」「はまなす」などに投句。商売上全国を旅し俳友が多い。句集に「花野」。(美しく花野に狂ひ羅臼川)(嶋田二歩)

名島俊子 なしま 明45・8・3(1911)

〔短歌〕岩見沢市生まれ。本姓永井。旧制高女、同師範科卒。短期間教職に就く。歌は兄の影響で入り、並木凡平悪を社会性豊かに鋭く描き続けている作家。52年から日本ペンクラブ理事。「海鳴りの街」(昭51)長編小説。昭和49年12月から翌年9月まで北海道新聞の日曜版に連載。講談社(昭51・4)刊。「わたしは小樽を舞台にした小説は、いくつも書いてはいるが、ふるさとが心のなかで生き生きと息づくのは、創作をしているとき」という作者は、戦後の小樽の風土を密度高く描いており、伊藤整「幽鬼の街」の戦後版の雰囲気を一面で持つ。(木原直彦)

夏目漱石 なつめ 慶応3・1・5(大正5・12・9(1869~1916))

〔小説〕東京生まれ。本名金之助。東京帝国大学在学中の明治25年4月8日、北海道岩内郡吹上町一七番地浅岡仁三郎方に戸籍を分家送籍。大正3年6月2日に東京に転籍するまで漱石の本籍は二年間岩内にあった。高原蟹堂著「極北日本」の漱石序(大2)にその叙述がある。昭和44年6月岩内町吹上町に〈文豪 夏目漱石在籍地〉碑が建つ。代表作に「吾輩は猫である」(明39)、「こゝろ」(大3)など。

浪花 剛 ななば 大13・2・9(1897)

〔出版〕小樽市生まれ。戦後、労働運動に携わったあと、昭和25年になわ書房を創立。43年月刊芸芸誌「北方芸芸」

に師事。歌集「郭公鳥」出版(青空詩社)。結婚後、東京へ出て長期間の空白の後、「青空」の復刊とともに再び作歌をはじめ。『青空』同人、札幌支部長。東京「芸術と自由」同人で活躍。札幌歌話会、「青空」「新短歌時代」「北土」、北海道歌人会員、北海道文学館理事のほか各婦人団体でも積極的に活動している。〈残る世のあわれ思わずこの宵の物書く時のわが笑む画像〉(青山ゆき路)

南須原彦一 なんすげん 明31・8・25(昭19・7・4(1898~1944))

〔短歌〕札幌市生まれ。北海道大学農芸化学科卒。大正12年から没年まで旧制岩見沢中学で「博物」を教え、学校長を務めた。雑誌「歩み」(大10~14)を創刊。歌集「力の断片」(大10、私家版)がある。(神谷忠孝)

南須原政雄 なんすげん 明35・12・6(昭48・1・1・9(1902~1973))

〔短歌〕札幌市生まれ。北海道大学農業経済学科学卒。拓殖銀行に長く勤務。兄の南須原彦一とともに雑誌「歩み」(大10~14)を刊行し、北大の「南須原ゴキウ兄弟」と称された。彦一の「力の断片」の跋を書く。(神谷忠孝)

夏堀正元 なつぼり 大14・1・30(1905)

〔小説〕小樽市生まれ。父は判事、弁護士、道議会議員。花園小学校から庁創刊に尽力。その後も北海道の出版文化に意を用いている。(小笠原克)

鍋山隆明 なべやま 大6・6・20(1917)

〔短歌〕札幌市生まれ。昭和11年「新壱」、14年「潮音」に入社して小田観瑩、太田水穂に師事し、現在は「新壱」の選者、運営幹部、「潮音」の幹部同人。「新壱」入社時代は、小樽にあって高橋和光らと共に小樽歌会の基盤をつくる。15年国鉄に勤務。23年「手稲樹華会」を創立して代表となり「樹華」を発刊、戦後いちはやく地域文化の向上をめざして活動。30年には手稲町文化協会を設立して副会長となる。34年国鉄歌人会の全国大会を札幌市で開催し大会長を務める。40年釧路市に転動し、42年には「新壱」の釧路支社代表となって新壱釧路大会の大会長を務めるなど、札幌市に戻るまでの間、釧路市の歌壇を指導して多くの実績を残した。45年再度国鉄歌人會全国大会を定山溪に大会長として開催。46年北海道文学館理事。47年札幌市の「潮音」全国大会で実行副委員長を務める。57年札幌市社会教育功労者として表彰された。「手稲樹華会」の活動の中からは、会員の合同歌集「樹華」「白樺」「樹海」「樹齡」「樹声」の五巻を出版。48年には、四〇年の長い歌歴をまとめた自らの歌集「白き軌道」を世に問う、そ

の一途な短歌への姿勢、郷土愛に支えられた文化活動の功績などを含めて高く評価された。

(足立敏彦)

浪岡豊明 昭5・9・29 (16)

〔短歌〕網走管内留辺蘆町生まれ。独学で実業学校検定に合格。昭和20年徴用のまま三井鉱業所入社。22年川村寿人主宰の歌誌「青楓」創刊に参加、一時「新翠」に所属。川村の転出後、27年炭鉱地域を中心とする歌誌「砂川短歌」発行の推進力となり「原始林」入会。「歌人と社会性」をテーマに意欲的に作歌。35年原始林賞受賞。(田村哲三)

並川 公 大4・4・18 (16)

〔詩〕後志管内余市町生まれ。本名三浦浩。五三歳より詩作に入り、「詩学」に投稿。詩誌「青芽」同人、北海道詩人協会会員。詩集「夕映え」(昭52・2、詩学社)。詩作品「針」で第四回文芸北見賞受賞。(小松英子)

並木凡平 明24・5・23 昭16

・9・29 (1891~1941)〔短歌〕札幌市生まれ。本名篠原三郎。若い頃文筆家を志し上京、一時内田魯庵の通い書生となつたが間もなく帰郷。明治42年より新聞記者生活に入り、道内の新聞社を遍歴すること三十数社。大正9年小樽新聞社会部記者に招かれ、後に社会部長となる。14年西出朝風らの口語歌誌「芸術と自

由」に参加。昭和2年自ら「新短歌時代」を創刊したが、6年4月終刊。5年小樽新聞新年読者文芸欄に初めて並木凡平選の口語短歌を登載。6年6月「青空」を創刊、凡平は編集監修者となり、「生活即短歌」の旗印を掲げて小樽新聞をバックに口語歌普及の陣頭に立った。12年11月突然小樽新聞社を追われ生活の資を失い、翌13年よりガラスコップに自作の歌を彫り付け、道内の歌友知己を訪ねて糊口をしのいだ。この年9月朝里に凡平歌碑が建立。14年室蘭の北海道日日新聞社に入社、再び得意の文筆をふるって活躍、同紙は室蘭タイムズと改題。16年編集局次長となり、同年9月小樽市で開催の全道口語歌大会に出席。帰郷もななく左指先受傷から室蘭市立病院で急逝。歌碑は小樽、室蘭、稚内に三基。歌集は「赤土の丘」「落葉焼く山」「廃船のマス」等。遺歌集に「並木凡平全歌集」。

〔人口問題研究〕など。(稲葉吉正)

成田昭男 昭2・10・10 (18)

〔俳句〕空知管内上砂川町生まれ。旧制庁立滝川中学校卒。自営業。昭和29年土岐鍊太郎を知り「アカシヤ」に入会して手ほどきを受ける。途中中断するが、42年復帰。54年同木理集(無鑑査)同人。同年アカシヤ浄鍊賞を受賞する。43年「沖」にも入会。アカシヤ俳句会運営委員。上砂川支部の指導にも当たる。俳人協会会員。(岡澤康司)

成田智世子 昭4・11・22 (18)

〔俳句〕後志管内積丹町生まれ。昭和32年千葉仁に勧められ作句を始めた。「鶴」「さるるん」同人。一時は「アカシヤ」にも出句した。昭和55年さるるん賞、58年「鶴」復刊三〇周年記念の風切賞を受賞した。(園田夢蒼花)

鳴海要吉 明16・7・9 昭34

・12・17 (1883~1939)〔短歌〕青森県生まれ。筆名うらぶる。少年期に藤村の詩文から影響を受け、明治37年処女詩集「乳涙集」刊行。藤村を頼って上京し花袋の学僕となる。帰郷して青森師範学校に学び下北半島へ赴任、口語短歌を試作発表。42年渡道し増毛小学校に勤務、エスぺラント語研究とローマ字教育に専心したのが社会主義者の嫌疑を受ける発端となり、転任先の古丹別で不敬罪により

免職。上京して行分け表記のローマ字詩集「TUTINKAERE」刊行、北海道受難の歌も収めた。大正15年歌誌「新緑」を創刊、詩的発想で短歌形態を生かすを念頭に口語歌の研究と普及に努力。戦時下は弘前へ疎開して児童文学を試み、帰京後に杉並の自宅で没した。歌集「土にかへれ」「やさしい空」、歌論集「歌を作る人へ」、童話集に「芽生をうゑる」「土に立つ子」がある。波乱の生涯は花袋、泡鳴、雨雀、暁、東光の作品に描かれてゐる。(高橋明雄)

南部樹未子 昭5・9・23 (18)

〔小説〕東京生まれ。本名キミ子。都立武蔵野高女卒。戦後東京で電気会社に勤め、また雑誌記者編集の仕事をする。一時根室市、釧路市に住んだが、根室で老人医療施設に勤めていた時代の見聞に材を得た小説「流水の街」(昭34)が婦人公論第二回女流新人賞を受け、作家活動に入る。骨太い男性的な筆致で推理小説を多く書く。著書に「流水の街」(昭35、中央公論社)、「閉ざされた旅」(昭49、毎日新聞社)、「狂った弓」(昭53、光文社)、「北の別れ」(昭54、同)、「失われた眠り」(昭55、同)、「影を逃れて」(昭56、徳間書店)、「乳色の墓標」(昭57、光文社)、「砕かれた女」(昭58、徳間書店)ほかがある。

(鳥居省三)

南部修太郎 明25・10・12 (18)

〔小説〕仙台市生まれ。慶応大学文学科卒。在学中の「修道院の秋」(大5・11、「三田文学」)で文壇にデビュー。渡島当別の男子修道院を舞台にした小説で、大正4、5年に来道したときの感動によってものした。短編集「修道院の秋」(大9・1、新潮社)に収める「秋の牧場にて」は紀行記ふうの短い小説で、札幌の琴似が舞台になっている。(木原直彦)

に

新島善直 明4・7・23 昭18

・2・7 (1871~1943)〔短歌〕東京生まれ。東京大学林学科卒。明治32年から札幌農学校、北大に在職。昭和10年退官後、北星高等女学校長。明治39年頃作歌、大正13年第一次「原始林」に参加。昭和4年「勁草」同人。歌集「書簡に代へて」(大13)や第二歌集「無題」(昭3)も刊行されている。歌は専門の森林調査の出張中に詠まれた風目の自然や旅

行の感懐が多く、いずれも淡泊な味わいがある。(中山周三)

新妻 博 大6・9・30 (19)

〔詩、俳句〕札幌市生まれ。日本大学専門部宗教学科卒。NHK職員として東京在勤中に俳誌「春光」主宰天野雨山に師事して作句をはじめ、札幌に帰り天野宗軒に私淑する。詩は春山行夫のモダニズム、山中散生のシュールレアリスムの影響を受け、西脇順三郎に私淑した。戦後、更科源蔵の「野性」に同人として参加。同誌廃刊後木津川昭夫の「曠野」(東京)、「幻視者」(同)同人となる。その間北海道俳句界の井上左久良、伊藤凍魚、細谷源二、斎藤玄、中村還一、富岡木之介と交わり寄稿した。詩集に「遠い日」(昭38)、「第二の博物館」(昭53)、「らんどろばあ・あんど・驢馬らんど」(昭54)、「俳句エッセー集」(胡座の笛) (昭50)、「句集」(絵理のコムボジヨン) (昭58)、「更科源蔵らとの中国旅行に取材した共著「シルクロード詩集」(昭58)ほかがあり、北海道詩人協会会長を務めた。日本現代詩人会、日本現代俳句協会会員。(佐々木逸郎)

新井田キヨノ 大3・3・28 (1914)

〔詩〕旭川市生まれ。昭和22年頃より詩を発表、池田勝亮主宰「新郷土」を発表の場とし、のち「遍路」「北

門文学「ATOM」に精力的に発表。昭和20年前後の旭川市における数少ない女流詩人の一人として活躍。27年詩誌「フロンティア」創刊同人となり、45年より編集、発行を引き受ける。旭川詩人クラブ会員。(東 延江)

西岡徳蔵 西岡 明37・9・18〜昭43・2・15 (1904〜1968) 「短歌」小樽市生まれ。東洋大学国文科卒。岩見沢で幼年期を過ごし、六歳の頃養父母と共に小樽に転住。大正14年立小樽商業学校教諭、のち緑陵高校教諭。昭和36年定年退職。作歌は大正8年頃、西丘はくあの手紙で「オリブ」に出詠。11年橋田東声に師事、「霸王樹」に入る。第一次「原始林」「野の花」などにも出詠。しばらく作歌中断ののち、昭和4年「霸王樹」に復帰。7年10月「このくれ」を創刊、編集し、通巻一〇〇号(昭16・1)を刊行した。これは「霸王樹」札幌支社の合同によるもの。10年このくれ社より歌集「落葉林」を刊行。21年からは第二次「原始林」に参加、後年選歌を担当。戦後の作品は、「細流」(昭27)、「青踏」(昭33)にまとめられた。ほかに「麦笛」(大12)、「いたどり」(大15)、「迷迭香」(昭2)、「校庭」(昭4)を小歌集にまとめた。「落葉林」以後、10年から21年までの作は「光る風」と命名されている

たが、未刊。「青踏」以後一〇年間の作もまとめられていないのは惜しまれる。その歌は温厚寡黙な人柄そのままの、質実で平明な作が多く、その底にはあたたかい抒情味が溢れている。〈白煙のごとく鮑が卵産む海の底ひは静かなるべし〉(中山周二)

西丘はくあ 西丘 明33・2・11〜昭43・2・13 (1900〜1968) 「短歌」金沢市生まれ。本名伊藤政雄。大正7年来道。13年小樽商業学校卒。山下汽船奔別炭鉱、北海道鉱業新鉱、住友炭鉱歌志内鉱、倉敷鉱業大土森鉱山副長勤務等を経て昭和25年幾春別中学教諭となり、37年退職。その後幾春別で古書店を経営した。作歌は大正6年頃からで、翌7年「創作」入社。9年「霸王樹」に入り、橋田東声に師事する。西岡徳蔵とは同窓。ほかに戸塚新太郎と「新樹」を興し、第一次「原始林」にも名を連ね「葦附」にも関係していた時期がある。第二次「原始林」に参加したのは昭和22年からで、一時選歌を担当した。戦中、戦後は炭鉱関係の勤務の関係から社会詠、生活詠が多く、戦争をうたったものはあまり見られない。幾春別中学に勤めてからは生活も安定して、視野もひろくなり、とくにその晩年は病勢の進行に伴い、静かに自己の運命を諦観して詠まれた作が

多い。没後遺歌集「西丘はくあ歌集」が編まれ、山下秀之助が序を、編纂者相良義重があとがきを記している。〈天の鍵もたねば高き蒼空に心をやりてまぎるる屋は〉(中山周二)

西尾政雄 西尾 明41・12・1〜昭57・8・30 (1908〜1982) 「短歌」徳島県生まれ。その後釧路管内標茶町に移住。昭和40年弟子屈町に移る。昭和22年頃アラギ入社。その後「原始林」入社。標茶町では同人誌「自生林」同人代表。46年弟子屈「青い川」社同人代表となり地方歌人の育成にあたる。「自生林」第一集から第四集までと、「青い川」に積極的に作品を発表した。(渡辺 勇)

西潟弘子 西潟 昭12・2・8〜(69) 「短歌」釧路市生まれ。昭和39年「辛夷」入会。48年第九回中城ふみ子賞を受賞。現在は「短歌人」「北の会」のほか「北海文学」の同人であり、また地元釧路市で、詩型にたずさわる各ジャンルの人々に呼びかけて結成された「空間における作品工房の会」の世話人など、その活躍は多方面にわたっている。50年刊行の第一歌集「燎原」のほか、釧路新聞社刊「釧路高女物語」の著書がある。(大塚陽子)

西勝洋一 西勝 昭17・1・21〜(69) 「短歌」函館市生まれ。北海道教

育大学旭川分校卒。中富良野、鷹栖などの中学校を経て、現在旭川市立豊里中学校教諭。昭和38年「短歌人」入会。42年短歌人賞受賞。39年「かぎろひ」入社。現在同誌専任編集委員兼運営委員。かわら45年現代短歌集団「野馬の会」を結成。同人誌「野馬」を石山宗晏と輪番で編集。道内外の歌誌を舞台に、若手現代派として活躍。「現代短歌北の会」結成に参画。批評活動でも所属誌のほか「北方文芸」「北海道読書新聞」などに時評を連載。総合誌にも「佐々木幸綱論」などを書く。歌集に「未完の葡萄」(昭45)、「コクトーの声」(昭52)。前者は、58年に再版が出、旭川の劇団「河」によって劇化、試演会がもたれた。〈まさびしく冬海見ゆるつらぬいてゆく論理あれまた愛があれ〉(木村 隆)

西川光二郎 西川 明9・4・29〜昭15・10・22 (1876〜1940) 「評論」兵庫県淡路島生まれ。明治27年札幌農学校に入学。東京専門学校に転じ卒業後、新聞雑誌記者となる。幸徳秋水、堺利彦らと日露戦争に反対する平民新聞を発刊。弾圧による廃刊後も「直言」「光」等を続刊。入獄を繰り返す。明治43年出獄後「心懐語」を出版し社会主義運動から離脱する。有島武郎の未完の長編「星座」の西山のモデルとされている。

西川青濤 西川 明38・3・22〜(69) 「短歌」徳島県生まれ。本名仁之進。明治42年両親に伴われて渡道、上川管内美瑛町を経て富良野市に移住。大正11年「潮音」入社。14年国学院大学神職教習科卒。富良野神社に奉仕。以後、富良野神社宮司補命、富良野宗教連盟理事長、神社本庁評議員会常任委員長、神道政治連盟副会長などを歴任、58年神社本庁より神職身分特級を授けられる。北海道神社庁顧問。昭和13年改造社版「新万葉集」に五首登載。14年「潮音」同人に進み、同年「新翠」に参加、幹部同人、選者に推される。21年6月短歌結社「樹水社」を創立主宰に推され、季刊歌誌「樹水」創刊。25年小田観螢歌碑建立委員長となり鳥沼湖畔に碑を建立。39年富良野市郷土研究会長。41年「潮音」幹部同人となり歌集「活火山」上梓。同年北の峰プリンスホテル前庭に西川青濤歌碑建立。51年第一回北海道潮音大会長に推され太田青丘夫妻を迎え富良野市で開催。54年講談社版「昭和万葉集」に三首登載。55年富良野市第一回文化賞受賞。56年第二歌集「雪の輪唱」刊行。同年北海道文学全集に「三首登載。58年「潮音」顧問同人。

西川徹郎 西川 昭22・9・29〜(19青地 繁)

西木正明 西木 昭15・5・25〜(69) 「小説」新潟県生まれ。本名鈴木正昭。早稲田大学中退。本道取材作に「オホーツク御朱印船」(昭55・3)、「野性時代」(「オホーツク謀報船」(昭55・7、角川書店)、「オホーツク特急」(昭57・4、「小説新潮」)、「悪夢の封印」(昭57、角川書店)、「霧が止むまで待て」(昭58、徳間書店)などがあり、「オホーツク謀報船」は第七回日本ノンフィクション賞新人賞を受賞し、55年下半期の直木賞の候補にもなった。

錦 俊坊 大12・5・28〜(69) 「川柳」旭川市生まれ。本名光雄。昭和28年鉄道病院有珠療養所入院中に川柳を始める。34年旭川川柳社同人、56年副主幹、60年主幹。40年国鉄文芸年度賞(川柳)、42年度北海道川柳年度賞受賞。(大野信夫)

(木原直彦)

西倉保太郎 明42・8・8
昭45・4・5 (1909-1970) [詩] 旭川市生まれ。本名品田保。幼少時、兄弟三人西倉家の養子となる。兄実是小熊秀雄が旭川新聞記者時代に鈴木政輝、小池栄寿らと同紙の文芸欄で活躍する。保太郎は、弟進(ペンネーム吉本伸一)と東京から文芸誌「裸」を創刊、第三号から旭川に移る。少年時代から詩歌に親しみ冊子「沈丁花」を出す。昭和4年「野の花」、「頬紅」、9年「静かなる窓」と抒情味溢れる詩集を出し、同年個人誌「投影」を三号まで出す。その後家庭の事情から上京。終戦直後から宮崎丈二、高村光太郎らと親交を深める。昭和34年自家版詩集「遠くはるかな」、42年「ふたたび・遠くはるかな」を刊行。それまで旭川の「情緒」にも時々作品を発表していたが、45年足摺岬の荒波に身を投じた。

(下村保太郎)

西田喜代司 大2・9・1
昭32・10・5 (1913-1957) [小説] 石狩管内厚田村生まれ。本名清美。北海中学より早稲田大学に進む。在学中早稲田系の同人誌「紀元」「世紀」に参加。戦時中札幌疎開。第一次「北方文芸」創刊号(昭16)に「天帝の辞」を発表。戦後第一次「札幌文学」を創刊。自ら編集、発

行人となり昭和25年中に五号を出すほどの精進ぶりであったが、九号まで続いた昭和29年に「札幌文学」より退く。パトロン役の西村真吉の援助があっても経済的に行きづまり、西田は家を売る羽目になる。自らは創刊号に「故園」、八号に「老女抄」を書いたにすぎず、終始裏方に甘んじた。胸を病み一時京都に住むが、のち小樽で療養に専念しながら北海道新聞紙上で道内同人雑誌評を行う。地味な存在ながら北海道の文壇に残した功績は大きい。

(小松 茂)

西谷能雄 大2・9・8
昭33(1908) [出版] 札幌市生まれ。二歳で母の生地佐渡に移る。明治大学卒。未来社社長。著書に「出版とは何か」正・続(日本エディタースクール出版部)のほか、未来社刊で「出版界の虚像と実像」、「出版を考える」など多数ある。

(神谷忠孝)

西田信春 明36・1・12
昭8・2・11 (1903-1933) [政治] 空知管内新十津川町生まれ。札幌一中、一高、東京大学卒。新人会で活動中に中野重治と親交を持つ。九州の日本共産党組織再建にあたっていて検挙、拷問死。中野重治ほか編「西田信春 書簡・追憶」(昭45・土筆社)がある。

(小笠原克)

39年新日本文学会の内部対立で除名され、翌年日本民主主義文学同盟創設、「民主文学」編集長をつとめたが44年脱退、共産党も離党。北海道取材には、戦後の朝鮮人労働者の帰国輸送問題にからめて差別観を改めてゆく人間を描いた「黒い谷間」(昭33・11、「群像」、美唄の炭鉱の中国人捕虜強制労働を扱った「骨のある土地」(昭33・11、「群像」、同主題の長編「根拠」(昭38・11、新日本出版社)、樺戸監獄を舞台に、奥宮健之ら明治の自由民権家を描いた「東方の人」(昭41・5、東風社)などがある。抑制された手堅い、地味だが腰の据わった作風で「歴史の人柱」を描く重要性を担っている。「石狩川紀行」(昭50・11、日本放送出版協会)は本道の本質を鋭く突いており、開拓移民二世の足跡は「昭和民衆史の私」(昭55・56、「北方文芸」)によって明らかである。

「東方の人」長編小説。昭和37年から40年まで「文化評論」に連載。東風社(昭41・5)刊。「明治二十七年十一月三日の午後、囚人の奥宮健之は監房からよびだされた」と物語は始まるが、この奥宮を描くことで樺戸監獄(集治監)の歴史も語られ、本道開拓に苦役した囚人を見据えている。

(小笠原克)

西部 邁 昭14・3・14
1939

(「児童文学研究」福岡県生まれ。宮沢賢治の童話に感動し児童文学の研究を志す。熊本大学の卒業論文で賢治童話を中心とする「児童文学論」を書き、早稲田大学院では「赤い鳥研究」で文学修士。国語学者西田直敏と結婚。二児を育てながら「日本児童文学研究」「現代日本児童文学論」「宮沢賢治論」「明日を考える文学」等を出版。北大国語学講座新設のため着任した夫と共に昭和40年来札。59年国学院女子短大助教から大阪国際児童文学館総括専門員として赴任するまで北海道教育大、藤女子短大等で児童文学を講じる一方、講演、テレビ等を通して児童文学普及に尽くす。「北海道児童文学全集」編集委員。ほかに札幌社会教育委員、道立三岸好太郎美術館協議会委員、HBC番組審議会委員、有島武郎青少年文芸賞審査員。また、カムバックサーモン運動をおこして「さけ科学館」設立に尽くすなど幅広く活躍。

(加藤多二)

西野幸三郎 明43・9・20
(1910-) [俳句] 留萌管内初山別村生まれ。西野辰吉の兄。大正11年に空知管内音江村(現深川市)へ移住。少年期より農業に従事、農協組合長等を務めた。若くして短歌、詩作等に共鳴し「北海詩紙」同人となる。また農民詩誌「泥炭地

」(評論) 渡島管内長万部町生まれ。札幌南高を経て東京大学経済学部卒。北海道新聞の「論壇」担当。著書に「蜚気楼の中へ」(中公文庫)、「経済倫理学序説」(中央公論社)、「大衆への反逆」(文芸春秋)、「生まじめな戯れ」(筑摩書房)、「幻像の保守へ」(文芸春秋)などがある。東大助教。

(神谷忠孝)

西亦一郎 昭10・6・17
(1889-) [詩] 旭川市生まれ。本名賢治。北海道学芸大学(旭川)卒業後、昭和37年頃より「文芸広場」に投稿。作文教育実践を機会に子どもの詩についての交流誌「教育指向」を創刊。「青芽」「明暗」同人、北海道詩人協会員。昭和44年から48年児童詩誌「こたんの子ら」を教員仲間と発行、九号で廃刊。詩集に「あの雲はもうやってこない」(昭53・4、北海詩人社)がある。

(富田正一)

西牟田秀紀 大11・12・19
(1905-) [俳句] 宮崎県生まれ。筑豊鉱山学校卒。三井鉱山田川、芦別両鉱業所に勤務。昭和18年から38年短歌雑誌「ひのくに」に所属、「あらつち」同人。44年芦別鉱業所職場俳句会を経て朝日新聞北海道俳壇で斎藤玄を知り、「丹精」に拠り「壺」復刊に参加、50年同人。56年壺中賞受賞。無鑑査同人に推される。52年定年退職、田川市で謡曲、書道を指

帯「農民軍」等創刊するが言論弾圧で発禁。昭和15年青木郭公の「暁雲」、滝春一の「暖流」により句作に入る。29年土岐謙太郎の「アカシヤ」、翌30年加藤楸郎の「寒雷」へ入会。のち「アカシヤ」「寒雷」同人となる。55年「梓」同人。句作の開始が四〇代と比較的晩学であったが、青年期に詩作で培ったみずみずしい情感を保ち、大地の香りを骨太に詠い上げる作風で、数少ない農民俳人の第一人者。昭和39年アカシヤ賞、42年寒雷暖響賞等を受賞。58年第一句集「石狩」刊行。現代俳句協会員。(土撒きて月明の雪呼び覚す)

(木村敏男)

西野辰吉 大5・2・12
(1895-) [小説] 留萌管内初山別村生まれ。七歳で空知管内音江村(現深川市)に移住。文学好きでのちに左翼運動に入った兄幸三郎の影響を受けた。須麻馬内小学校高等科卒(昭5)後、足尾銅山で雑役夫となる。昭和9年上京。雑多な職業を転々。22年新日本文学会に入り、翌年共産党員。「魔帝トキヒト記」(昭22)で注目され、「米系日人」(昭27)で民主主義文学の担い手の一人となる。革命的視点から現実を追求するリアリズム研究会の主力であった。「秩父困民党」(昭31、講談社)で毎日出版文化賞を受けた(主人公井上伝蔵の北海道潜入決意が棹尾を飾

導、田川壺の会を率いて活動。俳人協会員。

西村綾子 大6・4・5 (16) (短歌) 網走管内端野町生まれ。高等女学校卒業後、昭和9年から22年まで教職、その後の一〇年間、療養生活を送った。昭和31年「原始林」入社、40年に原始林賞と北海道歌人会賞を受賞。特色ある病床詠を含んだ歌集「小さきリズム」(昭51)がある。(村井 宏)

西村一平 明44・12・10 (6) (短歌) 金沢市生まれ。昭和6年与謝野寛、晶子に師事、以来新詩社同人。寛はつねに「古への啄木、今の一平」と社中に語って不遇の中に努力する一平の詩魂を愛した。三五年間、六花書房を経営。現在医院事務長。歌集に「櫛の鈴」「石狩びと」「遙かに青し」「十三夜月」「オケアノス号」「アブシベルまで」「新版櫛の鈴」「長く相おもふ」がある。44年大東出版社刊「石狩にふる星」には与謝野夫妻が一平に与えた二〇〇通に及ぶ書翰から、火花ちる鍛錬の厳しさと心温まる交流が細述されている。永平利夫「孤獨のロマン帰依者西村一平論」も収載。昭和41年一平歌集「櫛の鈴」から、歌の道一筋に生きる若い多感な著者をモデルにしたドラマがHBCテレビから放映された。46年芦別市旭丘公園に歌

碑建立。(六里をばこれより帰る櫛の鈴ふけし部落の星ぞらに鳴る)

西村京太郎 昭5・9・6 (1930) (小説) 東京生まれ。都立電機工業卒。昭和56年度に日本推理作家協会賞を受賞。本道取材作に「殺人者はオロラを見た」「日本殺人ルート」「オホーツク殺人」「札幌着23時25分」「高原鉄道殺人事件」「日本一周『旅号』殺人事件」「ハイビスカス殺人事件」などがある。(木原直彦)

西村寿行 昭5・11・3 (6) (小説) 香川県高松市生まれ。昭和44年「犬鷲」でオール読物新人賞受賞。「化石の荒野」(昭51)、「白骨樹林」(昭52)、「黄金の犬」(昭53)、「捜神鬼」(昭55)、「無頼船」(昭56)、「白く鯨」(昭57)、「オロロン」(昭57)など、知床などの道東やオホーツク海を舞台としたエンターテインメントの北海道取材作が多い。(木原直彦)

西村真吉 明36・11・19 (昭48) (3・7) (1903-1973) (劇作) 札幌市生まれ。小樽高商中退後上京し劇作を志すが家庭の事情で札幌に戻り、洋菓子店を経営。昭和16年「北方文芸」創刊に際し、運営面で助力。自身も二号に「庭」を発表。伊藤整に好意的批評をうける。

戦後、西田喜代司に誘われ「札幌文学」同人となり、同誌に「噂の女」「火花」等を発表する一方スポンサー役として札幌の文化運動に寄与した。(小松 茂)

西村淑子 大14・9・9 (6) (短歌) 樺太生まれ。大泊高女卒後教員養成所修。国民学校勤務中終戦。昭和22年引き揚げてから札幌在住。北大文学部図書室勤務。その後より胸部疾患で入院療養生活に入る。31年復職、文部事務官。その間23年「原始林」入社。32年田辺賞、36年原始林賞受賞。38年合同歌集「原始林十人」参加。繊細な中に陰影に富む歌風は、多く日常坐臥に材を得ながら美しい風物詩を成り立たせている。(鯉島昌子)

西村 信 昭10・10・20 (6) (文化運動) 札幌市生まれ。日本大学芸術学部卒。「札幌文学」同人。北海道文学展にスタッフとして参加以来、文学運動の裏方役として活動。北海道文学館の設立、「北方文芸」の運営等に参画。現在北海道文学館事務局次長。(小松 茂)

西山春宵女 明37・9・1 (昭11・11・25) (1904-1936) (俳句) 旭川市生まれ。本名みす江。俳人西山東溪の妹。大正10年庁立旭川高女卒。12年上京、ミス・ボイドによりキリスト教の

洗礼を受ける。同年藤田旭山の指導により俳句を知る。15年より室積但春に師事。昭和2年「ゆく春」創刊と同時に東溪、旭山と共に投句。12年東溪の手により遺句集「淡雪」が上梓され、但春が序文を寄せた。(後藤軒太郎)

西山東溪 明32・2・13 (8) (俳句) 旭川市生まれ。本名勲。昭和2年「ゆく春」創刊と同時に投句、室積但春の指導を受ける。同年藤田旭山と共に「旭川ゆく春会」を結成。43年旭山の「俳海」創刊と同時に参加、長老として重きをなしてゐる。44年句集「年輪」上梓。52年俳海百号記念文化賞受賞。53年句集「溪音」上梓。旭川信用金庫会長、北海道信用金庫連合会長。(後藤軒太郎)

西脇順三郎 明27・1・20 (昭57・6・5) (1894-1982) (詩、英文学) 新潟県生まれ。大正6年慶応義塾大学卒。英オックスフォード大学に学ぶ。大正15年から昭和37年慶応大教授。大正末から詩作を、同時に批評活動を始める。昭和36年来道し札幌、旭川に遊び長万部経由で帰京。札幌では更科源蔵、伊藤俊夫、新妻博と交流し定山溪に泊まり山中を逍遙する。昭和4年刊行の「超現実主義詩論」(厚生園)をはじめ詩論、詩など多くの著作があり、モダニズムの

始祖。(新妻 博)

新田充穂 大15・4・24 (昭57・11・23) (1903-1983) (俳句) 歌志内市生まれ。岩見沢に育ち、昭和16年国鉄岩見沢機関区勤務。17年より子穂と号してホトトギス句会に出席。41年より高浜年尾に直接師事し、54年より「ひかぶ」を編集、ライラック集の選者。46年「ホトトギス」同人となる。札幌ホトトギス会副会長。俳人協会員。句集「大地」がある。昭和57年従六位勲六等瑞宝章を受ける。(白幡千草)

新田次郎 明45・6・6 (昭55・2・15) (1912-1980) (小説) 長野県生まれ。本名藤原寛人。無線電信講習所卒。中央気象台就職。昭和32年「強力伝」により直木賞受賞。代表作に「八甲田山死の彷徨」など。「最後の叛乱」(昭34・9、角川書店)は寛文9年(一六六九)のシャクシャインの乱を、「昭和西山」(昭46・11、文芸春秋)は昭和西山の生成を、「野付牛の老尼」(昭49・7、「オール読物)は北見の屯田兵人形にちなんで描いたもの。(木原直彦)

新田汀花 明26・10・30 (昭54・5・14) (1883-1979) (俳句) 香川県生まれ。本名茂一。明治39年後志管内真狩村に入植。大正2年頃より一茶に興味を持ち小樽新聞等に投句を始める。4年

地元青蛙吟社、月の輪吟社に入会。7年「高潮」等に入会。9年小学校教員となり白田亜浪「石楠」加盟。10年牛島藤六「時雨」創刊に参加。12年仁木アツプル吟社に参加。翌13年仁木に白田亜浪を迎える。15年青木郭公「暁雲」創刊参加。昭和11年白田亜浪北海道、樺太徘徊に随行、帰路余市で歓迎句会を巨狼らと共に催す。翌12年長谷部虎杖子「葦牙」に客員として参加。20年古田冬草と「緋衣」を創刊し主宰となる。21年第一句集「えぞ不二」刊行。同年羊蹄俳句会を結成し機関誌「羊蹄」刊行。38年第一句碑を真狩に建立(峰巒に暁光りさす閑古鳥)。同年第二句集「摩湯利」刊行。40年真狩村史編纂刊行。俱知安に麗峰吟社結成。40年角川源義「河」参加。43年札幌の堀克己等を軸に漢岩俳句会を結成、俳人協会員となる。45年「河」北海道支部長、50年支社に昇格、支社長となる。48年第二句碑を「葦牙」「漢岩俳句会」の協力で札幌市・平和の滝大平和寺の境内に建立(焦紅葉滝金剛に奔り)。54年「葦牙」麗日集同人。52年11月教育功勞により勲五等双光旭日章をうける。(太田耕吐子)

新田 寛 明27・3・25 (昭32・2・19) (1894-1957) (短歌) 福島県生まれ。大正5年福島師範学校卒業後、

中学校の教諭を歴任、15年樺太大泊女学校教頭。大正8年頃より作歌。歌誌「青垣」「芸林」「樺太短歌」「ポトゾル」等に所属する。昭和7年「七部集猿蓑評釈」、11年「近世名歌三千首新釈」「新註小学校国語読本準拠集成」等を出版。同年短歌研究七月号に「蝦夷山家」五〇首が入選して歌壇の注目を集めると共に大泊町の委嘱で「大泊小唄」「大泊港音頭」を作詞する等円熟期に入る。終戦時樺太落合女学校校長。22年帯広市に引き揚げ後、教材店を開業。26年歌誌「山脈」創刊に参加、ついで「原始林」同人。29年歌誌「鴉族」創刊に尽力した。没後新田寛全歌集「蝦夷山家」(昭39)が上梓された。40年「鴉族」はその偉業を偲び「新田寛賞」を制定。作風は豊かな古典知識によって古語を自在に象徴、駆使すると共に写実を徹し、前衛的あるいは散文的傾向をもつ作品には強い抵抗もつていた。昭和20年勲四等瑞宝章受章。〈焼けただれしら骨さらす山の木々さながら吾れの象ならずや〉(寺師治人)

となり編集を手伝う。昭和20年丸山薫にすすめて山形県岩根沢に疎開させる。同年2月陸軍八戸防衛隊入営中に同郷の詩人逸見貞子を知り交流はじまる。復員後上京して再刊された「四季」の編集に当たったが、生活難などの理由で東大を中退し、丸山薫が教員をしていた岩根沢小代用教員となり、肺結核の末期的症状であった逸見貞子と結婚。貞子は昭和24年3月死亡。この看護中日塔も結核に罹患。高松高校間沢分校教師となり貞子を追悼する「哀歌」を書き続ける。26年高校の同僚工藤昌子と結婚。28年7月更科源蔵の紹介で妻、二女と共に札幌に転居し、回覧雑誌、文房具店を営み詩誌「野性」同人となる。32年4月第一詩集「鶴の舞」と日塔貞子遺稿詩集「私の墓は」を葦微科社から出版。その頃から道立図書館を根拠に郷土史研究にたずさわり「雄武町の歴史」(昭37・10)、「枝幸町史上巻」(昭42・7)、「砂金掘り夜話草」「北辺のゴールドラッシュ」などを刊行。昭和50年代に入ってから肺結核が悪化し入、退院をくりかえし、札幌で没した。詩集に「鶴の舞・鶴の舞以後抄」(昭57・4)、「曠野・日塔聰追悼特集号」(昭和59・9)がある。

・10・30 (1912~1980)「小説」名寄市生まれ。本名二階堂敏夫。庁立旭川中学校卒業後、郵便局勤務。召集されビルマで軍政要員となる。復員後「冬海」に作品発表。長編「追憶のパンケヌカナン」(昭54、東京音楽図書)刊行。

新渡戸稲造 文久2・9・1(昭8・10・16 (1862~1933)「教育、思想」盛岡市生まれ。明治10年札幌農学校第二期生として入学。内村鑑三、宮部金吾らと親交を結ぶと共にキリスト教徒となる。卒業後、東大を経てアメリカ、ドイツに留学、農政学などを研究。24年帰国、札幌農学校教授となり、六年間農政学などを担当。この間、札幌遠友夜学校を創立し恵まれない家庭の子女の教育に尽力した。京大法科教授、第一高等学校長、東大法科教授、東京女子大学校長を歴任。特に一高では学生に深い影響をあたえた。この間、最初の日米交換教授として渡米。大正15年国際連盟事務次長として六年間国際平和に尽くした。昭和6年帰国し貴族院議員に勅選された。青年時代に抱いた「太平洋の橋」になるという志をつらぬいた生涯であった。国際的名著として名高い「武士道」のほか「修養論」などの著書がある。遠友夜学校跡地に記念像がある。

新渡戸流木 昭6・3・6(1931)「俳句」日高管内門別町生まれ。本名常晴。北海道学芸大学函館分校卒。現在静内町立静内中学校長。昭和21年より「石楠」「浜」「万緑」に投句。23年より「寒雷」所属、「緋衣」「氷原帯」同人を経て「にれ」同人。句集は昭和37年「北国」、49年「風雪」、59年「浜薔薇」いずれも自家出版がある。58年第二回にれ風響賞受賞。えりも観光小唄、静内音頭等を作詞。

二取由子 昭23・11・1(1948)「小説」本姓高橋。札幌市生まれ。札幌南高校卒。札幌トヨタ自動車勤務を経て雑誌記者。「眠りの前に」(昭58・6)、「オール読物」でオール読物新人賞受賞。「見慣れた家」「人形と菓子」も新人賞候補作。

庭田竹堂 明36・2・1(1933)「俳句」渡島管内七飯町生まれ。本名竹千代。国鉄勤務。昭和3年ごろから作句。「赤壁」「さいかち」の函館地方支部長。「葦牙」「河」の同人。俳人協会員。句碑「いかつりの父の灯見分け子の立てり」(函館立待岬)がある。

丹羽文雄 明37・11・22(1904)「小説」三重県生まれ。浄土真宗の住職の子。早稲田大学国文科卒。代表作

に「贅肉」「厭がらせの年齢」「青麦」「一路」など。「暁闇」(昭16・8)、「中央公論」は風俗作家の主人公が昭和16年という「暗い谷間」にあって執筆がおもうにまかせず、友人(小説家古宇伸太郎)のすすめで来道し、函館、札幌、小樽と回る。慶心4(一八六八)年の穂足内(小樽)騒動の取材をかねた紀行記ふう短編小説。この旅の所産に最初の書きおろし歴史長編小説「勤王屈出」(昭17・3、大観堂)がある。激動する明治維新下の松前城を背景に、下国東七郎という一個の過渡的人物を描いている。戦後も講演などでたびたび来道し、いくつかの作品をものしている。「欲望の河」(昭36・37、北海道新聞)、「昂の蛭」(昭42・1)、「小説現代」、「晩秋」(昭43、週刊朝日)など。「晩秋」は支笏湖が背景。

大学国文科卒。万朝報記者時代の明治40年9月に釧路まで開通した国鉄根室本線の開通式に参列、同紙に発表した「北遊記」はその折のもの。

布川初朗 明37・3・31(1902)「短歌」札幌市生まれ。本名初太郎。大正11年から昭和36年まで国鉄苗穂工場に勤める。作歌は昭和3年伊藤清治らの「黒土」参加に始まり、続いて吉植庄亮の「橄欖」に加盟していたが、21年5月「原始林」の創刊に伴い、同人として参加。かたわら国鉄の短歌誌「星座」の同人として、また自らも「綱音」を創刊、一〇〇号を以て廃刊した。さらに国鉄短歌大会にも精力的に出席し、32年には国鉄文学賞、55年には札幌社会教育文化賞を受賞した。歌風は清澄で明るく、内向的な静謐さが特徴で、晩年も老いの暗さはない。〈冷蔵庫の鮭の切身にめしを食ふ夜のわが老い何の音もなく〉

沼波瓊音 明10・10・1(昭27・7・19 (1877~1927)「俳句、国文学研究」名古屋生まれ。本名武夫。東京

沼田壽枝女 大7・3・28(1918)「俳句」美唄市生まれ。本名スエ。昭和16年正岡陽炎女に師事、また俳誌「水明」に拠り、長谷川かな女に師事する。54年横道秀川主宰の「雪嶺」創刊に特別同人として参加し、現在同銀河同人として活躍。57年陽炎賞受賞。美唄俳壇真砂会主宰。57年より北海道俳句協

ぬ

会委員。51年美唄文化協会賞、55年美唄文化功労賞を受賞する。(横道秀川)
沼田流人(ぬまたりゅうじん) 明31・6・20(昭39・11・19(1898~1964))「小説」後志管内共和町生まれ。本名明三。大正10年「種蒔く人」創刊号に小説「三人の乞食」を発表。12年京極線敷設のタコ部屋を素材に「血の呻き(叢文閣)」を出版したが発禁となる。同素材で「地獄」(大15・9・「改造」。「北海道文学全集」第6巻収)発表。昭和5年「監獄部屋」(金星堂)を発売したがその後文学からはなれた。戦後は俱知安高校に勤めて書道を教えた。(武井静夫)

ね

根保孝栄(ねぼ けいさ) 昭13・8・30(1938)「若小牧市生まれ。本名石塚邦男。中央大学法学部卒。「声なき羊群」(昭48、北海道新聞日曜版佳作)、「千羽鶴」(ネッソスの肌着」(昭50)51、「クオリティ」、北海道文学賞奨励賞)、「希望への誘惑」(真冬日の道」(昭53、58、同佳作)などがある。(斎藤征義)

の

能條伸樹(のりょうのぶ) 昭5・10・18(1930)「詩」東京生まれ。昭和24年ころから北大生中心の総合誌「れじすて」に詩作品発表。26年詩誌「火山帯」(東京)同人を経て、木内進、竹吉新一郎らのすすめで40年詩誌「情緒」同人となる。46年ころまで北伸一のペンネームで詩作。詩集「薄明に呼ぶ」。所屬詩誌「情緒」「詩の村」。北海道詩人協会、北海道作詩家協会員。(東 延江)

野上弥生子(ののうえのよしこ) 明18・5・6(昭60・3・30(1885~1985))「小説」大分県生まれ。本名ヤエ。英文学者野上豊一郎は夫。明治女学校高等科卒。夏目漱石に師事。代表作に「海神丸」「真知子」「迷路」「秀吉と利休」など。本道取材作「ノッケウシ」(昭9・5、「文芸」)は屯田兵として野付牛(北見)に入植して果てた父の墓参のため母と私が訪ねて来る物語。作者は屯田兵と何の関係もなく、来道した形跡もない。(木原直彦)
野切好美(ののぎり) 昭2・9・16(1932)

野口富士男(ののぐちふじおとこ) 明44・7・4(1911)「小説」東京生まれ。詳細な「徳田秋声伝」(昭40)の完成後、同時代文壇史でもある小説「暗い夜の私」(昭44)など余人の追隨を許さぬ作風を展げる。八木義徳、和田芳恵、船山馨ら交遊が深かった作家への言及も多い。(小笠原克)

野坂幸弘(ののさかゆきひろ) 昭12・9・9(1937)「近代文学研究」小樽市生まれ。北海道大学国文学部大学院修。岩手大学教授。「私小説論再検討の視点―伊藤整の文学論の場合」(昭42、「日本近代文学」7集)、「伊藤整の八芸の理論」(北大「国語国文研究」26号)、「『小説の方法』の構造」(同34号)、「『小説の方法』をめぐって」(同46号)などの論文のほか、著書に「伊藤整の街と村」(雪明り叢書、北書房)がある。(神谷忠孝)

野島千恵子(ののしまちづこ) 大14・6・21(1929)「小説」上川管内美深町生まれ。本名林シゲ子。名寄高校卒。「北方文芸」に創作を発表したのち上京、「日暮れの前」(昭54・10、「婦人公論」)で第二回女流新人賞を受賞。(神谷忠孝)
野田宇太郎(ののたいうたろう) 明42・10・28(昭58・7・20(1909~1983))「詩、評論」福岡県生まれ。詩集「北の部屋」(昭8)、「音楽」(昭10)その他があり、評

論では「木下李太郎研究」。「文学散歩」の語は作者の創案によるもので「野田宇太郎文学散歩」全二八巻を刊行。「日本耽美派の誕生」(昭26)などで明治末期の浪漫主義研究に新生面をひらいた。北海道の文学散歩では石川啄木、吉田一穂などの縁の地を訪ねている。(小松瑛子)

野田高梧(ののたかご) 明26・11・19(昭43・9・23(1893~1968))「劇作」函館市生まれ。早稲田大学英文科卒。雑誌記者、公吏(東京市役所)のち、大正13年松竹浦田撮影所脚本部に入り広津柳浪原作「骨ぬすみ」をシナリオ化してシナリオ作家生活に入る。昭和2年の「懺悔の刃」が小津安二郎の第一回監督作品となり終生交わりがつづいた。主要作品に「愛染かつら」(昭13)、「西住戦車長伝」(昭15)、「晩春」(昭24)、「麦秋」(昭26)、「東京物語」(昭28)、「彼岸花」(昭33)、「秋日和」(昭35)、「小早川家の秋」(昭36)、「秋刀魚の味」(昭37)があり、戦後の作品のほとんどは小津安二郎の監督になる。小市民の生活感情を淡々と描きながら人生の哀歎を洞察したすぐれた作品を残した。昭和11年シナリオライター協会を結成し初代会長をつとめた。著書に「シナリオ方法論」(昭23)、「シナリオ構造論」(昭27)、「小津安二郎と共作

」(「短歌」樺太生まれ。国鉄警別機関区を昭和57年退職。31年「北海道アララギ」、33年「アララギ」に入会。47年室蘭アララギ短歌会の合同歌集「岬の風」に参加。職場詠を基調とし詠嘆に満ちている。(笹原登喜雄)

野口雨情(ののぐちあめ) 明15・5・29(昭20・1・27(1882~1945))「民謡、童謡、詩」茨城県生まれ。本名英吉。東京専門学校中退。中学生時代に「文庫」に俳句を投稿。明治38年創作民謡集「枯草」を刊行。40年3月人見東明、三木露風、相馬御風らと早稲田詩社を結成。同年5月北海道に渡り北鳴新報社(札幌)に入社。9月石川啄木を知り、10月ともに小樽日報社に入社。41年5月北海タイムス社(札幌)、42年6月胆振新報社に転じ、同年末郷里に帰った。民謡集「別後」(大10)、「童謡集「十五夜お月さん」(大10)、「童謡集「青い眼の人形」(大13)、「野口雨情民謡叢書」(昭3)のほかがある。「民謡は土の自然詩」と言い、童謡は「童心より流れて童心にうったう自然詩」との主張で民謡、童謡に新しい価値観を与えて広く愛唱された。昭和15年7月と8月に北海道を旅して余市に立ち寄った。同町茂入山の雨情詩碑はその折の詩を刻んで昭和43年7月に建立された。(佐々木逸郎)

のシナリオ集がある。(佐々木逸郎)
野田寿雄(ののたけお) 大2・2・23(1913)「国文学研究」大阪生まれ。東京大学国文学科卒。昭和24年から51年まで北大文学部に勤務。昭和30年北海道文学者懇談会の設立に尽くした。評論に「北海道の文学」などがある。定年退職後青山学院大学教授。「近世小説史論考」(昭36、塙書房)、「近世文学の背景」(昭39、同)、「近世初期小説論」(昭53、笠間書院)。(神谷忠孝)

野田牧聖(ののたけいさ) 明43・8・29(1910)「短歌」大阪生まれ。本名四郎。明治44年家族と共に渡道、士別に入植。教員検定試験を経て網走で教員。滝川に転住してから公民館長、社会教育主事などを歴任した。昭和24年「あさひね」、31年「ぬはり」、39年「原始林」に入会。歌文集に「空と雲と」(昭46)がある。滝川短歌会を結成、後進の指導に当たるほか「滝川文学」や郷土研究誌などの編集を通じて地域文化の振興に努める。(村井宏)

野中賢三(ののなかけんざ) 明20・大5・4・18(1887~1919)「小説」釧路市生まれ。明治36年函館商業学校を中退して上京、博文館に勤めながら小説を書き、40年「文章世界」に投書、釧路の米町を描いた「朝」が田山花袋の賞賛するところ

となり、間もなく「文章世界」の常連となった。その後「ナザレの行者」「野火」などの佳作を発表、文壇の一部に認められるようになったが、実家の営業不振で帰郷(明42)。はじめは釧路で回覧雑誌を出し、加藤棹声(加藤卓爾)らと「ザクロ会短歌研究会」を開いて作品の批評などをしていったが、大正2年並木凡平(浅利豊次郎)、吉野白村、加藤棹声らとともに同人雑誌「凍野」を創刊した。賢三はこの雑誌に評論「芸術に対する野心」、戯曲「旅路の果て」ほか小品を書き、釧路新聞に「カンラン山の夜」「如何にして生くべきや」「太陽の子のあこがれ」「チェホフ『初憎まれ』(翻訳)」などを発表した。大正3年ころからは肺患で療養生活を送っていた。

(鳥居省三)

野長瀬正夫 明39・2・3(昭59・4・22 (1906~1984))〔児童文学、詩〕奈良県十津川村生まれ。旧制中学校卒。詩誌「日本未来派」壺同人。詩集に「晩年叙情」(昭46、金の星社)、「小さなぼくの家」(昭51、講談社)、「小さな愛のうた」(昭55、金の星社)等がある。「小さなぼくの家」で第一回野間児童文学賞、第六回赤い鳥文学賞受賞。日本現代詩人会、日本児童文学賞協会員。昭和56年7月に野長瀬の詩碑の

除幕式で新十津川を訪ねた。

(小松英子)

野原水嶺 明33・11・23(昭58・10・21 (1900~1983))〔短歌〕岐阜県生まれ。本名輝一。大正3年桐橋私塾卒業後、父とともに十勝管内芽室町久山に入植。大正11年上帯広小学校代用教員となり、上川管内の小学校を経て帯広市柏小学校に移り、古舞小学校校長を最後に34年退職。大正15年金山で「潮音」に入社。昭和4年千葉一也、菅野郊路(要)らと「潮音」帯広歌会を開き歌誌「辛夷」の母体を作った。5年小田観螢の「新壜」創刊に参画、維持社友、選者となった。21年渡辺洪、成田茂らと「辛夷」を創刊、代表となる。25年大森卓、山下祥介、舟橋精盛、土蔵培人らと「山脈」を創刊、運営と指導に当たる。29年洪、塚越博一らと「辛夷」を復刊、代表となる。30年「新壜」退会後は「潮音」と「辛夷」に拠り、特に「辛夷」を通じて後進の育成に没頭、中城ふみ子、大塚陽子、時田則雄ら多くの新人を全国歌壇へと送り出した。戦前、戦中は十勝毎日新聞歌壇選者、戦後は十勝文化協会を興して主事となり、郷土の文化発展に尽力、48年帯広市文化賞を受けた。歌集には「花序」「本籍地」「幾山河」「常緑樹」「野原水嶺全歌集」、歌書に「散石集」

主な作品は「雪ぞら」「水の精」「夕焼の色」(札幌文学)など。(小松 茂)
野見山朱鳥 大6・4・30(昭45・2・26 (1917~1970))〔俳句〕福岡県生まれ。本名正男。旧制鞍手中学校卒。青年期より肺を病み、長い療養生活を送る。昭和20年より「ホトギス」に拠り句作。新鮮な作風で俳壇の注目を浴びる。27年「菜穀火」創刊主宰。道内に伊藤彰雪らの同人を擁し、45年網走まで足を延ばした。句集に「曼珠沙華」「天馬」「刑冠」「運命」「野見山朱鳥全句集」などがある。(木村敏男)

野村 武 昭5・10・26(1980)〔詩、書〕士別市生まれ。北海道教育大学札幌分校卒。詩誌「律動」創刊。「先列」「火山帯」「詩の村」などを経て「核」同人。詩風は実存感覚的で社会事象を通して生の根源的意味を問うことを主題としている。昭和45年詩集「内と外の間で」を刊行。赤平市文化奨励賞(昭44)、北海道書道展準大賞(昭47)を受賞。北海道書道展などの審査員を歴任。号は墨水。(永井 浩)

野村良雄 昭6・2・20(1981)〔詩〕函館市生まれ。昭和26年北海道第二師範学校卒。32年「北海道詩集」の作品応募を機に詩作を始める。34年「だいある」同人となり、同誌終刊後の

41年、「バターの馬」に加わり、49年廃刊まで所属する。この間「詩の村」「木星」両誌の同人となる。詩集に「沼がある」(昭43)、「帰途」(昭53)など三冊。北海道詩人協会員。(山本 丞)
野呂栄太郎 明33・4・30(昭9・2・19 (1900~1934))〔政治、経済学〕空知管内長沼町生まれ。北海道中学を経て慶応義塾大学卒。産業労働調査所員となり、日本共産党入党後は指導部の中枢として活躍。昭和8年11月検査され死に至らしめられた。「日本資本主義発達史講座」の企画、編集に従い、講座派理論を領導。島本健作に「野呂栄太郎氏」(昭14)があり、作中人物にも影を落としている。(小笠原克)

は

榎窓布席 宝暦10(天保11・6・12 (1780~1840))〔俳句〕福島県生まれ。本名吉田清兵衛。寛政2(一七九九)

○)年福山(現松前)へ渡来。北海道俳壇の黎明期を築いた松窓乙二とは、渡道以前師弟の絆を結んでいた。箱館(函

「第二散石集」「第三散石集」があるほか、「辛夷」幹部によって編まれた「歌人・野原水嶺」がある。狩勝峠頂上、音更町鈴蘭公園、野原家の庭内、帯広市上帯広に歌碑がある。

〔野原水嶺全歌集〕 歌集。昭和59年6月刊。「花序」「本籍地」「幾山河」「常緑樹」の全作品に、その後の作品二三五首を「道」として加え、全歌数は約三〇〇首。山名康郎が解題と年譜を書いている。(朱の落暉野火あとの空そのままに煙れり十勝はばくばくとして) (渡辺 洪)

野間 宏 大4・2・23(昭19)〔小説〕神戸市生まれ。京都大学仏文科卒。サンボリスムから文学に入り、在家仏教開祖の子として仏教へ、また学生運動、部落解放運動にかわりながらマルクス主義へと人間存立の根源を追究。「暗い絵」で戦後文学の最尖端に立つ。「真空地帯」「わが塔はそこに立つ」「さいころの空」「青年の環」など巨大な作品多数。「北方文芸賞」選者としての来道、講演もある。(小笠原克)

野間美英 大7・3・20(昭18)〔小説〕札幌市生まれ。本名柴原美江。庁立札幌高女卒。在満州時代「蒙疆文学」に作品を発表。帰国後「札幌文学」同人。西田喜代司の指導を受ける。

館)、江差などで俳諧の普及に努め、のち乙二を郷里から招いて道内一帯に数百人の社中をもつ斧柄社を創る基礎となった。以後乙二を第一世とし、布席は第二世を継承して蕉風を広めた。(木村敏男)

芳賀順子 昭17・7・18(1928)〔短歌〕宮城県生まれ。昭和46年ころ、野原水嶺にすすめられ「辛夷」入会。中城ふみ子賞佳作入選などを経て、59年第二七回北海道歌人会賞を受賞した。素直な抒情性が好ましい女流である。十勝管内音更町在住。(大塚陽子)
博田草樹 大元・12・1(1962)〔短歌〕稚内市生まれ。本名豪。戦前に並木凡平の「青空」に入社したが、戦時中に退社。昭和21年「新壜」に入社し、27年に退社。その間砂川市の職場歌誌「東庄短歌」の育成につとめたが一〇年程で終刊。現在「新凍土」同人。砂川短歌会の「象形」編集人として活躍中。生活実感を主軸とした繊細な感覚と飾り気のない詠風が魅力的である。

芳賀 綏 昭3・3・17(1928)〔国語学〕熊本市生まれ。北海道大学予科を経て昭和28年東京大学国文科卒。藤女子大学、東京工大などを歴任。「日本文法教室」「古典文法教室」「自己

表現術」など著書多数。NHKほかで日本語の問題や時事問題などの解説も手がける。

萩中美枝 昭2・8・7 (小笠原克) (アイヌ文学研究) 日高管内様似町生まれ。言語学者である北大教授知里真志保(昭36没)の最後の妻。金田一京助、久保寺逸彦、山田秀三、菅野茂らと親交あり。アイヌ語の表記はローマ字による方法が主流を占めているのに対して、独特のカタカナ表記法を提出。主著に「ユーカラへの招待」がある。

萩山深良 昭14・3・22 (木原直彦) (小説) 上川管内中富良野町生まれ。北海道大学文学部哲学科大学院修。同助手を経て43年旭川大学へ。現在同大教授。北大時代から小説に手をそめる。「愚神群」同人となり「樽死」「ヤスの休日」などを発表している。ハイデッガーの研究者。(高野斗志美)

萩原晴代 昭8・4・15 (木原直彦) (短歌) 空知管内雨竜町生まれ。本名中谷文子。深川女学校病氣中退。昭和16年結婚したが夫が三日目に応召、ソ連で戦病死。現在士別市の医院に勤務。29年「あさひね」、31年「北方短歌」創刊より参加。35年第一回酒井先生賞受賞。評論「心に響く作品との邂逅」は仏

教との関連性が高い。(歌はねば闇にのまるるシベリアに惨死を遂げし夫のためしひ)

萩原 貢 昭8・1・17 (江口源四郎) (詩) 小樽市生まれ。小樽緑陵高校卒。昭和32年米谷祐司と詩誌「城」(後に「文芸律」と改題)の創刊に参加。一方「野性」に参加し、34年「核」創刊、38年「小樽詩話会」設立に参加し、以来中心的存在として後進の指導と作品活動を続けている。詩集は主題により集成された本格的な詩集と気楽な小詩集があり、前者に「悪い夏」(昭44、第3回小熊秀雄賞受賞)、「ドアの断崖」(昭53)、「満月、輪の川その他」(昭58)があり、後者に「霧のブルース」(昭42)をはじめ「雪の路」「贖の追憶」「ゆめのかたみ」「微笑」「魔術」「花」などがある。ほかに共著詩集「カモメの手紙」「馬車の出発の歌」がある。詩風は感性の鋭敏と想像力の豊かさによって、表現すべき対象の意味を深く美しく比喻表現する技法の冴えに特色がある。日本現代詩人会員。北海道詩人協会員。

萩原葉子 昭9・9・4 (永井浩) (小説) 東京生まれ。萩原朔太郎の長女。「父・萩原朔太郎」(昭34)、「天上の花―三好達治抄」(昭41)で注目される。 (原子修)

橋場恒雄 昭4・10・18 (小笠原克) (詩) 函館市生まれ。昭和30年小野連司らの詩誌「だいたいある」同人となつて函館を中心に活発な詩活動を展開したが、31年十勝に転住し、以来十勝の風土におおのれ詩精神の放電をほかっている。中学校教師を勤めるかたわら、42年詩誌「裸族」(帯広)、48年「木星」(札幌)、50年「舟」(東京)、59年「不羈」(帯広) 同人として詩作を発表。46年には詩集「日方川」(裸族詩社)、49年「鎮魂歌」(黄土社)を刊行し、詩作一筋の道を歩む。早くから柳田国男らに触発された民俗学的視座に文明批評の軸を交差

させたゆるがぬボエジーを、独特な重層比喻の表現に焚いてきた独創的な書き手で、負の世界をねばっこく逆照射することによって、生の意味をあぶりだしている。 (武井静夫)

橋本佳代女 昭38・9・3 (武井静夫) (俳句) 札幌市生まれ。本名フミ。旧制札幌高女卒。昭和27年「ゆく春」に拠る。45年「北の雲」創刊に当たり入会まもなく同人。56年句集「潦」刊行、終戦時満州にいた懐旧の思いが旅吟に佳品をもたらしている。(島 恒人)

橋本徳寿 昭27・9・10 (18歳) (短歌) 横浜生まれ。工学院造船科卒。農商務省水産講習所を経て大日

れた。子供の特別れた母の再婚先札幌を訪ねる「女客」(昭37)がある(「北海道文学全集」第19巻収)。(小笠原克)

橋浦泰雄 昭21・11・30 (小笠原克) (民俗学、絵画) 11・21 (1888-1960) (民俗学、絵画) 鳥取県生まれ。小谷義雄の兄。高小卒。日本プロレタリア文芸連盟の美術部長、同美術家連盟とナップの中央委員長。大正14年ごろから日本原始共同体の研究に入り柳田国男に師事。昭和10年民間伝承の会(後に日本民俗学会)の創立に参加、戦後名誉会員。著書は「五島民族図誌」「月ごとの祭り」「五塵録」等。画家として札幌で五回個展開催。(小谷博貞)

橋崎 政 昭14・8・8 (小谷博貞) (小説) 北見市生まれ。宇都宮高等農林学校卒。戦後道庁勤務から北海道新聞記者となり、同人誌「私たち」「札幌文学」「凍原」、職場誌「赤煉瓦」、会員誌「札幌ペン」などにおびただしい創作を発表した。その結晶が「橋崎政創作選集」(北海道新聞社)である。25年の「さいかく見習」(「札幌文学」2号)で早くもその標榜する道化文学を確立、北方新戯作派の旗手となった。人工授精問題を扱った「プラス・エックス」(「凍原」13号)は発想に疑問があるとして「文学界」同人雑誌評で久保

本水産会技師。大正6年土岐哀果に師事し作歌を始める。14年古泉千樞に師事。歌誌「青垣」の創刊に参加し昭和2年編集発行人となる。大正7年第一歌集「船大工」を刊行。多くの歌集、歌論がある。大正時代より木造船技師として根室を中心にたびたび来道し、歌人の育成にも力を入れた。東京在住。(笹原登喜雄)

橋本 稔 昭4・5・11 (笹原登喜雄) (評論) 岩見沢市生まれ。東京外国語大学、法政大学日本文学科卒。法政大学講師を経て現在フリーの評論家として活躍。著書に「谷崎潤一郎―そのマゾヒズム」(昭49、八木書店)、「小林秀雄批判」(昭55、冬樹社)がある。

橋本雄一 昭7・8・21 (神谷忠孝) (詩) 函館市生まれ。小樽中学を経て昭和31年北海道大学文学部卒。39年北大大学院修士課程修(英米文学専攻)。函館高専教授を経て昭和43年以降北海学園大学教養部教授(イギリス現代詩)。北大在学中から同人詩誌活動を始め「帆」「新器官」「時間」「眼」同人を経て昭和32年から「木星」同人。文明批評の効いた透徹した作品を発表している。(坂井一郎)

(1915-)「短歌」秋田県生まれ。函館師範学校第二部卒。元小学校長。一八歳のころ「歌学思想変遷一考察」三〇枚を書く。師範時代より白山友正に師事し、自由律と定型を学ぶ。電信隊に応召、七年間南方作戦に従軍し昭和21年帰還、教壇に復帰する。美瑛と穂別でそれぞれ短歌会創設。退職後室蘭文芸協会に入会。随筆で第一一回室蘭文芸奨励賞受賞。「短歌紀元」維持同人。著書に戦場歌集「いのち」、秋田ことば民俗誌「どさ／ゆさ」がある。(萬上義次)

長谷川海太郎 (かいたろう) 明33・1・16、昭10・6・29 (1900-1935)「小説、翻訳」新潟県(佐渡)生まれ。筆名谷譲次、林不忘、牧逸馬。父長谷川淑夫(函館新聞主筆)、母ユキの長男。下に隣二郎(画家)、澹(ロシア文学者)、四郎(作家)がいる。二歳の時一家が函館に移住。弥生小から函館中学に進んだがストライキ事件で五年時に退学。上京して明治大学専門部卒。大正9年渡米、オペリン大学に学んだがすぐ退学、以後四年間各種の職業を転々としてアメリカ各地を放浪した。大正13年帰国、「探偵文芸」に翻訳物を書き、一方森下雨村の「新青年」に谷譲次の名で「めりけんじやっぶ」物を発表。作家生活に入った。昭和2年林不忘の名で東京日日新聞に「新版

の地位を占めている。(安東璋二)
長谷川慎吾 (しんご) 明38・10・12、(1905-)「短歌」函館市生まれ。札幌通信生養成所卒。札幌郵便局勤務。昭和11年渡満、21年帰還。札幌通信局再就職。札幌、渡島当別、倶知安に勤務、退職後勝浦市に居住。「アララギ」には大正14年入会。中村憲吉、土屋文明に師事。在満中は一時作歌を中断したが、帰還後再び「アララギ」、さらに「羊蹄」「あかだも」を経て「北海道アララギ」会員。後輩の指導に当たると共に、北海道歌人会の委員も務めた。歌集に、半世紀に近い所産を収めた「雪山」(昭47、柏葉書院)がある。山スキーを愛好したため山を詠んだ歌の多い事も特色だが、自然及び人情を写したのも、あるいは日常生活の哀歓を綴って独自の人間性を漂わせたものに優れた作品が多い。(幸ひを人には得よと言告げて朝明けの山に吾は真向ふ)(小国孝徳)

長谷川水敏 (みづみ) 明43・10・2、(1910-)「俳句」新潟県生まれ。本名精。旧制新津商業学校卒。銀行、会社員等を経て国家公務員、保護司等を務めた。昭和17年頃から俳句に親しみ、翌18年より「雲母」の飯田蛇笏を終生の師とし、蛇笏没後は飯田竜太に師事。以来戦時の休刊中と戦後の外地抑留期間を除

き、現在まで「雲母」無欠詠。その間、角川源義の「河」、石原八束の「秋」、伊藤凍魚の「氷下魚」、長谷部虎杖子の「葦牙」等五誌に拠り、同人となる。また戦前の樺太で互選三句集「寒流」を創刊。ソ連軍政下となった戦後も「きらら」「海豹」をひそかに創刊主宰した。23年引き揚げ後、蛇笏来道を機に「雲母札幌支社」を創設、職場文芸誌「北光」の心灯集選者等を経て現在勝又木風雨の「北の雲」、木村敏男の「にれ」同人。「雲母」「かつらぎ」「にれ」等に巻頭作品が多い。道内句碑資料調査の権威でもある。(木村敏男)
長谷川昌子 (まさこ) 昭6・8・27、(1931-)「俳句」札幌市生まれ。昭和23年札幌静修高校卒。同年北海道開発局土木試験所勤務。俳句は27年「水明」に所属、49年水明同人となる。25年職場句会「堤影」創設に参加し、以後横道秀川に師事する。54年横道秀川主宰の「雪嶺」創刊に参加し、同運営常任委員となり現在同銀河同人。銀杏賞、陽炎賞を受賞。現代俳句協会会員。(横道秀川)
長谷川正治 (まさぢ) 大2・1・27、(1913-)「短歌、書道」室蘭市生まれ。昭和9年小樽高商卒。栗林商会入社。11年「橄欖」同人塚田光男と「栗の花」短歌会結成。同年「橄欖」入社。14年日鉄

に学び大正3年卒業。7年渡道、函館豊川病院に勤める。12年サクラ薬局を設立。昭和4年に川柳に手を染め五十有余年、函館川柳社の顧問として物心両面より支援。(成り振りをかまわず動く父の汗)(鈴木書柳)
長谷川四郎 (しやう) 明42・6・7、(1909-)「小説」函館市生まれ。父長谷川淑夫(函館新聞主筆)、母ユキの四男。長兄海太郎(牧逸馬、林不忘、谷譲次)に、二兄三兄も画家や文学者。弥生小、函館中学から立教大学を経て法政大学独文科卒。昭和11年満鉄入社、調査部時代に「デルスウ・ウザラ」を翻訳。19年召集。20年8月ソ満国境でソ連軍の捕虜となる。以後25年までシベリア各地の収容所を転じ各種の強制労働に従事。復員後G・デアメル「パスキエ家の記録」(昭25・27、みすず書房)を翻訳。また「近代文学」に「馬の微笑」などシベリア体験による諸作品を発表し、27年「シベリア物語」(筑摩書房)として刊行。さらに「張徳義」(昭27、「近代文学」)、「鶴」(昭29、同)、「無名氏の手記」(同、みすず書房)などを相次いで発表。その後の小説に翻訳、詩、エッセー等を含め51年より「長谷川四郎全集」全一六巻が晶文社から刊行された。清潔な感性と簡潔自在な語り口の魅力で独歩

俳句欄選者を経て大正10年俳誌「枯野」創刊。11年から14年までに五回来道。ほとんど全道に足跡を残し、たちまち北海道に「枯野」全盛時代をつくる。句集「雑草」その他著書多数。美唄空知神社境内に長谷川かな女との夫婦句碑がある。(雪を見れば蝦夷ものたらず秋の蝶)

(横道秀川)

長谷部虎杖子 (はせべこじ) 明20・10・18
昭和47・12・26 (1887-1972) 〔俳句〕宮城県生まれ。本名栄二郎、旧姓尾形。明治36年頃より俳句の道に入る。明治23年父と共に伊達に移住。帝國製麻会社に就職。大正10年牛島藤六が本道俳句界の改革を呼び「時雨」を創刊するや参画。昭和9年札幌神社頓宮社掌のかたわら12年の廃刊まで「時雨」の発行、編集を担当。12年6月誌名を「葦牙」と改め藤六の主張を踏襲し編集同人の藤森水魚、大島扶老竹、斎藤幽坡、日坂あきら、高野草雨ら六人の共同体として発足したが、16年主宰を虎杖子とし、水魚は「初学雜詠」、草雨は「北方季題」の分担に改めた。長年北海道俳句協会常任委員を務める。昭和39年北海道文化奨励賞を受賞。句集は昭和29年の「木槿」があるが、51年遺句集「虎杖子句集」を上梓した。全道に六基の句碑がある。へうぐいすの溪園すでに日は高し)

人。

(神谷忠孝)

畑沢草羽 (はたせくさう) 大2・7・9 (1913) 〔短歌〕後志管内岩内町生まれ。本名吉光。元筆名くまがい・茨。産業組合書記、国際運輸職員、北炭夕張鉱、松下電器等に勤務。定年退職後は北海道繊維。昭和7年より文芸活動に入る。歌誌「防風林」「山脈」を経て清水信の「作歌」、川崎むつをの「短歌精神」等に参加。10年代まで口語歌壇で活躍したが、戦時のため中断。一時期俳句にも手を染める。44年より口語歌誌「藻岩嶺」に参加。一年後横井みつると編集交代、同誌二二号より誌名を「北土」と改題、現在同誌主宰。北海道歌人委員会。現代語短歌に賭ける情熱は並々ならぬものがあり、口語歌壇の一分野を担って縦横の活躍をしている。昭和9年板倉貞吾との合同歌集「漁火」発刊。へこまで歩いてきてまだ生きていく仕事が残っていた終焉の場か)

(吉田秋陽)

畑中康雄 (はたなか) 昭3・6・27 (1938) 〔小説〕樺太生まれ。小学校高等科卒業後に選炭工となり、敗戦後は宮城県で農民生活。25年に来道して土工、翌年から三井芦別炭鉱の坑内夫となる。この頃から小説を書きはじめ「新日本文学」「炭道文学」等に発表。37年に上京し、小説、ルポ、評論を各誌に。46年か

〔虎杖子句集〕に句集。長谷部虎杖子没後四年を経た昭和51年12月葦牙叢書第一四集として葦牙発行所から刊行。生前の「木槿」に次ぐ第二句集で昭和29年から47年までの七六九句を収めている。晩年いよいよ自在の境地に達した著者の軽妙な人事件、挨拶句は、この句集の特色の一つ。「葦牙刊行五百号記念大会に憶ふ」と前書のある(新涼や世にも小さき我が影よ)は、辞世の趣の濃い没年の作である。(太田耕叶)

支部沈黙 (はせべこじ) 明25・3・21 昭44
・3・21 (1893-1969) 〔詩、隨筆〕宮城県生まれ。本名貞助。明治43年札幌師範学校入学生後中退。夕張、空知沼南、厚田の各小学校に勤務。大正9年札幌の文芸雑誌「路上」創刊に参画、11年には詩と短歌の誌「アカシヤ」創刊に参加、三木露風を招いて時計台で文芸講演会を開いた。12年渡島当別のトラビスト修道院に三木露風が講師として赴任し、その手引きによって上磯の茂辺地小学校へ転任する。露風に代わり中央から刊行されていた少年雑誌の詩の選者になったことは戦後まで秘められていた。14年旭川大成小学校に転任、同市の綴方研究部に活気を与えた功績は大きく、各種の文集刊行を成功させた。個人詩、童謡の世界が独特の発展を示したのもこの時代前後で、

ら個人誌「年刊労働者」を発行し、八号より北海道の炭鉱を舞台にした長編「炭鉱労働者」を連載中。小説集「炭鉱」(昭51・8、土曜美術社)も本道の炭鉱を見据えている。(木原直彦)

(木原直彦)

畑野信太郎 (はたののぶ) 大14・12・20 (1905) 〔詩〕釧路管内標茶町生まれ。本名中畑信夫。昭和22年北海道青年師範学校卒。釧路市及び釧路管内の教職を歴任。国語教育を通して生徒、児童の詩の指導を三十余年継続する。「希望の町」「緋鮒」「虹の橋」「芝生」「太陽の手」「防風林」などの作品集は高い評価を受ける。詩誌「かばりあ」同人。「古城」「かばりあ」12号)にみられる意識的に情感を抑えた映画的手法を詩の構成に用いた作品が多い。一方「喪服の紋」(同17号)、連作「MOUの世界」「影絵考」「炎の前で眠っている犬」「チャンネル零」、詩劇「拳銃の季節」の長編詩がある。個人特集として、「水点の軌道」(同41号)、「原野の花錠」(同71号)を出す。創作「独楽」(同7号)、「土偶の黄昏」(同6号)を発表。昭和23年「ピルマの竖琴」を脚色、演出しNHK釧路局より放送。ほかに「駒踊り」等数作あり。

(堤 寛治)

波多野勝 (はたの) 明40・8・1 昭57
・8・29 (1907-1982) 〔短歌〕上川管

昭和3年童謡集「蟻のお城」、5年詩集「路草」、8年子ども文集「ひまわり」、10年詩文集「空と山の線」を刊行した。11年1月旭川で口火を切った第一次の北海道詩人協会の設立に参加。14年教育界を一旦去ることになり、記念に子ども文集「第二ひまわり」を刊行。蒙古に出国した。終戦後江別市に引き揚げ、「丘の時計台」四巻のほか、「丘のひまわり」を刊行。江別市開基九〇周年記念江別讃歌「いま太陽がのぼる」の作詞が最後の大作である。(入江好之)

畑喜多坊 (はたき) 明29・8・28 昭29
・7・20 (1896-1954) 〔川柳〕函館市生まれ。本名清松。大正初期より没年まで小樽の「番茶」、函館の「忍路」「かむい」「漁火」「潮」等数多くの川柳誌の編集者であり、川柳人の育成にも尽くした陰の功労者。作品は孤高にして繊細な句風が高く評価された。畑多聞子と親子二代の川柳家としても知られている。(越郷黙朗)

(越郷黙朗)

島山英治郎 (はまの) 昭23・6・10 (1908) 〔小説〕大分県生まれ。滝川高校卒。江別市青年センター勤務。昭和43年から翌年にかけて世界を一周。「泊り宿」(「江別文学」25号)と「浮游」(同27号)が「北海道新鋭小説集」の八、九集に再録された。「江別文学」同人。内劍淵町生まれ。昭和3年日本大学文学部在学中に「潮音」に入社、自らを根っからの潮音人と呼称。「新壘」初代編集長岡本高樹と中学時代文芸誌を発行していたよしみで17年「新壘」に入社、没年まで運営委員。生来のロマンチストで自在な発想から歌の題材も広い。一首の作品から漂う余韻や滲み出す意味性に重みがある。51年歌集「潮」を出版。歌作のほか長編小説一編、中編小説四編、童話選集一冊があり、その他歌曲詞、旭川小唄など町村小唄、音頭、校歌の作詞など多才な活躍をした。教職生活三八年、また長年にわたって札幌矯正管区旭川地区篤志面接委員を務めた。(永平利夫)

(永平利夫)

羽田野幸子 (はたの) 大3・9・17 (1914) 〔詩〕樺太大泊町生まれ。昭和22年岩見沢に引き揚げ、同市の文芸誌「草原」に投稿、「詩人種」の同人、その後「苗」「木星」に参加する。47年から58年まで「北海詩人」に参加。48年から50年まで二人誌「瞬間の眼」を八号まで出す。詩集「死の情念」(昭32)、「陰暦の章」(昭42、北書房)、「致死量」(昭53、北海詩人社)。(小松瑛子)

(小松瑛子)

畑 正憲 (はた) 昭10・4・17 (1939) 〔動物文学、隨筆〕福岡市生まれ。東京大学理学部、同大学院修了後、学習

研究社映画局で動物記録映画をつくる。昭和46年釧路管内浜中町の無人島、嶮暮婦に一家とともに移住。「ムツゴロウの無人島記」(昭46・4・47・4)、「毎日グラフ」はその体験記。「どんべえ物語」(昭47、朝日新聞社)はそこでのヒゲマ物語。47年4月対岸の浜中町に一〇〇万坪の土地を借りムツゴロウ動物王国を建国。「ムツゴロウの動物王国」や「ムツゴロウの純情詩集」などに、それら動物たちとの心温まる交流をつづる。さらに北の原野に生きる人々のドキュメント「根釧原野」(昭53、朝日新聞社)のほか、本道を舞台にした小説「純潔夫婦」(昭54、光文社)なども書く。54年には根室管内中標津町に移って「ムツ牧場」を経営。「われら動物みな兄弟」(昭42、協同企画出版部)で日本エッセイスト・クラブ賞、52年菊池寛賞受賞。

(日高昭二)

秦保二郎 〔詩〕函館市生まれ。本名萩原正二郎。昭和6年海老名礼太らの「北方の詩」編集同人。昭和7年に小樽市に転居。11年東郷克郎らの「整態派」同人となり本道モダンリズム詩のバイオニアとして活躍。15年には春山行夫らの「新領土」の同人となった。昭和58年「情緒」に参加。代表作「象牙の鼻」は昭和17年

鈴木政輝、東郷克郎編集「北海道詩人集」に収録。(河邨文二郎)

畑山博 〔小説〕東京生まれ。日大一高を卒業し、47年に芥川賞を受賞。社会の弱者や差別される人々を描くが、北海道を書き続けている作家でもあり、著書に「オーロラの街へ」(昭52、毎日新聞社)、「可愛い女」(昭58、講談社)があるほか「流水の前」「ビヤシリの神話」などの取材作を持つ。(木原直彦)

八条志馬 〔小説〕宗谷管内東利尻町生まれ。本名工藤猛。空知管内栗山町で看板業を営むかたわら小説を書く。大正13年雑誌「現在」に応募一位。昭和13年NHKラジオドラマ第一回懸賞募集に「熊の出る里」で一位入選。「文学案内」「北方文芸」、小樽新聞等に小説、戯曲発表。

「山脈」同人。近刊に「哭くな北方の人々」「ヒゲマ狩り」がある。北海道の浜、山野の生活に取材多く、登場人物に隣人的愛情を注いでいる。方言研究会員。岩見沢市在住。(山内栄治)

パチラー(ジョン) John Batchelor 〔小説〕安政元・3・20、昭19・4・2

〔宗教、アイヌ研究〕イギリス生まれ。明治10年病氣療養をかねて来道。以来六十余年間、困難を克服し

女との生活を描いた「生命尽きる日」「海潮音」を作品社から上梓し、「地宴」も再刊した。「生命尽きる日」は57年に平林たい子文学賞を受賞。札幌刑務所にはじまる三部作「地宴」「海潮音」「生命尽きる日」は神の存在を問うた代表作。ほかに「小説伊藤整」や梅崎春生との関係を書いた「風花の道」など。

(佐藤喜一)

八田尚之 〔小説〕明38・12・2、昭39

・8・25 (1905~1964) シナリオ、劇作「小樽市生まれ。庁立小樽中学を経て法政大学、明治大学に学び中退。勝見庸太郎にシナリオの才能を認められ、勝見プロを経てマキノプロ、日活、新東宝などでシナリオ作家として活躍した。代表作に石坂洋次郎原作「若い人」、伊藤永之介原作「鷲」、井伏鱒二原作「多甚古村」がある。昭和17年丸山定夫らと「苦楽座」を創立、舞台活動を始める。戦後再びシナリオに筆をふるい、昭和27年女優宝生あやこ(嘉山絢子)と結婚。二年後劇団「手織座」を創立し劇作、演出を手がける。戯曲の代表作に「愛しきは」「愛の凄鬼」「ふるさとの詩」がある。その作風は人間の善意を情感豊かに描き、ラジオドラマ「よるこび」「幸福」、テレビドラマ「夫婦百景」シリーズでも知られた。戯曲「罪」執筆を終え

ながら、とくにアイヌにキリスト教を布教。そのためにアイヌからアイヌ語を学ぶが、その過程で胆振地方の有力アイヌの家系の金成家、向井家、知里家との親交がはじまる。これら三家の人々のアイヌ語の上での役割は大きい。パチラーはアイヌ人伝道師養成のための函館の(愛隣学校)の設立に尽力したり、札幌の自宅敷地内に、徳川義親の経済的後援を得てアイヌ治療病室や進学を志す者の寄宿舎(パチラー学園)をつくった。また伝道とアイヌの親睦の雑誌「ウタリグス」を発刊するなどして「アイヌの父」と敬愛された。「蝦・和・英三対辞書」やアイヌ語の聖書、讚美歌、アイヌの民俗にかかわる著書多数。パチラー・八重子(向井フチ)は養女。昭和15年に帰国。(藤本英夫)

(藤本英夫)

パチラー・八重子 〔小説〕明17・6

・13、昭37・4・29 (1884~1962) 〔短歌〕伊達市(有珠)のアイヌの名家向井富蔵の二女。幼名フチ。七歳のとき、向井家と親交のあったJ・パチラーから受洗。明治39年パチラーと養子縁組。41年から43年養父母と渡英。東京・白金のコーラン聖書学校に学び伝道婦の資格を得、養父をたすけて道内、樺太の各地を布教、また幌別、平取の教会に勤めたこともある。生地が近く、同じ信仰の道を

千葉県で没した。「八田尚之作品集」三巻があり、小樽市祝津に詩碑がある。

(佐々木逸郎)

服部水嶺 〔小説〕明43・11・4、(19

10)「俳句」小樽市生まれ。本名誠市。小樽電報局退職後、小樽で釣具店を営む。俳句は昭和5年以來長谷川かな女に師事して「水明」に拠り、現在同季音櫛作家。54年横道秀川主宰の「雪嶺」創刊に特別同人として参加し、現在同銀河同人。俳句は静かに楳火として燃えるものという主張。現代俳句協会員。

(横道秀川)

鳩沢佐美夫 〔小説〕昭10・8・8、昭

46・8・1 (1935~1971) 〔小説〕日高管内平取町(去場)生まれ。幼少より病弱であったが、中学入学直後、持病の脊椎カリエスが悪化して休学。以後結核を併発して入退院を繰り返す。療養中、仲間と療友会を結成して病院の民主化に努めるかたわら、文学に関心を寄せ、「日高文学」や「山音文学」に入会。同誌に幼少年期の苦悩をモチーフにした「遠い足音」「証しの空文」等の作品を発表して脚光を浴びたが、三五歳の時、それらの作品でアイヌの神を冒瀆したという廉で右手中指を切断し入院中の平取病院から失跡。パチラー・八重子の墓前で自殺を図ったが果たせず、一週間後札幌大谷

歩む金成マツを深く敬慕していたが、一方、遠星北斗や知里真志保ら若い同族からサボ(姉)と慕われた。北斗や森竹竹一と並んでアイヌの三大歌人ともいわれ、(国も名も家畑までうしなふも失はざらむ心ばかりは)など収録の歌集「若きウタリ」がある。大正7年来道した中条(宮本)百合子を案内して静内、新冠を旅行しているが、中条の「風に乗って来るコロポックル」はそのときのもの。養父の帰国後は有珠に戻る。(藤本英夫)

(藤本英夫)

八匠衆一 〔小説〕大6・3・30、(1917)

〔小説〕旭川市生まれ。本名松尾一光。庁立旭川商業学校卒業後に上京、日本大学芸術学園に入学。講師の伊藤整、東大生の梅崎春生らと識る。戦時中召集により第七師団に入隊し、戦後復員と同時に再上京。過度の飲酒とヒロポン中毒のために深夜の路上で刑事事件を起こし、札幌刑務所で服役中に女性の看守部長坂東知子と知り合う。仮出所後は上川管内上川町の義兄宅に居食し、昭和29年に札幌に出て伝道師になっていた坂東知子と結婚。名古屋の「作家」に発表した「未決囚」は30年下期の直木賞候補になる。33年に再々上京。困窮のなかで書き上げた「地宴」を33年11月に講談社から出版した。51年に妻知子が死亡し、彼

地観霊院で発見された。この苦行で開眼。この年の9月自主退院して「日高文芸」を創刊。第六号にタブー化したアイヌ問題を内と外から告発した対談「アイヌ」を発表して、ウタリ巨星とうたわれたが、翌年燃えつきるようになって世を去った。
(須貝光夫)

花崎翠平 昭6・6・22 (62) (哲学、評論) 東京生まれ。東京大学哲学科卒。ベ平連運動いらい一貫して市民運動の現場に身をおく。学園紛争を機に北海道大学を退職。地域に生きる生活者の在り方を追究、また、アジア民衆と日本の真の連帯の道を探りつづけている。現代思想の最尖端で最も創造的な仕事をくりひろげ、大きな影響を波及させている。昭和56年「生きる場の哲学」、59年「生きる場の風景」札幌に住む。「詩の村」同人。
(高野斗志美)

花の本穂秋 嘉永5 (昭7・1・17) (1852-1932) (俳句) 岐阜県生まれ。本名上田肇。別号不識庵。慶応義塾に学ぶ。明治14年京都の花の本芹舎に師事して句作に入り、17年「鴨東集」創刊、21年「俳諧鴨東新誌」と改題。23年花の本宗匠の免許を得て第一一世となる。北海道へは明治42年、大正13年の二回来遊。また明治20年代に、北海道毎日新聞(現北海道新聞)の選を担当した。

○年毎に区切って「航跡」「土に帰る」「父と子」「回帰」の四部で構成。敗戦による混乱、勤務先の倒産、妻との離婚等が重なって経済的にも逼迫した最も苦難な期間で、そのために内観的な深さを加えた、と著者も述べている。小田哲夫は「初期の唯美的傾向から次第に荒波に耐えた人生象徴詠となる」と指摘している。<子ら育ち羽搏きゆけり頭の上の部屋二つ空洞となりて音せぬ>
(永平利夫)

浜田雨竜子 大4・2・7 (昭53・6・9) (1915-1978) (俳句) 鳥取県生まれ。本名五郎。昭和27年胸部疾患療養中「霧華」により句作を始め、30年より「寒雷」に投句する。44年同人誌「広軌」創刊と同時に参加。骨太い抒情が特徴。旭川市で没す。(後藤軒太郎)

浜田虎夫 大6・6・12 (1915) (短歌) 台湾生まれ。庁立根室商業学校卒。北海道拓殖銀行勤務。紋別支店長などを経て、昭和46年定年退職する。43年「北方短歌」に入会し、57年北方短歌賞を受賞する。48年宮柵二の「コスモス」に入会して現在第一同人。58年「北方短歌」を退会。へなまなまと浴場にて見つ戦友らの腎臓、動脈瘤、胃の手術痕

浜中登起 明33・3・21 (昭50) (江口源四郎)

英 美子 明25・7・1 (昭58・3・15) (1892-1983) (詩) 静岡県生まれ。本名中林文。旧制静岡県立高女卒。日本詩人クラブ所屬。「日本未来派」「詩界」同人。詩集「東洋の春」(昭7、交蘭社)、詩集「アンドロメダの牧場」(昭45、昭森社)、「授乳考」(昭50)。一時期北海道に寄住したことがあり、詩集「アンドロメダの牧場」はその折の作品。ギタリストの命令との詩朗読会で来道している。
(小松瑛子)

花見達二 明36・11・15 (昭45・9・21) (1903-1970) (政治評論) 仙台市生まれ。父の死後、教職についた母に伴われて来道。少年時代、島木健作と親交を結ぶ。戦後、「憂国の士」と称され言論界で活躍。「花見達二遺稿集」(昭46、新紀元社)に島木回想の数編がある。
(小笠原克)

花柳喜与衛 明39・7・31 (1906) (俳句) 根室市生まれ。本名大西きよ。昭和21年「ゆく春」、続いて「きばな」に拠つたが、現在は「道」「季節」「北の雲」会員。「樹水」「壺」同人。昭和45年士別市文化賞、53年北見市文化賞受賞。句集「舞扇」。
(島 恒人)

花輪墨雨 天保6 (明43) (1835) (川柳) 青森県生まれ。本名トキ。戦後岩見沢婦連会長や岩見沢市議として活躍。昭和40年川柳を人間短詩として始める。41年「岩見沢柳の芽川柳会」を創設。同会長として川柳の普及に努め、優れた統率力は同会を大きく育成させる。44年岩見沢市教育功労賞受賞。49年句集「流れ雲」を発売。
(斎藤大雄)

早川観谷 明17・1・19 (昭33・9・18) (1884-1986) (俳句) 新潟県生まれ。本名観二。寺の三男として出生。明治37年上京、永弥寺に寄宿。40年頃渡道、札幌市内国通運支店に職を得、以後小樽、旭川、帯広と転じた。俳句は明治35年「ホトトギス」に始まり37年「半面」(岡野知十)、41年河東碧梧桐の指導を受ける。その頃旭川に新傾向俳句系のルイベ吟社があり、懐川と号し嶋田柿洲らと活躍。大正13年帯広移住。昭和5年頃職を退き、7年「翰墨」を創刊、地元俳人の育成に当たつたが戦時中の昭和18年休刊。25年「とかち」によって再び十勝俳人の糾合を計り、没するまで意欲的に続刊した。句集は昭和23年「十五人集」、28年「とかち」同人句集、「六十人集」など。没後の昭和34年遺族と同人らによって「観谷句集」の上梓を見た。32年帯広市に「朝曇るしづけさどこ

か啼く郭公)の句碑を建立。
(佐々木露舟)

山形県生まれ。本名不詳。函館、小樽、余市等を経て、明治31年旭川へ移住。俳句の運座「旭風会」を興す。北海道俳諧三大家の一人に数えられ、旭川地方の俳諧の源流を培つた。
(木村敏男)

羽太正養 宝曆2 (文化11) (1752-184) (紀行) 東京(江戸)生まれ。二五歳で家督相続。幕府の蝦夷地直轄後、蝦夷地取締御用掛に任ぜられ、東蝦夷地の警衛、弊政改革にあたる。享和2(一八〇二)年箱館奉行となる。「休明光記」九巻は蝦夷地御処置の始末、その大綱を後世に伝えるために筆をとつたもので、寛政11(一七九九)年より文化4(一八〇七)年に至る蝦夷地御処置の顛末を明らかにし、その参考となるべき公文書を集めて付録とした大編著であるが、いわゆる読み物ではない。
(佐藤喜一)

浜 一郎 大4・2・6 (1915) (短歌) 函館市生まれ。庁立小樽中学校卒。学校職員を長く勤めた。昭和7年「新壘」、翌8年「潮音」入社、幹部同人。13年刊の新万葉集にも入集。新壘小樽支社代表。北海道歌人会委員、小樽市文化祭選者などを務める。50年歌集「海坂」を出版。この歌集は昭和10年以前の作品を割愛した作歌活動四一年間の作品六五六首を収める。配列は、ほぼ一

早川 平 昭11・5・3 (1906) (小説) 小樽市生まれ。北海道芸芸大学札幌分校卒。北海道高校教諭。同人誌「新創作」に「息をつめる」(3号)、「宿雨」(13号)、「冬の蝶」(14号)、「孤壘」(15号)などの創作を発表。また島木健作研究者として「島木健作特集」(「新創作」11号)を出し、「島木健作の北海道学時代」(昭45、角川書店)「国語科通信」18号)を発表している。その他各誌に教育、スポーツ関係の文章を書いている。
(神谷忠孝)

早川 浩 大15・6・5 (1906) (詩) 旭川市生まれ。昭和23年富田正一との出会を機会に「七ツ星」に参加。以後「青い芽」「青芽」「道標」「新器官」「時間」「コロポックル」「眼」「湾」「律動」同人で活躍。詩集に「遍歴」(昭25・3、青い芽芸芸社)がある。
(富田正一)

早川雅之 昭2・12・9 (1902) (詩) 空知管内秩父別町生まれ。北海道芸芸大学旭川分校卒業後、法政大学大学院修。長崎総合科学大学教授。昭和24年「遍路」編集。25年「ATOM」同人を経て、26年「前むきの足跡」、30年「開墾地」の編集。この二誌は農民文

学運動詩誌で深尾須磨子、大江満雄、谷川雁らに注目される。27年10月から「フロンティア」の編集同人。その後「河」（九州）同人。著書は、共著詩集「漂流」（昭27、私家版）、「伊藤整論」（昭50、八木書店）、「美意識と倫理」（昭51、北書房、共著「ナガサキー一九四五・八・九」（昭59、岩波書店）。農村教師一七年。戦後農民解放運動に奔走。六〇年安保敗退後上京、法政大学院で小田切秀雄に師事し学究の道に入る。「河」に「非詩の時代に」を、「教育国語」（むぎ書房）に「現代小説の方法」を連載。

（瀬戸哲郎）

早川三代治 明28・6・22〜昭37・8・28 (1895〜1962) 小説、経済学 小樽市生まれ。北海道帝大農学部卒。予科時代に教師の有島武郎に接し深い感化を受けた。大正10年ドイツに留学、経済学を学び帰国後北大で農業経済を講じた。「純理経済学序論」（昭5・5、岩波書店）ほか著書九冊がある。有島武郎の没後、島崎藤村に親近して「三田文学」「劇と評論」に戯曲を発表。戯曲集「聖女の肉体」（昭7・11、明窓社）、随筆集「ラインのほとり」（昭8・10、同）、短編小説集「青鷗」（昭8・12、同）、長編小説「ル・シアラージュ」（昭9・7、同）、詩集「エムブリオ」

（昭11・5、丸善札幌出張所）などを出版した。昭和11年北大を辞して小樽に戻り、地主生活をしながら本格的な創作活動をはじめ、大長編小説「土と人」四部作にとりくんだ。刊行順に並べると第一部「処女地」（昭17・12、元元書房）、第三部「土から生れるもの」（昭19・1、同）、第四部「生ける地」（昭19・8、宝文館）、第一部「根」（昭20・2、同）となり、戦後も第五部「地飢ゆ」（昭43・2・44・4、「北方文芸」、生前未刊）を書き、六部にあたる「ひこばえ」は構想ノートはできていたが刊行されなかった。ほかに自伝小説「若い地主」（昭22・7、青年論壇社）がある。昭和24年小樽商大教授。32年早稲田大学教授。

（神谷忠孝）

早川義英 昭5・3・11〜(68) 小説 帯広市生まれ。国民学校高等科修。農業、クリーニング業を経て現在日本農業新聞記者。「トカプチの夜明け」（昭41、帯広「市民文芸」）、創作集「密猟地帯」（昭54、デイスカパー十勝）がある。 林 題三 天保14・5〜明39・9・3 (1843〜1906) 行政 金沢市生まれ。明治6年に渡道し、北海道開拓事業を志す。明治12年に土族授産を旗印とする北海道開進会社の経営に参加する

が、経営不振となり16年からは行政官として郡長、支庁長を歴任した。その間漁村で馬鈴薯を奨励し住民は「薯郡長」と愛称した。明治33年に前著「北海紀行」を増補した「北海誌料」を編纂刊行。

（小野規矩夫）

林 静子 大5・3・4〜(50) 「短歌」札幌市生まれ。本名川村静。昭和13年「潮音」入社。太田水穂、四賀光子より影響を受けて作歌。その光陰も、歌がらもはげしく劇的である。今は静謐な日常と心境をうたう。現在「潮音」同人。昭和51年歌集「燿変」を出版。（紫紅色の花のあまき香守るとて棘したたかに粗きはまなす）

（水平緑苑）

林 直樹 昭9・11・23〜(68) 「詩」長野県生まれ。昭和20年の敗戦を満州で迎えた。父のシベリア連行後、母に伴われて南下難民の群に投じ、飢餓と疫病の中で妹二人を失った。帰国後神奈川を経て昭和27年釧路へ転住。北海道学芸大学釧路分校卒。31年詩誌「かばりあ」創刊に参加したほか「氾濫」「鳥」「釧路現代詩話会」などを経て「核」「原」同人。詩集に33年の「影との対話」、46年「石の中の耳」がある。詩風は人間の内奥の暗鬱を重厚なタッチで描き出す点に独自性がある。著書に釧路叢書の「釧路文学運動史」（戦後編、

昭55、共著）、「釧路現代文学選集」（昭46、同）があり、52年NHK、道詩人協会共催の「朗読のための詩作品コンクール」で最優秀賞を受賞した。

（永井浩）

林 白言 大12・6・23 (1923〜) 「エッセー」朝鮮慶尚北道生まれ。六歳、両親と来道し「漂流民」として辛酸を嘗めた。昭和16年鉄道教習所電信科修。戦後国鉄労組中央執行委員（情宣部長）。24年7月レッドパージで失職、入獄生活も味わう。37年林組を創設。北見文化連盟会長として衆望を担う。著書に北海道新聞社刊「じゃがいもの花」「こぶしの花」。連載に「忘れ得ぬ人々」（文芸北見）、「その前夜」（北見文学）などがある。

（小笠原克）

林 房雄 明36・5・30〜昭50・10・9 (1903〜1976) 小説 大分市生まれ。本名後藤寿夫。五高入学生（大8）の頃から小説を書き出す。東大新入会の雄としてプロレタリア文学運動に加わり、機知と諷刺で大衆性を帯びた新局面を拓いた。運動壊滅後は急速に日本主義へ転じ、戦後も右翼的言論人を持続。清新な処女作「林檎」（大15・2、「文芸戦線」）は前年の小樽高商軍事教練事件にオルグとして来た折の産物でもあ

（小笠原克）

林 美美子 明36・12・31〜昭26・6・28 (1903〜1951) 小説 下関市生まれ。本名フミコ。私生子。尾道市立高女卒。昭和5年7月に改造社から「放浪記」を出版しベストセラーになる。初

来道は9年5〜7月で函館に上陸したあと俱知安、岩内、札幌、釧路、摩周湖、帯広と道内を広く回った。この折に稚内から遠く樺太にも遊んでいる。「摩周湖紀行」（昭10・6）、「樺太への旅」（同）、「江差追分」（昭10・11）は、その紀行記で、この折の足跡を知ることができ

る。翌年夏には飛行機の招待飛行で札幌に降りているが、「飛行機の旅」（昭10・9）がそれである。11年と17年には文芸講演会で来道。こうした体験からいくつ

かの取材作が生まれた。わびしいマネキンの物語である「帯広まで」（昭10・7、「文芸春秋」）、稚内にはじまり樺太が舞台の「雷鳥」（昭26・7、「別冊文芸春秋」）、短編集「青春」（昭15・3、実業之日本社）のなかの「月寒」、俱知安が背景の「七つの灯」（昭16・1、むらさき出版社）と「田園日記」（昭17・12、新潮社）がある。「田園日記」は北海タイムス（現北海道新聞）に連載された。美唄市の中央公園に自筆を刻んだ詩碑（昭51・9・25）が建っている。代表作は「風琴と魚の町」「晩菊」「浮雲」な

ど。

林 美脈子 昭17・9・7〜(54) 「詩」滝川市生まれ。本名中田美智子。日本女子大学食物学科卒。高校教師。同人誌「北海詩人」「アンドロメダ」を経て個人誌「遊郭」（昭50〜59まで）発行。現在個人誌「緋境」発行。詩集に「撃つ夏」（昭49・3、創映出版）、「約束の地」（昭52・12、北海詩人社）、「緋のシャンバラ」がある。作品「陰画の岸」で第八回ケネスレックスロス詩賞受賞。

（小松瑛子）

林 道夫 明31・8・14〜昭43・6・22 (1898〜1968) 「短歌」鹿児島生まれ。東京大学経済学部卒。安田銀行重役。昭和8年「潮音」入社。太田水穂、四賀光子に師事。同誌選者幹部。「新藝」選者幹部。歌は主観があくまで濃厚であり、奇抜な風目はないが、すべて仁愛を帯びて軽躁なところがない。歌集は「東離集」（昭24）がある。（聖誕祭炉の灯ゆらぐたまゆらに深く根ざしし愛を推へる）

（宮崎芳男）

林 容一郎 明35・11・20〜昭37・3・23 (1902〜1962) 小説 小樽市生まれ。本名平沢哲男。林良心の筆名もある。大正11年「群像」に詩をのせる。13年に小林多喜二の「クラルテ」同人となり詩作をつづける。昭和3年上

京、西条八十に師事するかたわら「三田文学」に属したが、健康を害し14年札幌に移り「北方文芸」創刊にかかわった。「三田文学」に代表作「阿寒族」(昭15)など。「北方文芸」には「北方的性格について」(創刊号)、「函館戦争」(5号)などの作品がある。21年小樽に移る。

「阿寒族」「函館戦争」「貨物船エゴールカ」を取めた短編集「阿寒族」(昭22、白都書房)が出たこともあり創作意欲を燃やし、「健民」に「札幌開府」(昭22・6・23・5)を発表したのをはじめ「大道」「北の女性」「北の子供」などの雑誌に作品を発表した。25年「札幌文学」同人となり「ピカルディの牛」をのせたが、この頃より病状進み最後の作品となった。43年ミヤ未亡人、平沢秀和により「林谷一郎全集」刊行。(西村 信) 林 義実 評伝 大9・7・1(1982)

○)〔評論〕留萌管内小平町生まれ。日本大学文学部卒。長らく小、中学校の教職にあった。合同歌集や郷土史研究もあるが、空知地方の文学研究を続け、その成果の一端に「空知の文学山」(昭54・9、みやま書房)があり、啄木、独歩、葛西善蔵、小山清などの足跡が詳しい。(木原直彦)

早瀬霨舟 評伝 大元・12・14(昭56・6・25(1912~1981))〔俳句〕日高管

はらだみつ (人名編)

のが、作品からかけりのように感じ取られ、また社会への批評精神となって強く訴えてくるものがある。〈南半球に咲きさかりるむローダンセ冬終る日の部屋を飾りぬ〉 (八重樫実)

原子 修 評伝 昭7・11・13(1932)〔詩〕函館市生まれ。北海道芸大文学館分校卒。在学中より詩作を始め、昭和34年「詩学」新鋭詩人特集に、風山暇生、黒田喜夫らと選ばれて紹介された。詩誌「だいある」を経て34年「核」創刊に参加。詩集に31年の処女詩集「第一詩集」のほか、「ソネットによる頌歌」(昭32)、「鳥影」(昭42、北海道詩人賞)、「背理の魚」(昭48)、「来意」(昭53)などがあり、詩劇集「デッサ」(昭53)がある。詩風は、すぐれた暗喩感覚を駆使した詩的世界の展開と、ポキヤブラリーの豊かさに特色があり、筆力は道内屈指である。詩劇活動では道内第一人者で、これまで上演された作品は43年「チカブ」「ライラック」「イヨマンテ」、50年「アイオン」、51年「フリーユ」、52年「カムイ」「バラオン」、53年「エゴテイヌ」「シラユル」、56年「サロンカムイ」、57年「インカルシュベ」、58年「サロンチリ」その他があり、札幌市をはじめ横浜、京都、神戸、十和田、千葉など国内各都市やカナダ、ニューヨーク

内えりも町生まれ。本名円治郎。青年期より句作に入り、昭和29年より「緋衣」「草人」「あきあじ」「壺」等を経て、55年「これ」に拠る。57年遺句集「沖のこ」と刊行。(木村敏男)

葉山嘉樹 評伝 明27・3・12(昭20・10・18(1884~1945))〔小説〕福岡県生まれ。早稲田大子科を中退しカルカッタ航路の貨物船水夫となる。のち室蘭、横浜の石炭船に乗り組む。代表作「海に生くる人々」(大15)はその体験を踏まえ、生命を脅かされる下級船員、暴虐な船長を描き分け、船中ストライキを焦点に据えつつ、海上労働の実態と階級意識の覚醒をダイナミックに、しかも光彩に富む文体で描き出し大正期プロレタリア文学の記念碑的作品となった。取材作はほかに「浚渫船」(大15)、「船の犬」「カイン」(昭2)、「鴨獵」(昭3)など。「淫売婦」(大14)は小林多喜二に強い影響を与えた。文芸戦線派の中心であった。戦中は筆を断って長野県の山村に入り、やがて満州開拓団に加わったが健康を損ね、引き揚げの途中で生涯を閉じた。「葉山嘉樹全集」全六巻(昭51、筑摩書房)がある。(小笠原克)

原 和一 評伝 明35・8・7(1902)〔短歌〕山梨県生まれ。明治41年父母に従って渡道。俱知安町で営農のか

(国連本部)でも公演が行われた。ほかに評論集「人類バニック」(昭53、講談社)がある。51年北海道芸術新賞、53年北海道文化奨励賞受賞。日本現代詩人会員。北海道詩人協会常任理事。

原子公平 評伝 大8・9・14(昭19)〔俳句〕小樽市生まれ。東京大学仏文科卒。戦前岩波書店、戦後小学館勤務。俳句は三高在学中「馬酔木」に投句。翌年「寒雷」に加わり加藤楸邨に師事。戦後沢木欣一らと「風」創刊。現在は「風」「海程」「秋」同人。昭和47年「風濤」創刊主宰。人間探求派の流れを汲み、社会批判の句も多い。30年句集「浚渫船」、55年「良酔」。38年評論集「俳句変革の視点」など。(鳥 恒人)

原 孤葉 評伝 明29・3・1(昭45・7・28(1896~1970))〔俳句〕滋賀県生まれ。本名紋蔵。俳句は昭和8年「石楠」により作句、のち「暁雲」同人となる。昭和20年「緋衣」、38年「浜」、41年「河」同人。41年句集「孤」発行。39年サロマ湖畔に「鮭曳の唄よ日が落つ風の中」の句碑建立。網走町助役、常呂町長等を歴任。(山田緑光)

原武ふみえ 評伝 昭12・2・21(1937)〔詩〕上川管内美深町生まれ。昭和25年ころより詩作。40年詩誌「青

たわら、昭和11年吉植庄亮の「橄欖」に入会。次いで23年「原始林」に入会、秀之助に師事。羊蹄山麓を環境とする、素朴で明るい農耕詠を樹立し、長く地域の後進を指導してきた。45年に俱知安町文化協会文化奨励賞受賞。46年葉夫人との共著歌集「やまかげ」を出版。(土蔵培人)

原 清 評伝 大7・10・6(1918)〔短歌〕札幌市生まれ。昭和14年在満独立守備隊時代、日記を短歌形式で綴ったのが作歌のはじまりで、その後旭川部隊で高井晩秋と知り合い、その紹介で「潮音」「新壟」に入会。太田水穂、四賀光子の添削を受けた。29年古屋統、中田弘、山名康郎、矢鳥京子、宮田益子らと「凍土」創刊に参加、五号から二八号まで編集人となり、バイタリティーに富んだ仲間達の中核となって活躍した。36年作品発表を中止し、およそ一〇年間無所属を続けていたが、46年「いしかり」に加入、再び作品を発表する。49年「斧」を創刊し編集発行人となる。生家の農業を継いだが、その後不動産賃貸業となる。リアリズムを信条とし、表現者として剛直なまでに純粋さを堅持、瑣末な事象にこだわることはない。それが作品を高度なものにしている。青年時代と重なった兵役の頃の暗い痛みのようなも

芽」に参加。第一詩集「邂逅」(昭46)、「鬼の宴」(昭48)、「橋のある風景」(昭49)、「火の鳥」(昭52)、「草原」(昭54)、「原武ふみえ詩集」(昭58、芸風書院)の著書がある。所属詩誌は「パンと薔薇」「留萌文学」「北域」。50年美深町文化賞受賞。郷土史の発掘等に情熱を傾ける。「扉の会」(美深)主宰。北海道詩人協会員。(山田政明)

原田太郎 評伝 明41・3・28(1908)〔小説〕広島県生まれ。札幌師範学卒業後、帯広で教師、吏員、公民館、図書館などを転職。その間、小樽新聞社四〇周年記念の懸賞小説に「晩成社抄」が入選して機運を呼び、北海道新聞(十勝版)に「晩成記」を連載。またNHK帯広放送局から「十勝風土記郭公の里」を三年連続放送。昭和29年広島に帰郷し農業自営。53年「雑と女と土方」でオール読物新人賞を受賞、再出発した。(八重樫実)

原田三夫 評伝 明23・1・1(昭52・12・3(1890~1977))〔科学評論〕愛知県生まれ。明治40年札幌農科大学に入学。在学中藍野祐之とともに有島武郎を中心とする学内の美術団体黒百合会を創立。社会主義研究会にも出席生涯にわたる親交を結ぶ。病気のため八高に移り東京大学卒。大正8年より一年間北大

水産専門部講師のほか一貫して科学ジャーナリスト。著書は科学啓蒙書多数のほか「思い出の七十年」がある。

(高山亮二)

原田康子 昭3・1・12 (1938) (小説) 東京生まれ。釧路市立高女卒。二歳の時から釧路に住む。実家は雑穀問屋兼回漕業で先代までは豪商を誇っていた。昭和24年から釧路では女流第一号の新聞記者となる。「北方文芸」に処女作とみて「冬の雨」(昭24)、続いて「アカシヤの咲く町で」(昭27)を発表。「北海文学」の同人になってから「遠い森」「夜の喜劇」「暗い潮」「週末の二人」とたて続けに短編を発表した。はじめての長編「魔園」(昭29)のあと「新潮」同人雑誌賞に「サビタの記憶」で応募、最終候補に残って山室静の好评を得た。長編「挽歌」は当時ガリ版の「北海文学」に二〇回にわたって連載(昭30・6・31・7)したもので、掲載中から議論を呼んだ。しかし完結以前から映画化の照会や、出版の話題が舞い込んだ。「挽歌」と同時掲載の長編「死の誕生」の作者宇多治見が、途中で自殺するという事件が起こったのは何か象徴的である。「挽歌」元結後、原田は同人誌時代を脱して作家として独立、「近代文学」に「雪の集」(昭31)をはじめ「新

潮」「文学界」その他に作品を発表、間もなく札幌に移住した。昭和27年から31年にかけての原田の意欲的な「北海文学」同人時代が、北海道のみならず全国の無名新人作家に与えた刺激と影響は大きい。著書に「挽歌」(昭31)、「サビタの記憶」(昭32)、「輪唱」(昭33)、「魔園」(同)、「病める丘」(昭35)、「いたずら」(同)、「殺人者」(昭37)、「望郷」(昭39)、「北の林」(昭43)、「日曜日の白い雲」(昭54)、「虹」(同)、「素直な容疑者」(昭55)、「恋人たち」(昭57)、「新境地を拓いた「風の砦」(昭58)、「満月」(昭59)、「星の岬」(昭60)、「エッセー集」「北国抄」(昭48)、「鳥のくる庭」(昭57)がある。

「挽歌」長編小説。「北海文学」に連載。東都書房、昭和31年刊。愛を喪失した主人公恰子が、積極的な背伸びと小悪魔的な性格で大人の世界に干渉し復讐をはかるが、揺れ動く愛との相剋の中で傷つき、絶望する。作者にとっては青春の書である。昭和32年第八回女流文学賞を受賞。33年五所平之助監督で映画化され、テレビドラマでも何度か放送された。(鳥居信三)

原抱一庵 慶応2・11・14 (1877) (小説) 福島県生まれ。本名余三郎。上海に

春山行夫 明35・7・1 (1920) (詩、評論、文化史) 名古屋市長生まれ。本名市橋渉。昭和3年「詩と詩論」を創刊。ついで「文学」「詩法」「新領土」などの編集者として活躍し、日本でモダンニズム詩仕掛け人の役割を果たす。昭和初頭活躍した新しい文学運動の推進者。雑誌「セルバン」(第一書房)の編集、さらに戦後は「雄鶏通信」の編集長。専ら欧米文学と文化の紹介に大きな貢献をする。北海道には昭和13年第一書房セルバンの文芸講演会で阿部知二、伊藤整、大島豊とともに来道して札幌、旭川で講演を行う。戦後はNHK「話の泉」の番組公開録音で札幌を訪れ、続いて昭和36年、40年と四度渡道し、道南、

道東にも歩を運んでいる。著書に「詩の研究」をはじめ「二十世紀英文学の新運動」(昭8、第一書房)、「文学評論」(昭9、厚生閣)、「花の文化史」(昭55、講談社)等多数。(新妻博)

榎谷美枝子 大5・7・22 (1916) (俳句) 滝川市生まれ。俳人であった父一夢の影響を受け昭和5年から句作。程なく石田雨圃子に師事。8年夏旭川市で開かれた北日本俳句大会での高浜虚子との出会いを機に「ホトトギス」直系の「玉藻」に投句したが、25年山口青邨を知ってから「夏草」一本に絞

り、40年には同人に推された。札幌夏草会を結成したのが38年、約八〇名の会員を統率して毎年「札幌夏草句集」を刊行している。個人句集は「雪礫」(昭43)、「冷夏」(昭52)、「山湖晩秋」(昭58)の三冊。(いたづらの雪の礫か悲しけれ)〈刑に服すごと痛の身に冷夏来ぬ〉は句集名となった作だが、先年両句集の装丁に当たった夫の一本万寿三画伯に先立たれた。43年夏草功労賞受賞。一時「壺」同人となったが後に退き59年「梓」に同人として加入した。俳人協会会員。

半沢 洵 明12・1・9 (1879) (植物学) 札幌市生まれ。明治34年札幌農学校卒(有島

渡って亜細亜学館に学んだと明治19年5月札幌農学校予科第四年級に入学。21年に中退して北海道を去る。文名を高めた代表作の「闇中政治家」(明24・6、春陽堂)は、自由民権運動の福島事件の巻き添えて未決に入られた体験と北海道生活が結びついて生まれた。空知集治監が主要な舞台であり、明治前半の北海道の風物を克明に描いた屈指の小説で、明治20年代の問題作。(木原直彦)

原 路明 明37・12・19 (1904) (短歌) 苫小牧市生まれ。本名敏夫。昭和34年苫小牧王子製紙を退職。大正13年「アララギ」、昭和31年「北海道アララギ」入会。斎藤茂吉に師事。昭和7年茂吉を千歳に迎える。9年土屋文明来道の支笏湖歌会に出席。(笹原登喜雄)

針山和美 昭5・7・12 (1930) (小説) 後志管内倶知安町生まれ。筆名はほかに針山和己、春山文雄。札幌文化専門学院中退。小学校教員。昭和24年「しんぼる」「路苑」「道」などを創刊。「道」は一六号から「人間像」と改題。同誌に「百姓二代」(49号)、「愛と逃亡」(72号)、「支笏湖」(76号)、「女囚の記」(83号)、「山中にて」(103号)などを発表。短編集「奇妙な旅行」(昭和45、人間像同人会)がある。「人間像」主

武郎と同期)。宮部金吾教授に師事、応用菌学を専攻。「納豆博士」として著名。新渡戸稲造が創立した遠友夜学校に早くから関係し、大正11年同校代表となり、翌年に財団法人の認可を受ける。昭和13年新渡戸万里子校長死去により同校長(19年閉校まで)。44年北海道開発功労賞受賞。(高山亮二)

萬上義次 明44・3・19 (1921) (短歌) 函館市生まれ。翌年根室に転住。根室商業学校卒。在校中「吾妹」の同人前田浩教諭により短歌開眼、文芸誌「燭淚」の発行、編集に携わる。卒業後、里村実の筆名で、後に北海道新聞根室支局長となった浦信一(戦死)などと「土曜会」を結成して北原白秋に傾倒し、「まろうど」その他の文芸誌や地元新聞に小説、短歌などを発表。約一〇年間、辺境の地に清新で啓蒙的な文学運動を展開した。昭和14年函館に転住、一時文学運動を中断したが、21年疎開先の江差で作歌を再開、後に「短歌紀元」に参加。主幹白山友正逝去後は村上清一、安在久太郎と共に雑誌を同人誌に組織替えして、白山登代子を助け専ら選歌、編集を担当する。「道南歌人会」「花短歌会」でも活躍している。上磯町在住。〈海へ向くぞえは西風をまともにて目に一面の馬鈴薯の花〉(村上清一)

坂東甲齋 びんどう 大7・11・20(一〇一〇)〔俳句〕石狩管内新篠津村生まれ。本名頼樹。易占、印章篆刻業。昭和12年「葦牙」、14年「馬酔木」、15年「鶴」を経て20年「原始林」を創刊主宰。23年「壺」同人。40年「アカシヤ」同人。48年「壺」復刊と同時に同人復帰。閑古子にはじまり高帆、正眼、桃交、頼樹、桜処と俳号遍歴。(金谷信夫)

坂東三三 びんどう 明39・9・1(昭21)

10・15(1908)1946)〔小説〕旭川市生まれ。東北大学国文科卒。卒業論文「葛西善蔵研究」を宇野浩二に持参、賞讃され以後師事する。室蘭中学校の教員となる。昭和13年保高德蔵を知り「芸芸首都」の同人となり、多くの作品を同誌に発表。14年改稿をかさねて発表した「兵村」が芥川賞候補となり脚光をあびる。出身地の永山に材をとり、一開拓農民の浮沈の人生とおして屯田兵村の解体のドラマを描き、異色の素材と手がたいリアリズムの手法によって注目された。上京して教員生活をはじめ。16年「小説列車」、17年「学窓記」等の小説を発表。第一創作集「兵村」を新民書房から刊行するが、18年これが有馬賞候補作となった。また同年、新太陽社から刊行した第二創作集「兵屋記」が19年に歴史文学賞候補作となり、戦時下文学をい

なう新人作家として活躍していく。さらに19年「屯田兵物語 熊のすんでいた村」を国民図書刊行会から刊行し好評をうる。この間年来の結核が悪化、20年「新しき人生探求へ」、21年「北海道と文学評論」「雪みち」「姉の青春」等を書くが、東京で腸結核のため、屯田兵精神につながる求道的作家の生涯をとじた。没後、短編集「雪みち」が巖松堂から刊行された。(高野斗志美)

番場とみ子 びんどう 明44・7・1(昭31)〔短歌〕北見市生まれ。昭和13年「曼陀羅」、27年「ポトナム」に入社。

「原始林」には23年入社。数年後、前記二誌を退社。北見市では、多年にわたり原始林支社の責任者として活躍。一方、書家としても北見市書道連盟副会長を務め、50年北見市文化賞を受賞。歌は温順であり抒情的で滋味がある。56年頃より病氣療養のため休職。(中山信)

半村 良 びんどう 昭8・10・27(昭33)〔小説〕東京生まれ。本名清野平太郎。都立両国高校卒業後、多彩な職業を遍歴した。48年に「産霊山秘録」で第一回泉鏡花文学賞を、49年に「雨やどり」で第七二回直木賞を受賞した。伝奇ロマン作家でユニークな虚構の世界を描いているが、59年に苫小牧市民となり創作の場を北海道に移した。その年に戦中

記念しての「春の水」(白玉書房)、56年7月現代歌人叢書の一冊としての「鯨ぐもり」をはじめ、58年4月「五月野」(短歌新聞社)、59年3月「樋口賢治遺歌集」(短歌新聞社)が刊行された。いずれも潤いのある清純な作風である。〈牧草のみどり異なる丘いくつ遠くつらなる果てのしら波〉(小国孝徳)

金剛出版)、「心の眼」(昭42、文栄堂)を上梓した。(椎名義光)
足田義久 びんどう 昭25・10・23(昭20)〔小説〕網走市生まれ。網走向陽高卒。東京の出版社に六年間勤務。「芸芸網走」事務局を担当。共著に「網走の碑」(昭58、網走市教育委員会)がある。(神谷忠孝)

樋口賢治 びんどう 明41・7・15(昭58)

3・6(1908)1983)〔短歌〕滝川市生まれ。滝川中学を経て早稲田大学卒。日本橋区役所、東京市役所嘱託を勤めた後、昭和16年日本出版文化協会に入る。20年日本出版会北海道支部長として札幌に赴任。「アララギ」には昭和3年に入会して土屋文明に師事したが、札幌在勤中の21年10月「羊蹄」を創刊。北海道の会員ばかりでなく、文明以下アララギ有力会員の応援も得て、全国的に広く志を同じくする者を結集したが、樋口の東京転出に伴い24年9、10月合併号を最後として廃刊となる。その後東京書籍、光村図書勤務。北海道関係の仕事も多く受け持ち、頻繁に来道して各地の歌会やアララギ北海道大会にも出席して指導に当たる。42年「アララギ」選者。48年「北海道アララギ」選者。歌集には「暖雪」二〇〇首で参加したアララギ新人歌集「白生地」(白玉書房)、35年亡妻の七周忌を

樋口作太郎 びんどう 明28・2・7(昭51)5・1(昭36)1976)〔短歌〕山形県生まれ。庁立上川中学校卒。明治39年一家をあげて北海道に転住。樋口賢治の義兄弟。農業に従事。大正11年「アララギ」入会。土屋文明に師事。同年京都の一灯園生活に入り、13年帰郷。この間作歌中断。昭和4年「アララギ」に再入会。21年創刊の「羊蹄」に参加。創刊号に文明は「樋口作太郎君に報ず」八首を、12月号に「再報樋口作太郎君」七首を寄稿。22年5月文明が旭川を訪れた折、文明の寄せた「挽樋口大尉」五首をその筆蹟のままに彫った長男勇作の墓に案内した。31年「北海道アララギ」に加入。41年「樋口作太郎歌集」(白玉書房)を文明の序文を得て刊行した。歌風は朴訥で敬虔な人柄そのままに、生活色の滲み出ているところに特色がある。42年に旭川市文化奨励賞を受賞。(席一枚に黒く乏しく乾し上れり汗垂りて妻と負ひ来

し蔵) 久生十蘭 びんどう 明35・4・6(昭32)10・6(昭32)1957)〔小説〕函館市生まれ。本名阿部正雄。別筆名は谷川早。東京の滝野川聖学院中学卒業後、函館毎日新聞社に勤めながら詩を書き演劇に熱中した。昭和元年上京、岸田国士に師事し「骨牌遊びのドミノ」(昭4・3、「悲劇喜劇」)を発表。4年渡仏、パリの物理学校、技芸学校に学び演劇研究もした。8年帰国、新築地劇団演出助手となり「新青年」その他に探偵小説を書く。18年従軍記者として南方に赴き、翌年帰還。戦後は26年「鈴木主水」で直木賞受賞。29年にニューヨークのヘラルド・トリビューン紙の国際短編小説コンクールで「母子像」(昭29・3・26)28、読売新聞)が一等に入選、孤高の異端作家として有名になる。戦後の主要作品は「だいこん」(昭24・12、講談社)、「十字街」(昭27・1、朝日新聞社)、「肌色の月」(昭32・12、中央公論社)など。(神谷忠孝)

久末永雷 びんどう 明10・1・1(昭32)2・13(昭37)1967)〔俳句〕後志管内古平町生まれ。本名象太郎。明治24年上京、東京水産講習所に学び、同時に剣道を鉄舟道場に習う。一九歳のとき帰郷し家業の網元を継いだが、打ちつづく

東久世通禧 びんどう 天保4・11・22

東久世通禧 びんどう 天保4・11・22(明45)2(1833)1912)〔短歌〕京都生まれ。幼名保丸、号は竹亭、古帆軒など。伯爵。公卿の出で、明治2年開拓長官に任ぜられ、9月函館に開拓使出張所を開く。4年5月札幌に新設の開拓使庁に移り、同年10月侍従長に転出、退道。三條西季知門の堂上派に属し、日録や短冊に若干の本道歌がある。「竹庭舎歌集」(明42)もあるが、これには本道での作は見えない。(中山周三)

東 繁造 びんどう 明17・12・7(昭42)

10・12(1887)1967)〔短歌〕大分県生まれ。東京大学医学部卒。血色素沈降素の研究で有名。札幌、浦河で開業医。七〇歳の高齢で作歌を始め、昭和29年「日高路」「新壑」「いぶり路」に入社。「辛夷」に入社。枯淡味な詠風で知られ、歌集「パリュームの陰影」(昭39、

不漁により廃業し、大正9年小樽市に転居、市役所吏員となる。俳句は上京時服部畊石、勝峯晋風に師事。昭和8年俳誌「あきあじ」を小樽で発行主宰する。川上磨古刀、唯是日出彦、津田露木、一原九糸、社八郎、武石五加木、小野光丘、小野崎順子らが参加し、11年まで継続した。「木太刀」「俳句評論」「黄灯」に作品を発表、幅広い活動をする。27年喜寿を祝し句集「あきあじ」が刊行された。序文小田観堂、比良暮雪、西村溪登楼。〈枯萱の音暮るる宿の膳につく〉

(菊地清翠)

久田余四雄 大8・8・5 (1909)

〔俳句〕釧路管内厚岸町生まれ。本名喜雄。横浜専門学校卒。自営業。戦後「青炎」「いぶり」を経て昭和23年「アカシヤ」に参加。51年木理集(無鑑査)同人。46年芦別市文化連盟文化功労賞。芦別俳句連盟副会長。(岡澤康司)

久野 斌 大13・5・25 (1943)

・1・18 (1924~1968)〔詩〕芦別市生まれ。本名干場昇。昭和17年庁立空農農業学校卒。詩誌「童心」「流水」刊。詩集「私の旅よ」を同年詩文学研究より刊行。「日本詩壇」の協力同人。三釜土木に勤務、道内各市を転勤。「詩祭」(東京・津田頼男発行)の同人。この頃から久野斌の独特な文体の詩が形成されてき

る。〈白樺にぶつかり霧の流れ急

(嶋田二歩)

菱川善夫 大4・6・3 (1928)

〔短歌、評論〕小樽市生まれ。北海道大学文学部卒。同大学院文学研究科博士課程修。風巻景次郎に学ぶ。昭和22年「新壘」、24年「潮音」入会。28年同人誌「涯」創刊とともに両誌を去る。29年「短歌研究」第一回新人評論に「敗北の抒情」が入選。以後歌壇有数の理論家として活躍、戦後の短歌に批評を自立させる。38年北海道青年歌人会を設立。気鋭の新人を集め一〇年、一〇回のシンポジウムを開催。一方37年以降の現代短歌シンポジウムに参加。39年東京でのフェスティバル律に叙事詩「稚内」を監修出品。50年現代短歌・北の会を創立、会長。ジャーナル誌「涯」発刊。アンソロジー「北の会76」を刊行。51年以降の第二期シンポジウムでも一貫してその鋭い批評精神が横溢。著書「敗北の抒情」「現代短歌・美と思想」「戦後短歌の光源」「飢餓の充足」「中城ふみ子の秀歌」「歌のありか」「現代短歌人と作品」「歌の海」等。

〔現代短歌・美と思想〕評論集。昭和47年9月桜楓社刊。著者の第二評論集。安保以後の短歌史の危機的な変貌の中で、あらたな批評の確立をみず

た。陸軍に召集され、復員後「建設詩人」(小倉)、「色彩画家」(名古屋)、「詩火」(浜松)、「詩人種」(岩見沢)、「第二次の「詩祭」(札幌)、「POPO」(札幌)、「ぼへみや」(札幌)、「苗」(札幌)各同人。久野は佐藤初夫と行動を共にし、主として道外の詩誌に作品を発表したので道内では作品も名も知られていない。昭和22年建設詩人賞を受ける。「ルネッサンス」に戦後同人詩誌代表詩人として作品が載り、「花芯」(東京)、「詩と詩人」(新潟)、「第一書」(横浜)の戦後新鋭詩人集に作品発表。

久野英夫 大元・9・7 (1912)

〔詩〕室蘭市生まれ。昭和3年詩誌「凝視群」に参加以来、「地軸」「シリウス」主宰、「狼群」「風見鶏」「高台」同人。石川久司の筆名で昭和10年秋、北名新聞社募集の郷土歌「躍進名寄」に当選、作曲長津義司、唄楠木繁夫でテイチクレコードから発売。昭和12年名寄地方初の詩人連合体の名寄詩人連盟の結成や大政翼賛会の外郭団体名寄芸術文化連盟創立に尽力、名寄詩界の旗手でもある。昭和22年シベリアから復員後「詩帳」を出し、翌年5月若い詩人の結集をみた「亜寒帯」を創刊。この詩誌を主体にして全国各詩誌にも精力的に詩を発表した。詩集に「泥炭地詩集」(昭25・8、

からに課し、現代短歌のあり得べき美と思想を論じた苦渋の書。五部に分かれ、第一部「前衛短歌論」、第二部「戦後短歌史論」、第三部「昭和10年代の評価」、第四部「短歌否定論の考察」、第五部「論争の論」などに区分できる。著者の以後の歌人論や作品論の基幹の書といえる。(増谷電三)

日高昭二 昭20・5・15 (1945)

〔近代文学研究〕茨城県生まれ。早稲田大学国文科、同大学院修士課程修。麻布高校教諭を経て、昭和54年藤女子短大助教授。「評言と構想」(昭50・57)同人として伊藤整に関する論考を毎回のように発表。「小林多喜二の世界」(昭59、北大図書刊行会「北海道文学の系譜」)で新しい多喜二像を示す。著書「伊藤整論」(昭60・5、有精堂、編著「吉本隆明・江藤淳」(昭55、同)。NHK文化センターで創作を指導。(神谷忠孝)

悲田院狂之介 大6・10・10 (1917)

〔俳句〕新潟県生まれ。本名埴田賢治。一〇歳の頃渡道、空知管内上砂川町に住む。三井炭鉱坑内保安職員。俳句は戦後間もなく「青炎」で始め、昭和23年「北方俳句人」、24年「水原帯」に参加して細谷源二の指導を受ける。源二のはたらく者の俳句を实践、季節感のない炭鉱坑内を無季俳句の磁場と

〔富田正一〕

久松義典 安政3・1・10 (1856~1905)「新聞記者」三重県生まれ。号は狷堂。自由民権運動に入り沼間守一の嚆嗚社に加わる。明治15年立憲改進黨結成に参加し、記者活動に入る。阿部宇之八に請われて北海道毎日新聞(札幌)の客員として迎えられ、北海道会開設運動に道内を遊説するなど活躍した。在道中に「北海道新策」「開拓指針 北海道通覧」を著す。金沢で没。

(小野規矩夫)

久村文生 明40・12・23 (1905)

〔俳句〕三重県生まれ。本名文生。昭和10年九州大学医学部卒。少年時より俳句に興味を持ち、医学部学生時代、ホトギス同人が多く本格的に句作。昭和13年京都日赤病院で長谷川素逝と療養中に再会、虚子に逢い素逝を師としてホトギス俳句に没入す。「ホトトギス」「芹」などに投句。その後年尾、素十に師事する。昭和17年函館に転居。阿部慧月らと交遊、函館ホトトギス会を作る。終戦直後ホトトギス系俳誌「緋燕」を発刊するが数年で診療多忙のため小樽の三ツ谷諺村に引き継ぐ。函館新聞俳句欄選なども担当。48年ホトトギス同人に推される。函館道南病院理事長兼院長。句集に「燧炬」、句文集に「白樺」などがあ

して数々の秀作を生んだが、昭和28年頃、俳句の筆を折った。(川端麟太)

火野葦平 明40・1・25 (1907~1960)

〔小説〕北九州市生まれ。本名玉井勝則。早稲田大学英文科中退。昭和12年「糞尿譚」で芥川賞を受賞。代表作に「兵隊三部作」、「赤い国の旅人」「革命前後」など。層雲峡を舞台とした「谷の宿」は、27年7月に大岡昇平らと文芸春秋講演会で来道した折の所産。31年11月には日ソ交渉妥結後の状況取材のため根室を訪れ、国境の海の現実に触発されて「ハボマイ紀行」(昭31・11、西日本新聞)、「流水」(昭32・1、「新潮」)、「氷と霧」(同・3、「小説新潮」)を生んだ。ほかに北海道新聞に連載した「活火山」(昭29・8、新潮社)がある。(木原直彦)

日野政史 明治43・3・19 (1910)

〔短歌〕旭川市生まれ。昭和9年上川管内山部村書記補。18年応募、北千鳥占守島で終戦、シベリア抑留、24年帰還。山部村村長三期当選、41年5月富良野市と合併で市助役に選任。公職多数、表彰も多い。短歌結社「新壘」「樹水」の幹部同人。歌集は「あしわけやま」「旅と人生」「シベリアの唄」「春夏秋冬」がある。「山部町史」「農業の世紀」なども執筆。(西川青雉)

水室牙子 昭和32・1・11(65)「小説」岩見沢市生まれ。本名碓井小恵子。藤女子大学文学部国文学科卒。昭52年第一〇回「小説ジュニア」青春小説新人賞佳作入選。以後ジュニア小説の新しいホープとして活躍。大納言の娘、瑠璃姫が京の都大路を往くスリルとコメディー「なんて素敵にジャパネスク」(集英社コバルト文庫)をはじめ、「クララ白書」「恋する女たち」「シンデレラ迷宮」「なぎさボーイ」などの作品で超人気作家となる。映画化やテレビ化される作品も相次ぎ、主として青春小説季刊誌「コバルト」に拠り、最近では「火村彩子センセ・シリーズ」などの長編がある。(日高昭二)

平井希代子 昭和31・1・16(61)「短歌」網走管内端野町生まれ。野付牛町北成女学院卒。昭和41年同人誌「新凍土」に入会、同誌編集委員。49年第二回宮田益子賞受賞。その柔軟な叙情は寛容な人柄そのもの。56年7月第一歌集「陽炎の坂」を刊行。「花づな」「葦の会」にも所属。(大久保興子)

平池昌志 昭和31・3・16(61)「短歌」後志管内積丹町生まれ。北海道帝国大学医学部卒、同大医局、北海道少年院出張医を経て夕張市に医院を開業。昭和16年「新墾」に入社して現在は倉へ行くという作品「虹のカマクラ」(昭58・12、「すばる」)が第七回すばる文学賞を受賞。受賞後「札幌の子供」(昭59・4、「すばる」)発表。小説集に「虹のカマクラ」(昭59、集英社)、書き下ろし推理小説「笑ってジグソー、殺してパズル」(同、同)など。(日高昭二)

平木国夫 昭和31・8・6(61)「小説」石川県生まれ。「人間像」同人。昭和29年から八木義徳に師事。文芸家協会。北海道新聞連載の「ヒコキ物語」を冬樹社から刊行以来、民間航空物語を全国の各新聞に連載。「空気の階段を登れ」ほか著書多数。(針山和美)

比良信治 昭和31・6・18(61)「児童文学」札幌市生まれ。本名平中忠信。平中忠男の弟。庁立札幌夜間中学校卒業。北海道共同募金会事務局長。「森の仲間」「札幌文学」同人、日本児童文学者協会。作品には「石狩開拓地の子ら」(日本児童文学)、「クラーク先生と札幌農学校」(むかし昔北海道)、「早春の旅」(北の話)などがあり、ルポライターとして社会福祉関係にも幅広く手がけてゐる。(小松茂)

平中忠男 昭和29・11・9(昭28・9・1(1920~1953))「短歌」札幌市生まれ。比良信治の兄。早稲田大学政経

選者、運営幹部。43年夕張歌壇の隆盛期に夕張歌人会の初代会長。さらに同市文化協会の副会長を務め、夕張歌人会創立者の足立敏彦らとともに地域の文化活動に貢献した。45年札幌市に転住し、苫小牧市の病院に通勤。58年開催の「新墾」苫小牧大会に副大会長を務める。純粋な人間愛の眼で物事をとらえ、心情の深くこもった叙情を特質とする。感動を率直に表す姿勢は、作品の批評や鑑賞によく滲み出て説得力がある。(足立敏彦)

平井さち子 昭和31・8・31(61)「俳句」東京生まれ。調布高女卒。女学校時代課外活動で松野加寿女の俳句講座新設により作句、一時「ささかち」(松野自得主宰)に入会。昭和20年平井秀松と結婚。夫君の師中村草田男(成蹊学園、「万緑」主宰)を識り24年草田男に師事、31年「万緑」の第一次同人に推挙され、34年第六回万緑賞受賞。40年札幌に転居、北海道の自然風物、野生動物などとの接触を通じて随筆等を多数発表。家族の共著「蝦夷ツブ随想」(昭59、メデイカルプランニング社)がある。婦人を中心とする俳句会「季の会」の指導中心としても活躍、58年東京に生活の根拠を移すまで北海道文学館常任理事、北海道俳句協会常任委員。現在万緑発行所の事務担当。「子午線」同人。

科卒。第二次世界大戦に応召、陸軍中尉。北海道庁、北海道労働基準局などに勤め、戦後白川療養所に入所中にて作歌をはじめた。昭和20年代の療養短歌の中心的存在であったが三三歳で夭折した。「原始林」同人。遺歌集「笹鳴り」(昭29・10、原始林叢書第12編)がある。療養生活を基調としながら、感覚に溺れぬ透徹した作風であった。(田村哲三)

平野温美 昭和20・1・11(昭19)「小説」広島県生まれ。東京教育大学大学院修士課程修。北見工業大学勤務。評論「文学にあらわれる死」(ミングウェイの場合)「昭54、「文芸北見」10号)、小説「命日」(昭56、「北見文学」。「北海道新鋭小説集」7収)がある。(神谷忠孝)

平野香 昭和23・2・25(昭22)「短歌」美唄市生まれ。昭和23年夫病没後26年に岩見沢市役所勤務。市立双葉保育所長。55年退職して出刊。作歌は昭和30年から始め、37年「原始林」同人。歌集「北垂花」あり。55年岩見沢市文化連盟表彰、60年田辺賞を受けた。(田村哲三)

平野謹三 昭和31・1・21(昭30)「俳句」茨城県生まれ。二松学舎専門学校卒業。札幌西高等学校長を務めた。昭和30年ころより句作、のち寺田京

俳人協会会員。句集に「完流」「平井さち子集」「紅き葉」がある。「完流」句集。昭和48年牧羊社刊。24年から45年まで「万緑」を中心に発表した作品四九二句を収める。処女句集シリーズ第一集。序文で中村草田男は「真に独創性にかがやく一作者の面目―若々しい実感が説明への配慮を絶つた自在さで―作品化され続けている」と評しており、句集名は「完流や河口の秋天瓊瑤なし」の石狩河口の印象による。後半は「大根干すや北国の陽をつかひ果し」など優れた北方の詩情を展開している。(辻協系一)

平石幸一郎 昭和31・2・10(昭40・2・6(1923~1965))「俳句」函館市生まれ。道立函館商業学校卒業。家業の平石造船所を経て東京製塩工業経理部長。昭和15年「壺」創刊同人として編集に従事、俳句、随筆で活躍。28年「壺」休刊後東京に在って「鶴」に所属、石川桂郎と親交があったが「風土」に加わらず、晩年の短期間は「春汀」に投句。死後遺句集を編集したが未刊。(釜谷信夫)

平石貴樹 昭和23・10・28(昭22)「小説」函館市生まれ。東京大学大学院博士課程中退。現在東京大学助教。タイの娘とアメリカの黒人青年が鎌

子に師事。「寒雷」に学び加藤楸邨を師とする。「これ」「梓」同人を経て「陸」同人。「寒雷」「杉」所属。(木村敏男)

平野謙 昭和40・10・30(昭39・4・3(1907~1978))「評論」京都生まれ。本名朗。プロレタリア文学運動末期に知識人論を基軸とする批評を展開し、戦後、そのモチーフを深化させ、「政治と文学」論争の担い手となる。三派鼎立説を据えた昭和文学史論をはじめ、多領域で強い影響を持つ。「平野謙全集」(一三巻(新潮社)。「有島武郎文学展」(昭42)の折来道、「北方文芸」座談会(昭43・2)に出席。「伊藤整・亀井勝一郎文学展」(昭45)の折に伊藤整文学碑を訪れ、帰京後「私小説の限界―伊藤整の場合」(昭46・1、「文芸」)を書いた。(小笠原克)

平野直 昭和35・3・28(昭34)「小説」岩手県生まれ。高小卒。本道取材作に長編「新十津川郷」(昭17・9、東亜開拓社)がある。明治22年に奈良県の十津川郷から空知管内新十津川に分村移住した辛苦を描いた小説で、作者はその執筆の動機と意向とを「追憶『新十津川郷』」(昭49・6、「北方文芸」)のなかで語っている。(木原直彦)

平林幸七 昭和43(昭38)「詩」岩手県生まれ。9(1910~1983)

昭和31年より詩作をはじめ。北川冬彦の「時間」会員。詩誌「野性」に作品発表。「青芽」同人。34年自家版詩集「北極星」を刊行、その後「旅路」「幼年」など数多くの小冊子詩集を刊行した。木彫りをしながら逝去直前まで北海道新聞に投稿。名寄詩人協会賞受賞。

(小松英子)

平林たい子 ひらばやし 明38・10・3
昭47・2・17 (1905～1972) (小説) 長野県生まれ。本名タイ。県立諏訪高女卒。プロレタリア文学運動に入り、代表作に「嘲る」「治療室にて」「かういふ女」など。本道取材作に「トラビスト修道院」(昭26・8、「婦人公論」)や基地の町・千歳におけるアメリカ兵と日本人女性の実態を捉えた「千歳日記」がある。小説作品は無い。

(木原直彦)

平福百穂 ひらふく 明10・12・28
昭8・10・30 (1877～1933) (絵画、短歌) 秋田県生まれ。東京美術学校日本画科卒。同校教授。帝国美術院会員。「鴨」「七面鳥」等多くの優れた日本画を残す。明治35年伊藤左千夫を訪れ、根岸派歌人と親交を結び、「馬酔木」「アカネ」「阿羅々木」に作品を発表。その支援者ともなる。歌集「寒竹」は清淡にして気品高い。41年来道して阿寒や塘路湖を訪れ、多くの佳吟を残すと共に、「アイヌ」

を描いて画壇を讃嘆させた。

(小国孝徳)

比良暮雪 ひらふく 明31・9・20
昭44・2・12 (1889～1969) (俳句) 北海道生まれ。本名吉治。早川商店主森正則の援助を受け小樽高等商業学校へ進学。卒業後、恩義に酬いるため早川商店に勤めた。大正7年小樽高商在学中、松原地蔵尊、竹田岳石らと小樽高商緑丘吟社を創設、俳句の新風を鼓吹する。大正8年高浜年尾が同校に入学、ホトトギス系として小樽俳句会が結成され、高浜虚子の来道時、地蔵尊、岳石と共にホトトギスに入門する。11年小納迷人が転出したあと、札幌商業学校に教師として迎えられ、俳誌「北」を継承、第六号より一三号までを発行。佐瀬子駿、天野宗軒らと有無会を結成、丸善書店に勤めていた伊藤凍魚を知る。大正9年「雲母」に入会、飯田蛇笏、飯田竜太に師事、雲母小樽支社を設立し「雲母」同人として生涯を貫いた。大正12年小樽商業学校に転勤、昭和15年退職し北海製紙に入社取締役となる。「ホトトギス」「枯野」「鹿火屋」等関係した俳誌は多く、伊藤凍魚の「水下魚」には創刊以来協力、北方俳句の先達として活躍した。29年雲母寒夜句三昧個人賞受賞。34年「芝原のいづちとなく囁れり」の句碑を建立。著書「北海

じめ医学関係誌への発表も多いが、歌集はほかに「ぬべたま」(昭53)、「甘肅省」(昭57)等がある。(村井 宏)

平山 広 ひらやま 大15・2・20
(1926～) (近代文学研究) 空知管内新十津川町生まれ。昭和23年釧路拓殖実習場修。28年から59年まで国鉄赤平駅勤務。36年4月「啄木の歌とその原型」を自費出版。37年全国鉄文芸年度賞評論の部入選。岩城之徳著「定本石川啄木歌集」に資料提供。主として国木田独步、石川啄木の研究に従事。(木原直彦)

広井昭二郎 ひろい 昭2・2・23
(1927～) (短歌) 東京生まれ。官立無線電信講習所卒。国鉄青函連絡船通信士を昭和57年定年退職。昭和26年「アララギ」「ヒゲマ」、31年「北海道アララギ」に入会。武藤善友に師事。48年合同歌集「春の潮」に参加。(笹原登喜雄)

広川義郎 ひろがわ 大9・7・7
(1920～) (短歌) 新潟県生まれ。昭和15年「橄欖」入社。33年橄欖賞受賞。現在選者。橄欖時代の山下秀之助に師事して、た関係で22年「原始林」にも入社、中山周三や相良義重らの知遇を得た。同誌東京支社の重鎮で43年度原始林賞受賞。昭和18年応召。戦後は吉植庄亮の指導を受けた。もともと神社仏閣や民俗に関心が深く敬虔な精神土壌があり、清新な感

受性で洗練された語彙を駆使し、香り高い世界を築いている。歌集「海祭」(昭44)にその特徴が著しいが、一方では濃厚ながら気骨のある社会詠や生活詠も為している。ほかに合同歌集「原始林十人I」(昭27)がある。(松蟬の諸声立つは日ざかりに声明楽のごとく聞こえつ)

(村井 宏)

弘瀬 正 ひろせ 大3・12・30
(1917～) (小説) 高知県生まれ。「東北作家」同人を経て現在は釧路の「北海文学」同人。作品に「河鹿」(「文芸首都」)、「霖雨」(同)、「国道24号線」(「北海文学」)など。「溪流の風景」は「北海道新鋭小説集」九集に収録された。(木原直彦)

広瀬竜一 ひろせ 明40・6・15
(1907～) (短歌) 岐阜県生まれ。広島高師卒。大樹、士別、函館北高など各高校長を歴任。「北海道アララギ」会員。昭和33年「釧路野」、38年「十勝野」、43年「わらび野」の三歌集を刊行。地域の短歌指導に当たる。江別市在住。

(笹原登喜雄)

広谷マサ ひろたに 大6・9・27
(1911～) (詩) 宗谷管内利尻町生まれ。有朋高等学校卒。詩誌「渦」同人。北海道詩人協会会員。詩集「白い塔」(昭52、北書房)。人間愛を対象とした社会性のある詩に特色がある。(小松英子)

道樺太季題句集」「北海道俳壇史」「小樽俳壇史」。句集「雪祭」「ななかまど」「比良暮雪句集」。(菊地滴翠)

平松 勤 ひらまつ 大2・3・5
(1902～) (短歌) 赤平市生まれ。昭和12年北海道帝国大学医学部卒。14年召集を受け軍医として中国に渡り、戦後25年に札幌市で精神病院を開業。旧制滝川中学時代より啄木、牧水になじんだが作歌は昭和5年頃からで、茂吉、千櫨、憲吉らアララギ作家に傾倒。大学時代は内外の詩人や小説家の作品をむさぼり読み、特にハンス・カロッサからは大きな影響を受けた。昭和9年「橄欖」、11年「吾が嶺」に入社したが中断、北海道医歌人会の発足後まもなく山下秀之助のすすめで32年「原始林」入社。43年度の原始林賞を受賞。現在同誌選者。農民の血をうけた骨太さと熱いヒューマニズムが作風の根幹をなし、学生時代には有島武郎がかかわった遠友夜学校の教師として貧困家庭の子供を教えた。茫洋とした中に東洋的倫理をもつ直情的作品が多く、その傾向は第一歌集「葦吹く風」(昭45)に特に顕著である。「戦死者の眼窩にふかく積みし雪想ひ出でてこよひ涙流れぬ」。昭和48年に愛息の死に遭い、その悲傷に蔽われた歌集「幻日」(昭49)は49年度北海道新聞文学賞を受賞した。総合誌をは

広津和郎 ひろつ 明24・12・5
昭43・9・21 (1881～1968) (小説、評論) 東京生まれ。作家広津柳浪の二男。早稲田大学英文科卒。在学中に葛西善蔵らと「奇蹟」を創刊。代表作に「神経病時代」「風雨強かるべし」「松川裁判」など。菊池寛とのトラブルで話題になった「女給」(昭5・7、「婦人公論」)は昭和初期の銀座のカフェを背景にした風俗小説で、札幌生まれの秋田キクエ(小夜子)がモデル。(木原直彦)

広中白骨 ひろなか 明36・8・1
(1903～) (俳句) 山口県生まれ。本名守。大正12年南満州鉄道京城に入社。昭和20年撫順炭鉱鉄道に勤務し、22年引き揚げて北海道漁連に定年まで勤める。一六歳の時肺結核を患い句作をはじめ。ホトトギスに投句。高浜虚子、阿波野青歌に師事。「かつらぎ」札幌支部会長。かつらぎ全国同人会理事。ホトトギス同人。俳人協会会員。(白幡千草)



深沢七郎 ふかざわ 大3・1・29
(1906～)

〔小説〕山梨県生まれ。山梨県立白川中学卒。日劇ミュージックホールに桃原青二の名でギタリストとして出演しながら、昭和31年第一回中央公論新人賞に「楢山節考」を応募、当選し作家となる。「笛吹川」(昭33、中央公論社)で好評を得たあと「風流夢譚」(昭35・12、「中央公論」)を発表したところ、皇室に對する不穏当な表現ということで右翼テロ事件をひきおこした。そのため作者は右翼の目をさけて国内を警官に守られて転々とした。北海道では函館、札幌、苫小牧、旭川、稚内、釧路などを流れ歩き、のち「流浪の手記―風流夢譚余話」(昭38、アサヒ芸能出版)のなかで、道内各地での見聞を記している。40年から埼玉県でラブミー農場をひらき、今川焼の「夢屋」を東京で開店したりした。

(神谷忠孝)

深沢伸二 〔俳句〕樺太生まれ。本名昭二。昭和20年予科練より復員して北海道電力社員。22年細谷源二に師事して作句を始め、23年「北方俳句人」、翌24年同誌を改組した「水原帯」に同人として参加。45年源二没後、川端麟太、木下春影と共に代表に推されたが後に「水原帯」を退会。現在は「広軌」同人。現代俳句協会員。句集に「彷徨の泥」(昭46、水原帯)

社)がある。(園田夢蒼花) 深田久弥 〔小説、山岳紀行〕石川県生まれ。東京大学哲学科卒。東大在学中、手塚富雄、福田清人らと第九、一〇次「新思潮」を出し、「武人鑑賞録」を発表して横光利一、川端康成らに認められ「文学」同人に加わる。樺太を舞台に異種族間の醇朴な恋愛を描いた「オロッコの娘」(昭5・4、「文芸春秋」)が好評を得て作家生活に入る。昭和8年小林秀雄、武田麟太郎らと「文学界」創刊。函館郊外を舞台にした「文学道院」は昭和14年3月から北海タイムス(現北海道新聞)に連載され、短編集「廣修道院」(昭14、新潮社)に収録された。長見義三の「グラニット」(昭8・2、「創作派」)を絶賛して作家に育てるなど、新人発掘にも力を注ぎ、中島敦を世に送りだす。戦後は山岳紀行に新分野を開拓し「日本百名山」(昭39、新潮社)には作者独特の山岳哲学が語られている。日本山岳会副会長も務めた。

(神谷忠孝)

深野庫之介 〔短歌〕埼玉県生まれ。旧制中学卒業後、教員や官吏を勤めたほか中国石家荘で製粉工場長、引き揚げ後、札幌や苫小牧で新聞記者

者をするなど職歴多岐。昭和40年まで北海道に在住。中学三年頃より作歌、北原白秋に師事し曼陀羅社、第二巡礼詩社、紫烟草社、香蘭社を経て昭和44年「隕石」創刊、主宰。歌集に「深野庫之介短歌集」(昭40)、「北に流るる」(昭48)、「流恨」(昭53)がある。(村井 宏)

(村井 宏)

深海秀俊 〔小説〕渡島管内大野町生まれ。本姓依田。北海道学芸大学札幌分校卒。評論「野呂重雄論」は新日本文学賞佳作(昭46)。小説「クレージーボックス」は北教組文学賞(昭52)を受け「北海道新鋭小説集2」に収録。同作と「日の丸処分」は昭和52年、58年の北海道新聞文学賞候補となった。現在「創人」文学会主宰。(かなまる・よしあき)

深谷雄大 〔俳句〕朝鮮生まれ。本名会。東京都聖橋高等学校卒。山陽国策パルプにつとめ、昭和23年から句作。石原八束に私淑、「秋」創刊に参画。30年詩歌総合誌「叢雲」創刊主宰。33年同人誌「未明」編集。53年「雪華」創刊主宰となり、56年旭川文化奨励賞受賞。昭和43年句集「裸天」、56年「故園」、58年「白暝」、60年「雪二百句」を刊行。59年の「俳句実作入門教室」は新人育成の手引

きとなる好著。作風は八束の提唱する内観造型に心を砕き、雪をテーマに内奥の詩心が柔軟に輝く作品が多い。第八回秋賞も受賞、同誌の主要作家である。現代俳句協会員。〈白暝の自伝の荒野雪が降る〉(鳥 恒人)

(鳥 恒人)

福岡耕郎 〔俳句〕千歳市生まれ。札幌市農業協同組合経済部長、札幌協同振興社長を歴任。昭和24年土岐鍊太郎を識り「アカシヤ」に入会、28年同人、42年無鑑査同人となる。55年句集「冬楡」を上梓したが、風土に根ざした生活のうたごととして高く評価される。42年アカシヤ賞受賞。アカシヤ俳句会運営委員。俳人協会員。(岡澤康司)

(岡澤康司)

福木昭夫 〔小説〕十勝管内新得町生まれ。法政大学経営学部卒。印刷会社に勤務。詩集「北」(昭53、オホーツク書房)のほか小説「雨」(昭55、「文芸網走」)、「湖」(昭57、「文芸北見」)、「風葬」(「北海道新鋭小説集」8収)がある。(神谷忠孝)

(神谷忠孝)

福島運二 〔詩〕帯広市生まれ。旧制帯広中学卒。昭和23年池田保郎らと、詩誌「イデー」を創刊。25年「新詩人」同人として活躍。27年2月「オメガ」創刊。「A

TOM」同人となる。30年「眼年刊詩集」に参加、「影絵」を発表。31年札幌のさろん書房より詩集「貧しい甲羅」を刊行、馬淵美意子が序文を寄せている。34年「水柱」を創刊。城真真介のペンネームを使用する。ラジオ・ドラマや詩劇を帯広放送局より発表。「サイロ」の児童詩運動の発展にも貢献した。詩は根源的な文明批評であり、世界審判であると認識。愛の形而上学を思索する戦闘的ヒューマニズムの詩風は、人間の原罪をめぐる、次第に宗教的実存感情を反映し、独自の詩的宇宙を構築して注目を浴びている。(千葉宣一)

(千葉宣一)

福島昭午 〔小説〕北見市生まれ。古宇伸太郎(福島豊)の長男。中学校教師。「人間像」同人。同誌に連載(昭33・34)した「たんぶく物語」で注目され、父子の確執を描いた「父・福島豊」「人間像」92号)が大きな反響をよんだ。(針山和美)

(針山和美)

福島新松子 〔俳句〕石川県生まれ。本名正太郎。昭和7年結核罹患、療養中の10年句作を始め「葦牙」「南柯」に投句して異彩を放ったが惜しくも夭折。俳句短歌隨筆を収めた遺稿集「癒えなきものを」がある。

福島昌美 〔俳句〕長野県生まれ。炭鉱員の後電器店経営。昭和26年「海霧灯」入会。翌年「寒雷」に入会。昭和29年第一回寒雷賞受賞、翌30年第二回寒雷賞受賞、寒雷同人となる。30年同人誌「塔流」を創刊主宰した。昭和28年北海道炭鉱俳句コンクール第一位受賞。33年句集「坑熱」刊行。現代俳句協会員。(鈴木青光)

(鈴木青光)

福島瑞穂 〔詩〕東京生まれ。父は宗教家で「クラーク先生詳伝」などの著者逢坂信吾。新潟県立長岡高女卒。東京の出版社教文館勤務中に詩に親しみ、札幌に移って昭和16年自家版詩集「雲のうた」刊行。阿部(森)みつ、小島まさ代と詩誌「木零」を発刊。戦後「野性」同人となり小説家古宇伸太郎(福島豊)と結婚。詩集「心より翔びたつ黒揚羽蝶」(昭58・2)。現地詩人の会会員。

(佐々木逸郎)

福田清人 〔小説、児童文学〕長崎県生まれ。東京大学国文科卒。第一書房に入社して伊藤整らの「文芸レビュー」に参加。代表作に「脱出」や北海道文学にも触れた「日本近代文学紀行」など。短編集「脱

出(昭11・9、協和書院)に収められている「流謫地」は樺太放浪のチェーホフにわが夢を託した佳品。満蒙開拓の長編「日輪兵舎」(昭14・12、朝日新聞社)に北海道が散見され、短編集「憧憬」(昭17・9、富士書店)の「北海」は北千島もので、昭和13年の旅の所産。ほか取材作に「北洋航路」(昭13)、「濃霧期」(昭14)など。(木原直彦)

福田敏雄 とよお 明43〜昭11・1・27(1910)〜1936)〔詩〕旭川市生まれ。昭和2年旭川中学卒。江別の発電所に勤めたり、旭川市役所の土木測量臨時職員。病弱、寡黙で真摯、温雅な生涯を結核で早逝した。遺稿詩二七編を集め「福田敏雄詩集」(昭12)を発刊。(佐藤喜一)

福谷采吉 くみたか 昭3・2・10(1928)〜昭56・9・30(1938)〜1981)〔詩〕樺太大泊生まれ。陸軍士官学校から鳥取大学に進むが病のため退学。療養生活で俳句に親しみ俳誌「アカシヤ」に属した。昭和30年室蘭へ移住し詩誌「詩の村」「ペンと薔薇」(創刊同人)で旺盛な発表活動を始める。45年第一詩集「ダスト」を刊行。その詩風は痛烈な現状批判を特徴とした。その後「ベクトル・箱舟」を興したが病没。(光城健悦)

福永武彦 ふくのへ 大7・3・19(1918)〜昭54・8・13(1918)〜1979)〔詩、小説〕福岡県生まれ。東京大学文学部卒。昭和13、14、15、19、26年と来道、開拓地を視察し、若干の歌を残している。歌は万葉調。安田巖城はその実弟である。(中山周三)

藤井自染 ふじい 明26・2(1911)〜昭41・5・28(1933)〜1966)〔川柳〕滋賀県生まれ。本名富治郎。大正7年から川柳を始め八雲町に在って七賢人、秋堂ら三人で「三頭会」をつくる。俳句もよくし講談社の増刊号で一等、二等に入選する。昭和38年石坂千鳥らと宗谷川柳社(稚内)創立、同好者の発掘育成に力を尽くし39年主幹となる。40年句集「あしあと」処女出版。円熟した作品を発表した。(一)刀に任せて明日がある命(池水竜生)

藤江郁夫 ふじえ 昭29・5・8(1915)〜)〔小説〕静岡県生まれ。本名大滝和男。北海道大学医学部卒。静岡済生会病院脳神経外科勤務。北大芸部の「春楡」創刊号に発表した「セルロイド人形」が「北海道新鋭小説集」七集に収録。「踊る夏」(昭56・11、「北方文芸」)がある。(神谷忠孝)

藤枝静男 ふじえ 明40・12・20(1916)〜)〔小説〕静岡県生まれ。本名勝見次郎。八高時代に平野謙、本多秋五を識り生涯の盟友となる。志賀直哉に傾倒、戦後「近代文学」から出発し作家とな

岡県生まれ。東京大学仏文科卒。昭和17年中村真一郎、加藤周一らとマチネ・ポエティックを結成。20年に急性肋膜炎を患い、その予後の養生のため帯広市に疎開した。敗戦とともに帯広から岡山まで放浪し、途中信州上田に滞在して「風土」を書きすすめる。21年4月再び帯広に戻り、帯広中学校(現柏葉高)で英語教師をつとめ、22年上京して文筆活動に入る。帯広時代はマチネ・ポエティックの仲間を開拓に従事していた鷹津義彦の縁で「北海文学」(昭22・6)に詩や翻訳を発表し、「凍原」(昭21・10)の座談会「世界文学主流の中に日本文学の位置を探る」にも出席している。処女詩集「ある青春」(昭23・7、北海文学社)は「北海文学」同人の藤本善雄(現帯広藤丸社長)の援助で出版された。「心の中を流れる河」(昭31・12、「群像」)は帯広を舞台にしている。(神谷忠孝)

福村洋子 ふくむら 大14・6・17(1919)〜)〔短歌〕松山管内江差町生まれ。「原始林」「鴉族」「彩北」に所属。以前「アララギ」「歩道」に籍をおいたことがある。写実を基調とした細やかで冴えた響きをもつ観照が特徴。昭和35年原始林田辺賞、39年鴉族賞、43年鴉族新田寛賞をそれぞれ受賞。近年は古代からの女流歌人の評伝をよくし、「彩北」では積

藤川正 ふじがわ 大3・1・3(1918)〜昭20・4・23(1914)〜1945)〔短歌〕旭川市生まれ。昭和6年庁立旭川中学校卒。旭川地方裁判所検事局に勤務し、16年東京の検事局に転勤。肺結核により没した。昭和8年「アララギ」入会。土屋文明、樋口賢治に師事。10年樋口作太郎らと旭川アララギ会を発足。44年弟の藤川基、小森汎が「藤川正歌集」を刊行。都会的な感覚で抒情的に歌い上げた新鮮な作品が多い。(笹原登喜雄)

藤川日出尚 ふじがわ 昭9・4・28(1934)〜)〔詩〕網走管内置戸町生まれ。国学院大学卒。藤本洋一の筆名での詩作品発表も見られる。大学在学中詩誌「芽」に参加。「脈動」編集。早大、国学院大、都立大の学生らによる「現代行動詩派」に参加。卒業後帰郷し、「北見文学」を経て昭和40年「れん」創刊に参加、四号より編集代表。一六号(昭48)で休刊したが、57年復刊一七号を発行し以後季刊で続刊。(永井浩)

藤川碧魚 ふじがわ 大9・6・15(1916)〜)〔俳句〕旭川市生まれ。本名純一。昭和16年明治大学卒。直ちに入隊。20年

極的に批評を担当するほか道南歌壇でのリーダーでもある。(村井宏)

福本和夫 ふくもと 明27・7・4(1912)〜昭58・11・16(1934)〜1983)〔政治運動、文化史〕鳥取県生まれ。東京大学卒。革命運動史上「福本イズム」で知られる理論で大きな影響を与えた。釧路刑務所在監も含め一四年間の獄中の思索から戦後の絵画論や回想録、文化史論がつむがれた。「北方文芸」に「日本ルネッサンス史論から見た幸田露伴」(昭47・10、法大出版局)が連載された。(小笠原克)

福本時雄 ふくもと 大正6・2・8(1917)〜)〔詩〕宗谷管内中頓別町生まれ。昭和10年詩誌「プリズム」創刊に参加。11年「新詩塔」、12年名寄詩人連盟に参加、機関誌「高台」を編集。12年詩集「私は考える」出版。13年東京へ転出、歌謡詩誌「リラ」に参加。13年詩集「太陽のない都会」、14年「プリズム以後」発刊。21年「亜寒帯」参加。48年詩誌「朔嵐」に参加。現在名寄詩人協会長。(山田政明)

福本日南 ふくふ 安政4年(1827)〜大10・9・2(1867)〜1921)〔短歌〕福岡県生まれ。本名巴、のち誠。明治11年司法省法学校に学び、後年、日本新聞記者、九州日報社長。国士としても活躍した。子規や愚庵とも親交があった。「日南集」に

復員。一時北海日日新聞社に籍をおいたが昭和22年から50年まで北海道電力に勤務。父しげ草は虚子門の俳人。母雪子も俳句をたしなむ家庭環境にあった。西本一都が旭川に赴任以来、その指導を受けた。「新樹」「若葉」を経て、現在「雪溪」「白魚火」の同人。昭和45年度白魚火賞受賞。50年白魚火叢書第九集として句集「しろきのんど」を上梓。師西本一都の言には「強烈な感覚美のあふれる『超写生』ともいふべき技法を駆使し、ローカルカラー豊かな骨格の太い、手ごたえのある作品をものし得る」とある。俳人協会会員。(蛸蛤の触れあふてなる湖上かな)

伏木田土美 ふきで 昭15・1・5(1940)〜)〔詩〕日高管内浦河町生まれ。本名幸子。「現代詩手帖」に投稿、詩誌「明日」「銚」を経て「波」同人。詩集「囚われの季節」(昭40・1、東京思潮社)。(小松英子)

藤倉徹夫 ふさぐ 昭17・1・3(1916)〜)〔小説〕朝鮮平城生まれ。小樽商科大で中退。江別市役所勤務。昭和45年「江別文学」を創刊。主な作品として「山田義夫の生涯」「街も霧」「灯火」を「江別文学」に発表。同誌の中心的存在。(小松茂)

88) (小説) 日高管内静内町生まれ。北海道大学文学部卒。東京在住中は田中小実昌らと交遊、習作を書く。「札幌文学」同人。作品は「底」「粉雪黒い」「みつみつ久米の子ら」「札幌文学」。「砂」「川霧の流れる村で」「北方文芸」などがあり、「川霧の流れる村で」は第二回北方文芸賞を沢井繁男と共に受賞した。石狩川河口付近を素材にすることが多い。(小松 茂)

藤田旭山 明36・1・16 (1963) (俳句) 士別市生まれ。本名国道。昭和2年明治大学卒。在学中より室積徂春に師事し、昭和2年「ゆく春」創刊と同時に参加。同年西山東溪と共に「旭川ゆく春会」を発足させ43年まで継続した。ゆく春一〇周年記念式で徂春主宰より表彰される。昭和13年「旭山第一句集」を上梓。28年第六回旭川市民文化賞受賞。41年第二句集「虚心抄」を上梓。43年には「俳海」を創刊した。主要作家には元老格の西山東溪ほか村田悠水、河村岳葉、飛世美代子、小堀芹路ら、ゆく春直系のほか、個性尊重を指導理念とする徂春門高足のこととて、かつては独自の世界を歩もうとする高橋貞俊、園田夢蒼花等にもその門を閉ざさなかった。昭和54年秋、旭川市郊外の旭山公園の中腹に建てられた句碑には「雪虫

女卒。昭和2年藤田旭山と結婚。翌3年より「ゆく春」に投句。16年同人となる。39年より「天狼」に投句、山口誓子の指導を受ける。43年旭山の「俳海」創刊以来発行を助け作句活動を続けた。55年旭山の手で生前の作五百余句を収める遺句集「月女句集」が上梓された。(後藤軒太郎)

藤田光則 大11・3・1 (1936) (詩) 網走管内湧別町生まれ。青年学校教員養成所中退。加藤愛夫に私淑し、昭和25年第一詩集「牧笛」を刊行。33年富樫啓彦郎編集により札幌で刊行した「月刊詩評」を支援した。58年第二詩集「水柱の花」、60年第三詩集「凍裂」を刊行。札幌の詩誌「炎」「現地」同人。ほかに随筆集「臍なし人生」がある。(佐々木逸郎)

藤田 隆 明36・2 (1963) (短歌) 旭川市生まれ。本名永伯。「名寄集産党事件」に連座。旭川で映画館主任、士別市、朝日町で映画館主。歌集「母の乳房」(昭21)。歌誌「あさひね」入会。「短歌人」「放牧」同人。(佐藤喜一)

藤村 操 明19・7・明36・5 (1886-1963) (哲学) 明治30年代の哲学青年。父が大蔵省退官後、札幌市田銀行頭取、北海道電灯社長などになっ

の夕ぐれ青し旭川」が刻まれている。俳人協会員。北海道俳句協会顧問。「旭山第一句集」(1913) 大正13年から昭和12年までの三千余句の中から室積徂春の選を得た一千余句を収録。耳に爽やかな、舌に滑らかな言葉を選ぶのに心を砕いた、と著者は跋文に記している。「無色透明の水の如き淡泊さ」とは徂春の旭山作品評。平明で味わい深い作品群は、ものにはこだわらぬが、日本語をこよなく愛する人柄をうかがわせる。(月の野へ帰せし人を思ひけり) (後藤軒太郎)

藤田紫水朗 明25・12・23 (1892-1982) (俳句) 秋田県生まれ。本名正治。大正初年渡道、函館新聞社(のち統合により北海道新聞社)に入社、定年まで勤めた。句作を始めたのもこの頃で、大谷句仏の「懸葵」に所属、大正7年に懸葵函館支部を結成したが、その後吉田冬葉(冬葉没後は細木芒角星が継承)の「懸祭」に転じ昭和7年には懸祭函館支部を結成し後進の育成指導に当たった。しかし戦争の激化により一時支部を閉鎖、戦後の昭和22年函館懸祭句会として再発足した。特に37年自ら編者となって刊行を開始した年間合同句集「懸祭」は56年刊の第二〇号まで枚枚として続き道南俳壇に気を吐いた。

たので操も札幌一中(現札幌南高)に入学したが、父早逝のため一家帰京、開成中学、京北中学を経て明治35年9月一高に入学。翌年4月着任の夏目漱石の講義を受けた。その翌月、「巖頭之感」を樹木に刻んで華嚴の滝に投身自殺。歴史学者那珂通世の甥。(和田謹吾)

藤本和子 大14・1・6 (1936-1961) (短歌) 札幌市生まれ。立札幌高女卒。北大法学部図書室に勤務していたが、胃ガンで死去。昭和22年「羊蹄」、24年「アララギ」に入会。土屋文明に師事。28年「あかだも」の編集発行に当たる。(笹原登喜雄)

藤本尚子 昭19・4・24 (1964) (小説) 札幌市生まれ。本名ヒサ。啓北商高卒。「北象文学」同人。作品に「ガダルカナルへの道」(昭58)「北象文学」14号。「北海道新鋭小説集」8号、「血」「北象文学」16号)があり、戦争へのこだわりを一貫させている。(神谷忠孝)

藤本英夫 昭2・3・23 (1927) (考古学研究) 留萌管内天塩町生まれ。北海道大学経済学部卒。昭和26年静内高校教諭となり、アイヌに関する研究を始めた。のち星園高校教諭に移り、札幌市が刊行した「札幌百年のあゆみ」の編集員となる。昭和46年に北海道

個人句集は「赤松」(昭36)、「順風行路」(昭46)、「俳句巡礼」(昭50)の三冊。(山風も神威に澄みて鵲のこえ)を刻んだ句碑が函館八幡宮境内に建っている。元道南俳句協会会長。49年函館市文化賞受賞。(園田夢蒼花)

藤田清次 明42・7・3 (1909) (評論) ソウル市生まれ。東京大学英文学科卒。北大、東京女子大教授を経て、現在梅光女学院大教授。有島の「生れ出づる悩み」の英訳(昭30)、北星堂刊行。「サッカー研究」(昭38)、「評伝ジェーン・オースティン」(昭56)がある。(神谷忠孝)

藤田素月 明34・9 (昭59・10) (俳句) 岩見沢市生まれ。本名竹次郎。鉄道講習所卒。国鉄勤務。大正8年ごろより俳句を始め、「時雨」「曉雲」に拠る。後「葦牙」で長谷部虎杖子に師事、昭和16年より同誌編集員として活躍した。虎杖子没後も同誌麗日集同人として穏健な作風で後進を指導した。編著書に「長谷部虎杖子句集」(昭51)、著書に句集葦牙叢書第二二集「実生の柿」(昭54)がある。(佐々木子興)

藤田月女 明40・6・19 (昭48・6・5) (1907-1973) (俳句) 神奈川県生まれ。本名松枝。大正14年神奈川高

教育庁に入り、56年退職。現在北海道埋蔵文化財保護センター常務理事、同文化財保護協会専務理事。著書は、アイヌの葬制と、考古学時代の北海道の葬制を主内容とした「アイヌの墓」「北の墓」、アイヌ研究を行っているうちにアイヌ民族の血をひくアイヌ研究者である知里真志保に深く興味を持ち研究した「銀のしずく降る降る」「知里真志保の生涯」(いずれも新潮社)。共著として「札幌百年のあゆみ」「札幌百年の人びと」がある。(小野規矩夫)

藤森成吉 明25・8・28 (昭52・5・26) (1892-1977) (小説、劇作) 長野県生まれ。諏訪中学、一高を経て大正2年東京大学入学。処女作「波」(のち「若き日の悩み」と改題)で認められた。5年大学卒。岡山の六高に赴任したが創作熱押さえがたく半年で辞任。有島武郎の知遇を得て「研究室で」「煩惱」「旧先生」など多彩な作家活動の一方で、日本社会主義同盟、「種蒔く人」などとかかわる。13年から一年半の労働生活を体験(「狼へ」がその記録)、有島がモデルの戯曲「犠牲」(大15)、流行語になった「何が彼女をそうさせたか」(昭2)を発表。昭和3年ナップ初代委員長としてプロレタリア文学運動の担い手となった。戦後も種々の解放運動に献

手となった。戦後も種々の解放運動に献

身。「渡辺華山」(昭46、改版)ほか多数。「東京へ」(大12・8、改造社)には遠軽家庭学校での労働体験や修道院訪問を踏まえた「少年の群」「山湖」若き修道者」などを収録(北海道文学全集「5収」)。(小笠原克)

藤森蝶二 詩誌 明35・6・25、昭57・8・22 (1902~1983)「短歌」空知管内新十津川町生まれ。本名純義。農業学校中退後、農業、代用教員、農産物検査員、役場吏員等を勤めた。年少の頃より文芸を好み青年団の機関紙に短歌を投稿、大正13年には自ら歌誌「またたび」を編集した。戦後土岐謙太郎と共に句誌「アカシヤ」の発刊に努め、昭和38年夫人とみ子(筆名森こずゑ)と共著句集「雨祭」を上梓。短歌は「ぬはり」「いしかり」を経て「創作」同人。「原始林」にはこずゑと共に32年入社。ほかに地元歌誌「水芭蕉」「滝川短歌」にも関係した。自然や人事を対象に情念のじんだ重厚な詠風をもち、42年こずゑとの共著歌集「落暉」を出した。書や弓道も能くし56年滝川市文化功労賞を受賞。58年新十津川町ふるさと農園に歌碑建立。〈さくら花いまだも咲かぬ故里の山の雪見ゆうすくれなゐに〉(村井宏) 藤森氷魚 詩誌 生没年不詳(俳句)生地不詳。本名甲子治郎。牛島腰六が大

とめる。(大家陽子) 淵田隆雄 詩誌 昭12・4・4、(58~)「小説」滋賀県生まれ。昭和31年滋賀県立高島高校卒。「アイヌ遊侠伝」が第七回(昭41下期)小説現代新人賞を受賞。江差を舞台とした鉄火場のなかの男心を描く。(木原直彦) 舟橋精盛 詩誌 大4・10・17、昭53・9・27 (1915~1978)「短歌」十勝管内浦幌町生まれ。本別の小学校を卒業後家業を手伝いながら口語歌を作り、昭和9年に私家版の第一歌集「少年期」を編む。13年召集されて中国へ。その頃「満洲歌人」「ポトナム」、詩誌「蠟人形」へ歌と詩を投稿。当時、宮格にも大陸にあり、それが機縁で両者の交流は晩年まで続く。16年除隊後、帯広土木現業所に勤務し、詩作に没頭。「律」「野性」「情緒」「時計台」等に関係。20年「北方新潮」を創刊するが二号で廃刊。同年結核性両側股関節炎を発病、終生松葉杖を使っていた。21年「原始林」創刊にも参画するが、23年帯広で入院中大森卓らと「銀の壺短歌会」を結成、それを母体に「山脈」を26年創刊、二八号まで続く。29年新田寛、寺師治人らと「鴉族」創刊、没年まで原始林選者並びに鴉族編集人。30年玩具店を開店、33年歌人の結城伶子と結婚、好伴侶を得、坐りきりの店頭の椅

正10年「時雨」を創刊したとき副将格として参加。創刊号よりしばらくの間会報、課題句の選を担当。昭和12年「葦牙」創刊後は在札筆頭同人として、大島扶老竹、高野草雨、長谷部虎杖子らと交代で雑詠選に当たったが、16年虎杖子が事実上の主幹となってから誌上にその名を見るのがなくなった。以後消息不明。(山岸巨狼)

藤谷和子 詩誌 昭2・4・15、(58~)「俳句」樺太真岡生まれ。庁立真岡高女卒。北海道新聞俳壇の伊藤凍魚選を受け昭和34年「氷下魚」入会。同函館支部で杉野一博、斎藤高原吉らの指導を受ける。36年氷下魚新人賞受賞。「氷下魚」廃刊のため39年「四季」創刊同人として参加、後に編集同人。40年掌編小説「静脈」で第二回四季賞受賞。51年第八回四季年度作品努力賞を受賞。現代俳句協会員。(辻協繁)

藤原一確 詩誌 大15・2・25、(68~)「俳句」十勝管内足寄町生まれ。本名義男。樺太敷香青年学校中退。海軍志願。後警察官となり昭和59年退官。19年から「はまなす」所属。47年はまなす賞受賞。「これ」同人。合同句集に「秋琴」「無意根」がある。(竹田てつを) 藤原 定 詩誌 明38・7・17、(68~)「詩、評論」福井県生まれ。法政

子を社会の接点として終生動く磊落に生活と人情をうたい続けた。〈吾のため夜の蚊をとると臥床めぐり妻のうつ掌の寂しき音や〉。歌集は「少年期」のほか「無機」(昭40)、「凍湖」(昭43)、「大熊座」(昭51)、「遺歌集「残日」(昭55)、「鴉族合同歌集「凍日」(昭36)、「あらくさ」(昭48)など。53年帯広市文化賞受賞。54年帯広市緑ヶ丘公園に歌碑建立。(村井宏)

船山 馨 小説 大3・3・31、昭56・8・5 (1914~1983)「小説」札幌市生まれ。庶子。西創成小学校を経て大正15年札幌第二中学校(現西高)に入学。昭和6年に卒業し、翌年早稲田大学第一高等学院に進んだ。翌8年除籍されて札幌に帰る。9年明治大学予科に入学して舟橋聖一の教えを受ける。10年初めての小説「原稿料」を発表。12年に明治大学を中退し、北海タイムス(現北海道新聞)本社に入社。14年には新聞四社連盟の文芸記者として東京に赴任した。15年に寒川光太郎の誘いで同人誌「創作」(のち「新創作」)の同人となり、編集兼発行人の佐々木翠(本名坂本春子)を識つてのちに結婚。同年牧屋善三、野口富士男らと「青年芸術派」を結成。16年の「新創作」に戦前の代表作「北国物語」(昭16・12、豊国社)を連載した。

大学哲学科卒。倉田百三、谷川徹三、三木清に師事し、詩誌「歷程」同人。昭和10年大陸に渡り、満鉄調査部に勤務。戦後帰国、真壁仁、更科源蔵らの詩誌「至上律」の創刊に参画し、後「花粉」「オルフェ」を創刊、昭和27年夏、更科の案内で丸山薫、山室静と道内を歩き「摩周湖」の詩がある。詩集に「天と地の間」「距離」のほか評論、訳詩が多い。(更科源蔵)

二村不二夫 詩誌 昭4・1・31、(1923~)「短歌」十勝管内音更町生まれ。郷土の俳人、書家木堂の長男。昭和24年「文芸と創作研究会」に入り作歌をはじめ。NHK帯広ラジオ歌壇を通じて野原水嶺を知り、27年「新壘」入社。水嶺の新壘退社に従い29年「辛夷」に入会する。47年第一回四回辛夷賞を受賞。58年第一歌集「冬の音」を雁書館より発刊。これには、若くから病気がちであったが、生まれながらにして農業後継者としての道を歩み、酷寒の大地に生きる農民としての苦烈な日々がナイーブな詩精神によって包みこまれるようにうたわれている。現在も畑作農業に従事し、町民生児童委員、福祉協議会評議員、公民館運営委員などを歴任。辛夷運営委員、編集委員のほか、音更短歌同好会幹事、町民文芸「おとふけ」の編集委員などをつ

この年椎名麟三を識り終生の交わりを結ぶ。17年には「北国物語」と「三月堂」が芥川賞の参考候補作になる。20年新潟県の山村に疎開。21年故郷ものの短編集「稚情歌」を創美社から刊行し、「笛」「塔」で野間文芸賞奨励賞を受賞した。敗戦直後には第一次戦後派の旗頭として華々しく活躍したが、23年大宰治の入水自殺で急きょ朝日新聞に「人間復活」で登板したものの準備不足のためヒロポン中毒となり、以後低迷する。この時期に北海タイムス紙上で八木義徳と道内同人雑誌評を担当。39年本庄陸男の文学碑除幕式に参道し、これがきっかけで40年から「石狩平野」を北海タイムスに連載、「続 石狩平野」もあり、以後「お登勢」(昭44・4、毎日新聞社)、「見知らぬ橋」(昭46・9、講談社)、「釧火野」(昭48・7、朝日新聞社)など本道を舞台にした豊潤な長編を世に問うて国民的歴史ロマン作家の地歩を確立、吉川英治文学賞を得た老人文学の秀作「茜いろの坂」(昭55・9、新潮社)を書きあげて没した。同日妻春子も没。50年日高管内静内町に文学碑「お登勢」が建ち、54年には北海道新聞文化賞を受賞した。

「石狩平野」(詩誌) 長編小説。正編(明治編) 昭和40年7月1日、41年8月31日北海タイムス連載。河出書房新社

(昭42・8)刊。続編(大正・昭和編) || 昭42・1・4、43・3・8、北海タイムス連載。河出書房(昭43・4)刊。明治、大正、昭和の三代を辛苦のなかで明るく強く生き抜いたヒロイン鶴代の人生を、北海道(札幌)の歴史をタテ軸にして壮大に描く。三〇〇〇枚におよぶ愛と苦難の大河ロマンで、42年に第一四回小説新潮賞を受賞した。「氏の長い間の作家体験の総力を集中した感」(伊藤整)さし給佐藤忠良。(木原直彦)

布野栄一 1924 大12・3・15 (1623) (近代文学研究) 松本市生まれ。日大を経て北大旧制大学院修了。日大文学部教授。「石狩川」が描いた開拓集団(昭31、「日本文学」)、「小林多喜二」の青春の一時期(昭37、「位置」)などの評論があり、著書に「昭和文学思潮」(昭46、新典社)神谷忠孝との共著、「本庄陸男の研究」(昭47・4、桜楓社)、「政治と文学論争」の展望(昭59・3、同)がある。(神谷忠孝)

文梨政幸 1909 昭9・8・25 (1934) (詩) 網走管内興部町生まれ。幼少頃、両親と共に満州の生活経験を持つ。昭和28年頃より詩作、詩誌「青芽」に参加。次いで札幌の「木星」に参加。以後、四国の「開花期」に参加。小説にも手を染め楡文学会や「留萌文学」(全

天明3年(1783)西遊して「西遊記」を著す。8年幕府巡見使三枝十兵衛等に随従して東北、蝦夷地を巡り「東遊雜記」を著した。のち幕命によって江戸付近の測量図を作り、郷里に帰って没した。その末裔は函館市に居住している。(永田富智)

古川豊葉 1912 明45・3・10 (昭32・7・28 (1912~1957)) (詩) 空知管内新十津川町生まれ。本名豊作。浦幌尋常高等小学校卒業。浦幌で詩活動をはじめ中央の詩誌に投稿。警察官となり函館に勤務。中国従軍中肺結核にかかり、帰国して傷痍軍人北海道第二療養所へ入所。同所詩部会「凍原帯」の編集にあたる。「野性」同人。退所後中金二、佐々木逸郎と新十津川で「道標」創刊、編集、発行にあたる。肺結核で札幌に没した。(佐々木逸郎)

古川春雄 1911 大11・3・23 (1623) (詩) 岩見沢市生まれ。法政大学高商部中退。ローカル紙記者、発電所建設で北海道各地を転々とし、その後徴用され軍隊に。詩は中学三年頃より書き、戦後、総合雑誌「創建」の発刊に参画。昭和24年より岩見沢市で書店主。個人詩誌「水冠」を主宰。時空を超絶した北海道を背景とする作品が多い。詩集「極冠燭哭」(青土社)で第一三回北海道詩人

通北海道文学」に参加。51年詩集「郊外」を刊行。「道北文学」を主宰する。「核」「北域」同人。「郊外」によって北海道詩人協会賞、58年下川町文化奨励賞受賞。北海道詩人協会員。(山田政明)

冬木 薫 1914 昭14・6・4 (1639) (小説) 土別市生まれ。本名佐藤充孝。北海道学芸大学(現教育大)旭川分校卒業。高校教諭。佐冬充孝、雪原昂などのペンネームで短歌を発表。「天北の詩人たち」(昭59・12、「すばる」)で第八回すばる文学賞の佳作に入選した。(神谷忠孝)

冬木桃六 1908 大8・3・20 (1619) (俳句) 札幌市生まれ。本名沢口五郎。砂川の三井東庄に定年まで勤めたあと広島町に居住。俳句は昭和21年「東庄俳句」で始め、22年以後は細谷源二に師事して「北方俳句人」に参加。24年「水原帯」創刊同人。40年「粒」創刊同人。34年には第八回水原帯賞を受賞している。30年に発表した「氷山に屋あり空気羽ばたけり」は俳壇に社会性、前衛俳句論議が起る以前の先駆的作品で桃六の文名を高めた。また35年の「俳句評論」に、俳句の難解説と難記性について論じ「十七音定型に縛られる必要は無しが各人における音律の研究こそ、今後の課題となすべきであろう」と述べている

協会の受賞。(伊東 廉)

古川善盛 1902 昭2・12・8 (1925) (詩) 青森県生まれ。樺太豊原工業学校から陸軍士官学校に進み復員。函館税関勤務中肺結核にかかり札幌の幌南病院に入院。昭和31年詩誌「扇状地」を創刊し編集、発行にあたり「野性」の富樫翁老郎と交わる。「野性」に参加し同人となる。堀井利雄の「だいたいある」(函館)同人を経て河野文一郎の「核」(参加し、38年堀越義三、江原光太、佐々木逸郎らと「詩の村」を創刊した。函館税関を退職しフリーの編集者となり広報誌、社史、郷土史の編集に携わり、59年堀越義三の「現地」(札幌)同人となる。編・著書に「土工・玉吉」(昭49)、「続土工・玉吉」(昭52)、「円山百年史」(昭52)、「日塔聡詩集」鶴の舞・鶴の舞以後抄(昭57)ほかがある。(佐々木逸郎)

古瀬吟風楼 1901 明34・9・2 (1901) (俳句) 空知管内長沼町生まれ。木名岩吉。留萌、弟子屈と移住。この間写真館、植林事業を営んだが現在は弟子屈町で摩周植物園経営。俳句は昭和7年花の本秋邸に師事。「草上」「雁来紅」「曉雲」「緋衣」各同人を経て現在「水原帯」山嶺同人。「いそつじ」編集責任者。46年細谷源二の序文を得て句集「百歳の母」を水原帯発行所から上

る。その桃六自身は定型を重んじこれにくずすことがない。句集「上棟」(昭56、粒俳句会)で北海道俳句協会の鮫島賞特別賞を受けた。現代俳句協会員。(山田緑光)

ブランデン(エドモンド) 1896 11.1~1974.1.20 (詩) イギリスの桂冠詩人。オックスフォード大学出身。批評家でもある。大正13年より昭和2年まで東大で英文学を講じ、第二次大戦後昭和22年より三年間、英国文化使節として来日、各大学で講演。北海道には24年7月来道。25年刊行の「日本遍路」(富山茂記)に、「旭川に旅して」「層雲峡にて」「彼方へ、そして昔に」「北海道の夢」などの紀行文と「アイヌの子」の詩一編が掲載されている。(史料源蔵)

古川輝子 1904 明38・4・4 (1605) (短歌) 小樽市生まれ。筆名伊藤温子。古川製菓社長。日本橋高女在学中より竹久夢二などと交友を持ち、詩語の世界に魅せられ作歌。大正14年「芸術と自由」同人。54年新短歌人連盟賞受賞。歌集「零時の貌」刊行。(吉田秋陽)

古古松軒 1926~1907 (地理学) 岡山県(備中国下道郡)生まれ。名は正辰、平治兵衛と称する。測量、地理学に長じ、

梓した。現代俳句協会員。(川端麟太)

古田一也 1904~1979 (俳句) 旭川市生まれ。本名一也。札幌通信局に勤務して退職。昭和8年職場の玫瑰会入会、これを母胎に21年1月富安風生を主選者に迎え、小原野花、水野波陣洞等と「はまなす」創刊、24年四二号まで編集発行担当。43年札幌郵政若葉会を結成、若葉系俳人の育成に尽くす。俳人協会員。(新明紫明)

26年汀花は主幹を辞し、冬草がこれに代わる。以後現代俳句への傾斜が目につくようになる。創刊以来定期刊行を崩すことがなかったが、高血圧進行、昭和35年1月号を以て突如終刊宣言を行った。その後俳句から一切手を引き、東京へ引き揚げた。北海道俳句協会創立の功労者。句集に「冬霧」(昭34、緋衣社)がある。〈装いて愚をよしとしぬ冬の霧〉

(山岸巨狼)

古田八白子 明27〜昭14・10
20 (1894〜1939) 〔川柳〕出生地不詳。本名盛蔵。大正12年田中五呂八とともに「川柳水原社」を興し新興川柳運動に参画、五呂八の片腕となる。五呂八没後、「水原」を引き継ぎ昭和13年8月第八三号(最終号)まで発刊。「田中五呂八遺句集」を刊行。

古田裸人 明30・1・16〜(昭8)
〔俳句〕三笠市生まれ。本名信一。池田町で写真館を営み、のち余市、栗山に移り終戦後廃業。俳句は大正10年牛島陸六の「時雨」創刊に参加。のち青木郭公の「暁雲」にも拠り「時雨」「暁雲」の幹部同人として活躍。昭和12年「時雨」廃刊後も引き続き「葦牙」の長谷部虎杖子を扶け、その没後も「葦牙」長老同人として活躍。札幌市在住。

(佐々木子興)

草野心平編「逸見猶吉詩集」(昭23)がある。(小松瑛子)

ほ

星 剛 昭10・6・8〜(1935)
〔小説〕室蘭市生まれ。昭和31年室蘭栄高校(定)卒。日本製鋼所勤務。「室蘭文学」(昭36)を経て武田友寿らと「エスプリ」(昭43)を創刊、現在編集人。作品は「不惑の朝」「海のみえる工場」など。代表作「夏の調べ」は「北海道新鋭小説集・7」に収録。

(かなまる・よしあき)

星野 一郎 大15・12・13〜(昭59)
〔俳句〕歌志内市生まれ。砂川市三井東庄社員。昭和24年「水原帯」入会、現在同人。32年水原帯賞、38年句集「白く堆積」発行。40年「粒」同人。45年「海程」同人。53年句集「星野一郎集」(海程戦後俳句シリーズ)発行。堀葦男は同句集のなかで「……独自の感受、心象の表現に打ち込んで来た。それを実現する方法として感性的形象化がたゆみなく追求されている」と解説してい

古屋 統 大15・5・30〜(昭59)
〔小説〕十勝管内幕別町生まれ。幼時札幌に移る。北海道大学医専卒。室蘭工大教授。宮田益子らと歌誌「凍土」を出す。昭和32年「くりま」入会。「誤診」(「くりま」8号)が「文学界」に転載(昭40・3)される。「くりま」(7〜22号まで)発行人として同誌のまとめ役をつとめながら「アランチス私記」(7号)、「漬物」(13号)、「足枷」(14号)、「やまの影」(17号)、「北の長官」(18号)の諸作を「くりま」に発表。

(川辺為三)

古谷千代 明43・10〜昭53・1
(1910〜1978) 〔短歌〕秋田県生まれ。道東歌壇の重鎮として、その興隆と後進の指導に尽くした。歌風は、おおらかであり確固とした人生観が表出されている。家族、夫婦を歌材にしたものに優れたものが多い。自然詠も視点がはっきりしていた。歌集「青磁の壺」。

(百川梢介)

古山素石 明33・12・1〜昭56
・8・8 (1900〜1981) 〔俳句〕渡島管内八雲町生まれ。本名文利。二二歳頃革新川柳に傾倒後大正末期俳句に転向。「南柯」「石楠」等を経て、戦後「緋衣」「水原帯」「寒雷」等に所属。八雲俳句会長。昭和50年同町文化功労賞を受賞し

る。作品を形成するものは、天性といふべき形象表現のシャープな仕上がりがあり、これが独自の文体をなしている。「粒」編集人。海程賞選考委員。現代俳句協会会員。肩に小鳥けむりのように昼寝する。(山田緑光)

星野松路 昭2・1・20〜(1952)
〔俳句〕旭川市生まれ。本名昭二。北海道開発局土木試験所勤務。昭和27年より「石狩」「ホトトギス」「若葉」を経て「水明」に所属し、47年水明同人。25年職場句会「堤影」発足に参加し横道秀川に師事、現在同代表幹事。54年秀川主宰の「雪嶺」創刊に参加し、57年同銀杏賞受賞、銀河同人となる。現代俳句協会員。著書「堤影Ⅲ」。(横道秀川)

星野立子 明36・11・15〜昭59
・3・3 (1903〜1984) 〔俳句〕東京生まれ。高浜虚子の二女。昭和5年女流俳誌「玉藻」を創刊主宰。8年以來23年、29年、38年に来道している。34年父虚子の後をついで朝日俳壇の選者となる。昭和28年に北米、ブラジルへ、昭和31年に文化使節としてインド、ヨーロッパを歴訪した。句集「春雷」ほか多数あり。

(白幡千草)

星野天知 文久2・1・15〜昭25・9・17 (1863〜1960) 〔小説、評論〕東京生まれ。本名慎之輔。東京駒場の農

た。(島 恒人)

平秩東作 生年不詳〜寛政元・3・8 (1729) 〔狂歌、紀行〕東京(江戸)生まれ。本名立松懐之。字は君秩、東蒙、子玉、嘉穂等。江戸内藤新宿の馬宿を経営し、稲毛屋金右衛門と称した。東作は狂歌で名を知られ、また各地を踏査して記録を残しているが、その代表的なものに天明3〜4年(一七八三〜四)蝦夷地に渡航してものした「東遊記」があり、蝦夷地の地理、風俗、産業を知る貴重な史料である。(水田富智)

逸見猶吉 明40・9・9〜昭21
・5・17 (1907〜1946) 〔詩〕栃木県生まれ。本名大野四郎。一歳の時上京、早稲田大学経済学部卒。個人誌「鴉母」発行。昭和3年北海道に旅行、その折出来た作品「ウルトラマリン」第一編の「報告」を、草野心平の「学校」第七号に発表。「歷程」創刊同人。12年渡満して満州生活必需品会社に勤務。21年長春南郊の自宅で肺結核と栄養失調のため死去。

科大学を卒業し、明治女学校に迎えられる。島崎藤村らと「文学界」を創刊。明治27年に明治女学校を退職し、この年3月から5月にかけて北海道、東北地方に旅したが、その途次、教え子である松井万との結婚の内諾を函館に住む万の兄から得て帰京した。この折の所産に後志沿岸を舞台にした「磯物語」(明28・9・10、「文学界」と「熊に喰はれた男」(明29・2、同)とがある。

(木原直彦)

細井 剛 昭9・3・11〜(昭58)
〔短歌、評論〕札幌市生まれ。札幌市職員。昭和28年頃より作歌を始め、29年「新墾」入社、小田観登に師事。34年から同誌退社の52年まで編集委員。昭和38年第一回新墾評論賞受賞。同年北海道青年歌人会の活動に参加、40年「素」の創刊編集同人。50年現代短歌・北の会創立に参画、幹事(事務局担当)として活躍。アンソロジー「北の会76」を刊行。57年「岬」創刊に参画、現在同誌編集委員。著書に評論集「現代短歌の光と翳」(昭55・3、雁書館)。本道では菱川善夫の後を継ぐ本格的な短歌評論家であり、ことに若い世代の歌人論や状況論に優れたものがある。76年以降の現代短歌シンポジウムに参加しパネリストとしても鋭利な論を展開。ことに78年のシンポ

ジウムを53年10月札幌で開催する原動力となり、全国の歌人に北の会をアピールした。現代歌人協会員。

〔現代短歌の光と翳〕 評論集。著者の第一評論集であり、短歌ジャーナリズムが変節しようとする昭和50年初頭の危険な短歌状況を鋭く告発し共感を呼んだ。標題の評論や「状況への狙撃」「前衛短歌は幻影だったか」等のI部、「岡井隆論」「されどわが執念は一馬場あき子論」等作家論のII部、そして「伊東静雄論」等の詩論を収めたIII部より成る。50年から54年までの間に書かれたものをまとめている。(増谷竜三)

細川三空 明36・2・1〜昭58・2・31 (1903〜1983) 〔川柳〕札幌市生まれ。本名時次。齒科医。大正9年2月小樽にはじめて創刊された川柳誌「番茶」に鉢坊と号して作品を発表する。昭和23年11月小樽川柳粉雪吟社を設立、初代の主幹として吟社運営に大きな足跡を残す。従来の小樽川柳社が「番茶」誌と共に終戦を機に自然消滅。粉雪吟社は結社名を小樽川柳社と改称、「こそなゆき」を発行した。小樽川柳史に欠かせない川柳人。(長沢としを)

細田園子 明40・2・12 (1908) 〔短歌〕小樽市生まれ。札幌北星女学校卒。紋別市に居住後昭和58年横須賀奨励賞受賞。

細谷徹之助 大4・12・5 (1915) 〔短歌〕芦別市生まれ。少年時口語短歌を学び、昭和12年渡満、軍籍にありながら若山牧水系の作歌に励み「満洲歌人」同人。またハルビン放送短歌朗詠会の幹事をつとめる。戦後引き揚げ帰農。26年より芦別農協組合長、北海道共済農協連合会専務、北海道農協中央会専務を歴任。46年より芦別市長を二期務めて勇退。歌歴は昭和23年より「樹氷」同人。45年芦別短歌連盟を結成し会長。北海道歌人会委員。「創作」同人、同社東北北海道地区委員。歌集は「源流」「草原燃ゆ」「山稜」「望塔」「新愁」の五冊。芦別に歌碑二基あり。郷土史研究、文化財保護の功で56年道文化財保護功労者賞受賞。北海道文化振興審議会委員、北海道文化団体協議会常任理事、空知地方史研究協議会長、北海道みんぞく文化研究会、日本歌人クラブに所属。

市に移転。昭和36年同人誌「凍土」に入会、「新凍土」発足と共に所属。47年北海道歌人会三〇首競詠に準入選。51年第三回宮田益子賞受賞。(大久保興子)

細野陽子 大14・10・23 (1905) 〔短歌〕夕張市生まれ。昭和34年「新墾」入社。夕張歌人会で活躍する。46年新墾賞受賞。現在北海道歌人会幹事。「新墾」編集委員。タイプ工房を経営。青春時代に小学校代用教員四年間の経歴もある。歌柄は、優しく深慮の中からの抒情が奏でられて美しい。(吉田福太郎)

細谷源二 明39・9・2 (1905) 〔短歌〕夕張市生まれ。昭和34年「新墾」入社。夕張歌人会で活躍する。46年新墾賞受賞。現在北海道歌人会幹事。「新墾」編集委員。タイプ工房を経営。青春時代に小学校代用教員四年間の経歴もある。歌柄は、優しく深慮の中からの抒情が奏でられて美しい。(水平緑苑)

細矢友子 大11・7・24 (1908) 〔小説〕浜松市生まれ。朝鮮咸興高女卒。現地で小学校教員。戦後夫と共に引き揚げ旭川市に住みつく。小説「混乱の日々」で登場。「冬涛」に「ある極限」「慟哭の丘」発表。昭和46年「混乱の日々」(北書房)上梓。(佐藤喜一)

堀田龜羅 大14・9・13 (1909) 〔川柳〕東京生まれ。本名欣信。昭和34年雅号の由来である写真館を開業、同年より川柳の道を歩む。49年札幌川柳社から川柳叢書「サイロ」で出版。58年札幌市社会教育功労者賞(文化部門)受賞。(川村美翔)

堀田輝子 大11・5・16 (1908) 〔短歌〕函館市生まれ。函館遺愛高女卒。母(歌人似内たか)の影響で早くから作歌。昭和16年「短歌紀元」に入社。戦後札幌で「素」「鴉族」「新墾」「斧」や現代短歌「北の会」などで意欲的に活躍。札幌市婦人団体連絡協議会の新聞編集に一〇年間携わったこともある。現在「かぎろひ」所属。47年女の性を狂おしにまで問いつめた歌集「可笑園」を出版。(永平利夫)

堀田善衛 大7・7・17 (1908) 〔小説〕富山県生まれ。慶応大学仏文科卒。昭和26年「広場の孤独」(人間)8、「中央公論」9)で芥川賞を受賞。27年7月詩誌「至上律」の招きで来道した作者は、「国境」(昭27・11、「群像」)を発表して北海道が置かれている現状を国際感覚豊かな視点からとらえた。「鬼無鬼島」(昭31、「群像」、評論集「インドで考えたこと」(昭45、岩波書店)など話題作が多数ある。(神谷忠孝)

堀井更生 大14・7・5 (1909) 〔小説〕旭川市生まれ。小樽高商卒。昭和21年北海道新聞旭川支社と同僚だった吉柳元彦らと同人誌「冬涛」(のち「朱塔」「北方浪漫」と改題)を発刊。同時期、新川浩三の名で「野火」「限界」「豊談」に寄稿した。著書に「北海道への招待」秘められた歴史の断面(現代書房)、戯曲「カムイコタン」の歌(現代書房)、戯曲「カムイコタン」の歌(現代書房)、戯曲「カムイコタン」の歌(現代書房)がある。現在は東京観光専門学校で教壇に立っている。(梅田恭平)

となり、翌26年も引き続き同部門第一位となるなど本道戦後派第一期の詩人として活躍。27年以降は他誌を辞して「だいいある」の編集発行に専念する。40年同誌は六三号で終刊となる。その後、青函管理局海務部次長を経て函館駅前市街地再開発準備組合事務局長。詩集に「終曲」(昭25)、「ひらかなの樹々抄」(昭26)がある。(山本 丞)

堀井美鶴 昭3・9・20 (1938)「短歌」函館市生まれ。専門学校卒。昭和55年まで函館に在住し、その後札幌へ転居。昭和24年「新墾」入社。34年「潮音」入社。小田観瑩、酒匂親幸に師事する。42年新墾賞、50年北海道歌人会賞を受賞する。その間、昭和42年青年歌人会を母体として成立した同人誌「グループ・素」へ入会。さらに50年に発足した菱川善夫を代表とする「現代短歌・北の会」へ所属。前住地函館では新墾、潮音函館支社「潮」の会の創立に参画、有志による「現代短歌研究会」をもつなど、道南歌壇の推進力となって多彩な活動を続けた。53年第一歌集「秋の刺客」を上梓。現在新墾選者。〈岬より岬をつなぐいさり火の祖父の貧の穰めくことし〉(坪川美智子)

堀内信子 大12・5・19 (1936)

のちフリーのエッセイストに専念。地図、旅、鉄道に関する作品多く、昭和47年日本エッセイストクラブ賞を「地図のたのしみ」で受賞。主要な作品としてはほかに、「地図を歩く」「地図はさそう」「地図と風土」「地図は語る」「ヨーロッパ軽便鉄道の詩」「ヨーロッパの気ままな旅」「地図―遊びからの発想」「ニュージラランドは詩う」「地図のイメージ紀行」「オホーツク―春と秋の心象」「消えた鉄道―レールの詩」など数多くある。その他諸雑誌への寄稿が多い。どのエッセイも軽妙にして色彩豊かで、「人名録の話」が59年ベストエッセイ集である。「午後おそい客」の中に収録されている。(小松 茂)

堀 真 昭5・9・10 (1938)「小説」伊達市生まれ。本名堀内興一。日本大学文学部中退。昭和29年に斎藤伝らと「火山帯」発行。合併後の「室蘭文学」に「蛍光色の女」「空転」を発表。52年「山音文学」編集。57年に「転封」上梓。胆振管内壮瞥中学教諭。(木村南生)

本郷 新 明38・12・9 (昭55・2・13 (1905-1980))「彫刻」札幌市生まれ。昭和3年東京高等工芸学校彫刻部卒。高村光太郎に師事。国画会を経て14年新制作派協会彫刻部の創設に参加。

堀 克己 明34・11・1 (昭57・9・20 (1901-1982))「俳句」日高管内三石町生まれ。昭和37年浦臼より札幌に転住後、新田汀花に師事。藻岩吟社を創立、姉妹を中心に本格的作句を始める。「葦牙」「河」の同人。48年兄弟姉妹四人句集「さびた」(堀克己、堀庸、佐々木三枝、鈴木郁枝。ともに葦牙、河同人)上梓。43年虎杖子(北海道神宮境内)、48年汀花(札幌、平和の滝)の句碑を発起人として建立。(太田耕吐子)

堀川巨州 大11・1・29 (昭59)「俳句」紋別市生まれ。本名垣。俳句は小学生の時父牧韻に教わる。父没後の昭和36年牧韻遺句集「嘶」上梓。現在俳誌「草の王」主宰。「葦牙」「人」の同人。53年「草の王吟社」紋別市文連文化奨励賞、58年紋別市文化功労賞受賞。獣医。51年全国公平委連合会理事。58年

戦後は全道展にも所属し指導的立場にあった。数多くの彫刻作品のほか記念像制作にも取り組み全国各地に作品を残した。函館市大森浜の石川啄木像(昭34)、小樽旭展望台の小林多喜二文学碑(昭40)、釧路市幸町公園の啄木像(昭47)の制作者である。(工藤欣弥)

本迫蓬堂 大2・8・31 (昭52・3・17 (1913-1977))「俳句」奈良県生まれ。本名栄治。大阪商校卒。昭和17年渡道して鹿追農業会勤務。後帯広で会社員。俳句は昭和17年「暁雲」に、49年「水原帯」に加入、51年支社長となる。地元句会の席上倒れて没した。(佐々木露舟)

本庄陸男 明38・2・20 (昭14・7・23 (1903-1933))「小説」石狩管内当別町生まれ。佐賀県から入植した一家は大正2年再度北見国上落滑(現北見市)の開墾地に転じ同地で高等小学校卒。樺太で職工をして学費を貯え東京の青山師範学校入学(大10)、同人誌活動を始める。卒業後教員生活に入り、教育運動の担い手となる。さらに日本プロレタリア作家同盟の組織面、実践面の下積みの仕事に徹しつつ小説「北の開墾地」(昭3)や、「資本主義下の小学校」(昭3、発禁)を発表。教員組合事件で失職(昭5)後も、童話、壁小説、農民文学

道公平委連絡協議会副会長となる。

堀川牧韻 明16・10・30 (昭32・12・25 (1883-1957))「俳句」新潟県生まれ。本名才治。獣医校卒。紋別市で獣医開業。昭和2年「草の王吟社」設立。「草の王」を主宰指導する。青木郭公の「暁雲」、白田垂浪の「石楠」幹部。その後「緋衣」幹部。「水原帯」同人。「葦牙」同人。馬の句が多く馬の牧韻と称された。句集は昭和36年「嘶」を葦牙社より発行。市議会議員のほか公職が多かった。(山田緑光)

堀越義三 大12・2・26 (昭63)「詩」岩手県生まれ。根室実業学校卒。新聞記者生活のなかで詩作をつづけ、昭和26年釧路で「感情以後」を創刊。29年札幌に移り井村春光、木津川昭夫、佐々木逸郎と休刊中の「野性」を復刊。函館に転居して「だいいある」同人となったが、再び札幌にどり雑誌編集のかたわら38年「詩の村」を創刊し編集、発行にあたった。昭和59年札幌で現地詩人の会を発足させ機関誌「現地」の発行人。著作に結城庄司追悼誌「笑顔と怒りと」(昭59)がある。(佐々木逸郎)

堀 淳一 大15・10・6 (昭56)「随筆」京都生まれ。北海道大学理学部卒。北大教授を昭和55年に退職、

論、農村文化論を地道に継続、入党(昭7)から作家同盟解散(昭9)に至るまでの最も困難な実生活上、運動上の苦境を凌ぎ抜いた。多喜二虐殺、党首脳転向後、左翼の同人誌が相次いで生まれたが、本庄は「現実」同人として参加、ようやく作家的力量を発揮し出した。「白い壁」(昭9・5、「改造」)は「教育もの」の秀作として光を浴び、亡妻を描いた「水と石」、農民ものの「土地」など多彩な仕事ぶりで、本になった「白い壁」(昭10)、「女の子男の子」(昭11)のほか、遺稿集「団体」(昭37、北書房)標題作は多喜二の遺体を囲む人々の活写がある)や、長編「橋梁」(昭43、教師の友社)などもこの時期に書かれていた。「人民文庫」「槐」「現代文学」などの諸誌にも精力的な発表がある。北海タイムス連載の「石狩は懐く」(昭13・6-12。昭14、大観堂)は、秩父騒動後北海道に逃亡して開拓者となった男たちのその後を物語に仕組む。それはまた、代表作「石狩川」の呼び水でもあった。「石狩川」長編小説。昭和13年の9月、14年2月「槐」連載。加筆して昭和14年5月大観堂刊。維新の戦いに敗れ朝敵の汚名を着せられた伊達藩岩出山支藩君主以下の武士団が渡道し、石狩当別に入植、開拓の緒につくまでの辛酸きわ

まる経緯を、指導者の家老阿賀妻を基軸に、父祖の思いに重ね、さらに、昭和10年代に転向を強いられた人々の苦悩でひそかに裏打ちしつつ、叙事詩的大河小説をめざした。三部作構想の第一部に終わり中道に斃れた。あとがきに「をこがましくも作者は『石狩川』の興亡史を書きたいと念願した。川鳴りの音と漫々たる洪水の光景は作者の抒情を掻き立てる。その川と人間の接触を、作者は、作者の生れた土地の歴史に見ようとした。そして、その土地の半世紀に埋もれたわれらの父親の思ひを覗いてみようとした」と書いている。昭和31年に「大地の侍」(東映)の題で映画化され、39年7月23日には当別町太美の石狩川河畔で高見順の揮毫なる「文学碑石狩川」が除幕された。

修。アンドルー・マーズ、ジョージ・ハーバート、T・S・エリオットなどの研究論文多数。「現代詩の成立」(昭43・6、「北方文芸」)「認識行為としての現代詩」(昭50・7、「弦」)などの評論があり、著書に「芸術のなかのヨーロッパ像」(昭53、篠崎書林)、「アルノ河岸から」(昭60、同)がある。(神谷忠孝) 本多秋五(しょうご) 明41・9・22(1968)「評論」愛知県生まれ。東京大学国文科卒。マルクス主義文学運動の影響を受け、重苦しい心理的抵抗の中に戦時下を過ごし、終戦後平野謙らと「近代文学」を創刊(昭21・39)。政治に対する文学の自立を主張した戦後の代表的評論家である。主著に「転向文学論」「白樺」派の作家と作品「物語戦後文学史」等がある。白樺派の規定、有島武郎の見解に卓見が多い。42年に有島武郎文学展開催記念文芸講演会で来道した。

版。(酒本寿朗) 本保与吉(よきち) 明39・5・16(1964)「短歌」札幌市生まれ。庁立滝川中学校卒。小学校の教員を経て北海道農業会に、また昭和37年上京後は海運会社ジャパンラインに勤務した。45年八戸市に移る。昭和2年歌誌「霸王樹」会員。9年「ポトナム」同人、17年退社。23年「原始林」に参加、後運営委員、選者となる。道歌人会幹事を務めた。44年「日本歌人」に拠り、現在選者。この間、山下秀之助、前川佐美雄に師事。22年には篠路、37年には栗山の短歌会を、46年には八戸市に清遠短歌会をそれぞれ創立結成。38年から42年まで日本短歌雑誌連盟の事務局長も務めたほか、青森県の日刊紙二紙の歌壇選者を数次担当。56年度八戸市文化賞受賞。歌集に「北限木本」「黄昏漏刻」「月下の籟」、ほかに編著歌集「青稜集」がある。(離郷者とおのれ) かもへ帰巢の目やれば行雲の驛りあはしも(猪股 泰)

本多勝一(かつひ) 昭8・4・28(1933)「新聞記者」評論「長野県生まれ。飯田高校・千葉大学卒業後、京都大学中退。朝日新聞編集委員。「ルポルタージュの方法」(すずさわ書店)はじめ著書多数。北海道取材作に「北海道探険記」(朝日文庫)等がある。

本多ミサヲ(みさた) 大7・8・20(1918)「短歌」室蘭市生まれ。昭和22年に河野琢禅のアラギ短歌会に入会。21年から24年まで歌誌「羊蹄」会員。31年以來今日まで歌誌「北海道アラギ」会員であり、また昭和22年から中央誌アラギの会員。両誌共に一度の休詠なく活躍している。53年歌集「木槿の花」を出

本間静心子(しんしん) 明41・1・25(1916)「短歌」札幌市生まれ。本名江別市生まれ。本名博徳。中央大学専門部商学科卒。昭和18年結核罹病で札幌商業教師を休職。千葉県館山市に転地して療養句作を始め、18年「水 downstream」「鶴」に投句、戦後「壺」同人。29年「水 downstream」

本田錦一郎(にしんいちろう) 大15・11・11(1926)「英文学研究」東京生まれ。北海道大学英文科卒。大学院特研生三年

本間保(たもたけ) 大11・7・25(1926)「短歌」空知管内上砂川町生まれ。昭和16年三井砂川の勤務病院でアララギ派の歌人木目田三郎を知り歌作に入る。以後、早瀬謙の「現代短歌」をはじめ「原始林」「凍土」「新凍土」「いしかり」などに所属した。昭和48年に第一歌集「虚実」を出版。これは直接には著者が交通事故によって人間の生命を凝視した動機があるが、作品全体はおだやかな中にも社会への文学的批判の目が厳しく光っている。59年第二歌集「斜廊」を出版。〈訓練室の斜廊をゆくにひたひたと湯槽に満ちゆくもの音する〉という巻頭の一首から名付けられたこの歌集は、長年の診療放射線技師という仕事を退職すること、白血病による愛娘の死とが背景となったもので、この歌人の到達した一つの世界を拓いている。現在は「斧」を経て「彩北」に所属。(永平利夫)

本間武司(たけし) 大4・11・23(昭57・6・18(1915~1982))「短歌」札幌市生まれ。旧制札幌商業卒。森永乳業に勤務。昭和10年ロク膜炎の再発により森永退社、帰札、療養。この頃から病状は脊椎カリエスに移行、長い療養生活が始まる。短唱例会(池田六象)に出、11年俳誌「葦牙」に入る。その後詞伶侶として詩誌「若草」に拠り洲本節夫(中山連三)、篤苗真久(佐藤初夫)を知る。一時、「新墾」「青空」にも在籍、「多磨」入会。多磨札幌支部を作ったが芥子沢新之介の帯広転出に伴い解消(昭18・21)。昭和21年「これ」(北海道短歌会)を発行。不随の身で編集、発行人として孔版、隔月の会誌発行に碎身したが、カリエス再発のため26年やむなく休刊した。この間、「狭霧句会」(長谷部虎杖子)、「踏青」(工藤欣弥、寺田京子)、「水声」(壺)「水輪」に在籍活動。再び札幌詩話会(池田六象、深野庫之介)でも活躍した。24年「原始林」入会。28年「原始林十人II」に参加。作歌のかたわら身障者福祉の会に入り、その活動は没年まで続く。原始林選者、道歌人会競選考委

員も務める。47年歌集「相貌」上梓。48年自立更生者として札幌市長賞を受賞したが肺炎のため没。(川上喜代) 本間竜二郎(りゅうじろう) 明43・3・30(1910)「短歌」札幌市生まれ。本名留次郎。昭和5年札幌師範学校卒。各地小学校教員を歴任、36年琴似小学校校長、45年札幌中央小学校長定年退職。この間、全道国語教育連盟委員長、全道演劇教育連盟会長、話しことばの会北海道支部副会長などを務め、教育界で幅広く活躍した。作歌は、昭和5年幌内小学校時代、田辺杜詩花の指導を受け、6年「ポトナム」に入社、田辺をたすけ、同北海道支社を育成、21年第二次「原始林」創刊に際し、田辺らと共に参加。戦後教員組合の活動に没頭し一時作歌を中断、40年前後から復活した。45年に歌文集「樹水」をまとめ、つづいて51年に歌集「豊平郷」を刊行した。その歌は思い湧くまま、興の赴くまま自在に詠まれたものが多い。北海道歌人会委員。(老い犬には脂肪すくなき馬肉をと遠き市場へ妻は出でゆく)(中山周三)

文学会員となる。歌風は抒情的。(笹原登喜雄) 本間美鶴子(みづこ) 昭4・8・29(1929)「短歌」滝川市生まれ。札幌市立高女卒。昭和29年「アララギ」、43年「北海道アララギ」に入会。土屋文明、樋口賢治に師事。46年より北海道大学国

まる経緯を、指導者の家老阿賀妻を基軸に、父祖の思いに重ね、さらに、昭和10年代に転向を強いられた人々の苦悩でひそかに裏打ちしつつ、叙事詩的大河小説をめざした。三部作構想の第一部に終わり中道に斃れた。あとがきに「をこがましくも作者は『石狩川』の興亡史を書きたいと念願した。川鳴りの音と漫々たる洪水の光景は作者の抒情を掻き立てる。その川と人間の接触を、作者は、作者の生れた土地の歴史に見ようとした。そして、その土地の半世紀に埋もれたわれらの父親の思ひを覗いてみようとした」と書いている。昭和31年に「大地の侍」(東映)の題で映画化され、39年7月23日には当別町太美の石狩川河畔で高見順の揮毫なる「文学碑石狩川」が除幕された。

本多勝一(かつひ) 昭8・4・28(1933)「新聞記者」評論「長野県生まれ。飯田高校・千葉大学卒業後、京都大学中退。朝日新聞編集委員。「ルポルタージュの方法」(すずさわ書店)はじめ著書多数。北海道取材作に「北海道探険記」(朝日文庫)等がある。

本多ミサヲ(みさた) 大7・8・20(1918)「短歌」室蘭市生まれ。昭和22年に河野琢禅のアラギ短歌会に入会。21年から24年まで歌誌「羊蹄」会員。31年以來今日まで歌誌「北海道アラギ」会員であり、また昭和22年から中央誌アラギの会員。両誌共に一度の休詠なく活躍している。53年歌集「木槿の花」を出

編集後記

本事典の編集は早くからの懸案であったが、昭和58年度の北海道文学館総会（5月21日）において決定され、翌59年2月27日に「北海道文学大事典編集委員会」の発足をみた。

〈委員長〉更科源蔵。〈副委員長〉園田夢蒼花、中山周三、和田謹吾。〈委員〉小説・評論〓小笠原克、神谷忠孝、沢田誠一、日高昭二。児童文学〓加藤多一、柴村紀代、渡辺ひろし、和田義雄。詩〓東延江、河邨文一郎、小松瑛子、佐々木逸郎、永井浩。短歌〓田村哲三、永平利夫、宮崎芳男、村井宏。俳句〓木村敏男、島恒人、辻脇系一。〈事務局〉木原直彦、西村信。〈事務局員〉東海林淳子、山本よしえ。

以来、何回となく会議を重ねて基本要綱作りにはじまり、リスト作成に取り組んだ。その際に、日本近代文学館編「日本近代文学大事典」講談社）が大きく参考になったが、しかし府県単位の前例がないため、本道の実情に即して試行錯誤を重ねざるを得なかったのである。

最大の難関は項目の選定とスペースの割り当てであり、これにはどの委員も最初から最後まで苦闘の連続であった。結局のところ、全ジャンルのリストアップを終えたあと、ジャンル別に総枠を定め、ジャンルのリストアップを終えたあと、ジャンル別に総枠を定め、ジャンルごと配分するという方法をとった。ジャンルを横断し、全体を通じて横並びの比重を期すことは不可能だったからである。みんなが納得する基準などないこともおもしろい知った。最善の努力をはらったつもりであるが、しかし目くばりのまずさを恐れるもので、その点はお叱りを受けながら他意のないことをご了承いただきたいと

思っている。

編みながら、時間をかければそれでいい、というものでないことも知った。すでに見えなくなっているものが、いかに大きかったことか。この時期に編まなければ、古い事象はますます見えなくなってしまう、との実感を深めたこともたしかである。

いま本事典が陽の目を見ることになったが、ここまで漕ぎ着けることができたのも、校正にまで忙殺された全委員の熱情によること勿論であるが、なんといつても三四〇人という方々が心よく気持ちこめてご執筆くださったからにはかない。幾重にも感謝するものである。

北海道新聞社出版局図書編集部には並々ならぬお世話になった。ことに当方の編集やその手順のまずさを、担当の方々によってどれほど助けられたか知れない。このご尽力がなければ、この段階での完成はおぼつかなかったはずで、心からお礼を申しあげたい。また、出版社側と執筆者の間に立つて苦闘された北海道文学館の事務局員にも格別に感謝する。

だが、ここで、満腔の悲しみをこめて、更科源蔵北海道文学館理事長の急逝について述べなければならぬ。昭和42年の文学館創立以来、今日まで理事長として活躍され北海道の文学に、いや日本の文学界に多大の影響を与え続けてこられた氏は、文学館の歴史の中で最も大きな、画期的な事業として企画された本書の完成を待たず、昭和60年9月25日に永眠された。この一、二年、健康状態が思わしくなかったが、それにもかかわらず、自ら四二項目を執筆し、刊行を心待ちにしておられた。大変残念でならない。本書を霊前に捧げて、ご冥福を心からお祈りする次第である。

（木原 直彦）

北海道文学大事典

定価 四〇〇〇円

印刷 昭和六〇年一〇月二二日
発行 昭和六〇年一〇月三〇日

編者 北海道文学館
編者代表 更科源蔵

発行者 森田博志
発行所 北海道新聞社

札幌市中央区大通西三丁目
郵便番号 〇六〇
電話 (011)221-2211
振替 小樽九一二八三九八

印刷所 大日本印刷株式会社
製本所 大日本製本株式会社

ISBN4-89363-454-2 C0590 ¥4000E

北海道文学史略年表

年次	作品と事項	社会の動き
一八八九(明22)	幸田露伴・雪紛々	帝国憲法発布
一八九六(明29)	三遊亭円朝・権説蝦夷訛 有島武郎 札幌農学校入学	上磯郡当別にトラピスト修道院発足
一九〇二(明35)	国木田独步・空知川の岸辺	札幌・函館・小樽3区で衆議院議員選挙
一九〇三(明36)	菊池幽芳・乳姉妹	北海道官設鉄道、釧路・帯広間全通
一九〇五(明38)	パチエラー・アイヌ英和辞典	札幌農学校、東北帝国大学農科大学となる／函館大火
一九〇七(明40)	石川啄木・漂泊	新夕張炭鉱でガス爆発
一九〇八(明41)	小林多喜二 小樽に移住 武林夢想庵・洞爺 武者小路実篤 来遊	私立函館図書館開館(岡田健蔵ら設立)
一九〇九(明42)	徳富蘆花・寄生木 鳴海要吉 増毛に移住	小樽高等商業学校の設置認可
一九一〇(明43)	岩野泡鳴 来道 啄木・歌集一握の砂	小樽大火
一九一一(明44)	長田幹彦・溼 武者小路実篤・高村光太郎 来道	夕張炭鉱でガス爆発／五番館札幌営業開始
一九二二(大元)	里見淳・手紙 里見淳ら来遊	気候不順のため大凶作／不景気続く
一九二二(大2)	徳富蘆花・みづのたはこと	苦前村に大熊出現
一九二五(大4)	有島武郎 農科大学教授辞職	丸井今井百貨店開店
一九二六(大5)	小林多喜二 小樽商業入学 小熊秀雄 樺太転々	

年次	作品と事項	社会の動き
一九一七(大6)	有島武郎・カインの未裔 葛西善蔵・雪をんな	ロシア革命／この頃から、道内各地でストライキ相次ぐ
一九一八(大7)	伊藤整 小樽中学校入学 岡田三郎・涯なき路 有島武郎・生まれ出づる悩み 久保栄 帰道	北海道帝国大学を札幌に設置／北海道博覧会
一九一九(大8)	中戸川吉二・反射する心 島木健作 上京	
一九二〇(大9)	有島武郎 来道 高浜虚子ら来道	第一回国勢調査実施。全道人口二三五万九一八三人
一九二二(大10)	有島武郎 農場視察に来道 本庄陸男 上京	函館大火
一九二二(大11)	有島武郎 有島農場解放宣言 鶴田知也 来遊	札幌・函館・小樽・旭川・室蘭・釧路、区制を廃し市制を施行
一九二二(大12)	宮沢賢治・詩オホーツク挽歌 島木健作 上京	戸長役場を全廃し、町村制を施行
一九二四(大13)	宮沢賢治 来遊 佐藤春夫・北海道へ	札幌などで憲政擁護演説会開催
一九二五(大14)	宮沢賢治・佐藤春夫ら来遊 北原白秋ら来遊	治安維持法公布
一九二六(昭元)	葉山嘉樹・海に生くる人々 吉田一穂・詩集海の聖母	青森・函館間電話線開通／十勝岳大爆発、泥流で死者・不明者多数
一九二七(昭2)	若山牧水ら来遊 芥川龍之介・里見淳 来道	小樽港労働争議
一九二八(昭3)	小樽秀雄 上京	全国で共産党関係者を一斉検挙
一九二九(昭4)	小林多喜二・蟹工船 パチエラー八重子・若き同族に	駒ヶ岳大爆発
一九三二(昭7)	斎藤茂吉ら来道 林芙美子 来遊	満州事変／冷害凶作
一九三三(昭8)		札幌に三越支店開業 旭川国防婦人会発足

年次	作品と事項	社会の動き
一九三五(昭10)	正宗白鳥・尾上柴舟 来遊	国勢調査、全道人口三〇六万八二八三人
一九三六(昭11)	鶴田知也・コシヤメイン記 北海道詩人協会(旭川) 結成	陸軍特別大演習／昭和天皇、道内各地を巡幸
一九三七(昭12)	伊藤整・幽鬼の街 久保栄・火山灰地第一部	札幌・東京間の定期航空路開設
一九三八(昭13)	森田たま・石狩少女 本庄陸男・石狩川	国策パルプ工業創立
一九三九(昭14)	板東三三・兵村 寒川光太郎・密猟者	朝鮮人労働者の道内強制連行始まる
一九四〇(昭15)	高浜虚子・佐佐木信綱 来遊 吉田十四雄・百姓記	北海道女子師範学校設置／北部軍司令部を札幌に設置
一九四一(昭16)	島木健作 帰道 船山馨・北国物語	北海道綴方聯盟事件／太平洋戦争開戦
一九四二(昭17)	北海道文芸協会(札幌) 結成 北海道歌人協会(札幌) 結成 辻村もと子・馬追原野 早川三代治・処女地 北海道俳句作家協会(札幌) 結成	「北海タイムス」「小樽新聞」など十紙が合併し「北海道新聞」を創刊
一九四六(昭21)	島木健作・土地	宮部金吾、文化勲章を受賞
一九四七(昭22)	北海道出版文化祭(札幌)	北大に法文学部設置
一九四八(昭23)	武田泰淳・サイロのほとりにて	新制高等学校発足
一九五〇(昭25)	八木義徳・摩周湖 草野心平ら来遊	第一回札幌雪まつり／レッドパージ／朝鮮戦争(一五三年)

年次	作品と事項	社会の動き
一九五一(昭26)	志賀直哉・岸田国士 来道	対日平和条約・日米安保条約調印
一九五三(昭28)	畔柳二美・姉妹	街頭・店頭テレビに人気殺到
一九五四(昭29)	武田泰淳・ひかりごけ	青函トンネル工事起工式(八八年完成)／台風15号(洞爺丸台風)で大惨事／岩内大火
一九五五(昭30)	原田康子・挽歌	鯨凶漁、以後回復せず
一九五六(昭31)	伊藤整・若い詩人の肖像 北海道文学代表選集(道文懇)	NHK札幌中央放送局のテレビ開局／冷害凶作
一九五七(昭32)	石森延男・コタンの口笛	ソ連、人工衛星打ち上げに成功
一九五九(昭34)	原田康子第8回女流文学者賞	皇太子の成婚パレード
一九六一(昭36)	中沢茂・助命歌願 子母沢寛・厚田日記	札幌・東京間航空路にジェット機登場
一九六二(昭37)	日本近代文学会北海道大会(札幌)	東京でスモッグ、深刻化
一九六四(昭39)	水上勉・飢餓海峡	NHK、札幌圏内でカラーテレビ放送を開始
一九六五(昭40)	安部公房・榎本武揚 津村節子・さい果て	消費者物価七・四%上昇
一九六六(昭41)	三浦綾子・氷点	ビートルズ来日
一九六七(昭42)	船山馨・石狩平野	ベトナム反戦国際統一行動の全道中
一九六八(昭43)	物語北海道文学盛衰史 北海道文学展(札幌) 佐藤喜一・小熊秀雄論考 中野重治・北海道の作家たち 北海道文学館発足	央集会、札幌で開催
	北海道新聞文学賞設立 澤田誠一・斧と楡のひつぎ	十勝沖地震

年次	作品と事項	社会の動き
一九六九(昭44)	李恢成・またふたたびの道 亀井秀雄・伊藤整の世界	北大など道内大学でも学園紛争
一九七〇(昭45)	渡辺淳一・花埋み 渡辺淳一第63回直木賞 伊藤整・亀井勝一郎文学展開 催	全道市長会で北海道旧土人保護法廃止を決議
一九七二(昭47)	李恢成第66回芥川賞 木野工・権櫻 夏堀正元・幻の北海道共和国 小笠原克・近代北海道の文学 高橋揆一郎第37回文学界新人賞	札幌市営地下鉄南北線開業 第11回冬季オリンピック札幌大会開催 札幌市、政令指定都市となる 第一次石油ショック
一九七三(昭48)	和田芳恵第26回読売文学賞 西野辰吉・石狩川紀行 萱野茂・ウエベケレ集大成 萱野茂第23回菊池寛賞 小椋山博・出刃 八木義徳第28回読売文学賞 吉村昭・飛風 和田芳恵第9回日本文学大賞 和田芳恵・雀いろの空 高野斗志美・現代文学と北海道の作家群像 新・有島記念館開館(ニセコ) 小樽文学館開館 高橋揆一郎第79回芥川賞 和田芳恵第5回川端康成文学賞	佐藤栄作、ノーベル平和賞受賞 堂垣内知事、交通事故非常事態宣言を出す 道庁ロビーで時限爆弾爆発/ソ連の戦艦機、函館空港に強制着陸 北海道立近代美術館開館 英で世界初の試験管ベビー誕生
一九七四(昭49)	和田芳恵第26回読売文学賞	札幌豊平川にサケ遡上を25年ぶりに確認
一九七五(昭50)	西野辰吉・石狩川紀行	
一九七六(昭51)	小椋山博・出刃	
一九七七(昭52)	吉村昭・飛風	
一九七八(昭53)	和田芳恵第9回日本文学大賞	
一九七九(昭54)	和田芳恵第5回川端康成文学賞	

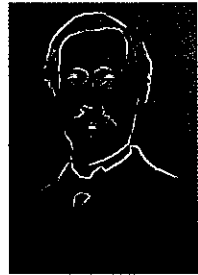
年次	作品と事項	社会の動き
一九八〇(昭55)	更科源蔵・原野 渡辺淳一第14回吉川英治文学賞	北電苫厚真火力発電所で火入れ式挙行 2月7日を北方領土の日と決定 石狩湾新港開港
一九八一(昭56)	倉本聰・北の国から 船山馨第15回吉川英治文学賞 吉村昭・関宮林蔵 小松伸六第32回芸術選奨文部大臣賞	
一九八二(昭57)	吉田十四雄農民文学特別賞 加藤幸子第14回新潮新人賞 島居省三・異端の系譜 高橋揆一郎・地ぶき花ゆら 加藤幸子第88回芥川賞 小椋山博第11回泉鏡花文学賞 萱野茂・アイヌの里二風谷に生きて 神谷忠孝・日本のダダ 三浦清宏・長男の出家 池澤夏樹・ステイルライフ 掛川源一郎・バチラー八重子の生涯 沖藤典子・薄命の作家素木しづの生涯 三浦清宏・池澤夏樹第98回芥川賞 室蘭港の文学館開館 北海道文学館財団法人化	大韓航空機、撃墜される 青函トンネル開通
一九八三(昭58)	加藤幸子第14回新潮新人賞	
一九八七(昭62)	萱野茂・アイヌの里二風谷に生きて	国鉄、百七年の歴史をとじる
一九八八(昭63)	神谷忠孝・日本のダダ	
一九八五(平7)	北海道立文学館開館	

小説・評論

フォトガイド 北海道の文学

近代北海道の文学は、18世紀後半から今日に至る一三〇年余りの歴史を有しています。そのうち小説・評論の分野は、時代の流れに沿って次の十のコーナーに分けて構成しました。

20世紀への胎動/助走期の苦闘/漂泊と彷徨/道産子作家の誕生/逆流のさなかで/モダンイズムの台頭/戦火の中で/復興と再生/成長期の精華/変転する現代
これらのうちから、主な展示資料や人物、文学碑などを紹介します。



ウィリアム・S・クラーク (1826~86)
米国から札幌農学校初代教頭として1876年に来道



札幌農学校演武場と北講堂 (1887年以後)



内村鑑三 (1861~1930)
札幌でキリスト者として活動



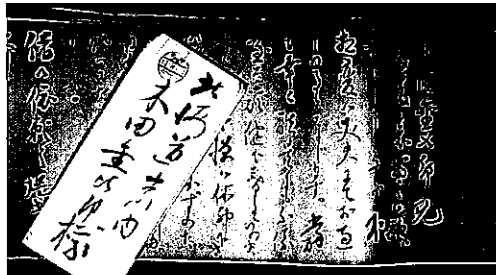
新渡戸稲造 (1862~1933)
選友夜学校を創立



札幌史学会著
札幌史学会刊「札幌沿革史全」(復刻版)



有島武郎 (1878~1923)
湖道は12年に及んだ



木田金次郎(画家)宛有島武郎書簡
木田との交流から小説「生れ出づる悩み」が誕生した



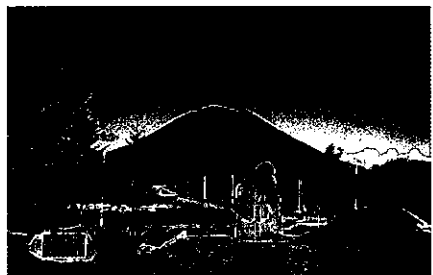
幸田露伴 (1867~1947)
若き日、余市町に2年滞在



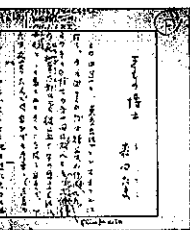
岩野泡鳴 (1873~1920)
1900年代初頭、札幌で放浪



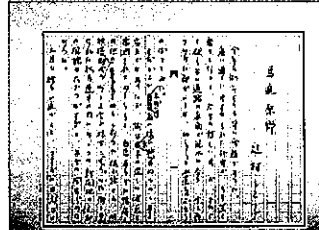
1910~20年代に現れた北海道内の文芸同人誌



有島武郎「カインの末裔」文学碑(ニセコ町)



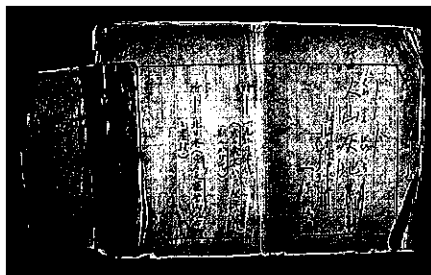
森田たま「きもの博士」原稿



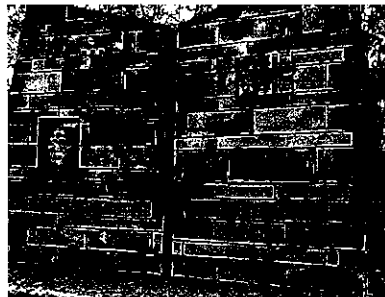
辻村もと子「馬追原野」原稿



久保栄 (1900~58)



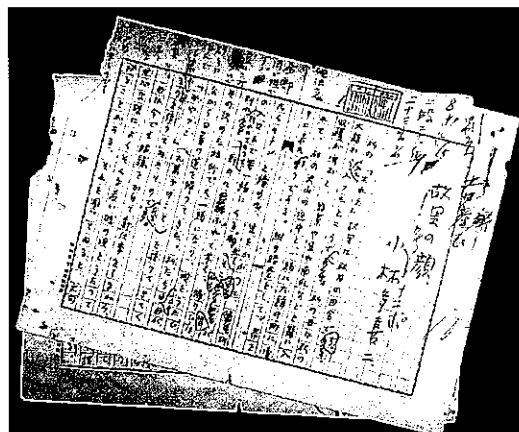
久保栄の代表作「火山灰地」(戯曲)の原稿



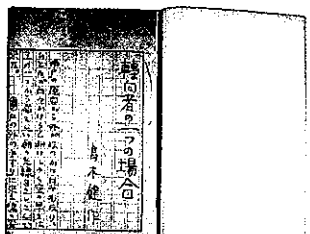
小林多喜二文学碑(小樽市)



小林多喜二(1903~1933)
幼時から小樽で過ごす



小林多喜二「故里の顔」原稿(全6枚)



島木健作「転向者の一つの場合」原稿



久保栄「林檎園日記」文学碑(札幌市)

■収録人物(物故者)没年月日一覧

※ デジタル版『北海道文学大事典』の「人名編」記事本文は刊行時(1985年)のかたたちををほぼそのまま残してアップしました。

掲載した人々の中には、すでに故人となった方々も含まれています。

※ 以下は、上記の「すでに故人となった方々」の没年月日について調査し、それが判明した人々について一覧化したものです。

また、「備考」欄は受賞歴など現在調査中の事柄のうち確定した内容を後日定期的に加え、情報としてご提供するための欄です。

※ 「人名編」記事本文には、下表とは別に、すでに物故されたと推定できる人々がまだ多く含まれています。

これらの方々については、調査を続行いたしますが、なおこの『大事典』をご利用くださる皆様で、

没年月日などの情報をお持ちの方は、随時当文学館まで当該情報をお届けください。

※ 没年一覧の該当人物については本文見出し人名部分に一覧へのリンク設定をしております。

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
あ				
追加・訂正部分は、赤字で表示しています。				
青木 政雄	あおき まさお	短歌	1906年(明39)8月14日～1988年(昭63)7月15日	
青山 ゆき路	あおやま ゆきじ	短歌	1907年(明40)8月11日～1993年(平5)3月1日	
秋山 清	あきやま きよし	詩、評論	1904年(明37)4月20日～1988年(昭63)11月14日	
秋山 しぐれ	あきやま しぐれ	俳句	1925年(大14)11月15日～没年不詳	
朝谷 耿三	あさたに こうぞう	小説	1909年(明42)2月17日～2007年(平19)3月	
浅野 晃	あさの あきら	詩、評論	1901年(明34)8月15日～1990年(平2)1月29日	
浅野 太市	あさの たいち	小説	1930年(昭5)7月10日～2008年(平20)9月	
浅野 明信	あさの めいしん	詩	1933年(昭8)8月5日～2005年(平17)10月1日	
安住 尚志	あずみ たかし	短歌	1919年(大8)1月20日～2000年(平12)2月19日	
阿部 慧月	あべ けいげつ	俳句	1905年(明38)12月25日～2005年(平17)12月31日	
安部 公房	あべ こうぼう	小説、劇作	1924年(大13)3月7日～1993年(平5)1月22日	
阿部 信一	あべ しんいち	俳句	1932年(昭7)8月15日～2005年(平17)12月31日	
阿部 保	あべ たもつ	英文学、詩	1910年(明43)5月30日～2007年(平19)1月10日	
荒川 楓谷	あらかわ ふうこく	俳句	1908年(明41)2月25日～2005年(平17)4月15日	
荒澤 勝太郎	あらかわ かつたろう	小説	1913年(大2)4月15日～1994年(平6)4月2日	
荒谷 七生	あらかわ なおえ	短歌	1911年(明44)8月24日～1997年(平9)8月	
阿波野 青畝	あわの せいほ	俳句	1899年(明32)2月10日～1992年(平成4)12月22日	
安藤 美紀夫	あんど う みきお	児童文学	1930年(昭5)1月12日～1990年(平2)3月17日	
い				
追加・訂正部分は、赤字で表示しています。				
飯塚 朗	いづか あきら	中国文学研究、小説	1907年(明40)9月2日～1989年(平元)2月23日	
飯田 龍太	いいた りゅうた	俳句	1920年(大9)7月1日～2007年(平19)2月25日	
生田 直親	いくた なおちか	シナリオ、小説	1929年(昭4)12月31日～1993年(平5)3月18日	
池波 正太郎	いけなみ しょうたろう	小説、劇作	1923年(大12)1月25日～1990年(平2)5月3日	
石 一郎	いし いちろう	小説、アメリカ文学研究	1911年(明44)8月1日～2007年(平19)1月	
石井 昌光	いしい まさみつ	詩	1911年(明44)5月24日～1987年(昭62)4月12日	
石岡 草次郎	いしおか そうじろう	短歌	1916年(大5)3月20日～1995年(平7)4月	
石垣 福雄	いしがき ふくお	国語学	1914年(大3)7月23日～2004年(平16)2月21日	
石上 玄一郎	いしがみ げんいちろう	小説	1910年(明43)3月27日～2009年(平21)10月5日	
石上 慎	いしがみ しん	劇作	1935年(昭10)1月1日～2010年(平22)5月10日	
石川 桔梗	いしかわ ききょう	短歌	1906年(明39)2月23日～2000年(平12)8月	
石川 澄水	いしかわ しょうすい	短歌	1905年(明38)5月1日～1986年(昭61)1月	
石川 昌男	いしかわ まさお	短歌	1911年(明44)10月10日～2005年(平17)	
石坂 由紀子	いしがき ゆきこ	詩	1936年(昭11)6月6日～1991年(平3)3月14日	
石坂 洋次郎	いしがき ようじろう	小説	1900年(明33)1月25日～1986年(昭61)10月7日	
石塚 喜久三	いしづか きくぞう	小説	1904年(明37)9月5日～1987年(昭62)10月1日	
石塚 友二	いしづか ともじ	俳句	1906年(明39)9月20日～1986年(昭61)2月8日	
石橋 豊次郎	いしばし とよじろう	短歌	1906年(明39)9月13日～1992年(平4)10月	
石原 八束	いしはら やつか	俳句	1919年(大8)11月20日～1998年(平10)7月16日	
石森 延男	いしもり のぶお	児童文学、国語学者	1897年(明30)6月16日～1987年(昭62)8月14日	

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
石山 透	いしやま とおる	シナリオ	1927年(昭2)5月15日～1985年(昭60)12月3日	
石山 正雄	いしやま まさお	短歌	1914年(大3)2月5日～2005年(平17)9月	
泉 孝	いずみ たかし	短歌	1916年(大5)8月1日～2007年(平19)7月13日	
市瀬 見	いちのせ けん	新聞記者	1918年(大7)6月5日～2002年(平14)3月28日	
井手 貢夫	いで あやお	独文学研究	1910年(明43)10月18日～1995年(平7)5月19日	
伊藤 信吉	いとう しんきち	詩、評論	1906年(明39)11月30日～2002年(平14)8月3日	
伊藤 俊夫	いとう としお	詩	1907年(明40)10月30日～1998年(平10)5月25日	
伊藤 兎志郎	いとう としろう	小説	1925年(大14)3月11日～2002年(平14)3月18日	
伊藤 雪女	いとう ゆきじょ	俳句	1898年(明31)2月12日～1988年(昭63)5月1日	
伊藤 蘭水	いとう らんすい	俳句	1918年(大7)11月11日～1992年(平4)7月31日	
伊東 廉	いとう れん	詩	1922年(大11)2月15日～2004年(平16)5月1日	
稲月 蛭介	いなづき けいすけ	俳句	1931年(昭6)12月5日～2004年(平16)	
犬飼 哲夫	いぬかい てつお	動物学	1897年(明30)10月31日～1989年(平元)7月31日	
井上 蛙宙	いのうえ あちゆう	俳句	1927年(昭2)3月30日～1997年(平9)9月	
いのうえ ひょう	いのうえ ひょう	詩、小説	1938年(昭13)7月9日～2002年(平15)12月13日	
井上 二美	いのうえ ふみ	児童文学	1922年(大11)11月12日～2012年(平24)3月31日	
井上 光晴	いのうえ みつはる	小説	1926年(大15)5月15日～1992年(平4)5月30日	
井上 靖	いのうえ やすし	小説	1907年(明40)5月6日～1991年(平3)1月29日	
猪股 泰	いのまた ゆたか	短歌	1931年(昭6)11月22日～1994年(平6)2月	
今井 鴻象	いまい こうしょう	詩、児童文学	1904年(明37)9月5日～1988年(昭63)11月15日	
今井 泰子	いまい やすこ	評論、近代文学研究	1933年(昭8)4月25日～2009年(平21)	
入江 好之	いりえ よしゆき	詩、児童文学	1907年(明40)9月4日～1989年(平元)8月8日	
岩城 三郎	いわき さぶろう	短歌	1927年(昭2)4月2日～2005年(平17)8月	
岩城 之徳	いわき ゆきのり	近代文学研究	1923年(大12)11月3日～1995年(平7)8月3日	
う				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
上西 晴治	うえにし はるじ	小説	1925年(大14)1月7日～2009年(平21)11月10日	
上野 新之輔	うえの しんのすけ	短歌	1908年(明41)1月24日～1988年(昭63)5月9日	
魚住 あらた	うおずみ あらた	短歌	1909年(明42)1月24日～2007年(平19)1月	
氏家 夕方	うじいえ ゆうかた	俳句	1907年(明40)12月12日～1993年(平5)12月12日	
薄井 うめ	うすい うめ	短歌	1919年(大8)8月10日～2009年(平21)9月	
打木 村治	うちき むらじ	小説	1904年(明37)4月21日～1990年(平2)5月29日	
内村 剛介	うちむら ごうすけ	評論、ロシア文学研究	1920年(大9)3月12日～2009年(平21)1月30日	
内村 直也	うちむら なおや	劇作	1909年(明42)8月15日～1989年(平元)7月27日	
内山 筏杖	うちやま ばつじょう	俳句	1906年(明39)9月4日～1988年(昭63)7月14日	
宇野 渭水	うの いすい	俳句	1918年(大7)11月9日～1991年(平3)10月19日	
宇野 千代	うの ちよ	小説	1897年(明30)11月28日～1996年(平8)6月10日	
生方 たつゑ	うぶかた たつゑ	短歌	1905年(明38)2月23日～2000年(平12)1月18日	
え				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
江口 源四郎	えぐち げんしろう	短歌	1917年(大6)10月7日～没年月日不詳	
遠藤 勝一	えんどう しょういち	短歌	1895年(明28)2月13日～1991年(平3)5月5日	
お				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
扇畑 忠雄	おうぎばた ただお	短歌	1911年(明44)2月15日～2005年(平17)7月16日	
大磯 ひろし	おおいそ ひろし	俳句	1918年(大7)1月15日～1988年(昭63)2月28日	
大江 賢次	おおえ けんじ	小説	1905年(明38)9月20日～1987年(昭62)2月1日	
大江 満雄	おおえ みつお	詩	1906年(明39)7月23日～1991年(平3)10月12日	
大久保 テイ子	おおくぼ ていこ	詩	1930年(昭5)2月2日～2002年(平14)4月10日	
大熊 信行	おおくま のぶゆき	短歌、評論、経済学	1893年(明26)2月18日～1977年(昭52)6月20日	
大籠 蘆雪	おおごもり ろせつ	俳句	1904年(明37)4月10日～1991年(平3)11月27日	
大沢 重夫	おおさわ しげお	詩	1901年(明34)6月18日～1994年(平6)2月3日	
大柴 甲子郎	おおしば こうしろう	俳句	1924年(大13)3月17日～2007年(平19)6月12日	

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
大治 柳哉	おおじ りゅうや	短歌	1909年(明42)11月19日～1997年(平9)	
太田 絢子	おおた あやこ	短歌	1916年(大5)3月17日～2009年(平21)10月31日	
太田 比古象	おおた ひこぞう	短歌	1904年(明37)12月7日～1996年(平8)1月28日	
太田 緋吐子	おおた ひとし	俳句	1910年(明43)6月29日～1998年(平10)6月12日	
太田 光夫	おおた みつお	短歌	1926年(大15)10月1日～2004年(平16)6月	
大塚 陽子	おおつか ようこ	短歌	1930年(昭5)7月12日～2007年(平19)8月18日	
大津 禪良	おおつ ぜんりょう	俳句	1896年(明29)7月22日～1988年(昭63)3月3日	
大沼 スミ	おおぬま すみ	短歌	1917年(大6)5月9日～1991年(平3)4月2日	
大野 利子	おおの としこ	短歌	1914年(大3)9月2日～1988年(昭63)3月16日	
大野 黙然人	おおの もくねひと	短歌、版画	1914年(大3)7月4日～2008年(平20)5月	
大場 豊吉	おおば とよきち	詩	1923年(大12)1月27日～没年月日不明	
おおば 比呂司	おおば ひろし	漫画	1921年(大10)12月17日～1988年(昭63)8月18日	
大広 行雄	おおひろ ゆきお	詩	1925年(大14)5月17日～2005年(平17)4月	
岡澤 康司	おかざわ こうし	俳句	1922年(大11)5月31日～2006年(平18)7月15日	
小笠原 賢二	おがさわら けんじ	編集者、批評家	1946年(昭21)4月15日～2004年(平16)10月4日	
小笠原 克	おがさわら まさる	評論、近代文学研究	1931年(昭6)9月3日～1999年(平11)12月9日	
緒方 厚子	おがた あつこ	俳句	1908年(明41)11月18日～1993年(平5)4月	
岡山 去風	おかやま きよふう	短歌	1923年(大12)4月10日～1991年(平3)6月	
沖口 遼々子	おきぐち りょうりょうし	俳句	1909年(明42)8月8日～1990年(平2)9月14日	
小国 孝徳	おくに たかのり	短歌	1917年(大6)5月～2010年(平22)3月3日	
奥野 健男	おくの たけお	評論	1926年(大15)7月25日～1997年(平9)11月26日	
尾崎 道子	おざき みちこ	詩	1933年(昭8)3月2日～1999年(平11)10月26日	
長見 義三	おさみ ぎぞう	小説	1908年(明41)5月13日～1994年(平6)4月21日	
小田切 進	おだぎりすすむ	評論	1924年(大13)9月13日～1992年(平4)12月20日	
小田切 秀雄	おだぎり ひでお	評論	1916年(大5)9月10日～2000年(平12)5月24日	
小田 重子	おだ しげこ	短歌	1894年(明27)1月15日～1989年(平元)3月22日	
小田島 思遠	おだじま しおん	短歌	1915年(大4)7月～1989年(平元)4月	
小田 節子	おだ せつこ	詩	1929年(昭4)4月29日～2008年(平20)8月16日	
小田 哲夫	おだ てつお	短歌	1913年(大2)12月15日～1990年(平2)2月	
小田 基	おだ もとい	小説	1931年(昭6)6月7日～2000年(平12)11月	
折原 きゑ女	おりはら きえじよ	俳句	1902年(明35)5月18日～1990年(平2)4月9日	
か				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
開高 健	かいこう たけし	小説	1930年(昭5)12月30日～1989年(平元)12月9日	
鍵谷 幸信	かぎや ゆきのぶ	英文学、詩、評論	1930年(昭5)7月26日～1989年(平元)1月16日	
笠井 清	かさい きよし	小説	1911年(明44)3月20日～1990年(平2)12月20日	
笠松 久子	かさまつ ひさこ	俳句	1920年(大9)1月28日～1993年(平5)8月17日	
笠谷 紅青紫	かさや こうせいし	俳句	1907年(明40)9月8日～1992年(平4)1月27日	
柏倉 俊三	かしわくら しゅんぞう	英文学研究、エッセー	1898年(明31)10月21日～1996年(平8)	
片山 栄志	かたやま えいじ	短歌	1916年(大5)11月10日～2007年(平19)8月24日	
勝又 木風雨	かつまた もくふうう	俳句	1914年(大3)11月8日～1997年(平9)1月23日	
加藤 愛夫	かとう あいお	詩	1902年(明35)4月19日～1979年(昭54)10月23日	
加藤 楸邨	かとう しゅうそん	俳句	1905年(明38)5月26日～1993年(平5)7月3日	
かなまる よしあき	かなまる よしあき	小説	1928年(昭3)8月21日～2007年(平19)11月13日	
金谷 信夫	かなや のぶお	俳句	1914年(大3)1月2日～1991年(平3)5月25日	
金子 きみ	かねこ きみ	小説	1916年(大5)2月12日～2009年(平21)6月23日	
金子 静光	かねこ せいこう	短歌	1903年(明36)9月23日～1999年(平11)4月	
金崎 葭杖	かねさき かじょう	俳句	1912年(大元)10月15日～1996年(平8)	
鎌田 純一	かまだ じゅんいち	小説	1934年(昭9)11月8日～2000年(平12)10月4日	
鎌田 薄氷	かまだ はくひょう	俳句	1910年(明43)2月5日～1985年(昭60)10月	

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
亀山 正治	かめやま しょうじ	短歌	1913年(大2)1月29日～1987年(昭62)3月9日	
萱野 茂	かやの しげる	アイヌ文化研究	1926年(大15)6月15日～2006年(平18)5月6日	
川内 康範	かわうち こうはん	小説	1920年(大9)2月26日～2008年(平20)4月6日	
川喜多 二郎	かわきた じろう	民族学	1920年(大9)5月11日～2009年(平21)7月8日	
川崎 彰彦	かわさき あきひこ	小説	1933年(昭8)9月27日～2010年(平22)2月4日	
川嶋 至	かわしま いたる	評論	1935年(昭10)2月24日～2001年(平13)7月2日	
河 草之介	かわ そうのすけ	俳句	1933年(昭8)1月17日～2005年(平17)1月3日	
川端 何洗	かわばた かせん	俳句	1905年(明38)6月1日～1994年(平6)7月20日	
川端 麟太	かわばた りんた	俳句	1919年(大8)1月16日～1987年(昭62)6月	
川辺 為三	かわべ ためぞう	小説	1928年(昭3)11月29日～1999年(平11)4月16日	
川村 淳一	かわむら じゅんいち	小説、短歌	1922年(大11)1月27日～1996年(平8)4月6日	
川村 清吉	かわむら せいきち	短歌	1914年(大3)3月29日～1988年(昭63)	
川村 謙人	かわむら とうじん	短歌	1904年(明37)11月27日～1990年(平2)11月6日	
河邨 文一郎	かわむら ぶんいちろう	詩	1917年(大6)4月15日～2004年(平16)3月30日	
川村 弥生	かわむら やよい	短歌	1915年(大4)3月24日～2010年(平22)7月29日	
上林 猷夫	かんばやし みちお	詩	1914年(大3)2月21日～2001年(平13)9月10日	
き				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
木内 綾	きうち あや	工芸	1924年(大13)7月7日～2006年(平18)11月5日	
木内 進	きうち すずむ	詩	1908年(明41)12月20日～1990年(平2)1月9日	
菊地 京路	きくち きょうろ	俳句	1901年(明34)10月15日～1993年(平5)2月22日	
菊地 滴翠	きくち てきすい	俳句	1916年(大5)7月15日～2005年(平17)3月3日	
菊地 徹子	きくち てつこ	詩	1925年(大14)5月1日～2004年(平16)2月23日	
菊村 到	きくむら いたる	小説	1925年(大14)5月15日～1999年(平11)4月3日	
木島 始	きじま はじめ	詩	1928年(昭3)2月4日～2004年(平16)8月14日	
北川 緑雨	きたがわ りょくう	短歌	1912年(明45)3月1日～1994年(平6)2月11日	
北 光星	きた こうせい	俳句	1923年(大12)3月5日～2001年(平13)3月17日	
北嶋 虚石	きたじま きよせき	俳句	1923年(大12)3月20日～1990年(平2)9月13日	
北野 洸	きたの こう	小説	1921年(大10)7月30日～2010年(平22)5月8日	
北見 洵吉	きたみ じゅんきち	短歌	1902年(明35)2月7日～1990年(平2)11月13日	
北 杜夫	きた もりお	小説	1927年(昭2)5月1日～2011年(平23)10月24日	
木下 順一	きのした じゅんいち	小説	1929年(昭4)4月10日～2005年(平17)10月27日	
木下 春影	きのした しゅんえい	俳句	1897年(明30)12月15日～1993年(平5)7月21日	
木下 路石	きのした ろせき	俳句	1926年(大15)8月20日～1991年(平3)2月1日	
木野 工	きの たくみ	小説	1920年(大9)6月15日～2008年(平20)8月3日	
木村 久運典	きむら くにのり	評論	1923年(大12)7月11日～2000年(平12)4月12日	
木村 哲郎	きむら てつろう	詩	1936年(昭11)9月12日～2000(平12)8月11日	
曲線 立歩	きよくせん りっぽ	川柳	1910年(明43)1月23日～2003年(平15)5月	
く				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
九鬼 伍平	くき ごへい	小説	1932年(昭7)5月3日～2002年(平14)3月17日	
草路 れい	くさじ れい	短歌	1911年(明44)10月13日～1994年(平6)2月	
草野 心平	くさの しんぺい	詩	1903年(明36)5月12日～1988年(昭63)11月12日	
草森 紳一	くさもり しんいち	評論	1938年(昭13)2月23日～2008年(平20)3月20日	
串田 孫一	くしだ まごいち	哲学、詩、随筆	1915年(大4)11月12日～2005年(平17)7月8日	
九島 勝太郎	くしま かつたろう	文化運動	1906年(明39)9月20日～1993年(平5)9月26日	
九津見 房子	くづみ ふさこ	社会主義運動	1890年(明23)10月18日～1980年(昭55)7月15日	
國松 登	くにまつ のぼる	絵画、俳句	1907年(明40)5月6日～1994年(平6)4月18日	
窪田 薫	くぼた かおる	俳句	1924年(大13)3月7日～1999年(平11)10月4日	
窪田 精	くぼた せい	小説	1921年(大10)4月15日～2004年(平16)2月29日	
久保 吉春	くぼ よしはる	郷土史	1924年(大13)3月8日～1989年(平元)8月14日	
倉島 齊	くらしま せい	小説・シナリオ	1932年(昭7)1月22日～2011年(平23)10月27日	

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
蔵原 惟人	くらはら これひと	評論	1902年(明35)1月26日～1991年(平3)1月25日	
郡司 正勝	ぐんじ まさかつ	演劇評論	1913年(大2)7月7日～1998年(平10)4月15日	
こ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
小池 嘉四郎	こいけ かしろ	俳句	1913年(大2)2月16日～1994年(平6)4月25日	
小池 喜孝	こいけ きこう	民衆史研究	1916年(大5)9月11日～2003年(平15)11月28日	
小池 次陶	こいけ じとう	俳句	1910年(明43)11月10日～1996年(平8)5月19日	
越郷 黙朗	こしごう もくろう	川柳	1912年(明45)7月18日～1996年(平8)5月20日	
後藤 軒太郎	ごとう けんたろう	俳句	1919年(大8)2月8日～2008年(平20)3月11日	
後藤 竜二	ごとう りゅうじ	児童文学	1943年(昭18)6月24日～2010年(平22)7月3日	
小林 金三	こばやし きんぞう	評論	1923年(大12)7月4日～2010年(平22)7月18日	
小林 孝虎	こばやし たかとら	短歌	1923年(大12)5月3日～2004年(平16)12月19日	
小林 とし子	こばやし としこ	俳句	1926年(大15)6月17日～1991年(平3)5月9日	
小松 瑛子	こまつ えいこ	詩	1929年(昭4)5月26日～2000年(平12)5月30日	
小松 茂	こまつ しげる	小説	1923年(大12)6月27日～2007年(平19)6月15日	
小松 伸六	こまつ しんろく	拙文学研究、評論	1914年(大3)9月28日～2006年(平18)4月20日	
小森 利夫	こもり としお	短歌	1908年(明41)6月1日～1994年(平6)6月5日	
小森 汎	こもり ひろし	短歌	1915年(大4)7月5日～1994年(平6)7月	
近藤 潤一	こんどう じゅんいち	俳句	1931年(昭6)2月1日～1994年(平6)9月16日	
近藤 芳美	こんどう よしみ	短歌	1913年(大2)5月5日～2006年(平18)6月21日	
金野 知足	こんの ちそく	俳句	1898年(明31)12月28日～1990年(平2)6月25日	
さ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
犀川 野火男	さいかわ のびお	俳句	1928年(昭3)9月20日～2002年(平15)12月22日	
斎藤 邦男	さいとう くにお	詩	1921年(大10)2月21日～2006年(平18)2月13日	
斎藤 大雄	さいとう だいゆう	川柳	1933年(昭8)2月18日～2008年(平20)6月29日	
斎藤 史	さいとう ふみ	短歌	1909年(明42)2月14日～2002年(平14)5月26日	
坂井 一郎	さかい いちろう	詩	1915年(大4)1月27日～1990年(平11)3月20日	
坂井 まつば女	さかい まつばじよ	俳句	1892年(明25)4月24日～1986年(昭61)7月28日	
神原 雪毬子	さかきばら せつきゅうし	俳句	1913年(大2)4月1日～1993年(平5)9月21日	
坂口 波路	さかぐち はろ	俳句	1917年(大6)8月2日～2006年(平18)5月1日	
坂田 文子	さかた ふみこ	短歌、俳句	1916年(大5)7月24日～1999年(平11)8月	
坂本 一亀	さかもと かずき	編集	1921年(大10)12月8日～2002年(平14)9月28日	
坂本 幸四郎	さかもと こうしろう	評論	1924年(大13)9月19日～1999年(平11)5月10日	
桜井 勝美	さくらい かつみ	詩、評論	1908年(明41)2月20日～1995年(平7)7月24日	
笹尾 礼三	ささお れいぞう	俳句	1928年(昭3)12月15日～1991年(平3)4月26日	
佐々木 あきら	ささき あきら	俳句	1897年(明30)6月6日～1996年(平8)	
佐々木 逸郎	ささき いつろう	詩、シナリオ	1927年(昭2)11月28日～1992年(平4)1月17日	
佐々木 子興	ささき しこう	俳句	1910年(明43)3月1日～1995年(平7)4月10日	
佐々木 孝丸	ささき たかまる	劇作、俳優	1898年(明31)1月30日～1986年(昭61)12月28日	
佐々木 武観	ささき たけみ	劇作	1923年(大12)12月28日～2000年(平12)7月22日	
佐々木 丸美	ささき まるみ	小説	1949年(昭24)1月23日～2005年(平17)12月25日	
佐々木 露舟	ささき ろしゅう	俳句	1912年(大元)10月23日～2007年(平19)3月10日	
笹沢 左保	ささざわ さほ	小説	1930年(昭5)11月15日～2002年(平14)10月21日	
佐多 稲子	さた いねこ	小説	1904年(明37)6月1日～1998年(平10)10月12日	
颯手 達治	さつて たつじ	小説	1924年(大13)6月13日～2009年(平21)4月11日	
佐藤 鶯溪	さとう おうけい	川柳	1906年(明39)1月10日～2002年(平14)4月	
佐藤 喜一	さとう きいち	小説、評論	1911年(明44)12月10日～1992年(平4)3月2日	
佐藤 洸世	さとう こうせい	俳句	1911年(明44)2月28日～1986年(昭61)7月20日	
佐藤 佐太郎	さとう さたろう	短歌	1909年(明42)11月13日～1987年(昭62)8月8日	
佐藤 しげ	さとう しげ	詩	1916年(大5)7月17日～1993年(平5)8月9日	
佐藤 たすく	さとう たすく	俳句	1903年(明36)10月4日～1994年(平6)10月9日	
佐藤 忠良	さとう ちゅうりょう	彫刻	1912年(明45)7月4日～2011年(平23)3月30日	

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
佐藤 初夫	さとう はつお	詩、短歌	1910年(明43)6月12日～1992年(平4)12月17日	
佐藤 晴生	さとう はるお	俳句	1918年(大7)6月20日～2006年(平18)10月19日	
佐藤 泰志	さとう やすし	小説	1949年(昭24)4月26日～1990年(平2)10月10日	
里見 純世	さとみ じゅんせい	短歌	1919年(大8)12月～2010年(平22)6月20日	
澤田 誠一	さわだ せいいち	小説	1920年(大9)9月18日～2007年(平19)6月5日	
澤野 久雄	さわの ひさお	小説	1912年(大元)12月30日～1992年(平4)12月17日	
し				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
塩野谷 秋風	しおのや しゅうふう	俳句	1909年(明42)10月10日～1986年(昭61)2月27日	
志賀 磯子	しが いそこ	短歌	1915年(大4)12月2日～1991年(平3)	
重兼 芳子	しげかね よしこ	小説	1927年(昭2)3月7日～1993年(平5)8月22日	
滋野 透子	しげの すみこ	児童文学	1921年(大10)5月4日～2000年(平12)11月14日	
重森 直樹	しげもり なおき	小説	1926年(大15)3月15日～2003年(平15)5月16日	
志田 白雨	しだ はくう	俳句	1907年(明40)1月22日～2005年(平17)3月29日	
柴生田 稔	しばうた みのる	短歌、国文学	1904年(明37)6月26日～1991年(平3)8月20日	
島 恒人	しま こうじん	俳句	1924年(大13)2月13日～2000年(平12)3月16日	
清水 堅一	しみず けんいち	短歌	1917年(大6)2月8日～2005年(平17)11月	
志水 汎	しみず はん	短歌	1910年(明43)5月1日～2001年(平13)	
清水 康雄	しみず やすお	詩、出版	1932年(昭7)2月4日～1999年(平11)2月21日	
下村 保太郎	しもむら やすたろう	詩	1909年(明42)8月15日～1985年(昭60)12月4日	
白井 長流水	しらい ちょうりゅうすい	俳句	1894年(明27)1月29日～1986年(昭61)10月13日	
城山 三郎	しろやま さぶろう	小説	1927年(昭2)8月12日～2007年(平19)3月22日	
神保 光太郎	じんぼ こうたろう	詩	1905年(明38)11月29日～1990年(平2)10月24日	
新聞 進一	しんま しんいち	国文学研究	1917年(大6)9月3日～2005年(平17)12月11日	
新明 紫明	しんみょう しめい	俳句	1928年(昭3)8月13日～2006年(平18)4月3日	
新明 セツ子	しんみょう せつこ	俳句	1930年(昭5)10月14日～2011年(平23)8月22日	
す				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
杉浦 明平	すぎうら みんぺい	評論、小説	1913年(大2)6月9日～2001年(平13)3月14日	
杉本 春生	すぎもと はるお	詩	1926年(大15)3月21日～1990年(平2)7月6日	
鈴木 恭三	すずき きょうぞう	俳句	1934年(昭9)10月30日～1992年(平4)5月5日	
鈴木 重吉	すずき じゅうきち	米文学	1916年(大5)9月14日～2002年(平14)11月30日	
鈴木 青光	すずき せいこう	俳句	1927年(昭2)1月3日～1994年(平6)6月1日	
鈴木 青柳	すずき せいりゅう	川柳	1908年(明41)8月13日～1999年(平11)4月	
鈴木 杜世春	すずき とよはる	短歌	1925年(大14)5月15日～1996年(平8)	
せ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
青野 麦秋	せいの ばくしゅう	俳句	1925年(大14)3月20日～1988年(昭63)8月16日	
瀬戸 哲郎	せと てつろう	詩	1919年(大8)1月21日～1985年(昭60)10月22日	
瀬沼 茂樹	せぬま しげき	評論	1904年(明37)10月6日～1988年(昭63)8月14日	
そ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
園田 夢蒼花	そのだ むそうか	俳句	1913年(大2)12月15日～2001年(平13)6月1日	
た				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
高木 彬光	たかぎ あきみつ	小説	1920年(大9)9月25日～1995年(平7)9月9日	
高木 牛花	たかぎ ぎゅうか	俳句	1913年(大2)1月27日～1991年(平3)6月5日	
高倉 新一郎	たかくら しんいちろう	農学、郷土史	1902年(明35)11月23日～1990年(平2)6月7日	
高瀬 白洋	たかせ はくよう	俳句	1908年(明41)12月8日～2003年(平15)1月15日	
高田 敏子	たかだ としこ	詩	1914年(大3)9月16日～1989年(平元)5月28日	
高田 光徳	たかだ みつぼ	川柳	1922年(大11)3月18日～1993年(平5)3月	
高野 斗志美	たかの としみ	評論	1929年(昭4)7月7日～2002年(平14)7月9日	
高橋 揆一郎	たかはし きいちろう	小説	1928年(昭3)4月10日～2007年(平19)1月31日	
高橋 貞俊	たかはし さだとし	俳句	1913年(大2)5月15日～1999年(平11)3月16日	
高橋 英衛	たかはし ひでえい	短歌	1908年(明41)3月8日～1993年(平5)12月	

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
高橋 笛美	たかはし ふえみ	俳句	1928年(昭3)3月10日～2010年(平22)4月19日	
高橋 義孝	たかはし よしたか	独文学研究・評論	1913年(大2)3月27日～1995年(平7)7月21日	
高橋 和光	たかはし わこう	短歌	1911年(明44)12月2日～2003年(平15)9月23日	
高山 亮二	たかやま りょうじ	近代文学研究	1916年(大5)9月27日～2001年(平13)10月17日	
滝川 句楽	たきかわ くらく	川柳	1909年(明42)3月1日～1987年(昭62)1月	
琢磨 緑泉	たくま りよくせん	俳句	1923年(大12)3月31日～1993年(平5)6月23日	
匠 秀夫	たくみ ひでお	美術評論	1924年(大13)11月28日～1994年(平6)9月14日	
竹内 てるよ	たけうち てるよ	詩	1904年(明37)12月21日～2001年(平13)2月4日	
竹岡 和田男	たけおか わだお	美術、映画評論	1928年(昭3)10月21日～2000年(平12)9月4日	
武田 繁太郎	たけだ しげたろう	小説	1919年(大8)8月20日～1986年(昭61)6月8日	
武田 隆子	たけだ たかこ	詩	1909年(明42)1月14日～2008年(平20)5月25日	
武田 友寿	たけだ ともじゅ	評論	1931年(昭6)1月16日～1991年(平3)2月1日	
竹中 雨閣	たけなか うかく	俳句	1913年(大2)1月13日～1988年(昭63)3月29日	
立野 正之	たての まさゆき	短歌	1902年(明35)8月9日～1999年(平11)5月	
館 美保子	たて みほこ	詩	1893年(明26)3月11日～1990年(平2)12月8日	
田中 小実昌	たなか こみまさ	小説	1925年(大14)4月29日～2000年(平12)2月27日	
田中 北斗	たなか ほくと	俳句	1922年(大11)3月15日～2005年(平17)2月27日	
棚川 音一	たなかわ おといち	短歌	1922年(大11)6月20日～1994年(平6)11月	
谷口 広志	たにくち ひろし	文化運動	1917年(大6)8月23日～1990年(平2)	
田上 義也	たのうえ よしや	建築	1899年(明32)5月5日～1991年(平3)8月17日	
玉川 雄介	たまがわ ゆうすけ	児童文学	1910年(明43)2月10日～2009年(平21)12月18日	
玉手 北肇	たまて ほくちよう	俳句	1920年(大9)11月6日～1988年(昭63)8月30日	
田宮 慧子	たみや けいこ	小説	1927年(昭2)1月16日～1992年(平4)10月9日	
田宮 虎彦	たみや とらひこ	小説	1911年(明44)8月5日～1988年(昭63)4月9日	
田村 哲三	たむら てつみ	短歌	1930年(昭5)4月10日～2000年(平12)7月26日	
田村 昌由	たむら まさよし	詩	1913年(大2)5月17日～1994年(平6)5月29日	
田元 北史	たもと ほくし	俳句	1910年(明43)9月20日～1994年(平6)5月23日	
ち				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
千田 三四郎	ちだ さんしろう	小説	1922年(大11)5月18日～2005年(平17)8月2日	
長 光太	ちよう こうた	詩	1907年(明40)4月8日～1999年(平11)7月10日	
つ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
塚本 邦雄	つかもと くにお	短歌	1920年(大9)8月7日～2005年(平17)6月9日	
辻岡 一羊	つじおか いちよう	俳句	1906年(明39)6月23日～1995年(平7)1月2日	
辻 邦生	つじ くにお	小説	1925年(大14)9月24日～1999年(平11)7月29日	
津田 露木	つだ ろぼく	俳句	1912年(明45)2月1日～1991年(平3)5月1日	
土谷 重朗	つちや じゅうろう	短歌	1904年(明37)3月10日～1994年(平6)1月	
土屋 文明	つちや ぶんめい	短歌	1890年(明23)9月18日～1990年(平2)12月8日	
網淵 謙綻	つなぶち けんじょう	小説	1924年(大13)9月21日～1996年(平8)4月14日	
鶴田 知也	つるた ともや	小説	1902年(明35)2月19日～1988年(昭63)4月1日	
て				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
手塚 義隆	てづか よしたか	短歌	1924年(大13)4月19日～1999年(平11)7月1日	
寺久保 友哉	てらくぼ ともや	小説	1937年(昭12)6月4日～1999年(平11)1月22日	
寺師 治人	てらし はるひと	短歌	1916年(大5)9月14日～2003年(平15)5月21日	
寺島 露月	てらしま ろげつ	俳句	1924年(大13)12月1日～1985年(昭60)10月	
と				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
塔崎 健二	とうざき けんじ	評論	1944年(昭19)2月14日～1995年(平7)	
百目鬼 恭三郎	どうめき きょうざぶろう	評論	1926年(大15)2月8日～1991年(平3)3月31日	
堂本 茂	どうもと しげる	小説	1924年(大13)8月2日～1997年(平9)11月22日	
戸川 幸夫	とがわ ゆきお	小説	1912年(明45)4月19日～2004年(平16)5月1日	
所 雅彦	ところ まさひこ	小説	1935年(昭10)7月5日～2011年(平23)	

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
戸田 正彦	とだ まさひこ	新聞記者	1924年(大13)1月22日～1994年(平6)7月23日	
富岡 木之介	とみおか きのすけ	俳句	1919年(大8)4月5日～1995年(平7)1月28日	
富原 孝	とみはら たかし	詩	1920年(大9)7月15日～2006年(平18)3月8日	
鳥居 省三	とりい しょうぞう	評論	1925年(大14)8月1日～2006年(平18)5月4日	
な				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
中紙 輝一	なかがみ きいち	小説	1922年(大11)11月18日～1992年(平4)8月19日	
中越 華章	なかごし かしょう	俳句	1908年(明41)2月16日～1988年(昭63)6月4日	
中沢 茂	なかざわ しげる	小説	1909年(明42)1月4日～1997年(平9)9月1日	
長次 としを	ながさわ としお	川柳	1920年(大9)9月8日～2000年(平12)12月	
長沢 美津	ながさわ みつ	短歌	1905年(明38)11月4日～2005年(平17)4月26日	
中嶋 立	なかじま りつ	俳句	1933年(昭8)3月28日～2002年(平15)6月26日	
中台 泰史	なかだい たいし	俳句	1923年(大12)5月26日～1994年(平6)6月27日	
永田 耕一郎	ながた こういちろう	俳句	1918年(大7)9月20日～2006年(平18)8月20日	
永田 秀郎	ながた ひでろう	劇作	1934年(昭9)7月16日～2009年(平21)8月5日	
中田 稔	なかた みのる	俳句	1921年(大10)11月2日～1986年(昭61)7月	
永田 洋平	ながた ようへい	動物文学、詩	1917年(大6)10月10日～2002年(平14)1月19日	
長野 京子	ながの きょうこ	児童文学	1914年(大3)1月1日～2008年(平20)2月18日	
中村 光夫	なかむら みつお	評論	1911年(明44)2月5日～1988年(昭63)7月12日	
中山 周三	なかやま しゅうぞう	短歌	1916年(大5)8月13日～1999年(平11)9月22日	
中山 照華	なかやま しょうか	俳句	1883年(明26)1月15日～1986年(昭61)12月17日	
中山 信	なかやま のぶ	短歌	1920年(大9)6月9日～2004年(平16)10月2日	
中山 勝	なかやま まさる	短歌	1906年(明39)3月24日～1989年(平元)8月19日	
名島 俊子	なじま としこ	短歌	1912年(明45)8月3日～1995年(平7)6月11日	
夏堀 正元	なつぼり まさもと	小説	1925年(大14)1月30日～1999年(平11)1月4日	
浪花 剛	なにわ つよし	出版	1924年(大13)2月9日～2010年(平22)11月19日	
鍋山 隆明	なべやま りゅうめい	短歌	1917年(大6)6月20日～1988年(昭63)4月26日	
並川 公	なみかわ こう	詩	1915年(大4)4月18日～1992年(平2)7月1日	
成田 昭男	なりた あきお	俳句	1927年(昭2)10月10日～2007年(平19)3月16日	
成田 智世子	なりた ちせこ	俳句	1929年(昭4)11月22日～1988年(昭63)12月30日	
に				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
新妻 博	にいづま ひろし	詩、俳句	1917年(大6)9月30日～2012年(平24)2月3日	
西川 青澗	にしかわ せいとう	短歌	1905年(明38)3月22日～1994年(平6)2月	
錦 俊坊	にしき としぼう	川柳	1923年(大12)5月28日～1997年(平9)3月	
西谷 能雄	にしたに よしお	出版	1913年(大2)9月8日～1995年(平7)4月29日	
西野 辰吉	にし の たつきち	小説	1916年(大5)2月12日～1999年(平11)10月21日	
西村 一平	にしむら いっぺい	短歌	1911年(明44)12月10日～2001年(平13)9月21日	
西村 寿行	にしむら じゅこう	小説	1930年(昭5)11月3日～2007年(平19)8月23日	
西村 信	にしむら まこと	文化運動	1935年(昭10)10月20日～2000年(平12)11月3日	
庭田 竹堂	にわた ちくどう	俳句	1903年(明36)2月1日～1988年(昭63)12月30日	
丹羽 文雄	にわ ふみお	小説	1904年(明37)11月22日～2005年(平17)4月20日	
ぬ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
沼田 寿枝女	ぬまた すえじょ	俳句	1918年(大7)3月28日～2007年(平19)3月9日	
の				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
野口 富士男	のぐち ふじお	小説	1911年(明44)7月4日～1993年(平5)11月22日	
野田 寿雄	のだ ひさお	国文学研究	1913年(大2)2月23日～2004年(平16)4月8日	
野間 宏	のま ひろし	小説	1915年(大4)2月23日～1991年(平3)1月2日	
野村 良雄	のむら ながお	詩	1931年(昭6)2月20日～2012年(平24)1月	
は				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
博田 草樹	はかた そうじゅ	短歌	1912年(大元)12月1日～1999年(平11)1月	
萩原 葉子	はぎわら ようこ	小説	1920年(大9)9月4日～2005年(平17)7月1日	

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
橋本 佳代女	はしもと かよじょ	俳句	1905年(明38)9月3日～1989年(平元)1月15日	
橋本 徳寿	はしもと とくじゅ	短歌	1894年(明27)9月10日～1989年(平元)	
長谷川 四郎	はせがわ しろう	小説	1909年(明42)6月7日～1987年(昭62)4月19日	
長谷川 正治	はせがわ まさはる	短歌、書道	1913年(大2)1月27日～1992年(平4)2月	
長谷川 みさを	はせがわ みさお	詩	1928年(昭3)2月26日～2004年(平16)3月	
畑沢 草羽	はたざわ そうう	短歌	1913年(大2)7月9日～1988年(昭63)12月	
羽田野 幸子	はたの ゆきこ	詩	1914年(大3)9月17日～1995年(平7)8月13日	
秦 保二郎	はた やすじろう	詩	1913年(大2)12月14日～1997年(平9)8月19日	
畑山 博	はたやま ひろし	小説	1935年(昭10)5月18日～2001年(平13)9月2日	
八匠 衆一	はっしょう しゅういち	小説	1917年(大6)3月30日～2004年(平16)6月21日	
浜 一郎	はま いちろう	短歌	1915年(大4)2月6日～1990年(平2)1月	
林 直樹	はやし なおき	詩	1934年(昭9)11月23日～2006年(平18)9月9日	
林 白言	はやし はくげん	エッセー	1923年(大12)6月23日～1995年(平7)1月26日	
原子 公平	はらこ こうへい	俳句	1919年(大8)9月14日～2004年(平16)7月18日	
原田 康子	はらだ やすこ	小説	1928年(昭3)1月12日～2009年(平21)10月20日	
針山 和美	はりやま かずみ	小説	1930年(昭5)7月12日～2003年(平15)7月11日	
春山 行夫	はるやま ゆきお	詩、評論、文化史	1902年(明35)7月1日～1994年(平6)10月10日	
萬上 義次	ばんじょう よしつぐ	短歌	1911年(明44)3月19日～1988年(昭63)8月	
半村 良	はんむら りょう	小説	1933年(昭8)10月27日～2002年(平14)3月4日	
ひ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
菱川 善夫	ひしかわ よしお	短歌、評論	1929年(昭4)6月3日～2007年(平19)12月15日	
氷室 冴子	ひむろ さえこ	小説	1957年(昭32)1月11日～2008年(平20)6月6日	
平野 直	ひらの ただし	小説	1902年(明35)3月28日～1986年(昭61)4月23日	
平松 勤	ひらまつ つとむ	短歌	1913年(大2)3月5日～2001年(平13)8月22日	
平山 広	ひらやま ひろし	近代文学研究	1926年(大15)2月20日～2001年(平13)8月3日	
弘瀬 正	ひろせ ただし	小説	1914年(大3)12月30日～1988年(昭63)8月3日	
広中 白骨	ひろなか はっこつ	俳句	1903年(明36)8月1日～1991年(平3)2月4日	
ふ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
深沢 七郎	ふかざわ しちろう	小説	1914年(大3)1月29日～1987年(昭62)8月18日	
深沢 伸二	ふかざわ しんじ	俳句	1927年(昭2)10月29日～1995年(平7)8月21日	
福田 清人	ふくだ きよと	小説、児童文学	1904年(明37)11月29日～1995年(平7)6月13日	
藤枝 静男	ふじえだ しずお	小説	1907年(明40)12月20日～1993年(平5)4月16日	
藤川 日出尚	ふじかわ ひでお	詩	1934年(昭9)4月28日～2004年(平16)6月7日	
藤田 旭山	ふじた きよざん	俳句	1903年(明36)1月16日～1991年(平3)3月6日	
藤田 光則	ふじた みつなり	詩	1922年(大11)3月1日～2000年(平12)1月13日	
藤本 英夫	ふじもと ひでお	考古学研究	1927年(昭和2)3月23日～2005年(平17)12月24日	
藤原 定	ふじわら さだむ	詩、評論	1905年(明38)7月17日～1990年(平2)9月17日	
古川 善盛	ふるかわ よしもり	詩	1927年(昭2)12月8日～2006年(平18)1月	
古瀬 吟風楼	ふるせ ぎんふうろう	俳句	1901年(明34)9月2日～1989年(平元)4月30日	
ほ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
星野 松路	ほしの しょうじ	俳句	1927年(昭2)1月20日～1999年(平11)1月20日	
細谷 徹之助	ほそや てつすけ	短歌	1915年(大4)12月5日～1988年(昭63)12月5日	
堀田 善衛	ほった よしえ	小説	1918年(大7)7月17日～1998年(平10)9月5日	
堀越 義三	ほりこし よしぞう	詩	1923年(大12)2月26日～2003年(平15)4月19日	
本田 錦一郎	ほんだ きんいちろう	英文学研究	1926年(大15)11月11日～2007年(平19)1月2日	
本多 秋五	ほんだ しゅうご	評論	1908年(明41)9月22日～2001年(平13)1月13日	
本多 ミサヲ	ほんだ みさお	短歌	1918年(大7)8月20日～1989年(平元)7月30日	
本間 保	ほんま たもつ	短歌	1922年(大11)7月25日～1992年(平4)7月	
本間 竜二郎	ほんま りゅうじろう	短歌	1910年(明43)3月30日～1994年(平6)5月7日	
ま				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
前川 康男	まえかわ やすお	児童文学	1921年(大10)12月25日～2002年(平14)10月14日	
前野 聖子	まえの せいこ	俳句	1926年(大15)3月12日～2007年(平19)12月27日	
増田 羽衣	ますだ うい	俳句	1907年(明40)4月1日～1991年(平3)12月10日	
益田 喜頓	ますだ きいとん	演劇	1909年(明42)9月11日～1993年(平5)12月1日	
増谷 龍三	ますたに りゅうぞう	短歌	1930年(昭5)1月3日～1996年(平8)5月27日	
松浦 睦子	まつうら むつこ	詩	1931年(昭6)3月5日～1998年(平10)1月29日	
松岡 繁雄	まつおか しげお	詩	1921年(大10)4月30日～1990年(平3)12月8日	
松尾 正路	まつお まさみち	仏文学研究、エッセー	1905年(明38)1月7日～1991年(平3)3月26日	
松田 貞夫	まつだ さだお	評論	1930年(昭5)4月5日～1999年(平11)9月	
松田 葉留枝	まつだ はるえ	川柳	1906年(明39)5月27日～2001年(平13)10月	
松永 伍一	まつなが ごいち	詩、評論	1930年(昭5)4月22日～2008年(平20)3月3日	
松原 良輝	まつばら よしてる	詩	1931年(昭6)6月3日～2005年(平18)1月	
松本 清張	まつもと せいちょう	小説	1909年(明42)2月12日～1992年(平4)8月4日	
間所 祥司	まどころ しょうじ	俳句	1935年(昭10)7月14日～1998年(平10)8月3日	
丸木 俊	まるき とし	絵画	1912年(明45)2月11日～2000年(平12)1月13日	
み				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
三浦 綾子	みうら あやこ	小説	1922年(大11)4月25日～1999年(平11)10月12日	
三浦 哲郎	みうら てつお	小説	1931年(昭6)3月16日～2010年(平22)8月29日	
三浦 敏之	みうら としゆき	短歌	1922年(大11)4月1日～1992年(平4)1月	
三木 澄子	みき すみこ	小説、児童文学	1909年(明42)1月2日～1988年(昭63)4月16日※生年については諸説あり	
三沢 坑子	みさわ こうし	俳句	1915年(大4)7月15日～1989年(平元)4月19日	
水口 幾代	みずぐち いくよ	短歌	1914年(大3)7月8日～1995年(平7)5月16日	
水谷 準	みずたに じゅん	小説	1904年(明37)3月5日～2001年(平13)3月20日	
三谷 木の実	みたに このみ	詩	1910年(明43)1月8日～2009年(平21)3月5日	
水上 勉	みなかみ つとむ	小説	1919年(大8)3月8日～2004年(平16)9月8日	
宮口 良朔	みやぐち りょうさく	短歌	1923年(大12)1月26日～1997年(平9)	
三宅 草木	みやげ そうもく	俳句	1907年(明40)2月28日～1993年(平5)5月13日	
宮崎 正夫	みやざき まさお	短歌	1940年(昭15)8月15日～2006年(平18)1月	
宮崎 芳男	みやざき よしお	短歌	1901年(明34)9月1日～1989年(平元)5月26日	
宮田 千恵	みやた ちえ	短歌	1926年(大15)9月13日～2007年(平19)2月	
宮田 陽之介	みやた ようのすけ	俳句	1902年(明35)12月20日～1994年(平6)4月4日	
宮西 頼母	みやにし たのも	短歌	1918年(大7)2月11日～2006年(平18)2月	
宮野 駿	みやの しゅん	小説	1923年(大12)5月12日～2007年(平19)6月11日	
宮部 鳥巢	みやべ ちょうそう	俳句	1921年(大10)9月19日～2007年(平19)5月29日	
宮本 顕治	みやもと けんじ	政治、評論	1908年(明41)10月17日～2007年(平19)7月18日	
宮本 貞子	みやもと さだこ	短歌	1932年(昭7)7月9日～1999年(平11)11月	
宮脇 俊三	みやわき しゅんぞう	紀行	1926年(大15)12月9日～2003年(平15)3月26日	
む				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
向井 豊昭	むかい とよあき	小説	1933年(昭8)11月14日～2008年(平20)6月30日	
村上 綾朗	むらかみ あやお	短歌	1929年(昭4)2月24日～2005年(平17)7月	
村上 元三	むらかみ げんぞう	小説	1910年(明43)3月14日～2006年(平18)4月3日	
村木 雄一	むらき ゆういち	詩	1907年(明40)10月3日～1987年(昭62)9月23日	
村田 和歌子	むらた わかこ	詩	1917年(大6)2月26日～1996年(平8)6月13日	
め				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
目黒 草水	めぐろ そうすい	短歌	1907年(明40)4月20日～1990年(平2)2月1日	
も				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
茂木 健太郎	もぎ けんたろう	短歌	1915年(大4)9月13日～1990年(平2)1月29日	
本山 哲朗	もとやま てつろう	川柳	1917年(大6)10月1日～2004年(平16)10月	
森 澄雄	もり すみお	俳句	1919年(大8)2月28日～2010年(平22)8月18日	
森本 三郎	もりもと さぶろう	詩、画家	1909年(明42)11月8日～1987年(昭62)	

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
森山 啓	もりやま けい	小説	1904年(明37)3月10日～1991年(平3)7月26日	
や				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
八重 樫実	やえがし みのる	小説	1922年(大11)11月1日～1999年(平11)11月29日	
八木沢 不凍	やぎさわ ふとう	俳句	1924年(大13)4月19日～1994年(平6)3月23日	
八木 義徳	やぎ よしのり	小説	1911年(明44)10月21日～1999年(平11)11月9日	
社 八郎	やしろ はちろう	俳句、川柳	1913年(大2)3月2日～1989年(平元)6月26日	
八森 虎太郎	やつもり とらたろう	詩	1914年(大3)6月12日～1999年(平12)10月24日	
八剣 浩太郎	やつるぎ こうたろう	小説	1925年(大14)10月23日～2009年(平21)6月	
藪 禎子	やぶ ていこ	近代文学研究	1930年(昭5)3月29日～2008年(平20)10月26日	
山内 栄治	やまうち えいじ	詩	1915年(大4)2月8日～2009年(平21)3月6日	
山川 力	やまかわ つとむ	エッセー、評論	1913年(大2)1月19日～2001年(平13)8月8日	
山岸 巨狼	やまぎし きよろう	俳句	1910年(明43)3月22日～1997年(平9)4月28日	
山口 馨子	やまぐち せいし	俳句	1901年(明34)11月3日～1994年(平6)3月26日	
山口 青邨	やまぐち せいそん	俳句	1892年(明25)5月10日～1988年(昭63)12月15日	
山崎 剛平	やまざき ごうへい	短歌、出版	1901年(明34)6月2日～1996年(平8)7月8日	
山路 ひろ子	やまじ ひろこ	小説	1937年(昭12)10月18日～1994年(平6)10月	
山田 昭夫	やまだ あきお	評論	1928年(昭3)1月2日～2004年(平16)9月15日	
山田 伍市	やまだ ごいち	詩	1930年(昭5)3月17日～2001年(平13)9月15日	
山田 順三	やまだ じゅんぞう	詩	1930年(昭5)5月28日～2005年(平17)7月23日	
山田 清三郎	やまだ せいざぶろう	小説、評論	1896年(明29)6月13日～1987年(昭62)9月30日	
山田 大雪槍	やまだ だいせつそう	俳句	1900年(明33)1月5日～1993年(平5)10月1日	
山田 秀三	やまだ ひでぞう	アイス文化	1899年(明32)6月30日～1992年(平4)7月28日	
山田 風太郎	やまだ ふうたろう	小説	1922年(大11)1月4日～2001年(平13)7月28日	
山田 政明	やまだ まさあき	詩	1934年(昭9)6月5日～2007年(平19)6月15日	
山田 緑光	やまだ りょくこう	俳句	1917年(大6)7月25日～2012年(平24)2月7日	
山室 静	やまむろ しずか	詩、評論	1906年(明39)12月15日～2000年(平12)3月23日	
山本 健吉	やまもと けんきち	評論	1907年(明40)4月26日～1988年(昭63)5月7日	
山本 千里	やまもと せんり	俳句	1928年(昭3)10月10日～1992年(平4)7月2日	
山本 太郎	やまもと たろう	詩	1925年(大14)11月8日～1988年(昭63)11月5日	
よ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
横井 みつる	よこい みつる	短歌	1917年(大6)11月25日～1998年(平10)9月23日	
横田 庄八	よこた しょうはち	短歌	1905年(明38)2月15日～1997年(平9)3月26日	
横道 秀川	よこみち しゅうせん	俳句	1910年(明43)2月22日～1998年(平10)6月2日	
与謝野 鉄幹	よさの てつかん	短歌、詩	1873年(明6)2月26日～1935年(昭10)3月26日	
吉岡 秋帆影	よしおか しゅうはんえい	俳句	1907年(明40)11月21日～1993年(平5)12月5日	
吉川 泰夫	よしかわ やすお	短歌	1906年(明39)12月14日～1994年(平6)4月	
吉田 乙丸	よしだ おとまる	短歌	1908年(明41)7月29日～1990年(平2)8月	
吉田 寿人	よしだ ひさと	短歌	1916年(大5)6月1日～1989年(平元)9月24日	
吉田 正俊	よしだ まさとし	短歌	1902年(明35)4月30日～1993年(平5)6月23日	
吉村 昭	よしむら あきら	小説	1927年(昭2)5月1日～2006年(平18)7月31日	
吉村 唯行	よしむら いこう	俳句	1914年(大3)12月30日～2009年(平21)2月3日	
吉行 淳之介	よしゆき じゅんのすけ	小説	1924年(大13)4月13日～1994年(平6)7月26日	
吉原 幸子	よしわら さちこ	詩	1932年(昭7)6月28日～2002年(平14)11月28日	
米村 晃多郎	よねむら こうたろう	小説	1927年(昭2)5月23日～1989年(昭61)7月18日	
米谷 祐司	よねや ゆうじ	詩	1934年(昭9)1月9日～2011年(平23)12月23日	
わ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
和田 謹吾	わだ きんご	近代文学研究	1922年(大11)5月12日～1994年(平6)11月15日	
和田 徹三	わだ てつぞう	詩	1909年(明42)8月4日～1999年(平11)6月27日	
渡辺 勇	わたなべ いさむ	短歌	1927年(昭2)3月11日～1990年(平2)12月	
渡辺 左武郎	わたなべ さぶろう	医学	1911年(明44)12月6日～1997年(平9)10月2日	

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
渡辺 秀二	わたなべ しゅうじ	俳句	1921年（大10）2月4日～1993年（平5）12月	
渡辺 俳瞳	わたなべ はいどう	俳句	1905年（明38）1月28日～1991年（平3）11月4日	
渡辺 ひろし	わたなべ ひろし	児童文学	1912年（明45）2月3日～1991年（平3）12月8日	
渡辺 睦子	わたなべ むつこ	俳句	1919年（大8）1月20日～1993年（平5）8月17日	